

帰り仕事や、早朝に出勤した場合などであっても業務内容ごとの従事した時間が把握できるようになっている。

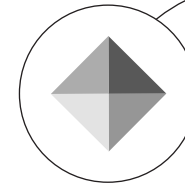
最後に、回答の方法である。特に出勤時間から退勤時間の間にあつては、必ず1つの業務分類に対して回答を求めることとした。その際無回答があると、該当する時間の中でどんな業務に従事していたのかわからなくなる。出勤時間と退勤時間の間は休憩を含めて、必ず何かを学校でしているわけであるため、連続したかたちで従事した業務内容をとらえることができるよう工夫した。

すなわち、図1-4-1の例でいえば、7時30分の出勤時間から18時30分の退勤時間までの間は「c,a,b,b,c,c,b,b,b,b,f,f,b,b,b,b,d,v,h,h,p」というように、11時間にわたって従事した業務内容をつなげながら回答できるようにすることによって、無記入や誤記を防ぐとともに回答しやすいよう配慮した。

以上のような特徴を反映させた回答用紙は、結果的に一日あたりB4用紙1ページ分で収まることとなり、回答者が日誌を書く要領で記入することが可能となった。さらに教員勤務実態調査用紙のもつこれらの特徴は、本研究の調査における高確率の有効回答数確保に寄与しているといえよう。

## 第2部

# 教員の勤務実態



# 調査の概要

## 1. 調査の目的

本調査は義務教育段階(公立の小学校および中学校)における教員の給与体系の在り方を検討するにあたり、給与水準および諸調整額の見直しのための検討材料として、教員の残業時間や持帰り時間を中心とした労働時間および勤務実態を明らかにすることを目的としている。詳しくは第1部第1章を参照のこと。

## 2. 調査の企画・設計

### 研究組織

本調査の実施にあたり、文部科学省からの研究委託を受けた東京大学が下記の研究組織を編成した。

青木 栄一 国立教育政策研究所 教育政策・評価研究部 研究員／調査全般の企画・調整

秋田 喜代美 東京大学大学院 教育学研究科 教授

居郷 至伸 東京大学大学院 教育学研究科 博士課程

岡田 真理子 和歌山大学 経済学部 助教授

小川 正人 東京大学大学院 教育学研究科 教授／研究代表者

萩原 克男 上越教育大学 学校教育学部 教授

中村 圭介 東京大学 社会科学研究所 教授

水本 徳明 筑波大学大学院 人間総合科学研究科 助教授

山森 光陽 国立教育政策研究所 初等中等教育研究部 研究員／質問紙・サンプリングなど技術面の企画・調整  
(敬称略 50音順)

### 調査実施機関

東京大学から調査の実務面について下記の機関に再委託を行った。

株式会社ベネッセコーポレーション・Benesse教育研究開発センター

## 3. 調査対象

### (1)調査対象校

全国の公立小学校および公立中学校から集落抽出法により抽出した計2,160校を対象校とした(1期あたり小学校180校、中学校180校を6期)。具体的な抽出方法については第1部第3章を参照されたい。実際に回答のあった調査協力校の数については本章第7節で述べる。

### (2)調査対象者

上記により抽出した学校に在籍する教員約5万人を調査対象者とした。実際の回答者数および回収率については、本章第7節で述べる。

具体的な調査対象者は、校長、教頭・副校長、教諭、栄養教諭、養護教諭、常勤講師とした。

なお、助教諭、養護助教諭、事務職員、栄養職員、非常勤講師、特別講師、校医、実習助手、ALT(AET)は、本調査対象外とした。

## 4. 調査時期

平成18年7月3日(月)から平成18年12月17日(日)にかけて、1期を4週間とし、以下の日程で合計6期の調査を行った。

- ①第1期:平成18年7月3日(月)～7月30日(日)
- ②第2期:平成18年7月31日(月)～8月27日(日)
- ③第3期:平成18年8月28日(月)～9月24日(日)
- ④第4期:平成18年9月25日(月)～10月22日(日)
- ⑤第5期:平成18年10月23日(月)～11月19日(日)
- ⑥第6期:平成18年11月20日(月)～12月17日(日)

なお、調査期間中に長期休業期を含む場合は、学校ごとの長期休業期間に即して、教員の業務記録のデータを長期休業期間と通常の授業期間(通常期)に分け、集計を行った。

各期につき、分析に用いたデータとその理由については、第2部第1章から第6章の、それぞれ第1節に記した。第1期、第3期、第4期、第5期については通常期のデータを用いた。第2期については夏季休業期のデータのみを取り上げた。第6期については長期休業期を含まなかったため、データは分割せずに用いた。

## 5. 調査方法

学校通しの郵送による自記式の質問紙調査。上の第3節第1項で述べた調査対象校に対して、第3節第2項で述べた調査対象である教員の人数分の調査票を送付し、校長から調査対象となる教員に配布してもらった。

調査対象者は、調査期間中(28日間)、毎日の勤務実態の調査票(「業務記録」)を記入するとともに、アンケート(「教員質問票」)にも回答した上で、調査期間終了後に校長に提出する。校長(または教頭・副校長)には、とりまとめた教員の調査票および自身の調査票、記入済みの学校調査票を1週間以内に調査実施事務局宛に返送してもらった。

## 6. 調査票の種類および調査項目

### (1) 調査票の種類

調査票は、大別して、①『学校調査票』、②『教員個人調査票』の2種類からなる。それぞれの調査票は、第3部に見本を収録した。

①『学校調査票』は、調査対象校の特徴をたずねる調査票である。各校につき1枚割り当て、校長あるいは教頭・副校長が回答する。

②『教員個人調査票』は、職階を問わず、本調査対象となったすべての教員が回答する共通の調査票で、アンケート(「教員質問票」)と、調査期間である28日間、毎日30分単位で24時間(48マス)の業務状況を記入する「業務記録」の2つの部分から構成されている。「業務記録」の内訳は、後の第9節第5項でみるa～uの21種類の業務内容と、「休憩・休息」のvに分類されており、教員は該当する業務分類を選択する。

	回答者	内容
①学校調査票	校長または教頭・副校長	調査対象校の特徴
②教員個人調査票	調査対象の教員全員	・調査対象者の属性(「教員質問票」) ・28日間の勤務実態の記録(「業務記録」)

### (2) 調査項目

各調査票につき、調査項目の構成は以下の通りである。

質問項目は、基本的には小学校・中学校いずれにおいても共通となるように設計した。しかし、力を入れて研究している教科は小学校のみ、担当している教科、部活動の顧問に関しては、中学校のみ質問している。

#### ①『学校調査票』

学校種／学校の所在する自治体および設置者／児童生徒数／教職員数／非常勤講師数および延べ合計勤務時間／学校の立地状況に関する特徴／学校の特徴／学校の規定している出退勤時刻とその管理方法

#### ②『教員個人調査票』

##### 1)「教員質問票」

性別／年齢／教職歴および行政職歴／職階／学級担任の有無および担当学年・クラス人数／力を入れて研究している教科(小学校のみ)／担当している教科(中学校のみ)／部活動の顧問の有無とその種類(中学校のみ)／主任の担当の有無とその種類／一週間あたりの担当授業コマ数／年次有給休暇取得状況／通勤時間／家庭での時間的ゆとりに関する質問(幼い子ども、要介護者の有無)／教員の仕事についての意識

##### 2)「業務記録」

日にちおよび勤務日の区分／その日の出退勤時刻／一日24時間の業務記録(30分単位)／所定の休憩時間内に実際にとることができた休憩時間

## 7. 回収結果

各期における調査票の有効回収率は次の通りである。いずれの調査時期においても8割を超える高い回収率となっている。

	第1期 (7/3~7/30)	第2期 (7/31~8/27)	第3期 (8/28~9/24)
小学校	3,556人 / 4,133部 (164校 / 180校) 86.0%	3,540人 / 4,104部 (168校 / 180校) 86.3%	3,446人 / 4,069部 (162校 / 180校) 84.7%
中学校	4,174人 / 4,843部 (168校 / 180校) 86.2%	4,226人 / 4,709部 (171校 / 180校) 89.7%	3,934人 / 4,752部 (157校 / 180校) 82.8%
全体	7,730人 / 8,976部 (332校 / 360校) 86.1%	7,766人 / 8,813部 (339校 / 360校) 88.1%	7,380人 / 8,821部 (319校 / 360校) 83.7%
	第4期 (9/25~10/22)	第5期 (10/23~11/19)	第6期 (11/20~12/17)
小学校	3,327人 / 4,029部 (151校 / 180校) 82.6%	3,715人 / 4,310部 (171校 / 180校) 86.2%	3,654人 / 4,099部 (168校 / 180校) 89.1%
中学校	3,915人 / 4,781部 (158校 / 180校) 81.9%	4,372人 / 4,915部 (172校 / 180校) 89.0%	4,186人 / 4,753部 (163校 / 180校) 88.1%
全体	7,242人 / 8,810部 (309校 / 360校) 82.2%	8,087人 / 9,225部 (343校 / 360校) 87.7%	7,840人 / 8,852部 (331校 / 360校) 88.6%

回収人数 / 発送部数  
協力学校数 / 依頼学校数  
有効回収率 (%)

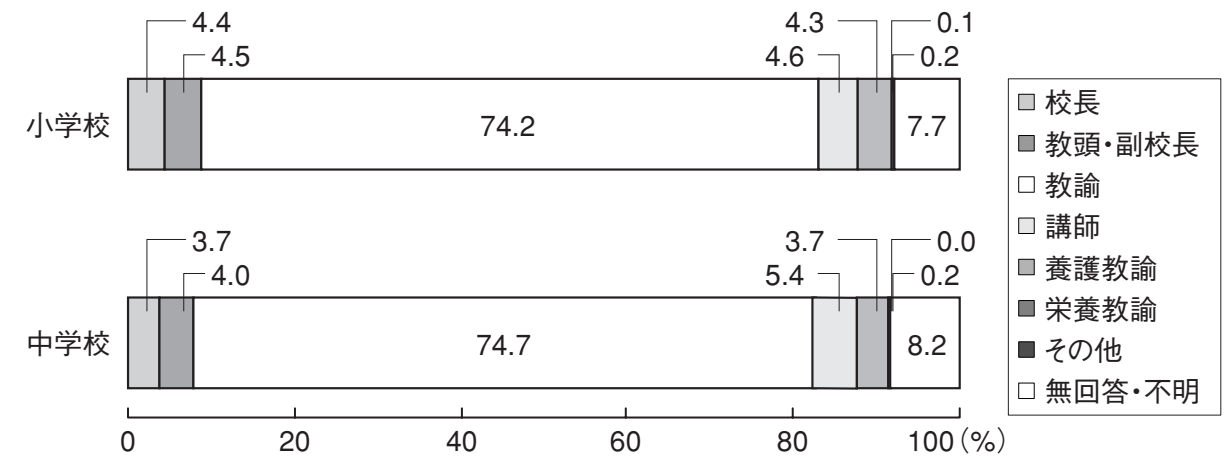
## 8. 回答者の属性

本調査に回答した教員について、(1)職階、(2)性別、(3)年齢といった基本的な属性をみておく。その他の属性については、巻末の基礎集計表を参照されたい。また、ここでは第1期から第6期全体を通じての属性について概観する。調査時期ごとの基本的な属性の構成については、巻末の基礎集計表を参照されたい。

### (1) 職階

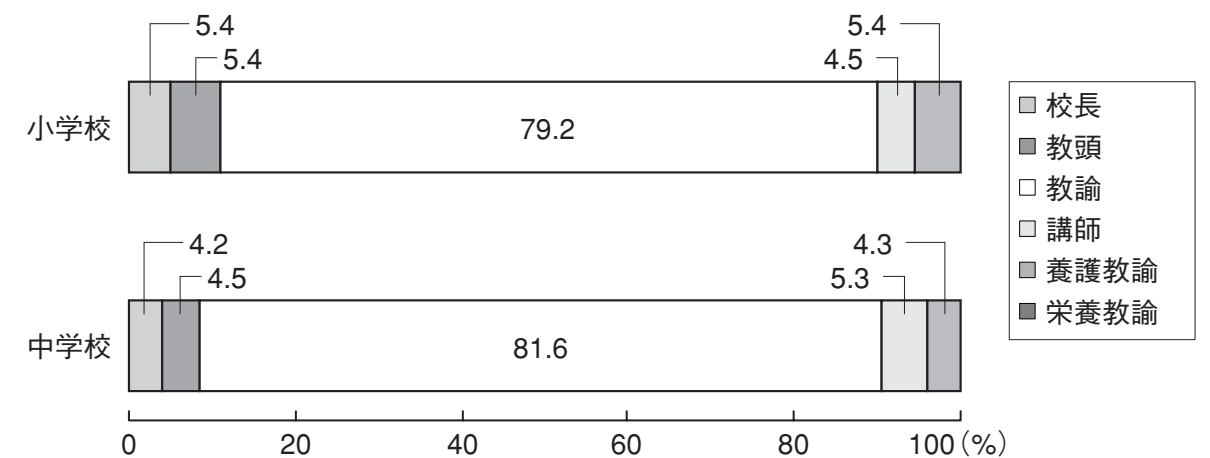
本調査における回答者の職階の分布は、次のようになっている。

小学校・中学校いずれにおいても、管理職がそれぞれ4%前後であり、教諭は7割強となっている。教諭の人数は、小学校では15,757人、中学校では18,543人となっている。なお、栄養教諭は平成17年度に開始された制度であり、サンプル数が少ない。そのため、図表中では、参考値として示している。また、「その他」の職階として具体的にあげられている回答には、「総括教諭」「主幹」などがあつた。



これを公式統計と比べてみよう。

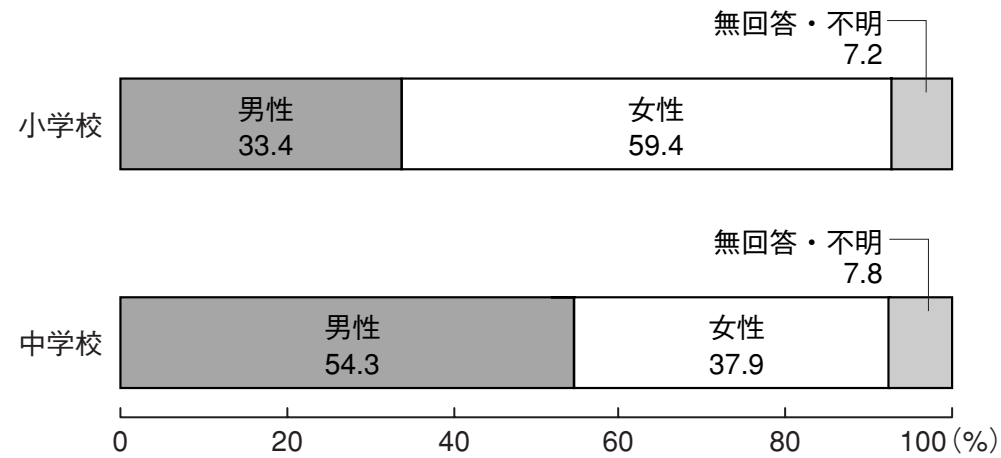
平成18年度の文部科学省『学校基本調査』によれば、本務教員に限った公立の小学校・中学校教員の職階別の構成比は、管理職は4~5%であるのに対し、教諭は8割である。教諭の人数は、小学校で324,561人、中学校で189,455人である。



文部科学省『平成18年度 学校基本調査』より 助教諭・養護助教諭をのぞいて算出 平成18年5月1日現在

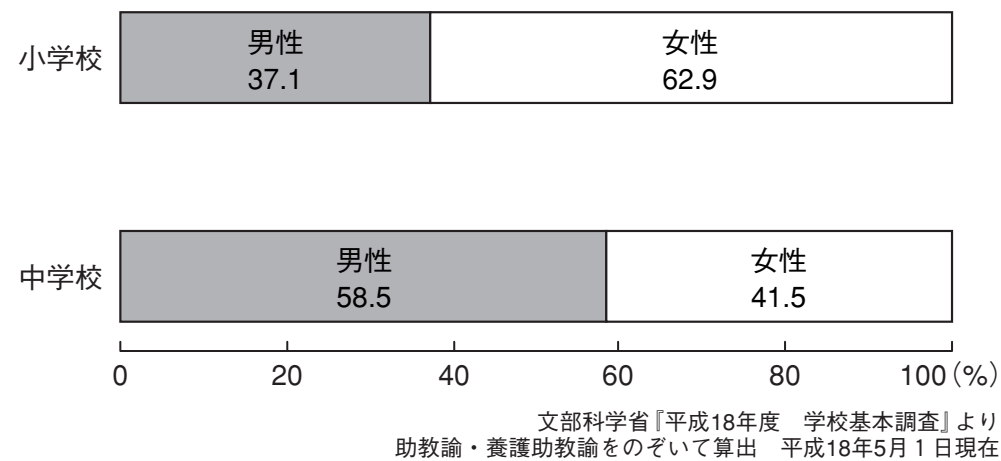
(2)性別

本調査における回答者の性別の分布は、次のように、小学校においては男性33.4%、女性59.4%、中学校においては男性54.3%、女性37.9%となっている。



これを公式統計と比べてみよう。

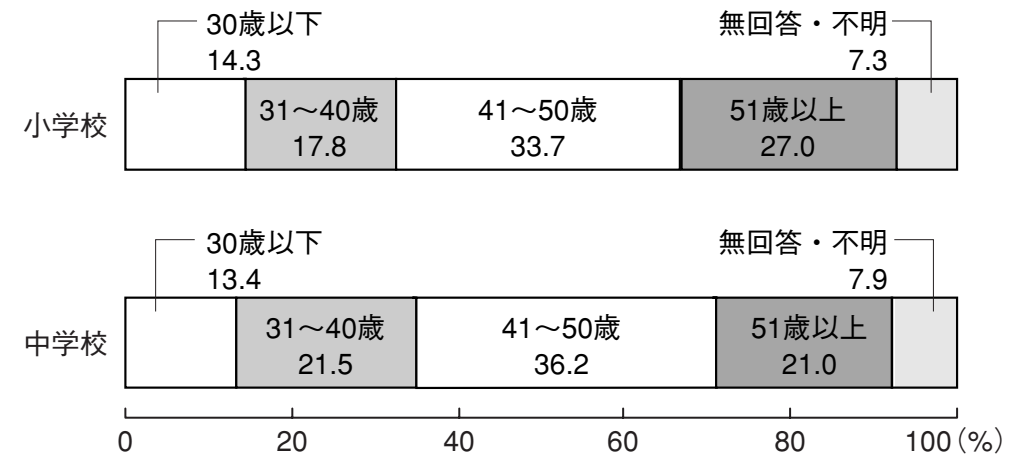
平成18年度の文部科学省『学校基本調査』によれば、公立の小学校・中学校の教員(本務教員)の性別の構成は、小学校では男性37.1%、女性62.9%、中学校では男性58.5%、女性41.5%となっている。



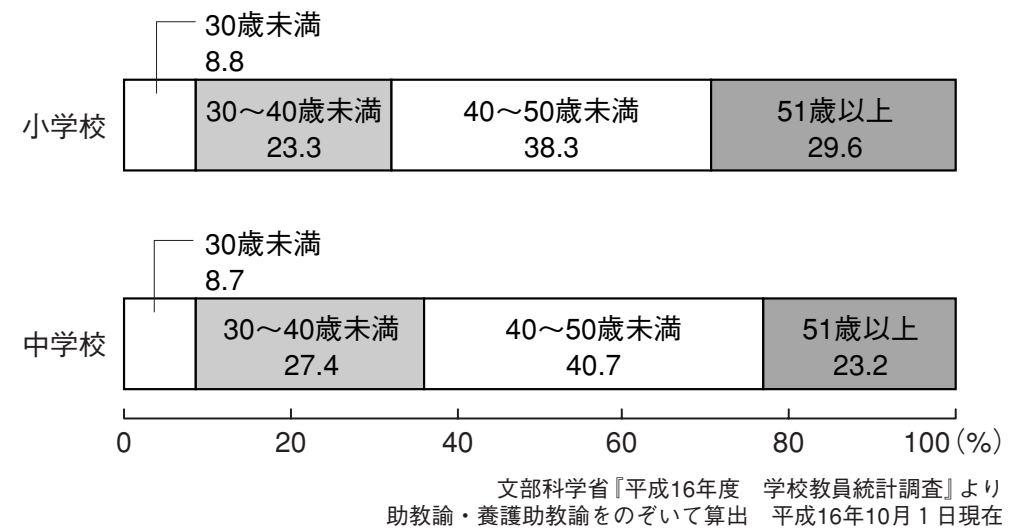
小学校では教員の約6割を女性が占め、中学校ではこれとちょうど逆に教員の約6割を男性が占めているといえる。本調査の回答者の性別においても無回答・不明をのぞくとおおむね同じ構成となっており、サンプリングの妥当性が裏付けられるといえる。

(3)年齢

本調査における回答者の年齢の分布は、小学校・中学校ともにほぼ同じで30歳以下が1割強、31~40歳以下がおよそ2割、41~50歳以下が3割強、51歳以上が2割強となっている。



なお、『学校基本調査』のように悉皆調査ではなく、3年ごとの調査だが、教員の年齢別構成をみるために、平成16年度の文部科学省『学校教員統計調査』によれば、公立の小学校・中学校の教員(本務教員)の年齢の構成は、小学校・中学校ともにほぼ同じで30歳未満が1割弱、30歳以上40歳未満が4分の1ほど、40歳以上50歳未満が4割、50歳以上が2~3割である。



本調査と『学校教員統計調査』では調査年次に加え、年齢のカテゴリーがやや異なるうえ、平成16年度の調査時点では栄養教諭が制度化されていなかったなどの違いもあり、単純な比較はできないが、無回答・不明をのぞけば、ほぼ同じ構成になっており、サンプリングの妥当性が裏付けられる結果となっている。

## 9. 時間量の集計について

### (1) 時間の単位

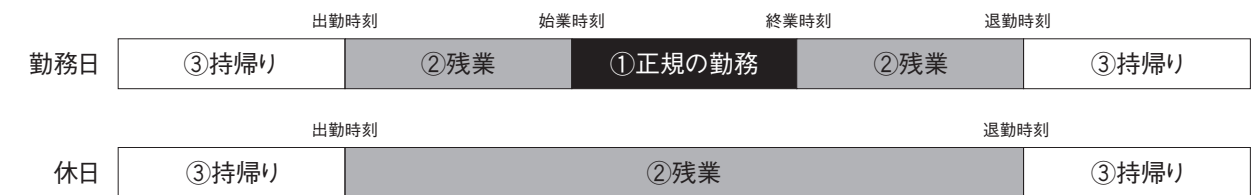
本調査においては、24時間を30分単位で区切り、業務記録をつける設計となっている。つまり、教員は一日あたり、48のマスに分けられた時間につき、業務を行った場合の状況を記録する(第3部の「2. 教員個人調査票見本」を参照のこと)。

調査設計において業務記録の単位時間を30分とした理由は、第1部第2章でも触れたように、40年前に文部省(当時)が実施した教員勤務状況調査\*1、本調査の実施にあたっての試行調査、先行研究などを踏まえたためである。つまり、記録の単位時間を細分化し過ぎないことにより、教員の負担を軽減するとともに、回収率の向上につなげ、業務記録のデータとしての精度を上げるねらいがある。

なお、実際の教員の業務においては、短い時間にも複数の業務を同時にこなしているのが実情である。しかしながら本調査では、そうした実態を踏まえつつも、これまでに明らかにされてこなかった教員の勤務の全体像を明らかにするため、また、約5万人の4週間にわたる業務記録という膨大なデータを処理する際の技術上の制約から、同一時間帯に複数の業務を行った場合は、最も負担感の大きい業務1つに絞って記録するように設計した。

### (2) 時間帯の種類

本調査においては、次の図のように時間帯の種類を設定した。



#### 【勤務日】

残業時間 = ②

持帰り時間 = ③

残業時間+持帰り時間 = ②+③

労働時間(持帰りを含まない) = ①+②

労働時間(持帰りを含む) = ①+②+③

#### 【休日】

残業時間 = ②

持帰り時間 = ③

残業時間+持帰り時間 = ②+③

第1部第1章でも述べたように、本調査は教員の残業時間および持帰り時間を明らかにするという関心で行った。そこでここでは、本報告書で取り上げる残業時間量、持帰り時間量、労働時間(持帰りを含まない)量といった時間量の算出方法について説明する。

まず、通常の勤務日に関しては、始業時刻から終業時刻までを「①正規の勤務時間帯」とした。今回の集計では算出手順上の制約から、始業時刻と終業時刻は全学校で一律に8:00~17:00と設定している。これは、本節第3項でみるとおり、学校が規定する勤務開始時間は8:15~8:30の間に、勤務終了時間は17:00~17:15の間に集中しているためである。

勤務日の各教員の出勤から退勤までの時刻のうち、「①正規の勤務時間帯」を除いた時間帯を「②残業時間帯」ととらえる。

また、1日の業務記録の開始時刻である5:00~出勤時刻までの時間および退勤時刻から1日の業務記録終了時刻である翌日の5:00までを「③持帰り時間帯」ととらえる。

さらに、休日についても、出退勤時刻に記入がある場合には、その出勤から退勤までの時間を「②残業時間帯」とし、それ以外の時間帯を「③持帰り時間帯」とした。出退勤時刻に記入がない場合には、休日のすべての時間を「③持帰り時間帯」とした。

以上の①~③の時間帯の組み合わせにより、①+②を「労働時間(持帰りを含まない)帯」、①+②+③を「労働時間(持帰りを含む)帯」ととらえる。

以上、それぞれの時間帯に業務を行っているとの回答があった時間を集計し、それぞれの時間量とした。

\*1 青木栄一執筆の第1部第2章を参照されたい。

■本報告書で使用する用語とその概念・算出方法

	用語	本調査報告書における概念・算出方法
勤務日の種類	休日	教員が毎日記入する「業務記録」中、「②今日の勤務は、1～4のどれにあたりますか」で「4.休日」に選択があった日
	勤務日	教員が毎日記入する「業務記録」中、「②今日の勤務は、1～4のどれにあたりますか」で「1.勤務日」に選択があり、かつ、③その日の出退勤時刻に記入があった日
時間帯の種類	正規の勤務時間帯	勤務日のうち、8:00～17:00の時間帯のこと
	残業時間帯	勤務日…「業務記録」中の③に記入されたその日の出退勤時刻の内で、正規の勤務時間以外の時間帯のこと 休日…「業務記録」中の③その日の出退勤時刻に記入があった場合、記入された出勤から退勤までの時間帯のこと (③に記入がない場合、残業時間は0とみなす)
	持帰り時間帯	勤務日・休日…「業務記録」中の③に記入されたその日の出勤時刻より前の時間帯、および、同退勤時刻より後の時間帯のこと (休日で、③に記入がない場合、すべて持帰り時間とみなす)
	労働時間(持帰りを含まない)帯	正規の勤務時間帯と残業時間帯を合わせた時間帯のこと (休日は残業時間帯のみ)
	労働時間(持帰りを含む)帯	正規の勤務時間帯、残業時間帯、持帰り時間帯を合わせた時間帯のこと (休日は残業時間帯と持帰り時間帯のみ)
時間量の種類	残業時間量	残業時間帯のなかで、業務項目a～uについている○の数×0.5(時間)
	持帰り時間量	持帰り時間帯のなかで、業務項目a～uについている○の数×0.5(時間)
	労働時間(持帰りを含まない)量	労働時間(持帰りを含まない)帯のなかで、業務項目a～uについている○の数×0.5(時間)
	労働時間(持帰りを含む)量	労働時間(持帰りを含む)帯のなかで、業務項目a～uについている○の数×0.5(時間)

(3)始業時刻・終業時刻の設定

前項で始業時刻・終業時刻を軸とした時間帯の分類について述べたが、本調査のデータ集計における始業時刻・終業時刻の設定と処理の方法について説明しておく。

地方公務員である公立の小学校・中学校教員の「①正規の勤務時間」は8時間45分(休憩を含む)であるが、始業時刻・終業時刻の設定は学校ごとに異なる。本調査の調査対象校においても、始業時刻・終業時刻の組み合わせは次のような分布を示している。

	小学校		中学校	
	学校数	%	学校数	%
7:50-16:35	0	0.0	7	0.7
7:55-16:40	13	1.3	34	3.4
8:00-16:45	124	12.6	167	16.9
8:05-16:50	38	3.9	67	6.8
8:10-16:55	112	11.4	176	17.8
<b>8:15-17:00</b>	<b>335</b>	<b>34.0</b>	<b>281</b>	<b>28.4</b>
8:20-17:05	125	12.7	107	10.8
8:25-17:10	56	5.7	40	4.0
8:30-17:15	158	16.1	79	8.0
その他	23	2.3	31	3.1
合計	984	100.0	989	100.0

本調査では、小学校および中学校における始業時刻・終業時刻の組み合わせのうちで最も

多い、8時15分始業・17時00分終業という組み合わせを基準にし、全教員の始業時刻・終業時刻を、8時00分始業・17時00分終業と設定した。

(4)勤務日・休日の考え方

本調査においては、一日分の業務記録の記入に際して、その日を「1.勤務日」「2.年休(終日)」「3.年休(部分)」「4.休日」の4種類に区分した上で記入する設計とした。

「1.勤務日」「4.休日」とは、本調査独自の定義づけのもとに用いている。「1.勤務日」とは平日ではなく、「4.休日」とは土日祝日を意味しない。「1.勤務日」とは、当該教員にとっての出勤すべき日であり、「4.休日」とは学校等で定めた出勤の必要がない日である。「2.年休(終日)」「3.年休(部分)」の概念については、第3部の「2.教員個人調査票見本」(P.204)を参照されたい。

本報告書では、この4種類の日の区分のうち、特に「1.勤務日」「4.休日」の勤務状況について報告する。

なお、「4.休日」についてはすべての業務記録を集計に用いた。しかし、「1.勤務日」については、すべての業務記録を集計に用いるのではなく、一定の条件を満たした「1.勤務日」の業務記録のみを集計に用いた。一定の条件とは、①日にちの区分が「1.勤務日」であり、なおかつ②出勤時刻・退勤時刻の記入があり、③一日のうち最低でも5時間分の記入がある(48マスのうち10マス)日のことである。本報告書では、この3つの条件を満たした「1.勤務日」を集計した結果を用いている。その理由は、不備や誤記入、空欄などが多い業務記録を集計に加えると、全体で平均の業務時間などを算出する場合に、業務時間量の代表値が過度に少なくなり、実態を反映しない危険性があるためである。

(5)業務の分類

教員の業務は多岐にわたり、校種、職階、年齢などによっても多種多様であるため、限られた種類に分類することは難しい。しかし、教員の全体としての勤務実態を把握するために、先行研究\*2および試行調査などの結果を参考にしつつ、本調査においては、次の表のようなa～vの22種類に分類した。

■業務の分類

児童生徒の指導にかかわる業務	a	朝の業務	朝打合せ、朝学習・朝読書の指導、朝の会、朝礼、出欠確認など
	b	授業	正規の授業時間に行われる教科・道徳・特別活動・総合的な学習の時間の授業、試験監督など
	c	授業準備	指導案作成、教材研究・教材作成、授業打合せ、総合的な学習の時間・体験学習の準備など
	d	学習指導	正規の授業時間以外に行われる学習指導（補習指導、個別指導など）、質問への対応、水泳指導など
	e	成績処理	成績処理にかかわる事務、試験問題作成、採点、評価、提出物の確認・コメント記入、通知表記入、調査書作成、指導要録作成など
	f	生徒指導（集団）	正規の授業時間以外に行われる次のような指導：給食・栄養指導、清掃指導、登下校指導・安全指導、遊び指導（児童生徒とのふれ合いの時間）、健康・保健指導（健康診断、身体測定、けが・病気の対応を含む）、生活指導、全校集会、避難訓練など
	g	生徒指導（個別）	個別の面談、進路指導・相談、生活相談、カウンセリング、課題を抱えた児童生徒の支援など
	h	部活動・クラブ活動	授業に含まれないクラブ活動・部活動の指導、対外試合引率（引率の移動時間を含む）など
	i	児童会・生徒会指導	児童会・生徒会指導、委員会活動の指導など
	j	学校行事	修学旅行、遠足、体育祭、文化祭、発表会、入学式・卒業式、始業式・終業式などの学校行事、学校行事の準備など
	k	学年・学級経営	学級活動（学活・ホームルーム）、連絡帳の記入、学年・学級通信作成、名簿作成、掲示物作成、動植物の世話、教室環境整理、備品整理など
学校の運営にかかわる業務	l	学校経営	校務分掌にかかわる業務、部下職員・初任者・教育実習生などの指導・面談、安全点検・校内巡視、機器点検、点検立会い、校舎環境整理、日番など
	m	会議・打合せ	職員会議、学年会、教科会、成績会議、学校評議会、その他教員同士の打合せ・情報交換、業務関連の相談、会議・打合せの準備など
	n	事務・報告書作成	業務日誌作成、資料・文書（調査統計、校長・教育委員会等への報告書、学校運営にかかわる書類、予算・費用処理にかかわる書類など）の作成、年度末・学期末の部下職員評価、自己目標設定など
	o	校内研修	校内研修、校内の勉強会・研究会、授業見学、学年研究会など
外部対応	p	保護者・PTA対応	学級懇談会、保護者会、保護者との面談や電話連絡、保護者対応、家庭訪問、PTA関連活動、ボランティア対応など
	q	地域対応	町内会・地域住民への対応・会議、地域安全活動（巡回・見回りなど）、地域への協力活動など
	r	行政・関係団体対応	教育委員会関係者、保護者・地域住民以外の学校関係者、来校者（業者、校医など）の対応など
校外	s	校務としての研修	初任者研修、校務としての研修、出張をとまなう研修など
	t	会議	校外での会議・打合せ、出張をとまなう会議など
その他	u	その他の校務	上記に分類できないその他の校務、勤務時間内に生じた移動時間など
	v	休憩・休息	校務と関係のない雑談、休憩・休息など

\*2 青木栄一執筆の第1部第2章、および山森光陽執筆の第1部第4章を参照されたい。

10. 本報告書を読む上での注意事項

(1)数値について

- ・労働時間量等については、時間に換算する際に小数点以下を切捨てて表示している。そのため、業務の内訳ごとに算出した平均時間を合計すると、表示より少なくなる場合がある。
- ・百分比(%)は有効回収数のうち、その設問に該当する回答者を母数として算出し、小数点第2位を四捨五入して表示した。四捨五入の結果、各々の項目の数値の和と合計を示す数値が一致しない場合がある。
- ・平均値でうかがえる労働時間量とは、極端に言えば、ある業務を行った時間が0分の人も1時間の人もいるという状態をならした計算上の値であることに注意が必要である。特に、業務内訳に関しては、たとえば、平均残業時間における業務内訳で部活動・クラブ活動が12分となっても、すべての教員が毎日12分ずつ部活動・クラブ活動をしているわけではなく、業務時間の分布は、教員によって、また、日によって異なると考えられる。
- ・休憩時間の調査結果が45分を下回る結果になっているが、これは各校や各自治体が45分に満たない休憩時間を設定しているというわけではなく、調査期間中に各教員が実際に取得することのできた休憩時間を示している。

(2)用語について

本調査では、勤務日、休日、残業、持帰り、労働時間などの定義につき、独自の定義をおこなっている。これらに関しては、本章第9節を参照されたい。

(3)通期全体で勤務実態をみることについて

本調査では、第1期から第6期までの調査期間(以下、「通期」)それぞれにおいて、異なる教員を対象としている。そのため厳密に言えば、各期の結果を並べてみても、同一人物の勤務実態の時期的な変化をとらえたということにはならない。しかしながら、回答者数が非常に多い調査であることや、各期について長期休業期などの時期的な特徴が反映される調査結果となっていることから、複数の期にまたがって、あるいは通期で、勤務実態の変化を推測することもある程度は可能であると考え、参考までに分析を行った。



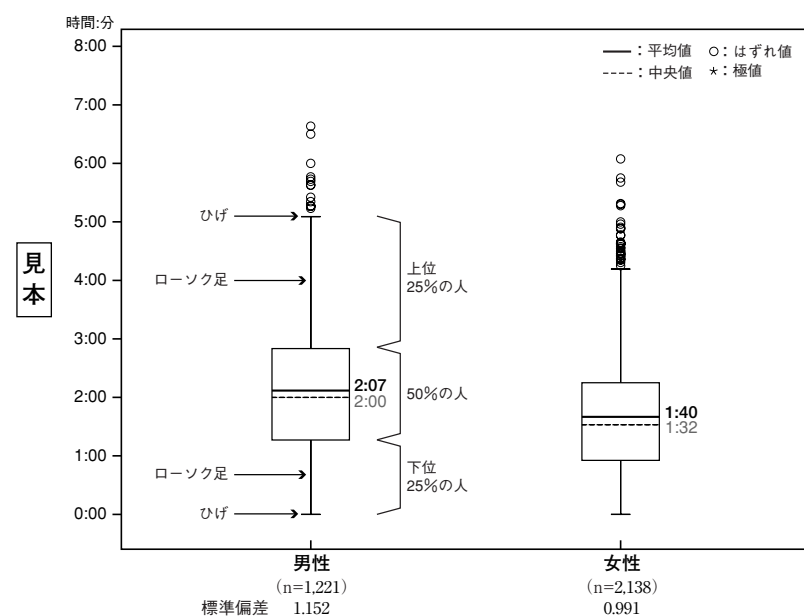
#### (4)箱ひげ図の見方

本報告書においては、一般的なグラフのほか、箱ひげ図を用いた。

箱ひげ図とは、データの分布を視覚的にとらえることのできるグラフで、複数のカテゴリ間でのデータの分布を比較する際に便利である。本調査に即して言えば、性別や職階別の教員の残業時間の平均や分布の範囲の様子を視覚的にとらえることができる\*3。

以下、箱ひげ図について本調査に即した説明をしておこう。

箱ひげ図とは、箱と、箱から出た上下のローソク足とひげおよびはずれ値や極値からなる図の全体を指す。グラフの軸については、縦軸は業務時間をあらわし、横軸はカテゴリ(性別や職階などの種類)をあらわす。各業務時間(縦軸)に教員がどのように分布しているかが、箱やひげ、はずれ値や極値\*4によってあらわされている。つまり箱ひげ図全体の長さは、教員の業務時間が分布する範囲をあらわす。



箱ひげ図を構成するそれぞれの部分について説明しておこう。

箱のかたちになっている箇所は、教員全体のうち中央の50%の人数が分布している業務時間の範囲をあらわしている。箱の上のひげは最大値を、箱の下のひげは最小値をあらわす。箱に入っている線のうち、中央値(破線)は、教員を業務時間量の順に並べたときの中央50%の値を示している。箱から出ている棒線をローソク足といい、上のローソク足は上位25%、下のローソク足は下位25%の人が分布していることをあらわす。本報告書では、これに加えて平均値(実線)も示した。平均値はすべての教員の業務時間量を足し合わせ、人数で割った値を示している。

標準偏差とは、データのちらばり具合をあらわす目安となる値で、分散の平方根をとったものである。

\*3 なお、箱ひげ図は、データの分布に複数の山がある場合には用いることができない。本報告書では、箱ひげ図を作成するにあたって、データの分布に複数の山がないこと(データの単峰性)を確認した上で作成している。

\*4 箱の長さの1.5倍以上の業務時間に分布する教員は、はずれ値や極値として示されている。はずれ値とは箱の上端または下端から、箱の長さの1.5倍~3倍の位置にある業務時間の教員であり、極値とは、箱の上端または下端から、箱の長さの3倍以上の位置にある業務時間の教員である。なお、はずれ値や極値という表現は、統計上の用語であり、誤った値であるということの意味するわけではない。\*5も参照のこと。

分散とはデータのちらばり具合をあらわす値で、個々のデータの値が平均値からどれくらい離れているのかという距離を2乗して足し上げ、平均を出したものであり、標準偏差はその平方根をとったものである。

データがどのようなかたち(範囲)でちらばっているのかは、平均値と標準偏差または分散によって決まる。たとえば、標準偏差ないし分散が0であるということはデータにばらつきがないこと、すべての値がまったく同じであることを意味する。標準偏差や分散が大きい値になるほど、データが平均値から離れた広い範囲にちらばっていることを意味し、小さい値であるほど、平均値の近くにデータが分散していることを意味する。したがって、平均値が同じ集団があっても、標準偏差や分散が異なれば、データのちらばり方は異なる。

なお、仮にごく一部の教員が極端に長いまたは短い業務時間であった場合、平均値はその影響を受けやすいが、中央値は受けにくいという特性がある\*5。よって、中央値と平均値を比較し、その乖離が大きければ、極端な値をとる教員がいることがわかる。ただし、学問的な論文などをのぞく日常的な場面では、経験的に理解しやすいため、平均値が用いられることが多い。そこで中央値と平均値の長短を考慮し、本報告書では、1)箱ひげ図に中央値と平均値をともに盛り込むこと、2)本文の記述は平均値を中心にすすめること、3)各期における教員ごとの平均残業時間量および平均持帰り時間量の分布の棒グラフもあわせて示すことにした。

\*5 中央値と平均値の算出にあたっては、はずれ値と極値を含めて算出している。これは、必ずしも大きな値がすべて異常値というわけではなく、たとえば修学旅行などのように、実態として教員の労働時間が長くなる場合もあるためである。この点は現場教員からの声によっても確認できた。

# 第1章 第1期(通常期)における勤務実態

## 1. 第1期の調査協力校の概況

第1期の調査期間は、平成18年7月3日(月)から平成18年7月30日(日)までの4週間である。

まず、第1期の調査協力校の時期的特徴について紹介する。

第1期において回答のあった332校すべての小学校・中学校が、調査期間の後半に児童・生徒の夏季休業期(以下、「夏季休業期」)を含んでいる。夏季休業期前の通常の授業などが行われている期間(以下、「通常期」)には、試験や成績処理などの学期末に伴う業務が集中する傾向にある。これに対して夏季休業期には、補習などの特別な場合をのぞいて授業はなく、登校する児童・生徒の数も少ない。そのため、通常期と夏季休業期では、教員の業務における質と量に大きな違いがあると考えられる。そこで第1期については、調査協力校の夏季休業期の開始日の情報をもとに、データを通常期と夏季休業期の2つの時期に分けて分析を行った。

なお、調査協力校における夏季休業期の開始日の分布は表2-1-1のようになっている。

分布をみると、7月21日(金)から夏季休業期を開始するという学校が、75.0%(249/332校)と最も多い。つまり、第1期の調査協力校のうち75.0%の学校において、調査期間(7月3日から7月30日)の3~4割に該当する期間(10/28日間)が夏季休業期になっている。

本章では、夏季休業期前の教員の勤務実態の特徴を検討するため、第1期のうち通常期について報告を行うこととする。なお、夏季休業期の教員の勤務に関する分析は、次の第2章において第2期のデータをもとに行う。

表2-1-1 第1期の調査協力校における夏季休業期の開始日

夏季休業期 開始日	7月18日 (火)	7月19日 (水)	7月20日 (木)	7月21日 (金)	7月22日 (土)	7月23日 (日)	
	3	2	10	249	26	3	
	0.9	0.6	3.0	75.0	7.8	0.9	
7月24日 (月)	7月25日 (火)	7月26日 (水)	7月27日 (木)	7月28日 (金)	7月29日 (土)	計	
5	15	8	9	1	1	332	校
1.5	4.5	2.4	2.7	0.3	0.3	100.0	%

## 2. 残業時間・持帰り時間および業務の内訳

### (1) 全体的な残業時間・持帰り時間の実態

まず、第1期(通常期)の勤務日における残業時間・持帰り時間の実態について、小学校、中学校、小学校と中学校の比較という順番で検討していこう(表2-1-2)。

小学校では、残業時間量は平均で1時間49分、持帰り時間量は平均47分、これらを合わせた時間の平均は2時間37分である。

中学校では、残業時間量は平均2時間26分、持帰り時間量は平均25分、これらを合わせた時間の平均は2時間51分である。

また、小学校と中学校を比べてみると、勤務日の残業時間の平均は、中学校の方が小学校よりも約40分長い。一方、持帰り時間の平均は小学校の方が中学校よりも約20分長い。

次に、第1期(通常期)の休日における残業時間・持帰り時間の実態について、小学校、中学校、小学校と中学校の比較という順番で検討していこう(表2-1-3)。

小学校では、残業時間は平均で28分、持帰り時間は平均で2時間18分、残業時間と持帰り時間を合わせた時間の平均は2時間47分である。残業時間の中央値が0分であることからわかるように、小学校の教員は基本的に休日には学校で業務を行っていないといえる。一方で、休日の持帰り時間においては、中央値と平均値に30分のひらきがあることからわかるように、小学校では、休日に持帰り仕事をする人の間では時間量の差が大きい(表2-1-3)。これは後の図2-1-4からも確認できる。

中学校では、残業時間と持帰り時間はほぼ同じで、残業時間は平均1時間50分、持帰り時間は平均1時間47分、これらを合わせた時間の平均は3時間37分である。また、休日の残業時間と持帰り時間の中央値と平均値におよそ50分から60分のひらきがあることからわかるように、中学校では休日に残業や持帰り仕事をする人の間で、時間量の差が大きい(表2-1-3)。これは後の図2-1-3や図2-1-4からも確認できる。

小学校と中学校を比べてみると、休日の残業時間の平均は中学校の方が小学校よりも約1時間20分長い。持帰り時間の平均は、小学校の方が中学校よりも約30分長い。小学校、中学校それぞれの残業時間・持帰り時間における業務内訳については後の第3項で述べるが、中学校においては部活動を行っているために長くなると考えられる。

以上、第1期(通常期)の勤務日と休日を比べてまとめておこう。

小学校の教員は、勤務日においては、残業時間の方が持帰り時間よりも約1時間長く(表2-1-2)、休日においては、持帰り時間の方が残業時間よりも1時間50分長い(表2-1-3)。特に持帰り時間については、勤務日よりも休日の方が約1時間30分長くなっており、休日には学校で業務を行わないものの、自宅で持帰り仕事を行っている様子がかがえる(表2-1-2、表2-1-3)。

中学校の教員は、勤務日においては、残業時間の方が持帰り時間よりも約2時間長く(表2-1-2)、休日においては、残業時間と持帰り時間はほぼ同じ長さである(表2-1-3)。持帰り時間については、勤務日よりも休日の方が1時間20分ほど長い(表2-1-2、表2-1-3)。

表2-1-2 勤務日・1日あたりの平均残業時間量・持帰り時間量

	残業時間量	持帰り時間量	残業時間+持帰り時間
小学校	1時間49分 〔1時間40分〕(1.073)	47分 〔32分〕(0.845)	2時間37分 〔2時間30分〕(1.322)
中学校	2時間26分 〔2時間19分〕(1.237)	25分 〔10分〕(0.613)	2時間51分 〔2時間46分〕(1.368)
全体	2時間09分 〔2時間00分〕(1.203)	35分 〔17分〕(0.752)	2時間44分 〔2時間38分〕(1.352)

[ ]内は中央値、( )内は標準偏差を示す。

表2-1-3 休日・1日あたりの平均残業時間量・持帰り時間量

	残業時間量	持帰り時間量	残業時間+持帰り時間
小学校	28分 〔0分〕(1.081)	2時間18分 〔1時間48分〕(2.295)	2時間47分 〔2時間20分〕(2.399)
中学校	1時間50分 〔48分〕(2.435)	1時間47分 〔1時間00分〕(2.220)	3時間37分 〔3時間12分〕(2.920)
全体	1時間12分 〔0分〕(2.051)	2時間01分 〔1時間18分〕(2.270)	3時間14分 〔2時間42分〕(2.726)

[ ]内は中央値、( )内は標準偏差を示す。

(2)個人単位でみた残業時間・持帰り時間の実態

前項では、第1期(通常期)の教員全体における残業時間量、持帰り時間量の平均に注目した。しかし、すべての教員が一様に残業や持帰り仕事を行っているわけではなく、これらの時間は、教員間での差が大きいと考えられる。

そこで、第1期(通常期)における教員一人あたりの平均残業時間量および平均持帰り時間量の分布をみたものが、図2-1-1から図2-1-4である。

以下、勤務日と休日それぞれについて、残業時間、持帰り時間の順に、それぞれ小学校、中学校の結果を検討していく。

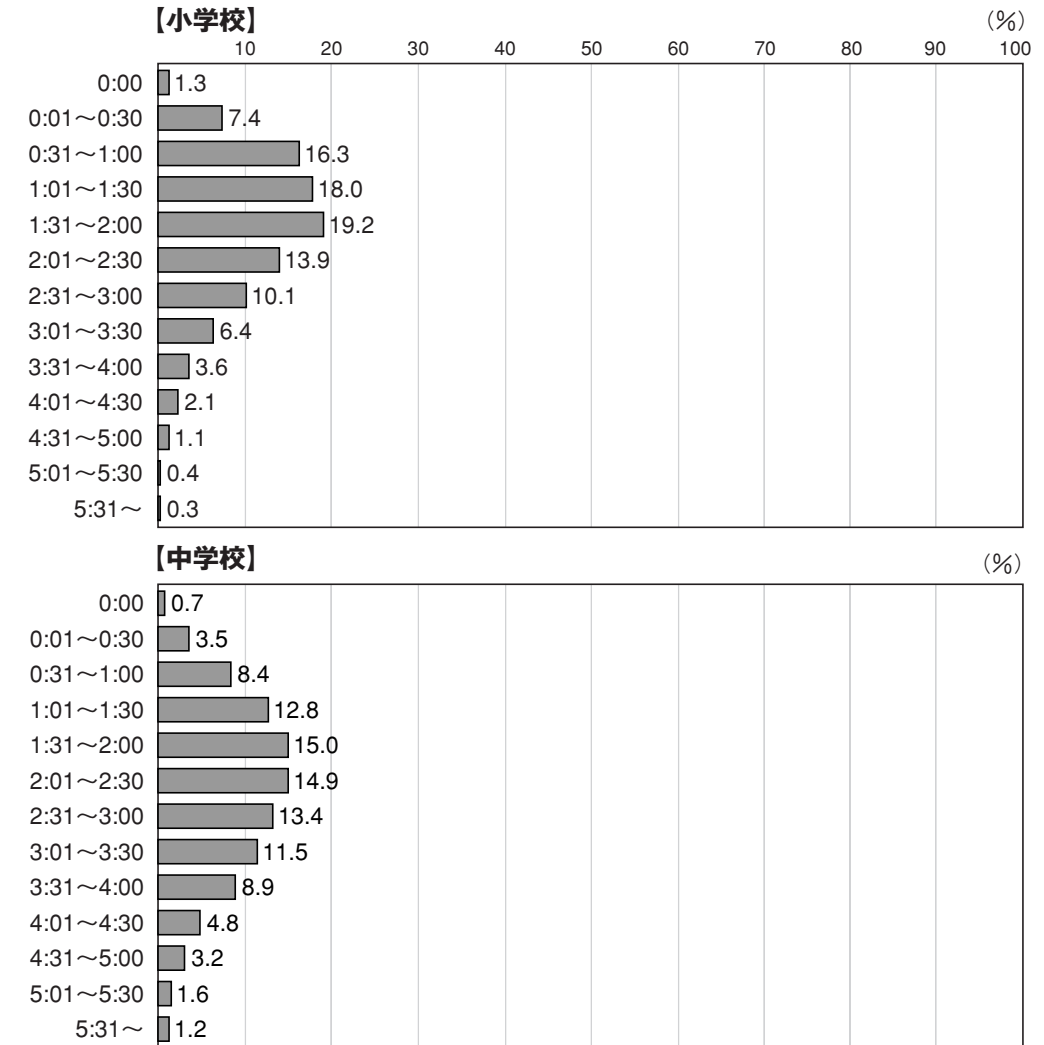
まず、第1期(通常期)の勤務日における平均残業時間量について検討しよう(図2-1-1)。

小学校の勤務日における平均残業時間の分布は、0分が1.3%で、残業を行わない教員はほとんどいない。平均残業時間が30分以下(0分をのぞく)は7.4%、31分～1時間以下は16.3%となっており、約25%の教員が1時間以下(0分をのぞく)の残業を行っている。また、残業が1時間01分～1時間30分以下の教員は18.0%、1時間31分～2時間以下の教員は19.2%、2時間01分～2時間30分以下の教員は13.9%、2時間31分～3時間以下の教員は10.1%と、1時間01分～3時間以下の残業を行う教員は6割に達する。さらに、3時間を超える残業を行う教員も1割以上存在する。

中学校の勤務日における平均残業時間の分布は、0分が0.7%で、残業を行わない教員はほとんどいない。残業時間が30分以下(0分をのぞく)は3.5%、31分～1時間以下は8.4%となっており、およそ1割の教員が1時間以下(0分をのぞく)の残業を行っている。これに対して、平均残業時間が1時間01分～1時間30分以下の教員は12.8%、1時間31分～2時間以下の教員は15.0%、2時間01分～2時間30分以下の教員は14.9%、2時間31分～3時間以下の教員は13.4%と、1時間01分～3時間以下の残業を行う教員は5割強に達する。さらに、3時間を超える残業を行う教員は3割以上存在する。

以上から小学校・中学校ともに、ほとんどの教員が勤務日に残業を行っており、過半数の教員が1時間01分～3時間以下の残業を行っていることがわかる。また、小学校よりも中学校の方が、概して残業時間が長い傾向にあるといえる。

図2-1-1 勤務日・1日あたりの平均残業時間量の分布



※時間量は「時間:分」を示す。たとえば「1:01～1:30」は「1時間01分～1時間30分」。

次に、第1期(通常期)の勤務日における平均持帰り時間量について検討してみよう(図2-1-2)。

小学校の教員の勤務日の平均持帰り時間の分布は、0分が17.1%で、持帰り仕事を行わない教員は2割弱である。持帰り時間が30分以下(0分をのぞく)は32.0%、31分～1時間以下は19.9%であり、過半数の教員が1時間以下(0分をのぞく)の持帰り仕事をを行っている。1時間を超える持帰り仕事をを行っている教員は3割いる。

中学校の教員の勤務日の平均持帰り時間の分布は、0分が29.6%で、持帰り仕事を行わない教員は3割ほどである。持帰り時間が30分以下(0分をのぞく)は43.4%、31分～1時間以下は14.0%であり、6割弱の教員が1時間以下(0分をのぞく)の持帰り仕事をを行っている。1時間を超える持帰り仕事をを行っている教員は1割強いる。

以上、第1期(通常期)の勤務日について、勤務日に持帰り仕事を行わない教員は小学校では2割弱、中学校では3割ほどいる。また、小学校・中学校いずれにおいても、過半数の教員が1時間以下(0分をのぞく)の持帰り仕事をを行っている。

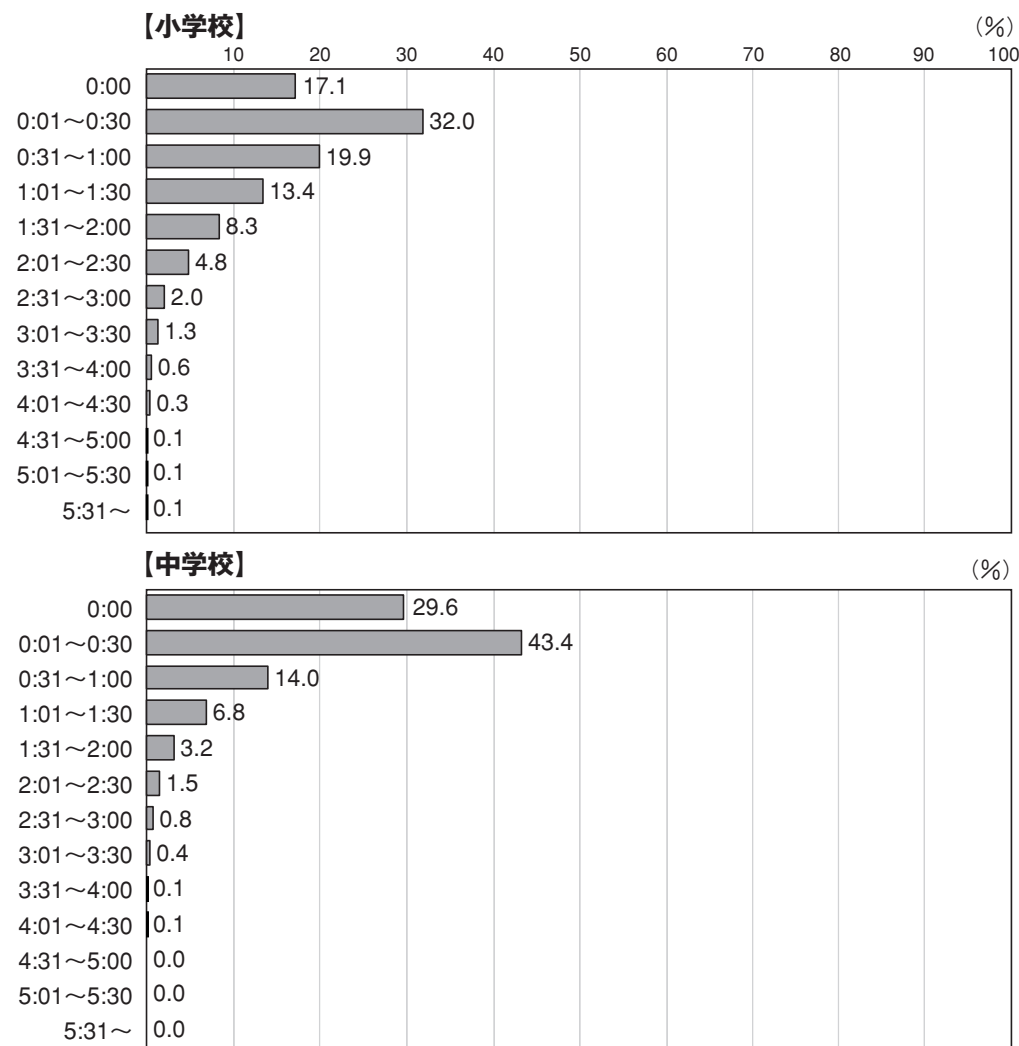
第1期(通常期)の勤務日の残業時間と持帰り時間の実態についてまとめると、ほとんどの教員が残業を行っており、過半数の教員が1時間01分～3時間以下の残業を行っている(図2-1-1)。持帰り仕事をしていない教員は小学校では2割弱、中学校ではおよそ3割弱となっているが、何らかの持帰り仕事のある教員の方が多数派であり、その過半数が1時間以下(0分をのぞく)の持帰り仕事をを行っている(図2-1-2)。

次に、第1期(通常期)の休日における平均残業時間量について検討してみよう(図2-1-3)。

小学校の休日の平均残業時間の分布は、0分が72.8%で、残業を行わない教員は7割である。勤務日(図2-1-1)と比べ、休日には学校に出勤する教員は多くないといえる。しかし、1時間以下(0分をのぞく)の残業を行う教員は1割、1時間01分～3時間以下の残業を行う教員も1割ほどいる。

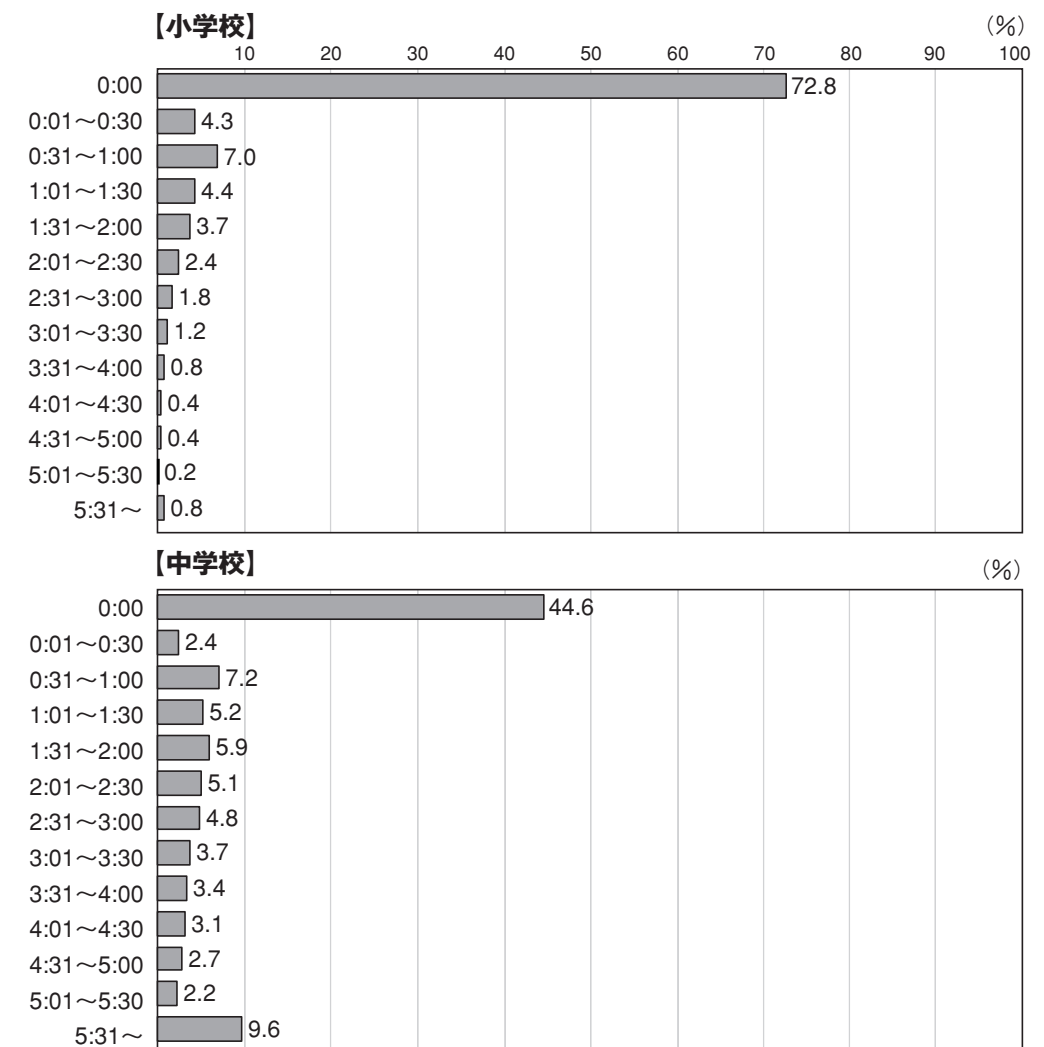
中学校の休日の平均残業時間の分布は、0分が44.6%で、残業を行わない教員は4割強である。勤務日(図2-1-1)と比べ、残業を行う教員は少ない。また、小学校よりも休日に残業を行う教員が多い。残業時間は教員間での差が大きく、残業時間が1時間以下(0分をのぞく)の教員が1割、1時間01分～2時間以下の教員が1割、2時間01分～3時間以下の教員が1割、3時間01分～5時間以下の教員が1割強、さらに5時間を超える教員も1割存在する。休日に学校で5時間を超える業務を行う教員が1割存在するのは、小学校にはない中学校だけの特徴であるといえる。この時間に行っている業務としては部活動などが考えられるが、実際に中学校の教員が休日の残業時間にどのような業務を行っているのかは、後の第3項において紹介する。

図2-1-2 勤務日・1日あたりの平均持帰り時間量の分布



※時間量は「時間:分」を示す。たとえば「1:01～1:30」は「1時間01分～1時間30分」。

図2-1-3 休日・1日あたりの平均残業時間量の分布



※時間量は「時間:分」を示す。たとえば「1:01～1:30」は「1時間01分～1時間30分」。

以上をまとめると、次のようにいえる。第1期(通常期)の休日における平均残業時間量については、休日に残業を行わない教員は小学校では7割、中学校では4割強存在すると指摘できる。また、小学校・中学校いずれにおいても、残業時間は個人差が大きく、幅広い時間帯に分布している。

次に、第1期(通常期)の休日における平均持帰り時間量についてみてみよう(図2-1-4)。

小学校の休日における平均持帰り時間の分布は、0分が2割で、勤務日(図2-1-2)とそれほど大きな差はない。休日でも8割の教員が持帰り仕事を行っており、その時間は教員間での差が大きい。持帰り時間が1時間以下(0分をのぞく)の教員は2割弱、1時間01分~2時間以下の教員は約17%、2時間01分~3時間以下の教員は約15%、3時間01分~5時間以下の教員は2割弱、さらに5時間を超える教員も1割強存在する。

中学校の休日における平均持帰り時間の分布は、0分が3割で、勤務日(図2-1-2)と大きな差はない。休日でも7割の教員が持帰り仕事を行っており、その時間は教員間で差が大きい。持帰り時間が1時間以下(0分をのぞく)の教員は2割、1時間01分~2時間以下の教員は約16%、2時間01分~3時間以下の教員は1割、3時間01分~5時間以下の教員は1割強、さらに5時間を超える教員も1割存在する。

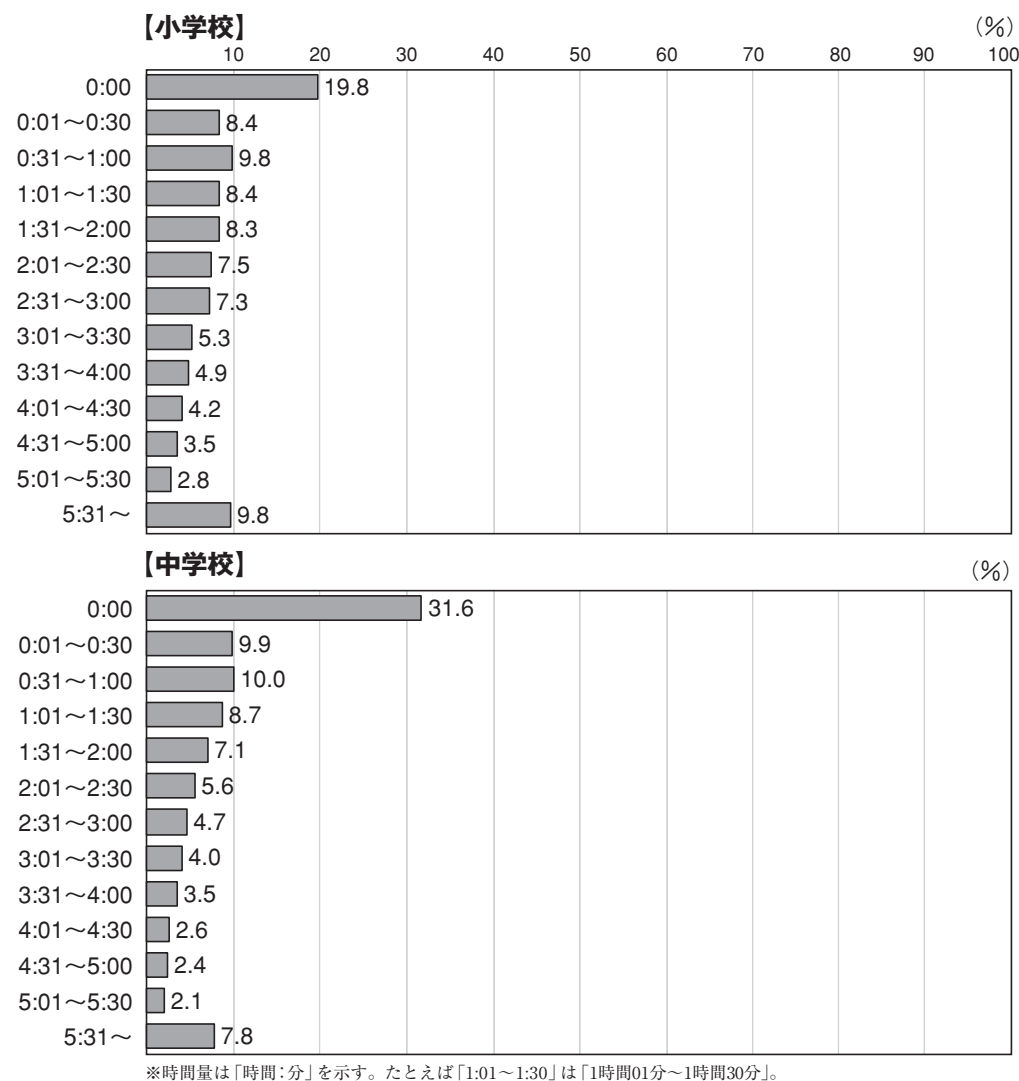
以上、第1期(通常期)の休日の持帰り時間について、休日に持帰り仕事を行わない教員は小学校では2割、中学校では3割存在する。また、小学校・中学校いずれにおいても、持帰り時間は教員間で差が大きく、5時間を超える長時間の教員も1割存在すれば、30分以下(0分をのぞく)と短時間の教員も1割存在する。

第1期(通常期)の休日の残業時間・持帰り時間の実態についてまとめると、残業時間については、休日に残業を行わない教員は小学校では7割、中学校では4割強存在する。また、中学校では、教員間での残業時間の差が大きい(図2-1-3)。持帰り時間については、休日に持帰り仕事を行わない教員は小学校では2割、中学校では3割存在する。また、小学校・中学校いずれにおいても、持帰り時間は教員によって差が大きい(図2-1-4)。

以上から、次のことが指摘できる。

第1期(通常期)においては、勤務日にはほとんどの教員が残業を行っており、過半数の教員が1時間01分~3時間以下の残業を行っている(図2-1-1)。休日には残業を行う教員は小学校では3割弱、中学校では5割強であり、その残業時間には個人差がある(図2-1-3)。持帰り仕事を行う教員の割合は、小学校・中学校のいずれにおいても、勤務日(図2-1-2)と休日(図2-1-4)ではそれほど大きな差はなく、休日の方が若干増えるが、いずれも小学校ではおよそ8割、中学校では7割である。小学校・中学校いずれにおいても、勤務日の持帰り時間は過半数が1時間以下(0分をのぞく)に集中するが(図2-1-2)、休日の持帰り時間は、教員間で差が大きい(図2-1-4)。

図2-1-4 休日・1日あたりの平均持帰り時間量の分布



(3) 残業時間・持帰り時間における業務内訳

前項では、第1期(通常期)における教員一人あたりの平均の残業時間量・持帰り時間量の分布について注目したが、本項ではこれらの時間にどのような業務を行っているのか、業務の内訳を検討する。

第1期(通常期)における勤務日と休日それぞれについて、残業時間、持帰り時間の順に、小学校と中学校のそれぞれで業務の上位5種類の内訳を検討していこう。

まず、第1期(通常期)の勤務日について検討しよう(表2-1-4、表2-1-5)。

平均残業時間における業務内訳については、小学校・中学校いずれにおいても最も長いのは成績処理で、ともに28分である。これは、第1期(通常期)が多くの学校で学期末にあたるという时期的な特徴によると思われる。小学校で2番目に長いのは授業準備で18分、つづいて事務・報告書作成が12分、学校経営が9分である。中学校では2番目に長いのは部活動・クラブ活動で26分、つづいて授業準備16分、事務・報告書作成13分、学校経営10分である。ここから、小学校・中学校いずれにおいても残業時間における業務内訳は、事務的な業務が中心となっているといえる。中学校ではこれに部活動・クラブ活動が加わる(表2-1-4)。

平均持帰り時間における業務内訳については、小学校・中学校いずれにおいても最も長いのは成績処理で、小学校では24分、中学校では9分である。2番目に長い業務は、小学校・中学校ともに授業準備で、小学校では9分、中学校では5分である。3番目から5番目に長い業務は、小学校・中学校で若干順位の変動はあるが、学年・学級経営が小学校で4分、中学校で1分、事務・報告書作成、その他の校務が1~3分ずつである(表2-1-5)。

次に、第1期(通常期)の休日について検討しよう(表2-1-6、表2-1-7)。

平均残業時間における業務内訳については、小学校では成績処理が最も長く11分、以下、事務・報告書作成2分、保護者・PTA対応が2分、部活動・クラブ活動が1分、学校経営が1分とつづく。中学校では部活動・クラブ活動が最も長く78分、つづいて成績処理が11分である。以下、その他の校務が4分、事務・報告書作成が3分、授業準備が3分とつづく。小学校・中学校ともに成績処理が上位に入っており、10分以上と他の業務よりも長いのは、第1期(通常期)が学期末であるためだと考えられる(表2-1-6)。

平均持帰り時間における業務内訳については、小学校では成績処理が最も長く91分、つづいて授業準備が13分、事務・報告書作成が9分、学年・学級経営が7分、その他の校務が3分である。中学校では部活動・クラブ活動が最も長く45分、つづいて成績処理が27分、授業準備9分、事務・報告書作成5分、その他の校務5分である。小学校・中学校ともに成績処理が上位に入っているのは、やはり学期末であるためだと考えられる(表2-1-7)。

小学校・中学校いずれにおいても、休日の業務は、学校での残業についても自宅での持帰り仕事についても、ほぼ同じ内訳である。ただし、業務の内訳は同じでも、業務に費やす時間が異なる。たとえば、小学校では休日の残業時間における成績処理は11分であるのに対し、休日の持帰り時間においては91分と増加する。また、中学校では休日の残業時間における成績処理は11分であるのに対し、休日の持帰り時間においては27分と増加する。ここから、成績処理などの業務は学校で行うことも多いが、持帰り仕事として、自宅でより長い時間をかけて行っていることがわかる。

表2-1-4 勤務日の平均残業時間における業務内訳

	小学校		中学校		全体	
	業務	時間	業務	時間	業務	時間
1	成績処理	28分	成績処理	28分	成績処理	28分
2	授業準備	18分	部活動・クラブ活動	26分	授業準備	17分
3	事務・報告書作成	12分	授業準備	16分	部活動・クラブ活動	15分
4	学校経営	9分	事務・報告書作成	13分	事務・報告書作成	13分
5	その他の校務	7分	学校経営	10分	学校経営	9分

表2-1-6 休日の平均残業時間における業務内訳

	小学校		中学校		全体	
	業務	時間	業務	時間	業務	時間
1	成績処理	11分	部活動・クラブ活動	78分	部活動・クラブ活動	42分
2	事務・報告書作成	2分	成績処理	11分	成績処理	11分
3	保護者・PTA対応	2分	その他の校務	4分	事務・報告書作成	3分
4	部活動・クラブ活動	1分	事務・報告書作成	3分	その他の校務	2分
5	学校経営	1分	授業準備	3分	授業準備	2分

表2-1-5 勤務日の平均持帰り時間における業務内訳

	小学校		中学校		全体	
	業務	時間	業務	時間	業務	時間
1	成績処理	24分	成績処理	9分	成績処理	16分
2	授業準備	9分	授業準備	5分	授業準備	6分
3	学年・学級経営	4分	事務・報告書作成	2分	学年・学級経営	2分
4	事務・報告書作成	3分	学年・学級経営	1分	事務・報告書作成	2分
5	その他の校務	1分	その他の校務	1分	その他の校務	1分

表2-1-7 休日の平均持帰り時間における業務内訳

	小学校		中学校		全体	
	業務	時間	業務	時間	業務	時間
1	成績処理	91分	部活動・クラブ活動	45分	成績処理	56分
2	授業準備	13分	成績処理	27分	部活動・クラブ活動	25分
3	事務・報告書作成	9分	授業準備	9分	授業準備	11分
4	学年・学級経営	7分	事務・報告書作成	5分	事務・報告書作成	7分
5	その他の校務	3分	その他の校務	5分	学年・学級経営	5分

### 3. 属性別にみた残業時間・持帰り時間

前節では、第1期(通常期)における平均の残業時間量・持帰り時間量の全体像を検討した。

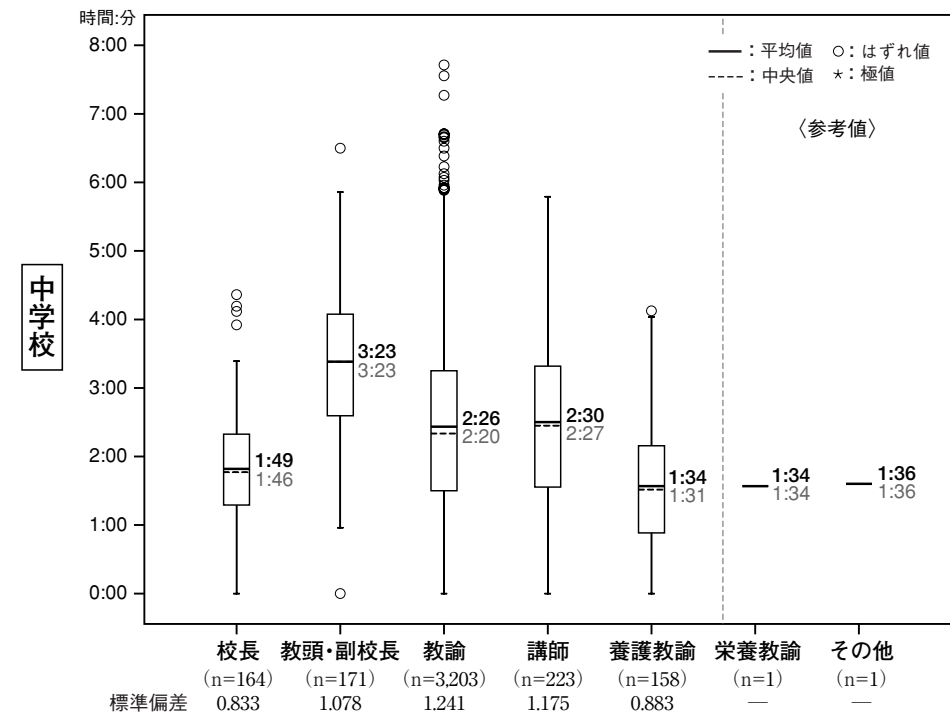
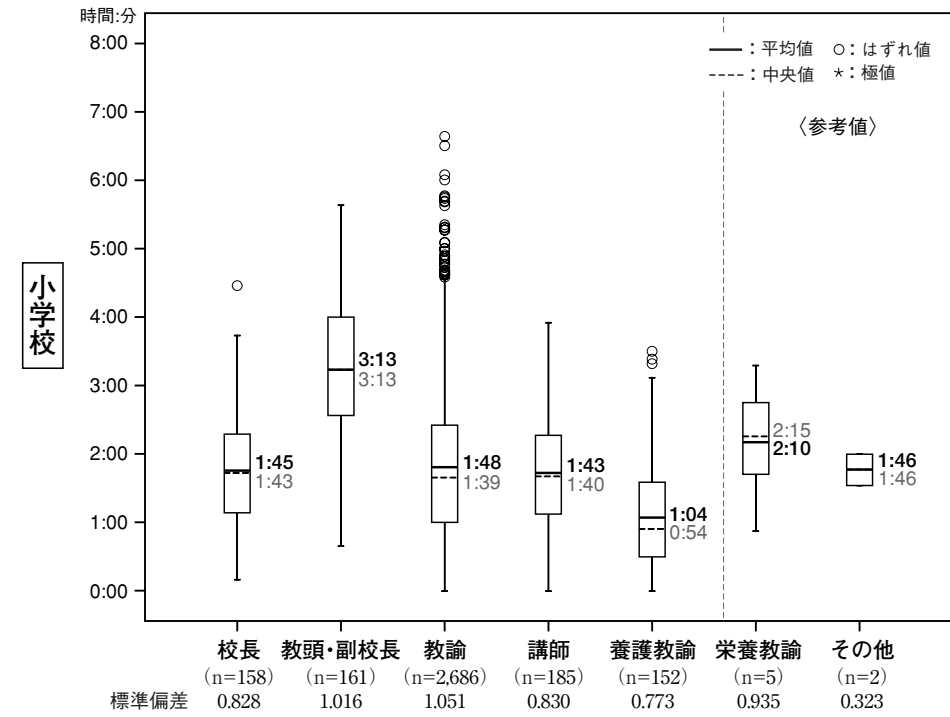
しかし、一人一人の残業時間量・持帰り時間量や、正規の勤務時間に処理できない業務を学校で行うのか、自宅で持帰り仕事として行うのかといった勤務実態は、教員の性別や職階、年齢などの属性によって異なると考えられる。

そこで本節では、特に勤務日に絞り、属性別(職階別、性別、年齢別)に残業時間量・持帰り時間量の実態を明らかにする。

まずは職階別に、平均残業時間量、平均持帰り時間量の順に、小学校と中学校のそれぞれについて検討しよう。

第1期(通常期)の勤務日における平均残業時間量は、図2-1-5の通り、小学校の教頭・副校長は3時間13分、中学校の教頭・副校長は3時間23分であり、他の職階に比べて圧倒的に長くなっている。その他の職階については、小学校では校長は1時間45分、教諭は1時間48分、講師は1時間43分とほとんど差はない。中学校では校長は1時間49分で、教諭は2時間26分、講師は2時間30分と、校長よりも教諭・講師の方が40分ほど長くなっている。

図2-1-5 勤務日・1日あたりの平均残業時間量(小・中学校 職階別)

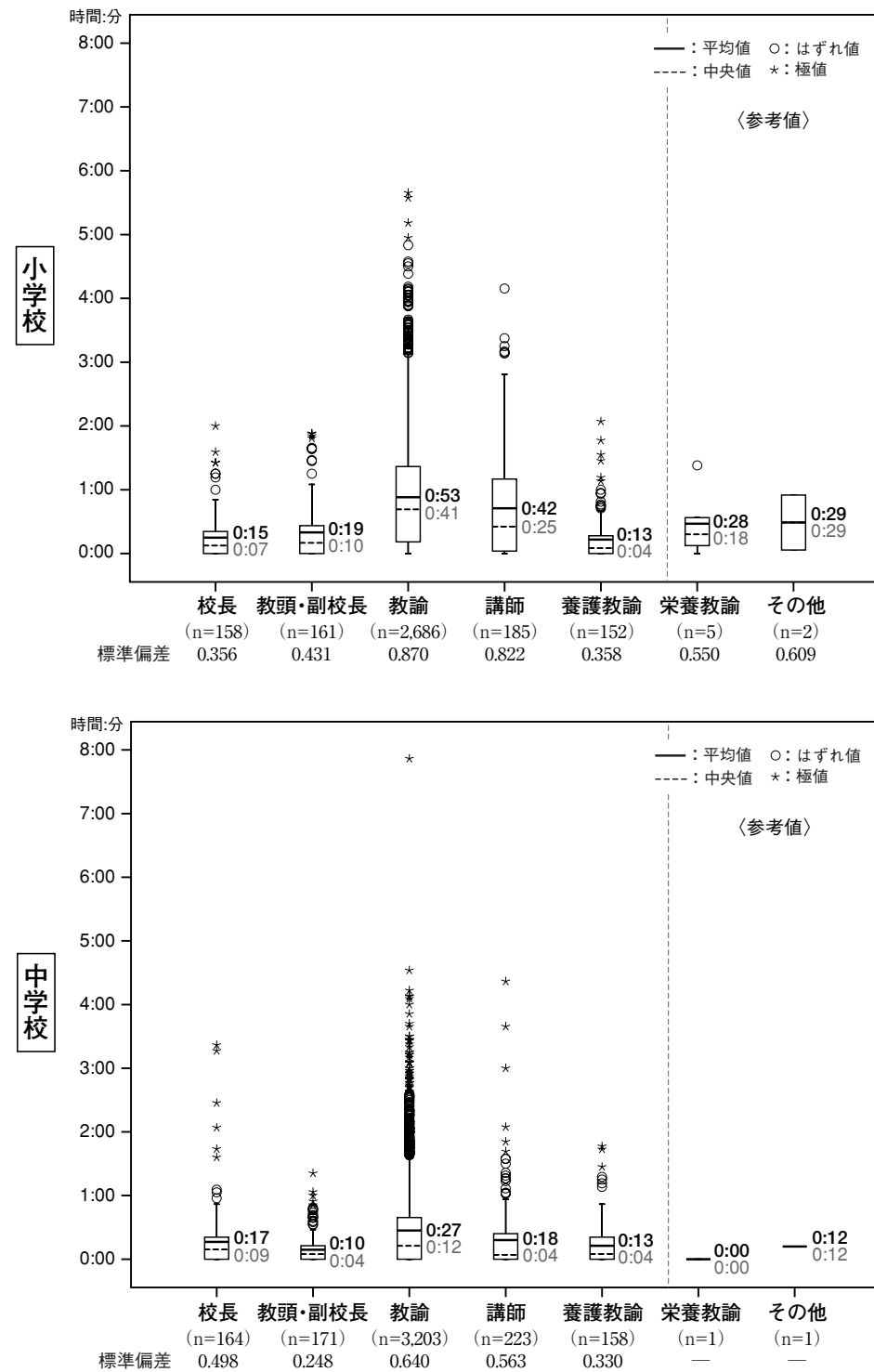




第1期(通常期)の勤務日における平均持帰り時間量は、図2-1-6のように、小学校・中学校いずれにおいても教諭で最も長くなっている。特に小学校の教諭の方が長く、小学校の教諭は53分であるのに対して中学校の教諭は27分である。小学校では、教諭につづいて長いのが講師42分、次に教頭・副校長19分である。中学校では、教諭につづいて長いのが講師18分であり、次が校長17分である。

図2-1-5と図2-1-6の比較から、勤務日においては、学校では教頭・副校長が長く残業を行い、自宅では教諭が長く持帰り仕事を行っているといえる。

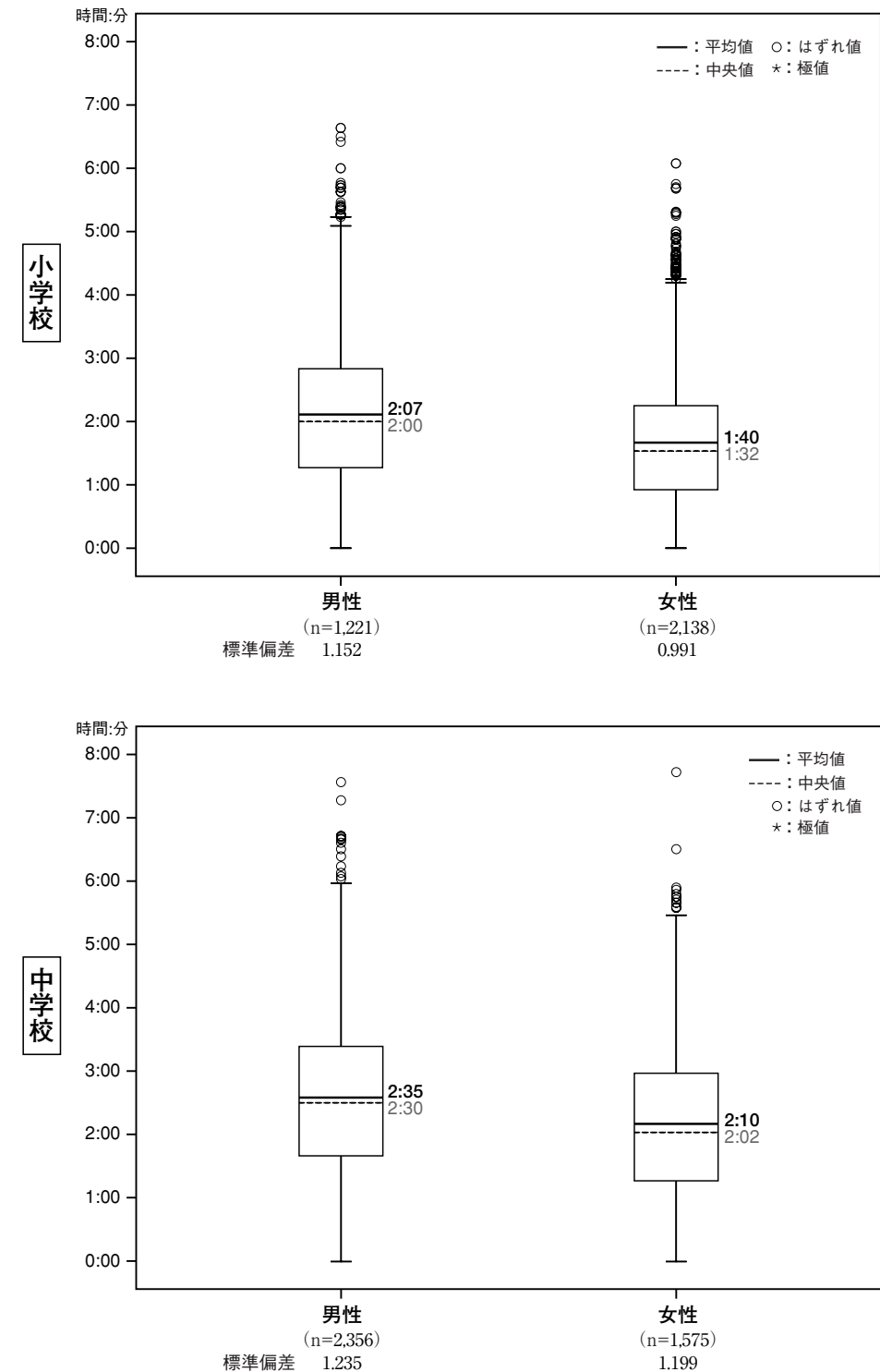
図2-1-6 勤務日・1日あたりの平均持帰り時間量(小・中学校 職階別)



次に、性別ごとに平均残業時間量、平均持帰り時間量の順に、小学校と中学校それぞれについて検討しよう。

第1期(通常期)の勤務日における平均残業時間量は図2-1-7の通り、小学校・中学校ともに男性教員の方が女性教員よりも約30分長くなっている(平均値は次の通り/小学校:男性教員 2時間07分、女性教員 1時間40分、中学校:男性教員 2時間35分、女性教員 2時間10分)。

図2-1-7 勤務日・1日あたりの平均残業時間量(小・中学校 性別)



これに対して第1期(通常期)の勤務日における平均持帰り時間量は図2-1-8の通り、小学校においては女性教員の方が男性教員よりもやや長くなっている(男性教員 43分、女性教員 49分)が、中学校においては、男性教員と女性教員の差はほとんどない(男性教員 24分、女性教員 26分)。

最後に、年齢別に平均の残業時間量・持帰り時間量の実態を検討しよう。ただし、この場合、職階の影響をのぞく必要がある。たとえば 51歳以上には管理職が多く、この年齢層で残業時間・持帰り時間が長い場合は、年齢の影響だけではなく職階の影響も考えられる。そこで、教諭のみを取り出し、教諭の年齢層で残業時間、持帰り時間の順に、小学校と中学校について分析を行う。

第1期(通常期)の勤務日における教諭の平均残業時間量は、小学校・中学校ともに30歳以下で最も長く、小学校では2時間39分、中学校では3時間20分である(図2-1-9)。しかし、年齢層が上がるにつれて平均残業時間は減少する。小学校では31~40歳で1時間50分、41~50歳で1時間39分、51歳以上で1時間26分である。中学校では31~40歳で2時間40分、41~50歳で2時間19分、51歳以上で1時間46分である。ここから、年齢層の高い、いわゆるベテラン教諭になるほど平均残業時間が減少していくといえる。この原因は、経験を積むことによって授業などの準備時間が短縮することや、若い年齢層ほど部活動などの業務が任せられることなどが考えられる。

図2-1-8 勤務日・1日あたりの平均持帰り時間量(小・中学校 性別)

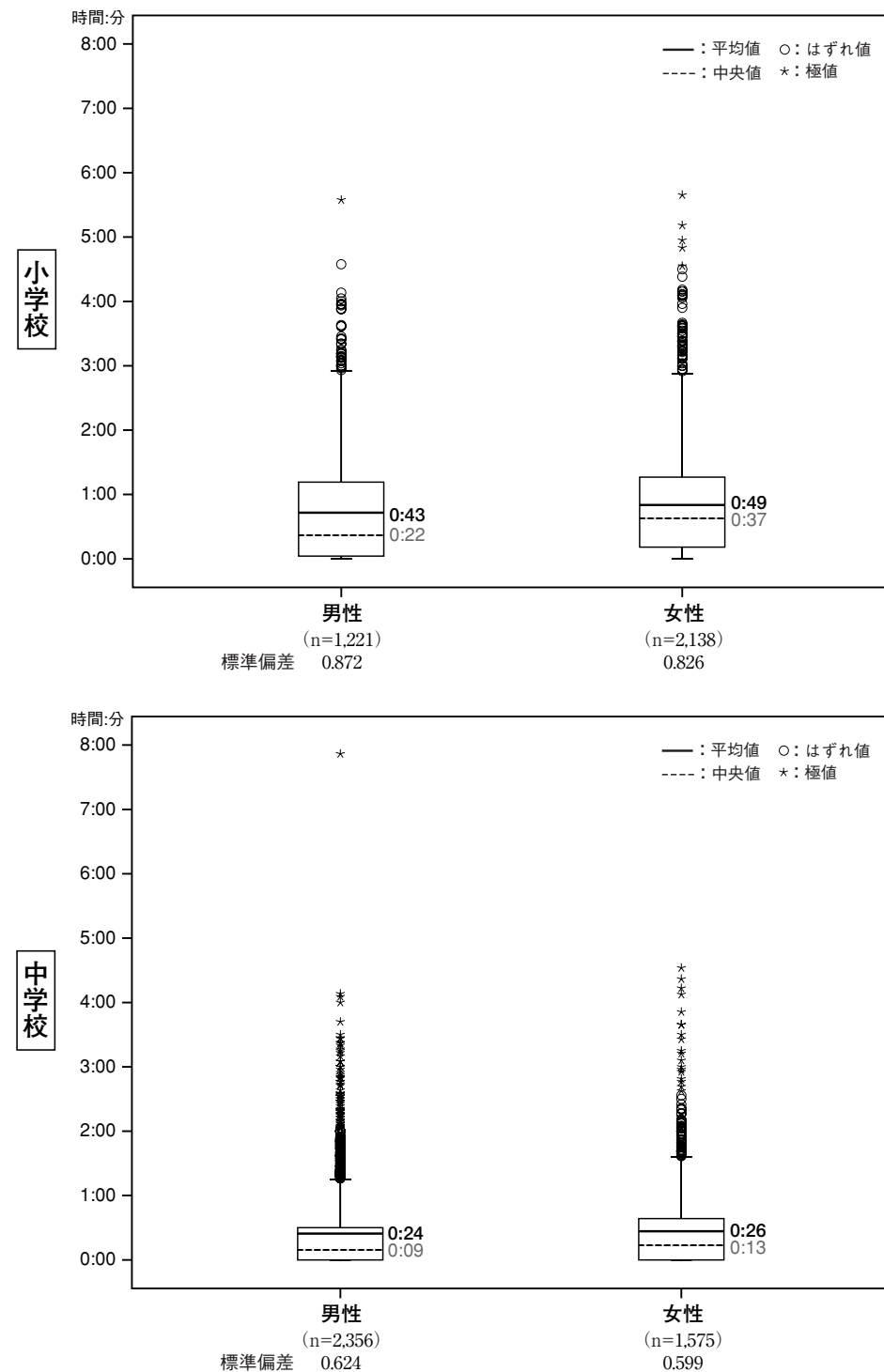
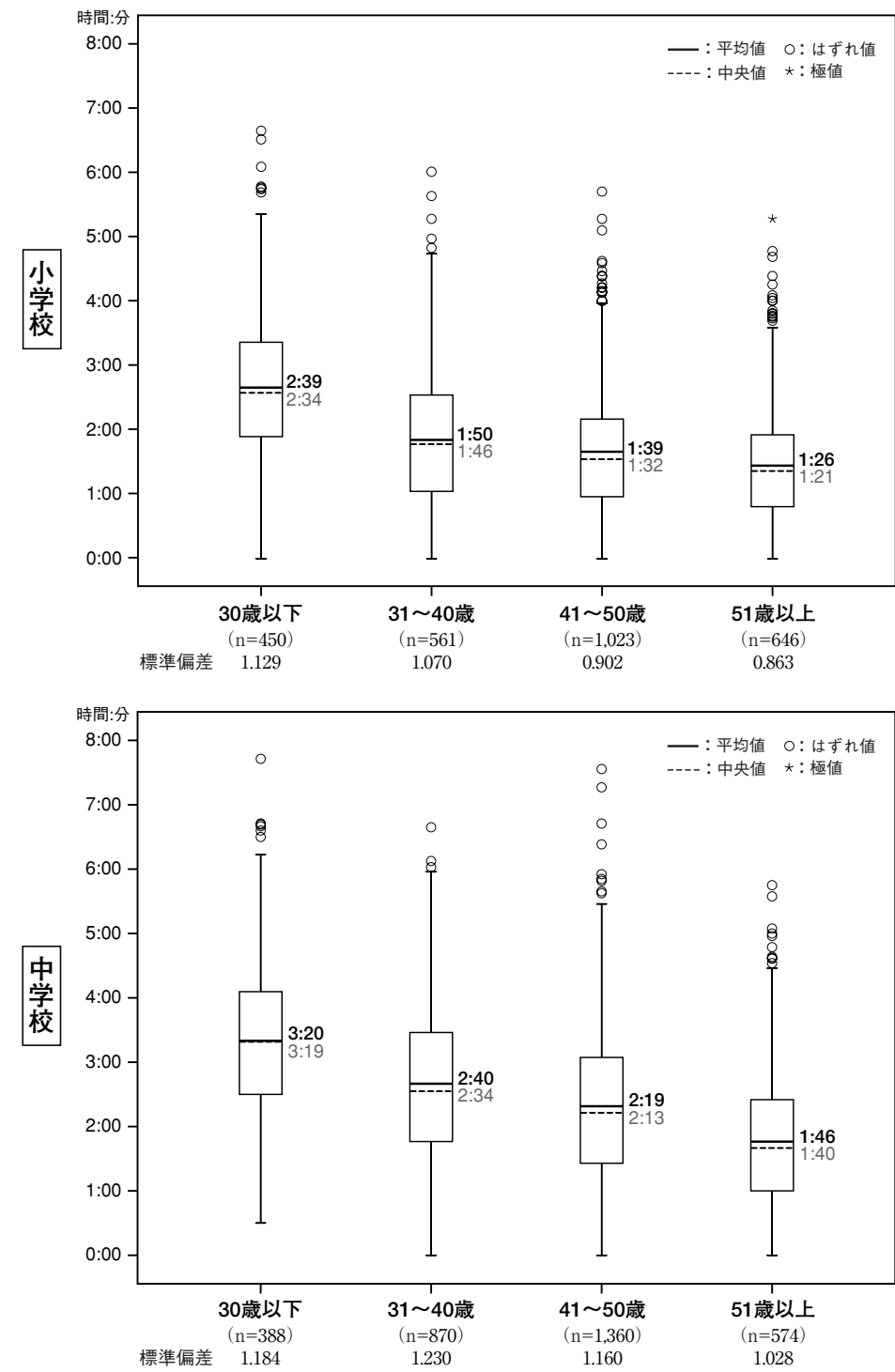


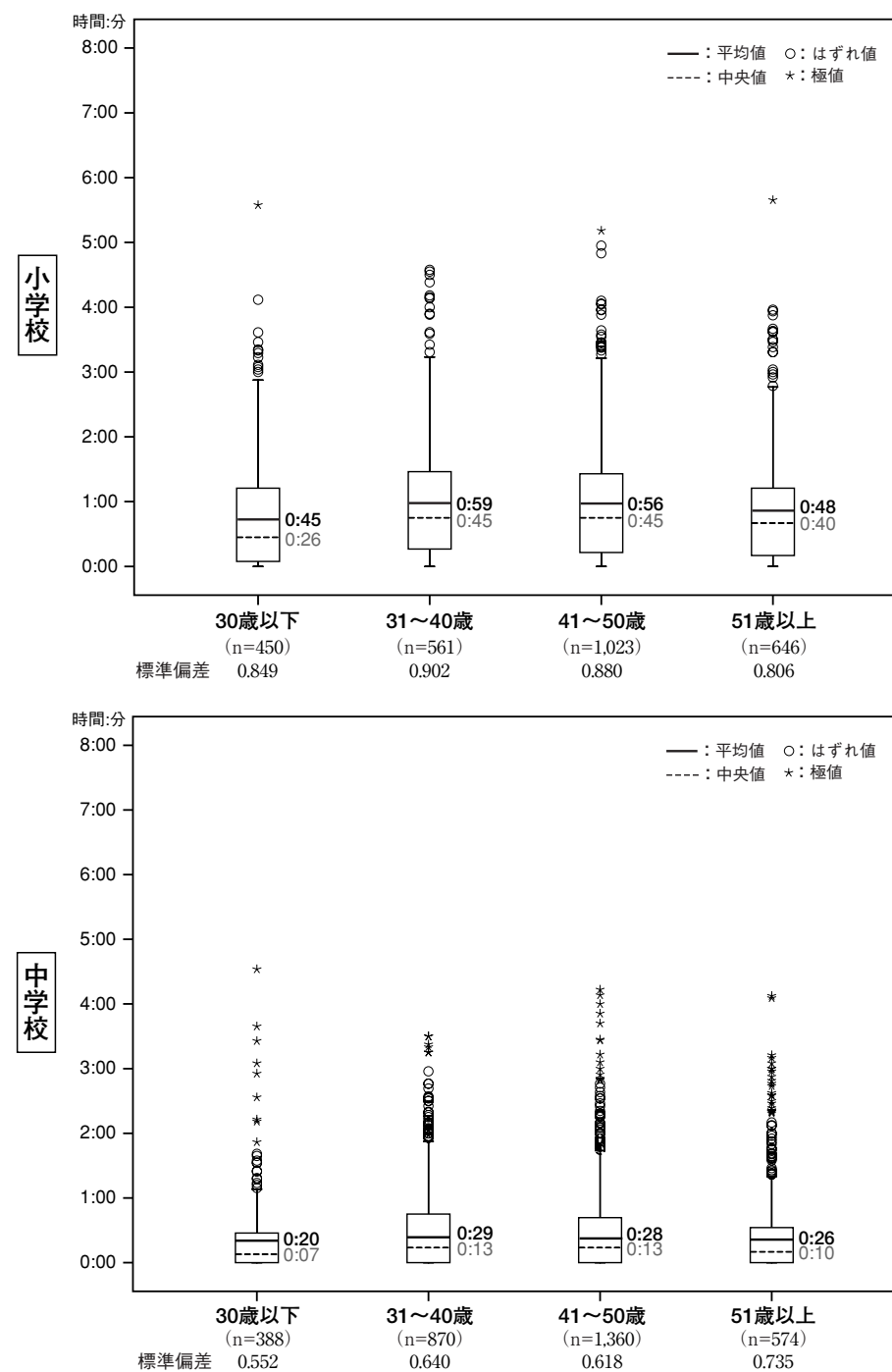
図2-1-9 勤務日・1日あたりの平均残業時間量(小・中学校 教諭の年齢別)



第1期(通常期)の勤務日における教諭の平均持帰り時間量は、小学校・中学校いずれにおいても30歳以下が最も短く、31~40歳、41~50歳でやや長くなっているが、年齢によって大きな差はないことがわかる(図2-1-10)。小学校では30歳以下で45分、31~40歳で59分、41~50歳で56分、51歳以上で48分である。中学校では30歳以下で20分、31~40歳で29分、41~50歳で28分、51歳以上で26分である。

小学校・中学校いずれにおいても、30歳以下の若い教諭は、他の年齢よりも残業時間は長いものの(図2-1-9)、持帰り時間は他の年齢よりも短くなっている(図2-1-10)。

図2-1-10 勤務日・1日あたりの平均持帰り時間量(小・中学校 教諭の年齢別)



## 第2章 第2期(夏季休業期)における勤務実態

### 1. 第2期の調査協力校の概況

第2期の調査期間は、平成18年7月31日(月)から平成18年8月27日(日)までの4週間である。

まず、第2期の調査協力校の時期的特徴について紹介する。

第2期において回答のあった339校すべての小学校・中学校が、調査期間の前半に児童・生徒の夏季休業期(以下、「夏季休業期」)を含んでいる。第1章でも述べたように、夏季休業期には通常の授業はなく、登校する児童・生徒の数も少ない。そのため、夏季休業期における教員の業務は、通常期とは質も量も異なっていると考えられる。そこで第2期については、調査協力校の夏季休業期の終了日の情報をもとに、データを通常期と夏季休業期の2つの時期に分けて分析を行った。

なお、調査協力校における夏季休業期の終了日の分布は表2-2-1のようになっている。すべての調査協力校において、調査期間は夏季休業期から始まっていたため、ここでは夏季休業期の終了日についてのみ紹介する。

分布をみると、8割の学校で第2期の調査期間が終了する8月27日(日)以降に夏季休業期が終了する。8月25日(金)が夏季休業期の最終日である学校も、土日がつづくため、8月27日(日)以降に夏季休業期が終了する場合と実質的にはほぼ同じである。そのため、第2期の調査協力校のうち8割を超える学校では、第2期の調査期間がすべて夏季休業期となっている。残る1~2割の学校では、調査期間中に1~12日間の通常期を含んでいることになる。

本章では、夏季休業期の教員の勤務実態の特徴を検討するため、第2期のうち夏季休業期について報告を行うこととする。

表2-2-1 第2期の調査協力校における夏季休業期の終了日

夏季休業期 終了日	8月15日 (火)	8月16日 (水)	8月17日 (木)	8月19日 (土)	8月20日 (日)	8月21日 (月)
	1	1	3	2	15	4
	0.3	0.3	0.9	0.6	4.4	1.2
8月22日 (火)	8月23日 (水)	8月24日 (木)	8月25日 (金)	8月27日 (日)	8月28日 (月)	8月29日 (火)
3	8	13	11	16	14	11
0.9	2.4	3.8	3.2	4.7	4.1	3.2
8月30日 (水)	8月31日 (木)	9月1日 (金)	無回答・ 不明	計		
11	222	1	3	339	校	
3.2	65.5	0.3	0.9	100.0	%	

## 2. 残業時間・持帰り時間および業務の内訳

### (1) 全体的な残業時間・持帰り時間の実態

まず、第2期(夏季休業期)の勤務日における残業時間・持帰り時間の実態について、小学校、中学校、小学校と中学校の比較という順番で検討していこう(表2-2-2)。

小学校では、残業時間量は平均で21分、持帰り時間量は平均15分、これらを合わせた時間の平均は36分である。

中学校では、残業時間量は平均33分、持帰り時間量は平均14分、これらを合わせた時間の平均は48分である。

また、小学校と中学校を比べてみると、勤務日の残業時間の平均は中学校の方が小学校よりも12分長い。しかし、持帰り時間の平均は小学校と中学校においてほとんど差はない。

次に、第2期(夏季休業期)の休日における残業時間・持帰り時間の実態の状況について、小学校、中学校、小学校と中学校の比較という順番で検討していこう(表2-2-3)。

小学校では、残業時間は平均で7分、持帰り時間は平均で34分、残業時間と持帰り時間を合わせた時間の平均は41分である。残業時間の中央値が0分であることからわかるように、小学校の教員は基本的に休日には学校で業務を行っていないといえる。ただし、休日の持帰り時間については、中央値と平均値に30分以上のひらきがあることからわかるように、休日に持帰り仕事をする人の間では時間量の差が大きい(表2-2-3)。これは後の図2-2-4からも確認できる。

中学校では、残業時間と持帰り時間はほぼ同じで、残業時間は平均44分、持帰り時間は平均47分、これらを合わせた時間の平均は1時間32分である。また、残業時間の中央値が0分である一方、平均値は40分以上であることから、中学校では残業を行う教員と行わない教員の差が大きいことがわかる。これは第2期(夏季休業期)の特徴である。また、休日の残業時間と持帰り時間の中央値と平均値に40分以上ものひらきがあることからわかるように、中学校では休日に残業や持帰り仕事を行う人の間で、時間量の差が大きい(表2-2-3)。これは後の図2-2-3や図2-2-4からも確認できる。

小学校と中学校を比べてみると、休日の残業時間の平均は中学校の方が小学校よりも37分長い。持帰り時間については、中学校の方が小学校よりも13分長い。小学校と中学校それぞれの残業時間・持帰り時間における業務内訳については、後の第3項で述べるが、中学校においては部活動を行っているために休日の残業時間が長くなると考えられる。

以上、第2期(夏季休業期)の勤務日と休日を比べてまとめておこう。

小学校の教員は、勤務日においては、残業時間が持帰り時間より6分長い(表2-2-2)、休日においては、持帰り時間の方が残業時間よりも27分長い(表2-2-3)。

中学校の教員は、勤務日においては、残業時間の方が持帰り時間よりも19分長く(表2-2-2)、休日においては、残業時間と持帰り時間はほぼ同じ長さである(表2-2-3)。持帰り時間については、勤務日より休日の方が30分ほど長い(表2-2-2、表2-2-3)。

小学校・中学校いずれにおいても、第2期(夏季休業期)は、他の時期に比べて正規の勤務時間以外の業務時間が短いといえる。複数の調査期間の比較については、詳しくは後の第7章で述べる。

表2-2-2 勤務日・1日あたりの平均残業時間量・持帰り時間量

	残業時間量	持帰り時間量	残業時間+持帰り時間
小学校	21分 〔10分〕(0.516)	15分 〔0分〕(0.562)	36分 〔20分〕(0.797)
中学校	33分 〔21分〕(0.670)	14分 〔1分〕(0.500)	48分 〔32分〕(0.870)
全体	28分 〔15分〕(0.613)	15分 〔0分〕(0.529)	43分 〔27分〕(0.843)

[ ]内は中央値、( )内は標準偏差を示す。

表2-2-3 休日・1日あたりの平均残業時間量・持帰り時間量

	残業時間量	持帰り時間量	残業時間+持帰り時間
小学校	7分 〔0分〕(0.409)	34分 〔0分〕(1.080)	41分 〔13分〕(1.172)
中学校	44分 〔0分〕(1.362)	47分 〔5分〕(1.398)	1時間32分 〔49分〕(1.950)
全体	27分 〔0分〕(1.087)	41分 〔3分〕(1.268)	1時間09分 〔26分〕(1.695)

[ ]内は中央値、( )内は標準偏差を示す。

(2)個人単位でみた残業時間・持帰り時間の実態

前項では、第2期(夏季休業期)の教員全体における残業時間量・持帰り時間量の平均に注目した。しかし、すべての教員が一様に残業や持帰り仕事を行っているわけではなく、これらの時間は、教員間での差が大きいと考えられる。

そこで、第2期(夏季休業期)における教員一人あたりの平均残業時間量および平均持帰り時間量の分布をみたものが、図2-2-1から図2-2-4である。

以下、勤務日と休日それぞれについて、残業時間、持帰り時間の順に、それぞれ小学校と中学校の結果を検討していく。

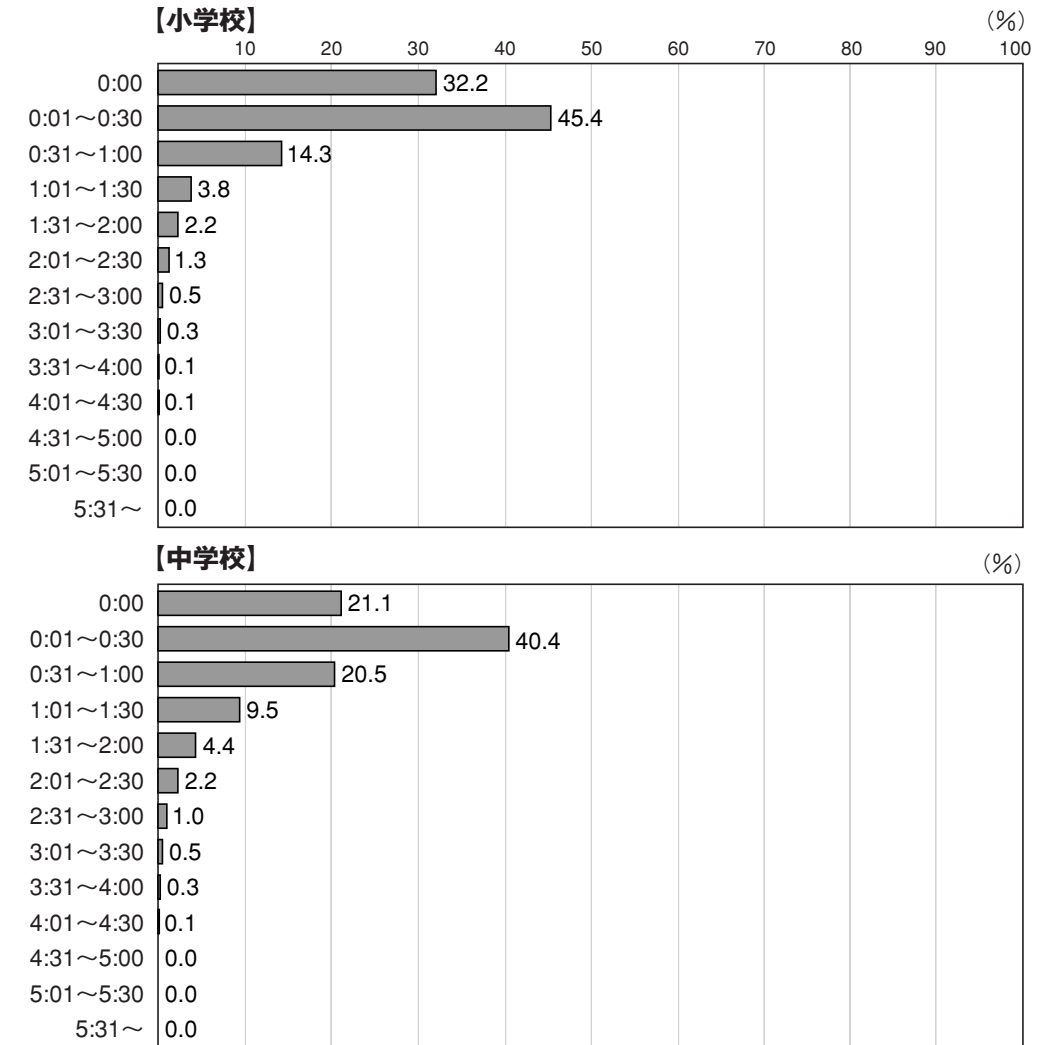
まず、第2期(夏季休業期)の勤務日における平均残業時間量について検討してみよう(図2-2-1)。

小学校の勤務日における平均残業時間の分布は、0分が32.2%で、残業を行わない教員はおよそ3割である。平均残業時間が30分以下(0分をのぞく)は45.4%、31分~1時間以下は14.3%となっており、およそ6割の教員が1時間以下(0分をのぞく)の残業を行っている。残業が1時間を超える教員は1割に満たない。

中学校の勤務日における平均残業時間の分布は、0分が21.1%で、残業を行わない教員は2割である。残業時間が30分以下(0分をのぞく)は40.4%、31分~1時間以下は20.5%となっており、6割の教員が1時間以下(0分をのぞく)の残業を行っている。これに対して、平均残業時間が1時間01分~1時間30分以下の教員は9.5%、1時間31分~2時間以下の教員は4.4%、2時間を超える教員は4%ほどである。

以上から勤務日に残業を行わない教員は小学校においてはおよそ3割、中学校においてはおよそ2割となっており、第2期には、通常期に比べて残業を行う教員が少ないことがわかる。一方で、およそ6割の教員が1時間以下(0分をのぞく)の残業を行っている。また、小学校よりも中学校の方が、概して残業時間が長い傾向にあるといえる。

図2-2-1 勤務日・1日あたりの平均残業時間量の分布



※時間量は「時間:分」を示す。たとえば「1:01~1:30」は「1時間01分~1時間30分」。

次に、第2期(夏季休業期)の勤務日における平均持帰り時間量について検討しよう(図2-2-2)。

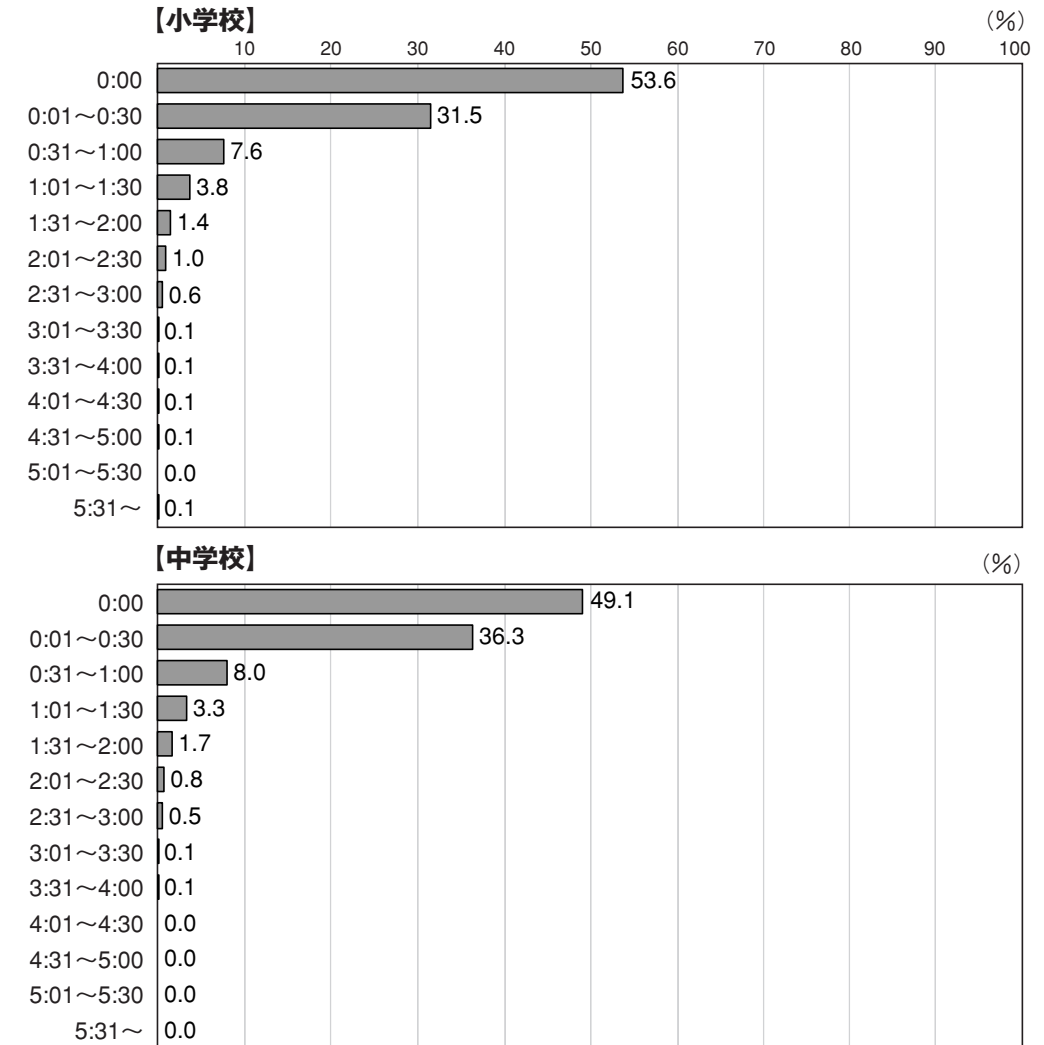
小学校の勤務日の平均持帰り時間の分布は、0分が53.6%で、持帰り仕事を行わない教員は5割強である。持帰り時間が30分以下(0分をのぞく)は31.5%、31分~1時間以下は7.6%であり、4割の教員が1時間以下(0分をのぞく)の持帰り仕事をを行っている。1時間を超える持帰り仕事をを行っている教員はおよそ7%である。

中学校の勤務日の平均持帰り時間の分布は、0分が49.1%で、持帰り仕事を行わない教員は5割弱である。持帰り時間が30分以下(0分をのぞく)は36.3%、31分~1時間以下は8.0%であり、4割強の教員が1時間以下(0分をのぞく)の持帰り仕事をを行っている。1時間を超える持帰り仕事をを行っている教員は6.5%である。

以上、第2期(夏季休業期)の勤務日について、勤務日に持帰り仕事を行わない教員は小学校では5割強、中学校では5割弱いる。また、小学校・中学校ともに、およそ4割の教員が1時間以下(0分をのぞく)の持帰り仕事をを行っている。

第2期(夏季休業期)の勤務日の残業時間と持帰り時間の実態についてまとめると、残業をまったく行っていない教員は小学校においてはおよそ3割、中学校においてはおよそ2割となっており、小学校・中学校いずれにおいても、およそ6割の教員が1時間以下(0分をのぞく)の残業を行っている(図2-2-1)。持帰り仕事については、まったく行っていない教員は小学校では5割強、中学校では5割弱となっており、小学校・中学校いずれにおいても、およそ4割の教員が1時間以下(0分をのぞく)の持帰り仕事をを行っている(図2-2-2)。

図2-2-2 勤務日・1日あたりの平均持帰り時間量の分布



※時間量は「時間:分」を示す。たとえば「1:01~1:30」は「1時間01分~1時間30分」。

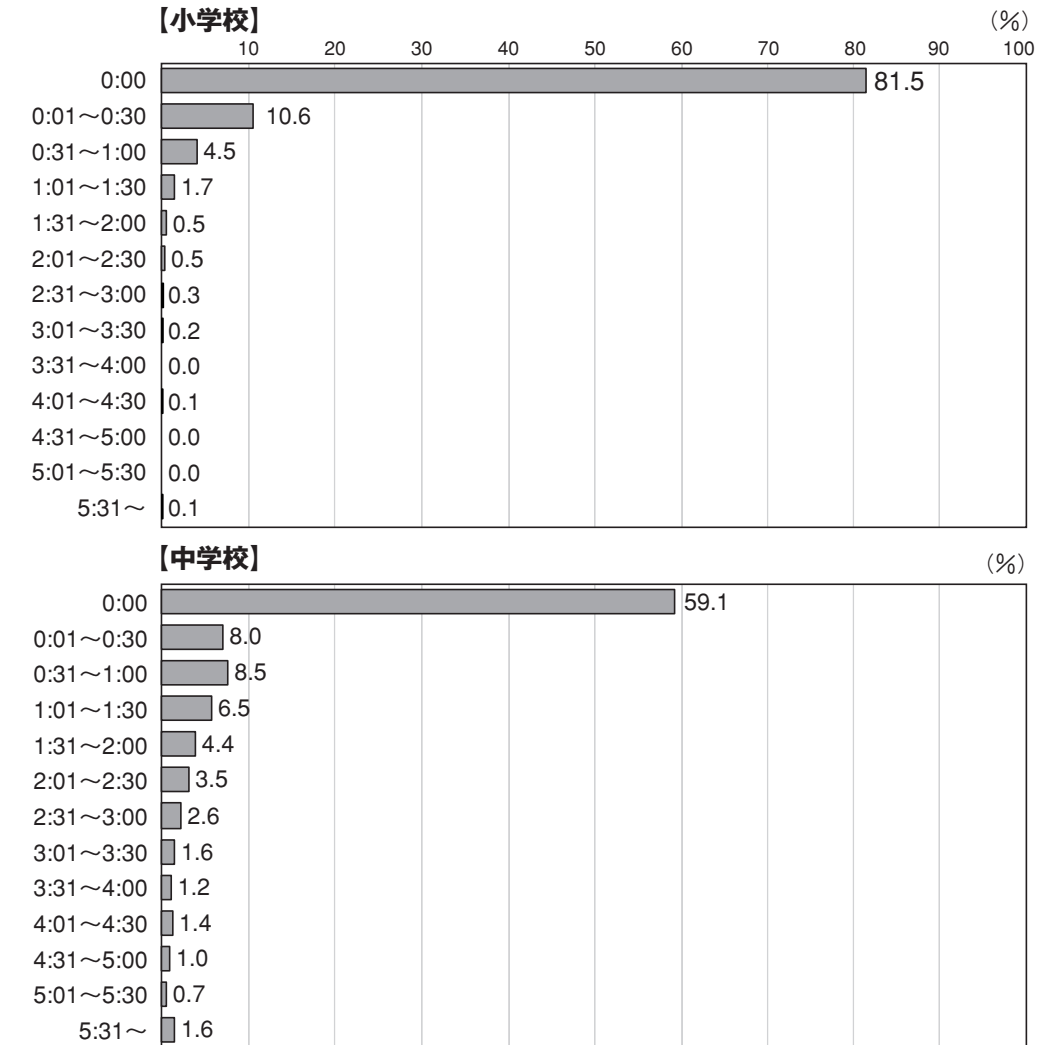
次に、第2期(夏季休業期)の休日における平均残業時間量について検討しよう(図2-2-3)。

小学校の休日における平均残業時間の分布は、0分が81.5%で、勤務日(図2-2-1)と比べると、休日にはほとんどの教員が学校に出勤することはないといえる。1時間以下(0分をのぞく)の残業を行う教員は約15%、1時間を超える残業を行う教員は約3%と、残業を行う教員も少ない時間帯に集中している。

中学校の休日の平均残業時間の分布は、0分が59.1%で、勤務日(図2-2-1)と比べると残業をまったく行わない教員は40ポイントほど増加する。しかし一方で、4割の教員が休日にも学校に出勤して残業を行っている。また、小学校に比べると、休日に残業を行う教員が多い。残業時間については1時間以下(0分をのぞく)の教員が16.5%、1時間01分~2時間以下の教員が1割、2時間01分~3時間以下の教員が約6%、3時間を超える教員は1割弱ほど存在する。この時間に行っている業務としては部活動などが考えられるが、実際に中学校の教員が休日の残業時間にどのような業務を行っているのかは、後の第3項において紹介する。

以上をまとめると、次のようにいえる。第2期(夏季休業期)の休日における平均残業時間について、休日に残業を行わない教員は小学校では8割、中学校では6割存在する。しかし、小学校では残業時間が1時間以下(0分をのぞく)の教員が約15%となっており、残業を行う教員についても、その時間は長くはない。中学校においては、残業時間は教員間での差が大きいが、1時間以下(0分をのぞく)などの少ない時間帯を中心に分布している。

図2-2-3 休日・1日あたりの平均残業時間量の分布



※時間量は「時間:分」を示す。たとえば「1:01~1:30」は「1時間01分~1時間30分」。



次に、第2期(夏季休業期)の休日における平均持帰り時間量について検討しよう(図2-2-4)。

小学校の休日における平均持帰り時間の分布は、0分が50.8%で、持帰り仕事をを行わない教員は5割である。これは、勤務日(図2-2-2)と大きな差はない。他方、休日でも5割の教員が持帰り仕事を行っており、その時間は1時間以下に集中している。持帰り時間が30分以下(0分をのぞく)の教員は19.5%、31分～1時間以下の教員は11.2%と、1時間以下(0分をのぞく)の持帰り仕事を行っている教員は3割である。1時間01分～2時間以下の教員は1割、2時間を超える教員は1割弱である。

中学校の休日における平均持帰り時間の分布は、0分が48.2%で、持帰り仕事をを行わない教員は5割である。これは、勤務日(図2-2-2)と大きな差はない。他方、休日でも5割の教員が持帰り仕事を行っており、その時間は1時間以下に集中している。持帰り時間が30分以下(0分をのぞく)の教員は15.7%、31分～1時間以下の教員は10.8%と、1時間以下(0分をのぞく)の持帰り仕事を行っている教員は3割弱である。1時間01分～2時間以下の教員は1割強、2時間を超える教員はおよそ1割である。

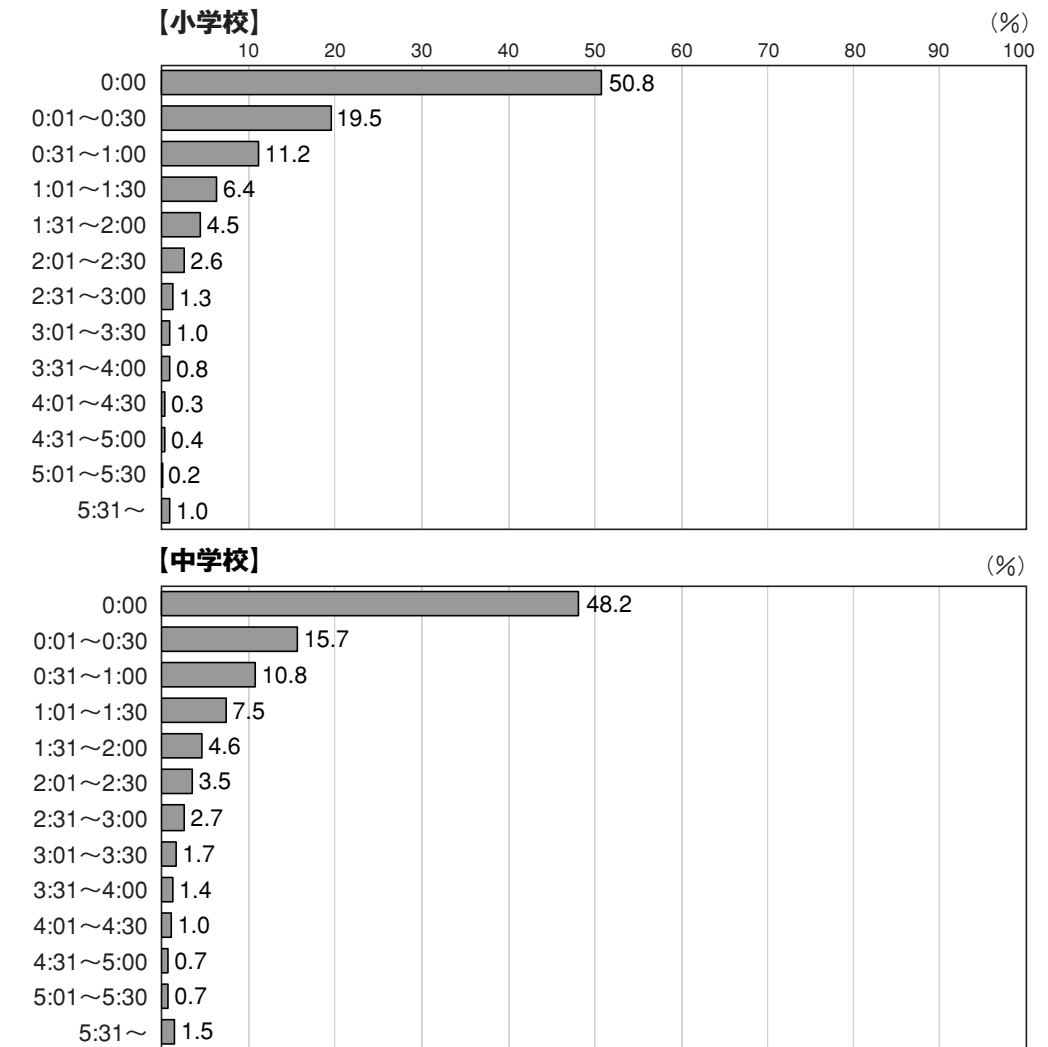
以上、第2期(夏季休業期)の休日の平均持帰り時間量については、休日に持帰り仕事をを行わない教員は小学校・中学校いずれにおいても5割存在する。また、小学校・中学校いずれにおいても、およそ3割の教員が1時間以下(0分をのぞく)の持帰り仕事を行っている。

第2期(夏季休業期)の休日の残業時間・持帰り時間の実態についてまとめると、残業時間については、休日に残業を行わない教員は小学校では8割、中学校では6割存在する。残業を行う教員についても、1時間以下(0分をのぞく)の残業を行う教員の割合が小学校・中学校いずれにおいても15%ほどであり、残業時間は長くはない(図2-2-3)。持帰り時間については、休日に持帰り仕事をを行わない教員は小学校・中学校いずれにおいても5割ほど存在する。持帰り仕事を行う教員については、小学校・中学校いずれにおいても、1時間以下(0分をのぞく)に3割の教員が集中している(図2-2-4)。

以上から、次のことが指摘できる。

第2期(夏季休業期)においては、勤務日に残業を行っていない教員は小学校においては3割強、中学校においては2割強であり、小学校・中学校いずれにおいても、およそ6割の教員が1時間以下の残業を行っている(図2-2-1)。休日に残業を行う教員は小学校では2割、中学校では4割いるが、残業時間については、小学校・中学校いずれにおいても1時間以下(0分をのぞく)の教員が15%ほどと、長くはない(図2-2-3)。持帰り仕事を行う教員の割合は、小学校・中学校のいずれにおいても、勤務日(図2-2-2)と休日(図2-2-4)ともにほぼ5割である。小学校・中学校いずれにおいても、勤務日の持帰り時間は4割が1時間以下(0分をのぞく)に集中し(図2-2-2)、休日の持帰り時間は1時間以下(0分をのぞく)に3割の教員が集中している(図2-2-4)。

図2-2-4 休日・1日あたりの平均持帰り時間量の分布



※時間量は「時間:分」を示す。たとえば「1:01~1:30」は「1時間01分~1時間30分」。

(3) 残業時間・持帰り時間における業務内訳

前項では、第2期(夏季休業期)における教員一人あたりの平均の残業時間量・持帰り時間量の分布について注目したが、本項ではこれらの時間にどのような業務を行っているのか、業務の内訳を検討する。

第2期(夏季休業期)における勤務日と休日それぞれについて、残業時間、持帰り時間の順に、小学校と中学校のそれぞれで業務の上位5種類の内訳を検討していこう。

まず、第2期(夏季休業期)の勤務日について検討しよう(表2-2-4、表2-2-5)。

平均残業時間における業務内訳については、小学校において最も長いのは、その他の校務で4分である。小学校で2番目に長いのは事務・報告書作成で3分、つづいて学校経営が2分、学校行事が2分、授業準備が1分である。学校行事が上位に入っているのは、第2期(夏季休業期)の時期的特徴であると考えられる。中学校において最も長いのは部活動・クラブ活動で10分である。中学校で2番目に長いのはその他の校務で6分、つづいて事務・報告書作成4分、学校経営2分、授業準備1分となっている。ここから、小学校・中学校ともに残業時間における業務内訳は、事務的な業務が中心となっており、中学校ではこれに部活動・クラブ活動が加わるといえる。また、夏季休業期であっても、授業準備を行っていることがわかる(表2-2-4)。

平均持帰り時間における業務内訳については、小学校において最も長いのは授業準備で4分である。2番目に長いのはその他の校務で3分、つづいて事務・報告書作成2分、学年・学級経営0分、学校経営0分である。中学校においても最も長いのはその他の校務で3分である。2番目に長い業務は授業準備で2分である。つづいて事務・報告書作成2分、部活動・クラブ活動0分、成績処理0分であり、事務的な業務が中心であるといえる(表2-2-5)。

次に、第2期(夏季休業期)の休日について検討しよう(表2-2-6、表2-2-7)。

平均残業時間における業務内訳については、小学校ではその他の校務が最も長く1分、以下、保護者・PTA対応が1分、事務・報告書作成0分、学校経営0分、部活動・クラブ活動0分とつづく。中学校では部活動・クラブ活動が最も長く33分、以下、その他の校務が2分、事務・報告書作成1分、保護者・PTA対応1分、学校経営0分とつづく。小学校・中学校いずれにおいても、保護者・PTA対応が上位に入っていることは、保護者・PTAにかかわる集会などが増える第2期(夏季休業期)の時期的特徴であると考えられる。また、小学校においても部活動・クラブ活動が上位に入っていることも、第2期(夏季休業期)の特徴であると考えられる(表2-2-6)。

平均持帰り時間における業務内訳については、小学校では授業準備が最も長く9分、つづいてその他の校務が5分、事務・報告書作成が4分、部活動・クラブ活動が1分、校務としての研修が1分である。中学校では部活動・クラブ活動が最も長く22分、つづいて授業準備が5分、その他の校務が4分、事務・報告書作成が3分、成績処理が1分となっている。小学校において校務としての研修が上位に入っていることは、第2期(夏季休業期)には通常の授業がないために研修が開かれることが多く、教員が研修を受ける時間をとることができるからだと考えられる(表2-2-7)。

表2-2-4 勤務日の平均残業時間における業務内訳

	小学校		中学校		全体	
	業務	時間	業務	時間	業務	時間
1	その他の校務	4分	部活動・クラブ活動	10分	部活動・クラブ活動	6分
2	事務・報告書作成	3分	その他の校務	6分	その他の校務	5分
3	学校経営	2分	事務・報告書作成	4分	事務・報告書作成	3分
4	学校行事	2分	学校経営	2分	学校経営	2分
5	授業準備	1分	授業準備	1分	授業準備	1分

表2-2-6 休日の平均残業時間における業務内訳

	小学校		中学校		全体	
	業務	時間	業務	時間	業務	時間
1	その他の校務	1分	部活動・クラブ活動	33分	部活動・クラブ活動	18分
2	保護者・PTA対応	1分	その他の校務	2分	その他の校務	2分
3	事務・報告書作成	0分	事務・報告書作成	1分	保護者・PTA対応	1分
4	学校経営	0分	保護者・PTA対応	1分	事務・報告書作成	1分
5	部活動・クラブ活動	0分	学校経営	0分	学校経営	0分

表2-2-5 勤務日の平均持帰り時間における業務内訳

	小学校		中学校		全体	
	業務	時間	業務	時間	業務	時間
1	授業準備	4分	その他の校務	3分	授業準備	3分
2	その他の校務	3分	授業準備	2分	その他の校務	3分
3	事務・報告書作成	2分	事務・報告書作成	2分	事務・報告書作成	2分
4	学年・学級経営	0分	部活動・クラブ活動	0分	学校経営	0分
5	学校経営	0分	成績処理	0分	成績処理	0分

表2-2-7 休日の平均持帰り時間における業務内訳

	小学校		中学校		全体	
	業務	時間	業務	時間	業務	時間
1	授業準備	9分	部活動・クラブ活動	22分	部活動・クラブ活動	13分
2	その他の校務	5分	授業準備	5分	授業準備	7分
3	事務・報告書作成	4分	その他の校務	4分	その他の校務	5分
4	部活動・クラブ活動	1分	事務・報告書作成	3分	事務・報告書作成	3分
5	校務としての研修	1分	成績処理	1分	成績処理	1分

### 3. 属性別にみた残業時間・持帰り時間

前節では、第2期(夏季休業期)における平均の残業時間量・持帰り時間量の全体像を検討した。

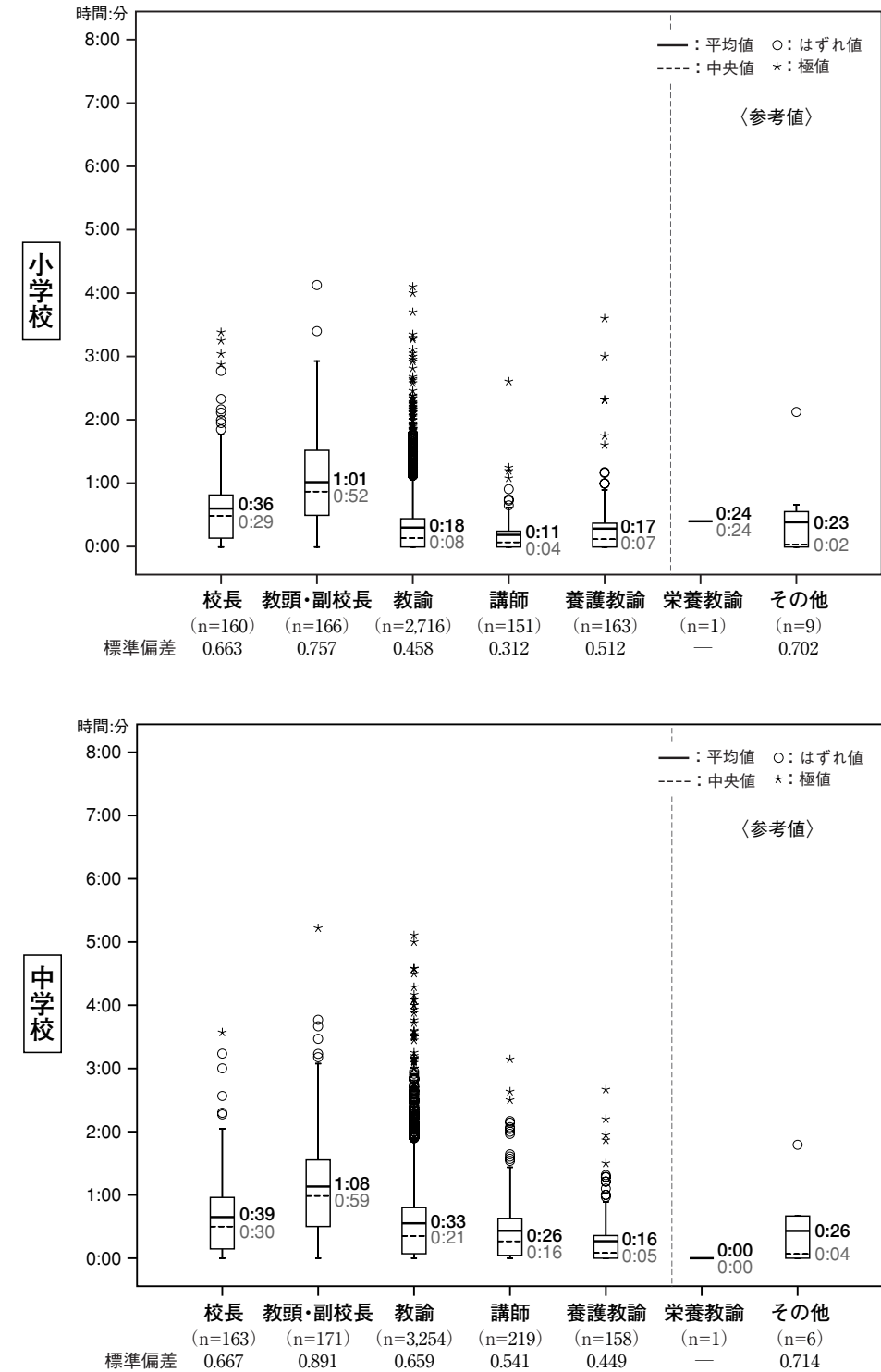
しかし、一人一人の残業時間量・持帰り時間量や、正規の勤務時間に処理できない業務を学校で行うのか、自宅で持帰り仕事として行うのかといった勤務実態は、教員の性別や職階、年齢などの属性によって異なると考えられる。

そこで本節では、特に勤務日に絞り、属性別(職階別、性別、年齢別)に残業時間量・持帰り時間量の実態を明らかにする。

まずは職階別に、平均残業時間量、平均持帰り時間量の順に、小学校と中学校のそれぞれについてみていこう。

第2期(夏季休業期)の勤務日における平均残業時間量は、図2-2-5の通り、小学校の教頭・副校長は1時間01分、中学校の教頭・副校長は1時間08分であり、他の職階に比べて圧倒的に長くなっている。その他の職階については、小学校では校長は36分、教諭は18分、講師は11分、養護教諭は17分となっており、校長は他の職階よりも15~25分ほど長くなっている。中学校では校長は39分で、教諭は33分、講師は26分、養護教諭は16分となっており、校長は他の職階よりも5~25分ほど長くなっている。

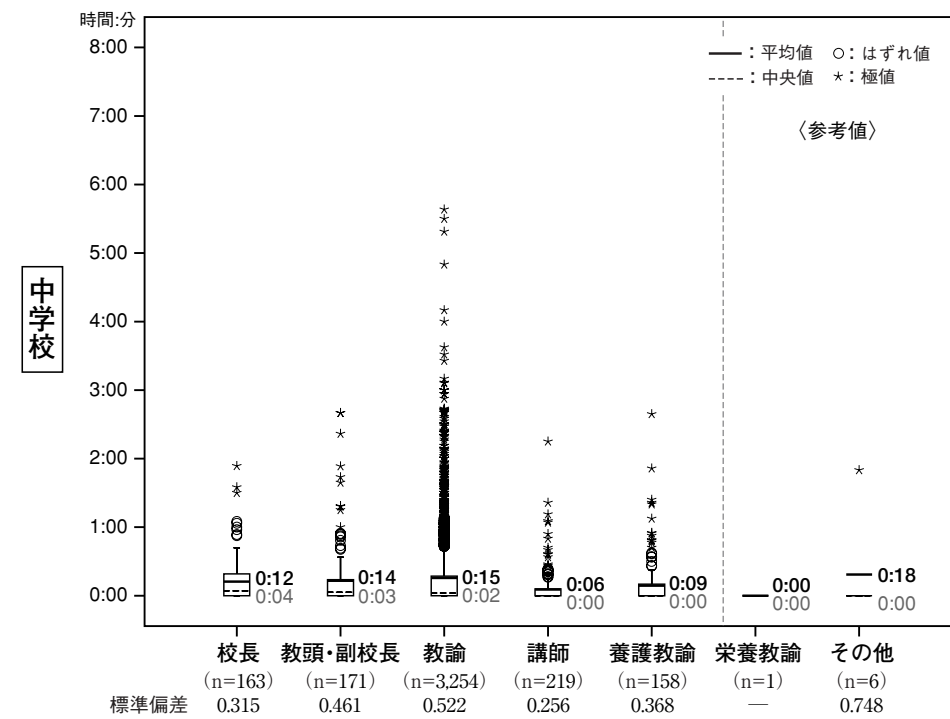
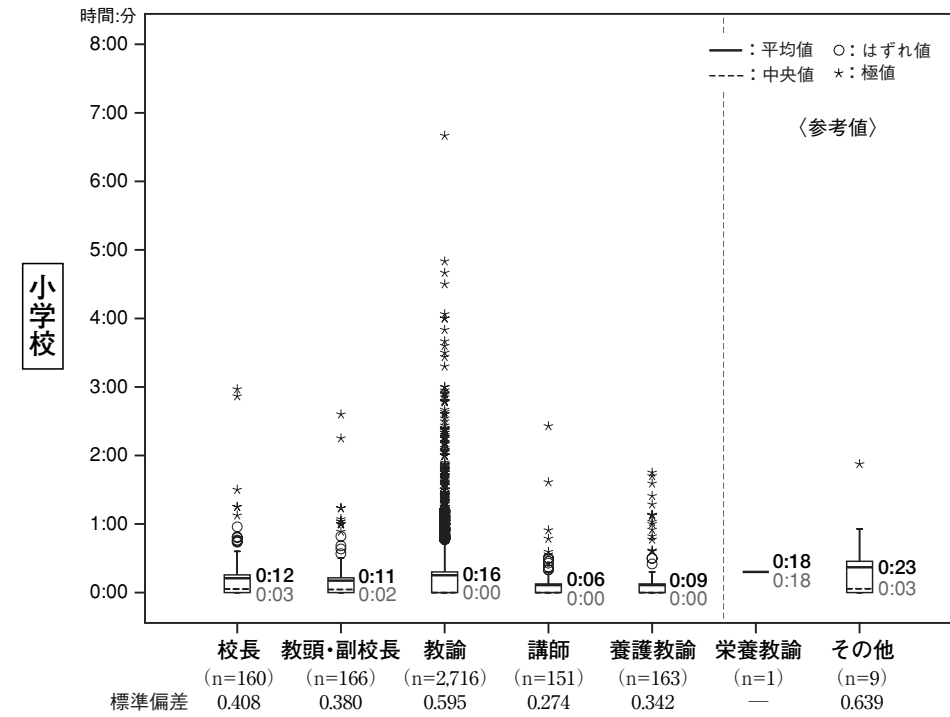
図2-2-5 勤務日・1日あたりの平均残業時間量(小・中学校 職階別)



第2期(夏季休業期)の勤務日における平均持帰り時間量は、他の時期に比べて全体的に短くなっている。職階別にみると、図2-2-6のように、小学校・中学校とも教諭で最も長くなっている。しかし、教諭と校長や教頭・副校長との差は大きくはなく、小学校では、教諭16分につづくのが校長12分、教頭・副校長11分である。中学校では、教諭15分につづくのが教頭・副校長14分、校長12分である。

図2-2-5と図2-2-6の比較から、小学校・中学校とも勤務日においては、学校では教頭・副校長が長く残業を行うが、自宅での持帰り仕事の量には、講師・養護教諭をのぞき職階による違いはあまりないといえる。

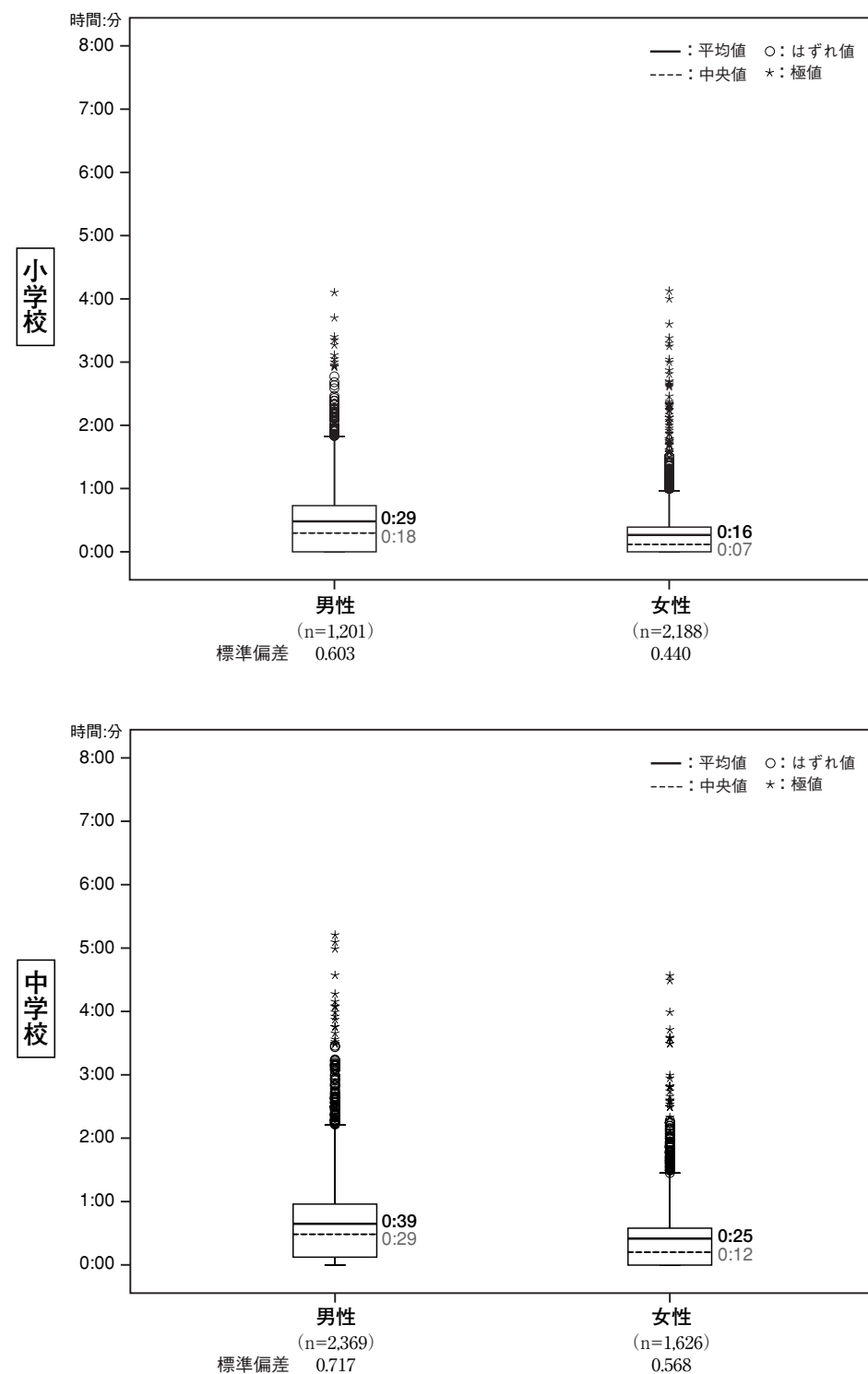
図2-2-6 勤務日・1日あたりの平均持帰り時間量(小・中学校 職階別)



次に、性別ごとに平均残業時間量、平均持帰り時間量の順に、小学校と中学校それぞれについて検討しよう。

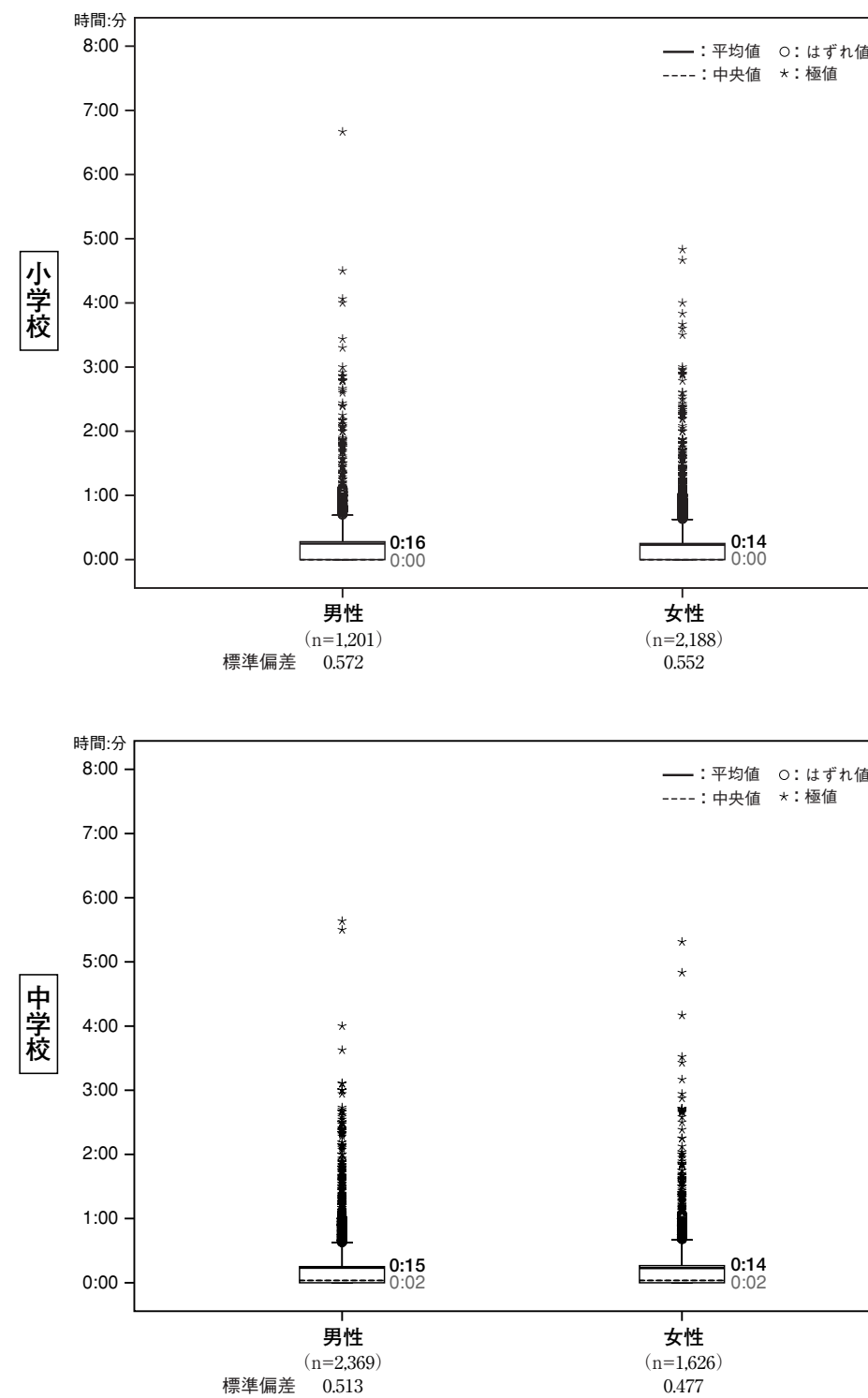
第2期(夏季休業期)の勤務日における平均残業時間量は図2-2-7の通り、小学校・中学校ともに男性教員の方が女性教員よりも15分ほど長くなっている(平均値は次の通り/小学校:男性教員 29分、女性教員 16分、中学校:男性教員 39分、女性教員 25分)。

図2-2-7 勤務日・1日あたりの平均残業時間量(小・中学校 性別)



これに対して第2期(夏季休業期)の勤務日における平均持帰り時間量は図2-2-8の通り、小学校・中学校いずれにおいても男性教員と女性教員の差はほとんどない(平均値は次の通り/小学校:男性教員 16分、女性教員 14分、中学校:男性教員 15分、女性教員 14分)。

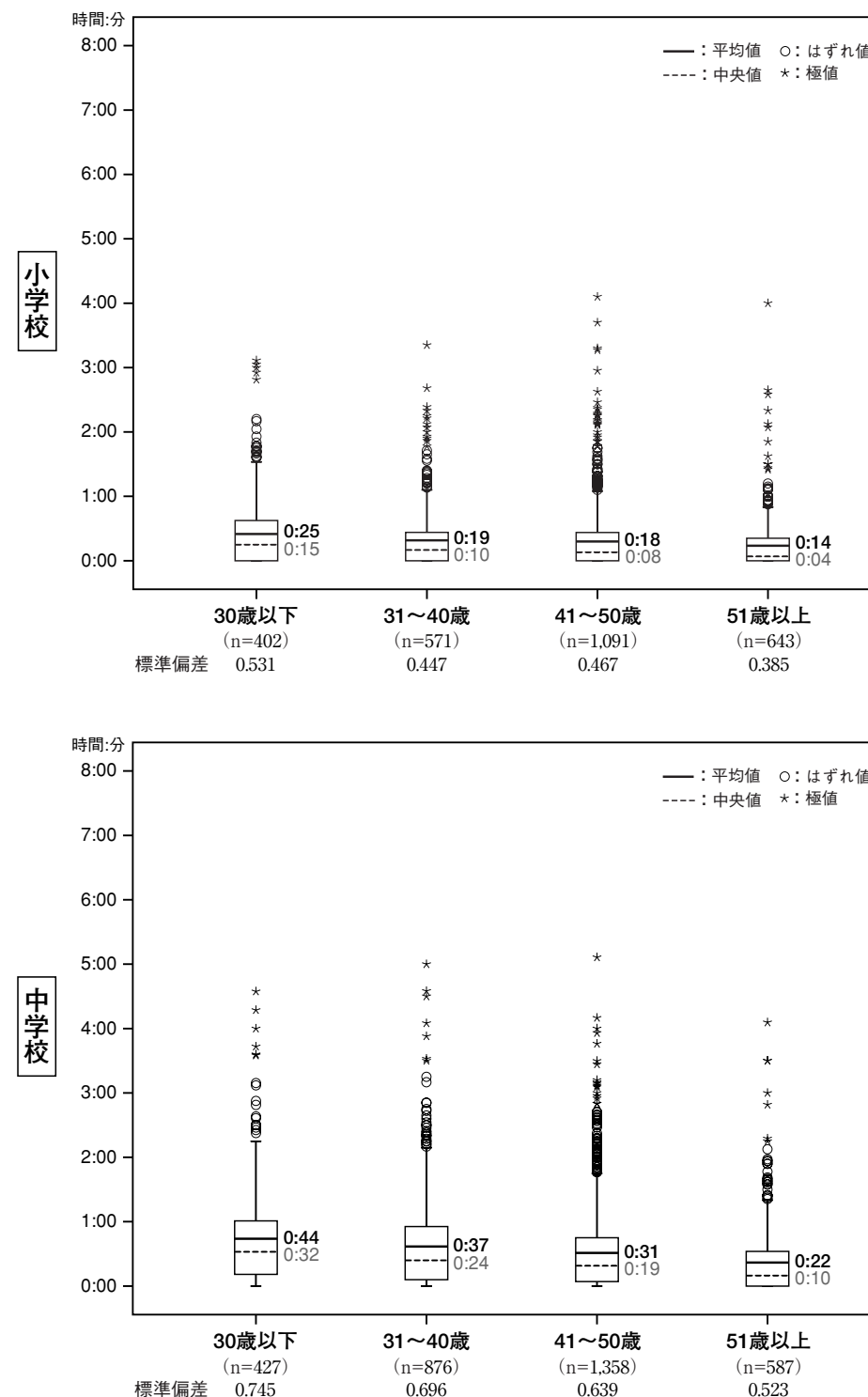
図2-2-8 勤務日・1日あたりの平均持帰り時間量(小・中学校 性別)



最後に、年齢別に平均の残業時間量・持帰り時間量の実態を検討しよう。ただし、この場合、職階の影響をのぞく必要がある。たとえば51歳以上には管理職が多く、この年齢層で残業時間・持帰り時間が長い場合は、年齢の影響だけではなく職階の影響も考えられる。そこで、教諭のみを取り出し、教諭の年齢別で残業時間、持帰り時間の順に、小学校と中学校について分析を行う。

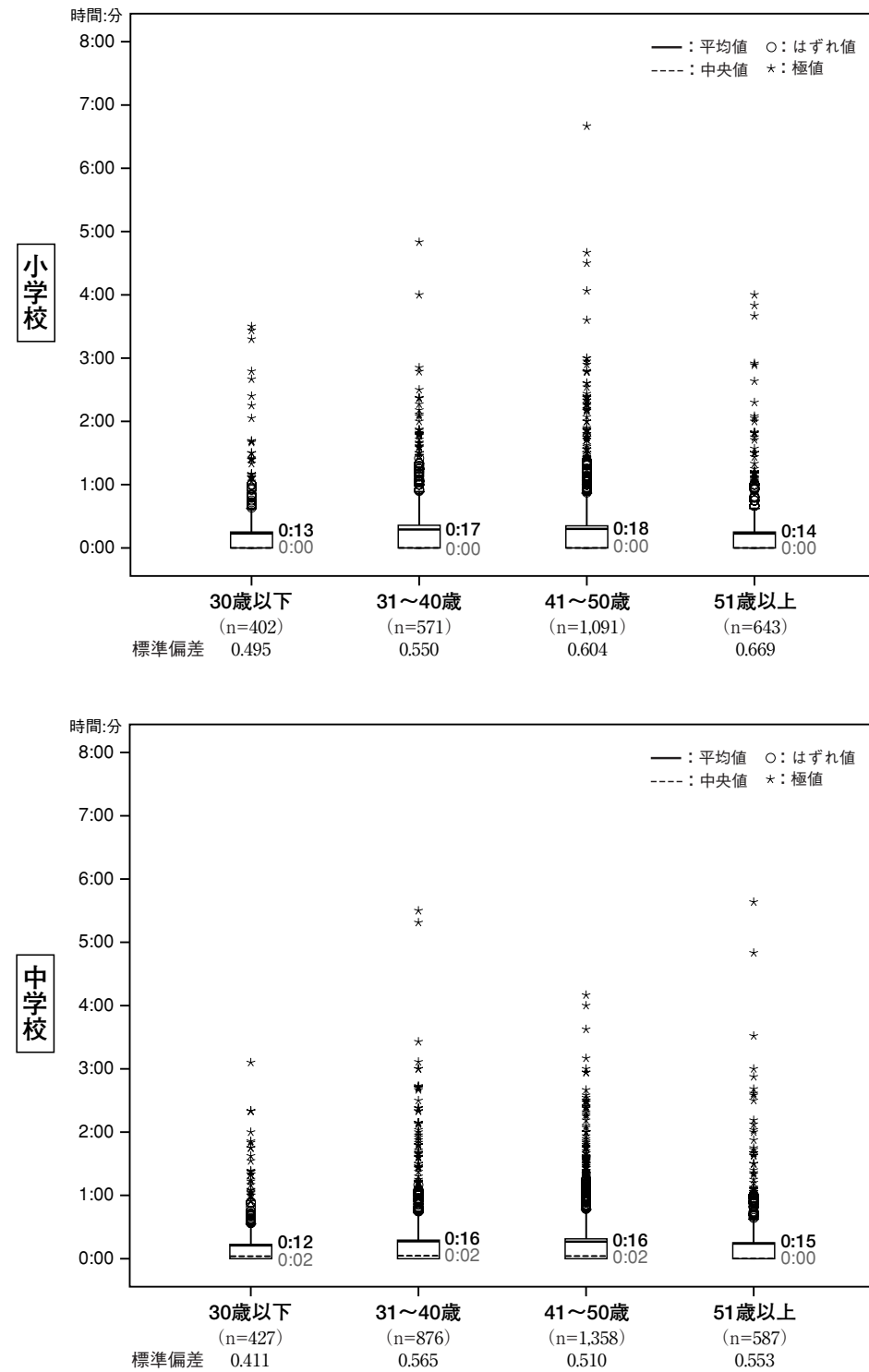
第2期(夏季休業期)の勤務日における教諭の平均残業時間量は、小学校・中学校ともに30歳以下で最も長く、小学校では25分、中学校では44分である(図2-2-9)。しかし、年齢層が上がるにつれて平均残業時間は若干減少する。小学校では31~40歳で19分、41~50歳で18分、51歳以上で14分である。中学校では31~40歳で37分、41~50歳で31分、51歳以上で22分である。ここから、年齢層の高い、いわゆるベテラン教諭になるほど平均残業時間が減少していくといえる。この原因は、経験を積むことによって授業などの準備時間が短縮されることや、若い年齢層ほど部活動などの業務が任されることなどが考えられる。

図2-2-9 勤務日・1日あたりの平均残業時間量(小・中学校 教諭の年齢別)



第2期(夏季休業期)の勤務日における教諭の平均持帰り時間量は、小学校と中学校いずれにおいても、年齢によって大きな差はないことがわかる。30歳以下では小学校13分、中学校12分、31～40歳では小学校17分、中学校16分、41～50歳では小学校18分、中学校16分、51歳以上では小学校14分、中学校15分である(図2-2-10)。

図2-2-10 勤務日・1日あたりの平均持帰り時間量(小・中学校 教諭の年齢別)



## 第3章 第3期(通常期)における勤務実態

### 1. 第3期の調査協力校の概況

第3期の調査期間は、平成18年8月28日(月)から平成18年9月24日(日)までの4週間である。

まず、第3期の調査協力校の時期的特徴について紹介する。

第3期において回答のあった319校の小学校・中学校は、調査期間の前半に児童・生徒の夏季休業期(以下、「夏季休業期」)を含んでいる。第1章でも述べたように、夏季休業期には基本的に授業はなく、登校する児童・生徒の数も少ない。これに対して夏季休業期後の通常の授業などが行われている期間(以下、「通常期」)には、授業などのほか、学期始めに伴う業務などが集中する傾向にある。そのため、夏季休業期と通常期では、教員の業務における質と量に大きな違いがあると考えられる。そこで第3期については、調査協力校の夏季休業期の終了日の情報をもとに、データを夏季休業期と通常期の2つの時期に分けて分析を行った。

なお、調査協力校における夏季休業期の終了日の分布は表2-3-1のようにになっている。

分布をみると、第3期の調査が始まる8月28日(月)以降に夏季休業期が終了する学校は、およそ8割におよぶ。つまり、8割の学校で、調査期間である28日間のうちに1~7日間の夏季休業期を含む。残る1~2割の学校では、調査期間中に夏季休業期を含んでいない。

本章では、夏季休業期の終了後の時期における教員の勤務実態の特徴を検討するため、第3期では、通常期について報告を行うこととする。

表2-3-1 第3期の調査協力校における夏季休業期の終了日

夏季休業期 終了日	8月16日 (水)	8月17日 (木)	8月18日 (金)	8月20日 (日)	8月21日 (月)	8月22日 (火)
	1	2	1	15	4	7
	0.3	0.6	0.3	4.7	1.3	2.2
8月23日 (水)	8月24日 (木)	8月25日 (金)	8月26日 (土)	8月27日 (日)	8月28日 (月)	8月29日 (火)
6	19	8	1	6	10	9
1.9	6.0	2.5	0.3	1.9	3.1	2.8
8月30日 (水)	8月31日 (木)	9月3日 (日)	計			
11	217	2	319	校		
3.4	68.0	0.6	100.0	%		



## 2. 残業時間・持帰り時間および業務の内訳

### (1) 全体的な残業時間・持帰り時間の実態

まず、第3期(通常期)の勤務日における残業時間・持帰り時間の実態について、小学校、中学校、小学校と中学校の比較という順番で検討していこう(表2-3-2)。

小学校では、残業時間量は平均で1時間37分、持帰り時間量は平均30分、これらを合わせた時間の平均は2時間08分である。

中学校では、残業時間量は平均2時間11分、持帰り時間量は平均19分、これらを合わせた時間の平均は2時間30分である。

また、小学校と中学校を比べてみると、勤務日の残業時間の平均は中学校の方が小学校よりも34分長い。一方、持帰り時間の平均は小学校の方が中学校よりも11分長い。なお、小学校・中学校での残業時間・持帰り時間における業務内訳については、後の第3項で述べる。

次に、第3期(通常期)の休日における残業時間・持帰り時間の実態について、小学校、中学校、小学校と中学校の比較という順番で検討していこう(表2-3-3)。

小学校では、残業時間は平均で16分、持帰り時間は平均で1時間23分、残業時間と持帰り時間を合わせた時間の平均は1時間40分である。残業時間の中央値が0分であることからわかるように、小学校では基本的に休日に学校では仕事を行わないといえる(表2-3-3)。

中学校では、残業時間と持帰り時間はほぼ同じで、残業時間は平均1時間29分、持帰り時間は平均1時間31分と、学校での残業も自宅での持帰り仕事も1時間30分ほどである。これらを合わせた時間の平均は3時間01分である。また、休日の残業時間と持帰り時間の中央値と平均値がおおよそ40~50分もひらいていることからわかるように、中学校では休日に残業や持帰り仕事をする人の間で、時間量の差が大きい(表2-3-3)。これは後の図2-3-3や図2-3-4からも確認できる。

小学校と中学校を比べてみると、休日の残業時間の平均は中学校の方が小学校よりも1時間13分長い。小学校と中学校それぞれの残業時間における業務内訳については後の第3項で述べるが、中学校においては部活動を行っているために長くなると考えられる。

以上、第3期(通常期)の勤務日と休日を比べてまとめておこう。

小学校の教員は、勤務日においては、残業時間の方が持帰り時間よりも約1時間長く(表2-3-2)、休日においては、持帰り時間の方が残業時間よりも1時間07分長い(表2-3-3)。持帰り時間は勤務日よりも休日の方が約50分長く、休日には学校で仕事をせず、自宅で持帰り仕事を行っている様子がうかがえる(表2-3-2、表2-3-3)。

中学校の教員は、勤務日においては、残業時間の方が持帰り時間よりも2時間弱長い(表2-3-2)。休日においては、残業時間と持帰り時間はほぼ同じ長さであり、これは小学校の教員にはない特徴である(表2-3-3)。持帰り時間は勤務日よりも休日の方が1時間10分ほど長く、休日でも自宅で持帰り仕事を行っている様子がうかがえる(表2-3-2、表2-3-3)。

表2-3-2 勤務日・1日あたりの平均残業時間量・持帰り時間量

	残業時間量	持帰り時間量	残業時間+持帰り時間
小学校	1時間37分 〔1時間30分〕(0.996)	30分 〔15分〕(0.659)	2時間08分 〔1時間59分〕(1.204)
中学校	2時間11分 〔2時間06分〕(1.143)	19分 〔6分〕(0.524)	2時間30分 〔2時間24分〕(1.253)
全体	1時間55分 〔1時間47分〕(1.113)	24分 〔9分〕(0.599)	2時間20分 〔2時間13分〕(1.245)

〔 〕内は中央値、( )内は標準偏差を示す。

表2-3-3 休日・1日あたりの平均残業時間量・持帰り時間量

	残業時間量	持帰り時間量	残業時間+持帰り時間
小学校	16分 〔0分〕(0.698)	1時間23分 〔1時間00分〕(1.479)	1時間40分 〔1時間16分〕(1.625)
中学校	1時間29分 〔37分〕(1.979)	1時間31分 〔49分〕(1.882)	3時間01分 〔2時間33分〕(2.458)
全体	55分 〔0分〕(1.637)	1時間27分 〔56分〕(1.707)	2時間23分 〔1時間49分〕(2.213)

〔 〕内は中央値、( )内は標準偏差を示す。

(2)個人単位でみた残業時間・持帰り時間の実態

前項では、第3期(通常期)の教員全体における残業時間量・持帰り時間量の平均に注目した。しかし、すべての教員が一様に残業や持帰り仕事を行っているわけではなく、これらの時間は、教員間での差が大きいと考えられる。

そこで、第3期(通常期)における教員一人あたりの平均残業時間量および平均持帰り時間量の分布をみたものが、図2-3-1から図2-3-4である。

以下、勤務日と休日それぞれについて、残業時間、持帰り時間の順に、それぞれ小学校、中学校の結果を検討していく。

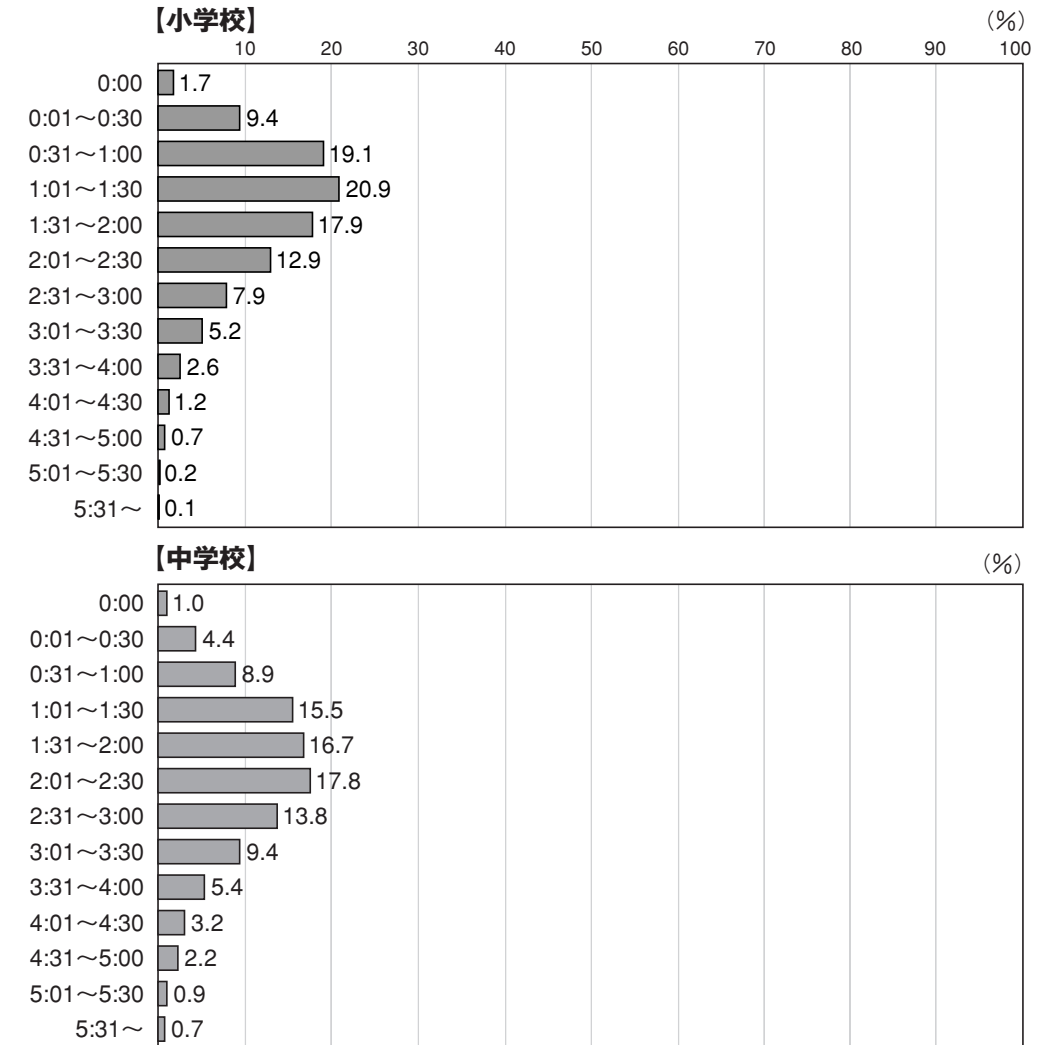
まず、第3期(通常期)の勤務日における平均残業時間量について検討しよう(図2-3-1)。

小学校の勤務日における平均残業時間の分布は、0分が1.7%で、残業を行わない教員はほとんどいない。平均残業時間が30分以下(0分をのぞく)は9.4%、31分~1時間以下は19.1%となっており、3割弱の教員が1時間以下(0分をのぞく)の残業を行っている。また、残業が1時間01分~1時間30分以下の教員は20.9%、1時間31分~2時間以下の教員は17.9%、2時間01分~2時間30分以下の教員は12.9%、2時間31分~3時間以下の教員は7.9%と、1時間01分~3時間以下の残業を行う教員はおよそ6割である。さらに、3時間を超える残業を行う教員も1割存在する。

中学校の勤務日における平均残業時間の分布は、0分が1.0%で、残業を行わない教員はほとんどいない。残業時間が30分以下(0分をのぞく)は4.4%、31分~1時間以下は8.9%となっており、約13%の教員が1時間以下(0分をのぞく)の残業を行っている。これに対して、平均残業時間が1時間01分~1時間30分以下の教員は15.5%、1時間31分~2時間以下の教員は16.7%、2時間01分~2時間30分以下の教員は17.8%、2時間31分~3時間以下の教員は13.8%と、1時間01分~3時間以下の残業を行う教員は6割強に達する。さらに、3時間を超える残業を行う教員は2割を超える。

以上から小学校・中学校ともに、ほとんどの教員が勤務日に残業を行っており、およそ6割の教員が1時間01分~3時間以下の残業を行っていることがわかる。また、小学校よりも中学校の方が、概して残業時間が長い傾向にあるといえる。

図2-3-1 勤務日・1日あたりの平均残業時間量の分布



※時間量は「時間:分」を示す。たとえば「1:01~1:30」は「1時間01分~1時間30分」。

次に、第3期(通常期)の勤務日における平均持帰り時間量について検討しよう(図2-3-2)。

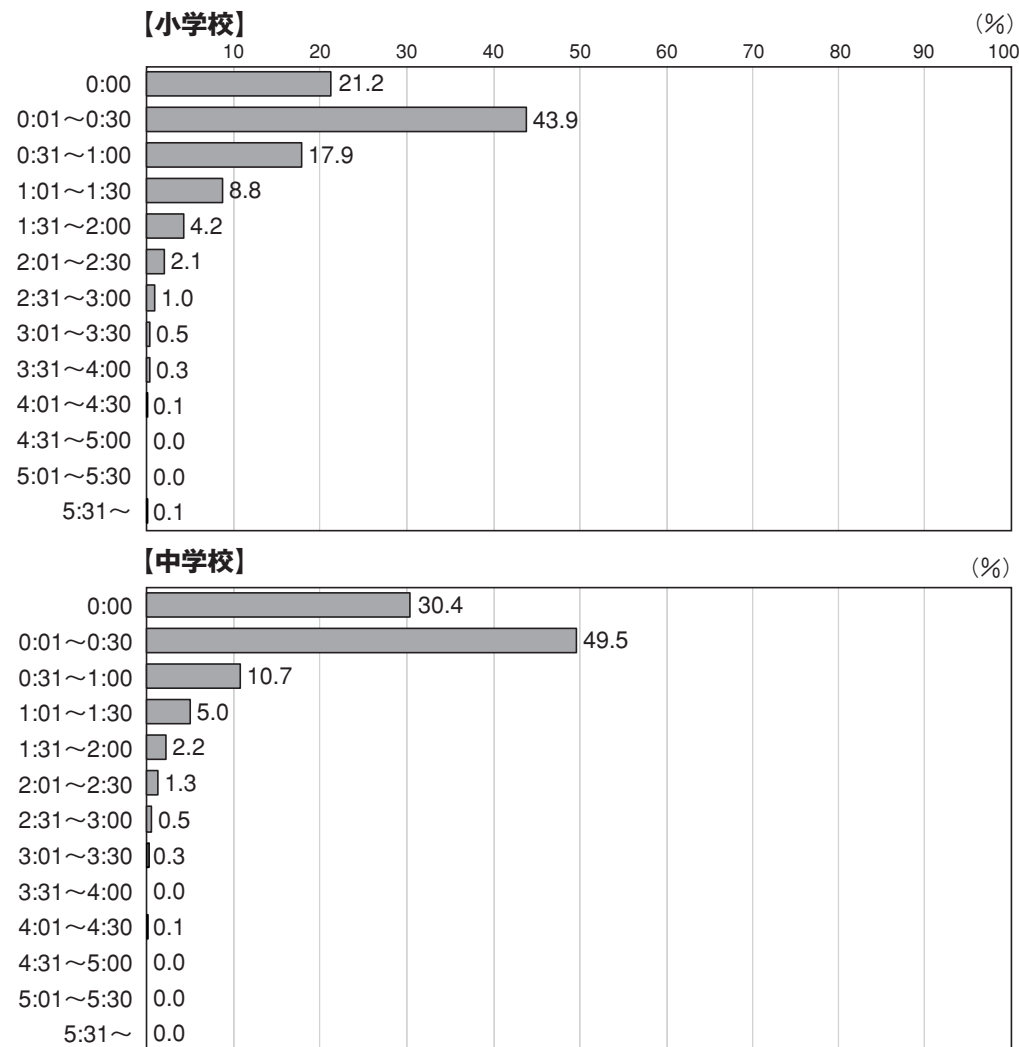
小学校の勤務日の平均持帰り時間の分布は、0分が21.2%であり、持帰り仕事をを行わない教員は2割ほどである。持帰り時間が30分以下(0分をのぞく)は43.9%、31分～1時間以下は17.9%となっており、6割の教員が1時間以下(0分をのぞく)の持帰り仕事をを行っている。1時間を超える持帰り仕事をを行っている教員は2割弱いる。

中学校の勤務日の平均持帰り時間の分布は、0分が30.4%であり、持帰り仕事をを行わない教員は3割ほどである。持帰り時間が30分以下(0分をのぞく)は49.5%、31分～1時間以下は10.7%となっており、全体として6割の教員が1時間以下(0分をのぞく)の持帰り仕事をを行っている。1時間を超える持帰り仕事をを行っている教員は1割弱いる。

以上、第3期(通常期)の勤務日について、勤務日に持帰り仕事をを行わない教員は小学校では2割、中学校では3割ほどいる。また、小学校・中学校ともに、6割の教員が1時間以下(0分をのぞく)の持帰り仕事をを行っている。

第3期(通常期)の勤務日の残業時間と持帰り時間の実態についてまとめると、ほとんどの教員が残業を行っており、小学校では約67%の教員が2時間以下(0分をのぞく)の残業を行い、中学校では約46%の教員が2時間以下(0分をのぞく)の残業を行っている(図2-3-1)。持帰り仕事をしていない教員は小学校では2割、中学校では3割いるが、小学校・中学校いずれも6割の教員が1時間以下(0分をのぞく)の持帰り仕事をを行っている(図2-3-2)。

図2-3-2 勤務日・1日あたりの平均持帰り時間量の分布



※時間量は「時間:分」を示す。たとえば「1:01~1:30」は「1時間01分~1時間30分」。

次に、第3期(通常期)の休日における平均残業時間量について検討してみよう(図2-3-3)。

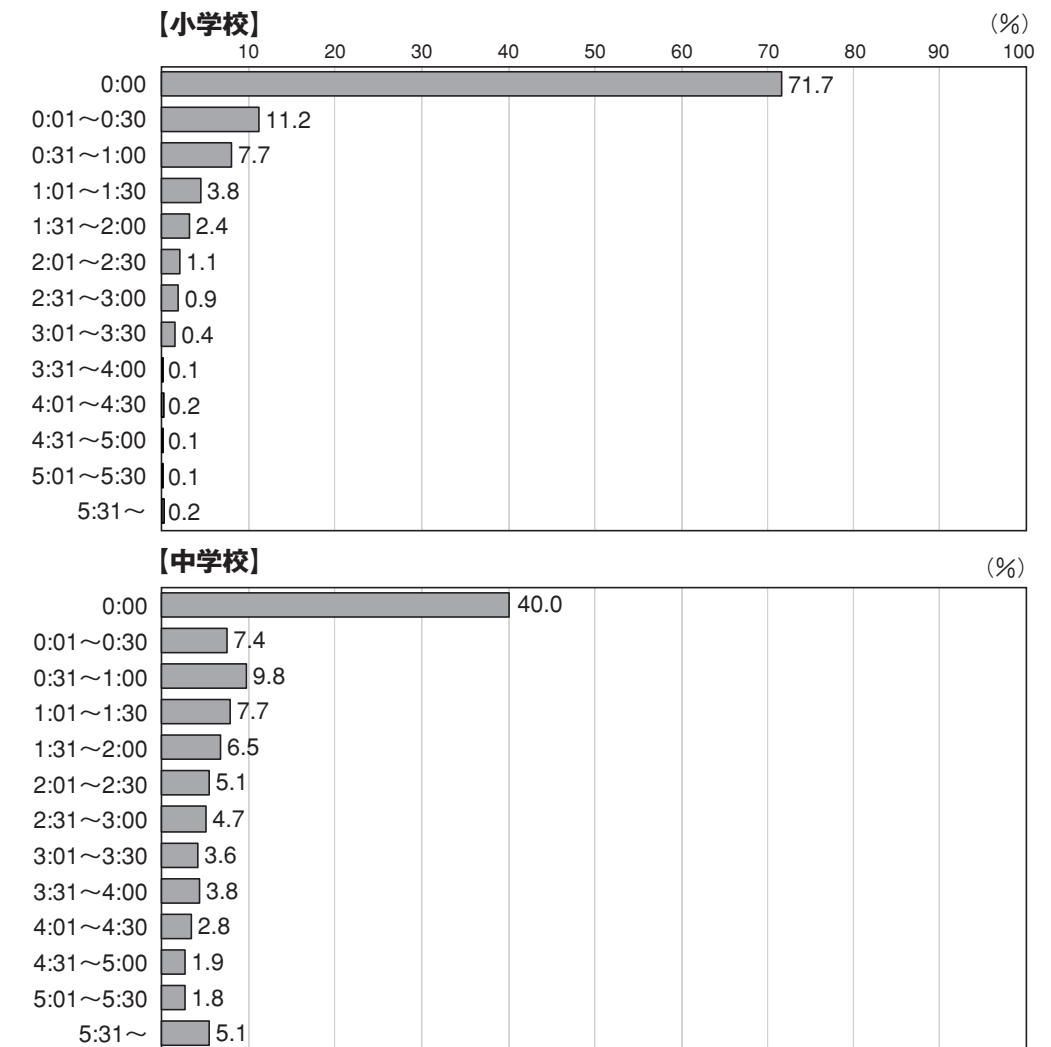
小学校の休日における平均残業時間の分布は、0分が71.7%であり、勤務日(図2-3-1)と比べると、休日にはほとんどの教員が学校に出勤することはないといえる。しかし、1時間以下(0分をのぞく)の残業を行う教員も20%弱、1時間01分～3時間以下の残業を行う教員も約8%いる。

中学校の休日における平均残業時間の分布は、0分が40.0%であり、勤務日(図2-3-1)と比べると残業を行う教員は少ない。また、小学校よりも休日に残業を行う教員が多いといえる。残業時間は教員によって差が大きく、幅広い時間帯に分布している。残業時間が1時間以下(0分をのぞく)の教員が2割弱、1時間01分～2時間以下の教員が1割強、2時間01分～3時間以下の教員が1割、3時間01分～5時間以下の教員が1割強存在する。

さらに、休日に学校で5時間を超える業務を行う教員が約7%存在するのは、小学校にはない中学校だけの特徴であるといえる。この時間に行っている業務としては部活動などが考えられるが、中学校の教員が実際に休日の残業時間にどのような業務を行っているのかは、後の第3項において紹介する。

以上をまとめると、次のようにいえる。第3期(通常期)の休日の平均残業時間量については、休日に残業を行わない教員は小学校では7割、中学校では4割存在する。また、特に中学校において、残業時間は教員間での差が大きく、幅広い時間帯に分布している。

図2-3-3 休日・1日あたりの平均残業時間量の分布



※時間量は「時間:分」を示す。たとえば「1:01~1:30」は「1時間01分~1時間30分」。

次に、第3期(通常期)の休日における平均持帰り時間量について検討しよう(図2-3-4)。

小学校における休日の平均持帰り時間の分布は、0分が19.7%であり、勤務日(図2-3-2)とそれほど大きな差はない。休日でも8割の教員が持帰り仕事を行っている。持帰り時間は、1時間以下(0分をのぞく)の教員は3割、1時間01分~2時間以下の教員は約25%と、過半数の教員が2時間以下(0分をのぞく)の持帰り時間となっている。他方、2時間01分~3時間以下の教員は1割強、3時間を超える教員は1割強存在する。

中学校の休日における平均持帰り時間の分布は、0分が25.8%であり、休日に持帰り仕事を行わない教員は、勤務日(図2-3-2)より約5ポイント少ない。休日でも7割強の教員が持帰り仕事を行っている。持帰り時間は、1時間以下(0分をのぞく)の教員は3割弱、1時間01分~2時間以下の教員は2割弱と、およそ5割の教員が2時間以下(0分をのぞく)の持帰り時間となっている。他方、2時間01分~3時間以下の教員は1割、3時間01分~5時間以下の教員は1割存在する。さらに5時間を超える教員も約6%存在する。

小学校・中学校いずれにおいても、勤務日(図2-3-2)よりも休日(図2-3-4)の方が、持帰り仕事を行う教員が多い。

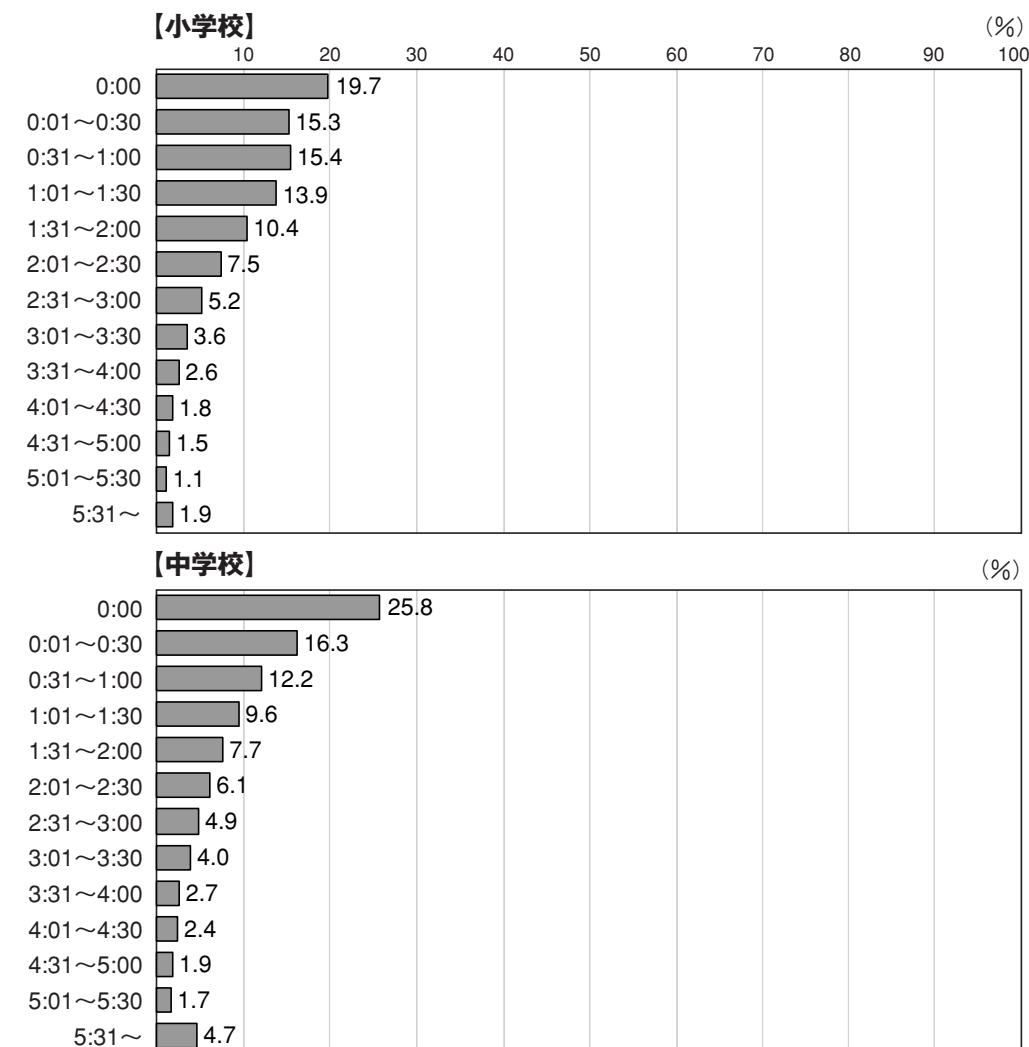
以上のことから、休日に持帰り仕事を行わない教員は小学校では2割、中学校では2割強存在する。また、小学校・中学校いずれにおいても、持帰り時間は教員間での差が大きく、およそ5割の教員が2時間以下(0分をのぞく)の持帰り仕事を行っているが、3時間を超える教員も、小学校では1割強、中学校では2割弱存在する。

第3期(通常期)の休日の残業時間・持帰り時間の実態についてまとめると、残業時間については、休日に残業を行わない教員は小学校では7割、中学校では4割存在する。また、中学校では教員間で残業時間の差が大きい(図2-3-3)。持帰り時間については、休日に持帰り仕事を行わない教員は小学校では2割、中学校ではおよそ4分の1存在する。また、小学校・中学校いずれにおいても、およそ5割の教員が2時間以下(0分をのぞく)の持帰り仕事を行っているが、3時間を超える持帰り仕事を行っている教員も、小学校では1割強、中学校では2割弱存在する(図2-3-4)。

以上から次のことが指摘できる。

第3期(通常期)においては、勤務日にはほとんどの教員が残業を行っており、6割の教員が1時間01分~3時間以下の残業を行っている(図2-3-1)。休日には残業を行う教員は小学校では3割弱、中学校では6割となり、その残業時間には個人差がある(図2-3-3)。持帰り仕事を行う教員の割合は、小学校・中学校のいずれにおいても、勤務日(図2-3-2)と休日(図2-3-4)ではそれほど大きな差はなく、休日の方が若干増えるが、いずれも小学校ではおよそ8割、中学校では7割である。小学校・中学校いずれにおいても、勤務日の持帰り時間は6割が1時間以下(0分をのぞく)に集中するが(図2-3-2)、休日の持帰り時間は教員間で差が大きく、およそ5割の教員が2時間以下(0分をのぞく)の業務を行っているが、3時間を超える業務を行っている教員も、小学校では1割強、中学校では2割弱存在する(図2-3-4)。

図2-3-4 休日・1日あたりの平均持帰り時間量の分布



※時間量は「時間:分」を示す。たとえば「1:01~1:30」は「1時間01分~1時間30分」。

(3) 残業時間・持帰り時間における業務内訳

前項では、第3期(通常期)における教員一人あたりの平均の残業時間量・持帰り時間量の分布について注目したが、本項ではこれらの時間にどのような業務を行っているのか、その内訳を検討する。

第3期(通常期)における勤務日と休日それぞれについて、残業時間、持帰り時間の順に、小学校と中学校のそれぞれで業務の上位5種類の内訳を検討していこう。

まず、第3期(通常期)の勤務日について検討しよう(表2-3-4、表2-3-5)。

平均残業時間における業務内訳については、小学校で最も長いのは、授業準備で22分である。中学校で最も長いのは、部活動・クラブ活動で22分である。小学校で2番目に長いのは成績処理で11分、つづいて学校行事が9分、事務・報告書作成が8分である。中学校では2番目に長いのは授業準備で19分、つづいて学校行事で14分、事務・報告書作成11分である。ここから、小学校・中学校ともに残業時間における業務内訳は、授業準備・学校行事が長い。学校行事の時間が長いのは、第3期の時期的特徴であるといえる。中学校ではこれに部活動・クラブ活動が加わる(表2-3-4)。

平均持帰り時間における業務内訳については、小学校・中学校いずれにおいても最も長いのは授業準備で、小学校では11分、中学校では6分である。2番目に長い業務は、小学校・中学校ともに成績処理で、小学校では6分、中学校では4分である。3番目から5番目に長い業務は、小学校・中学校で若干順位の変動はあるが、事務・報告書作成、学年・学級経営、その他の校務が1~3分ずつである(表2-3-5)。

表2-3-4 勤務日の平均残業時間における業務内訳

	小学校		中学校		全体	
	業務	時間	業務	時間	業務	時間
1	授業準備	22分	部活動・クラブ活動	22分	授業準備	20分
2	成績処理	11分	授業準備	19分	部活動・クラブ活動	12分
3	学校行事	9分	学校行事	14分	学校行事	12分
4	事務・報告書作成	8分	事務・報告書作成	11分	成績処理	10分
5	学校経営	8分	成績処理	9分	事務・報告書作成	9分

表2-3-5 勤務日の平均持帰り時間における業務内訳

	小学校		中学校		全体	
	業務	時間	業務	時間	業務	時間
1	授業準備	11分	授業準備	6分	授業準備	8分
2	成績処理	6分	成績処理	4分	成績処理	5分
3	学年・学級経営	3分	事務・報告書作成	1分	学年・学級経営	2分
4	事務・報告書作成	2分	その他の校務	1分	事務・報告書作成	1分
5	その他の校務	1分	学年・学級経営	1分	その他の校務	1分

次に、第3期(通常期)の休日について検討しよう(表2-3-6、表2-3-7)。

平均残業時間における業務内訳については、小学校では成績処理と授業準備が最も長く2分、以下同じ値で、保護者・PTA対応、その他の校務、地域対応が1分である。中学校では部活動・クラブ活動が最も長く64分である。以下、成績処理、授業準備、その他の校務、学校行事がそれぞれ3分である(表2-3-6)。

平均持帰り時間における業務内訳については、小学校では授業準備が最も長く26分、つづいて成績処理が23分、事務・報告書作成が7分、学年・学級経営が5分、その他の校務が5分である。中学校では部活動・クラブ活動が最も長く40分、つづいて授業準備が15分、成績処理が13分、事務・報告書作成が4分、その他の校務が3分である。休日では成績処理や授業準備が長く、中学校では部活動の時間が長い傾向があるといえる(表2-3-7)。

休日の残業時間・持帰り時間における主要な業務は、小学校においては成績処理や授業準備、中学校においては部活動・クラブ活動、成績処理、授業準備など、学校での残業についても自宅での持帰り仕事についてもほぼ同様の内訳である。しかし、学校で残業として行う場合と、自宅で持帰り仕事として行う場合では、業務に費やす時間が異なる。たとえば、小学校では休日の残業時間における成績処理は2分であるのに対し、休日の持帰り時間においては23分と増加する。また、中学校では休日の残業時間における成績処理は3分であるのに対し、休日の持帰り時間においては13分と増加する。成績処理などの業務は、学校で行うことも多いが、持帰り仕事として、自宅でより時間をかけて行っていることがわかる。

表2-3-6 休日の平均残業時間における業務内訳

	小学校		中学校		全体	
	業務	時間	業務	時間	業務	時間
1	成績処理	2分	部活動・クラブ活動	64分	部活動・クラブ活動	34分
2	授業準備	2分	成績処理	3分	成績処理	3分
3	保護者・PTA対応	1分	授業準備	3分	授業準備	3分
4	その他の校務	1分	その他の校務	3分	その他の校務	2分
5	地域対応	1分	学校行事	3分	学校行事	2分

表2-3-7 休日の平均持帰り時間における業務内訳

	小学校		中学校		全体	
	業務	時間	業務	時間	業務	時間
1	授業準備	26分	部活動・クラブ活動	40分	部活動・クラブ活動	22分
2	成績処理	23分	授業準備	15分	授業準備	20分
3	事務・報告書作成	7分	成績処理	13分	成績処理	18分
4	学年・学級経営	5分	事務・報告書作成	4分	事務・報告書作成	6分
5	その他の校務	5分	その他の校務	3分	その他の校務	4分

### 3. 属性別にみた残業時間・持帰り時間

前節では、第3期(通常期)における平均の残業時間量・持帰り時間量の全体像を検討した。

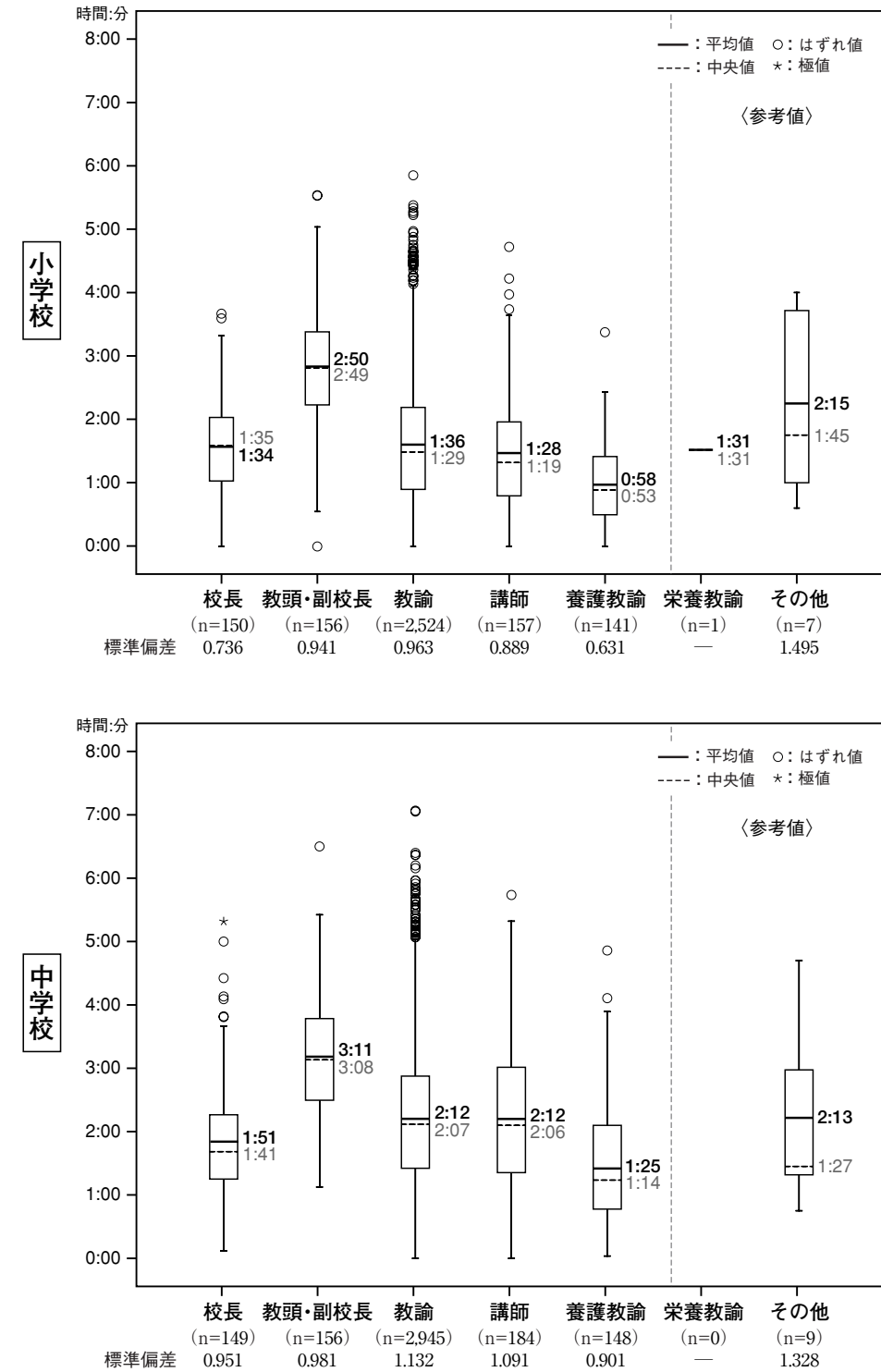
しかし、一人一人の残業時間量・持帰り時間量や、正規の勤務時間に処理できない業務を学校で行うのか、自宅で持帰り業務として行うのかといった勤務実態は、教員の性別や職階、年齢などの属性によって異なると考えられる。

そこで本節では、特に勤務日に絞り、属性別(職階別、性別、年齢別)に残業時間量・持帰り時間量の実態を明らかにする。

まずは職階別に、平均残業時間量、平均持帰り時間量の順に、小学校と中学校のそれぞれについて検討していこう。

第3期(通常期)の勤務日における平均の残業時間量は、図2-3-5の通り、小学校の教頭・副校長は2時間50分、中学校の教頭・副校長は3時間11分であり、他の職階に比べて圧倒的に長くなっている。その他の職階については、小学校では校長は1時間34分、教諭は1時間36分、講師は1時間28分とほとんど差はない。中学校では校長は1時間51分、教諭・講師は2時間12分と、校長よりも教諭・講師の方が20分ほど長くなっている。

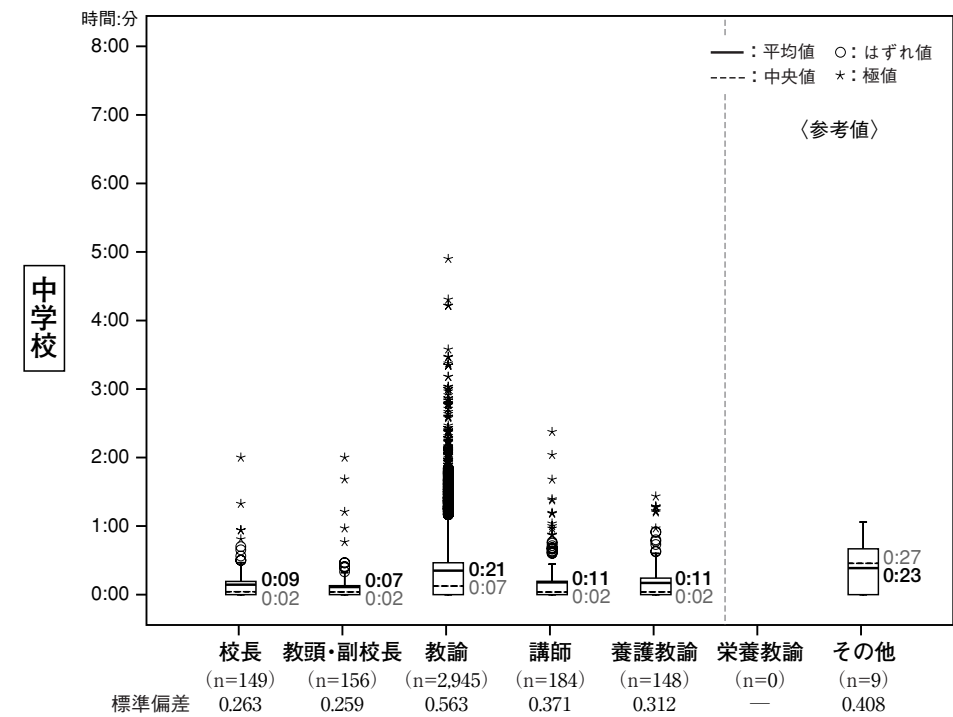
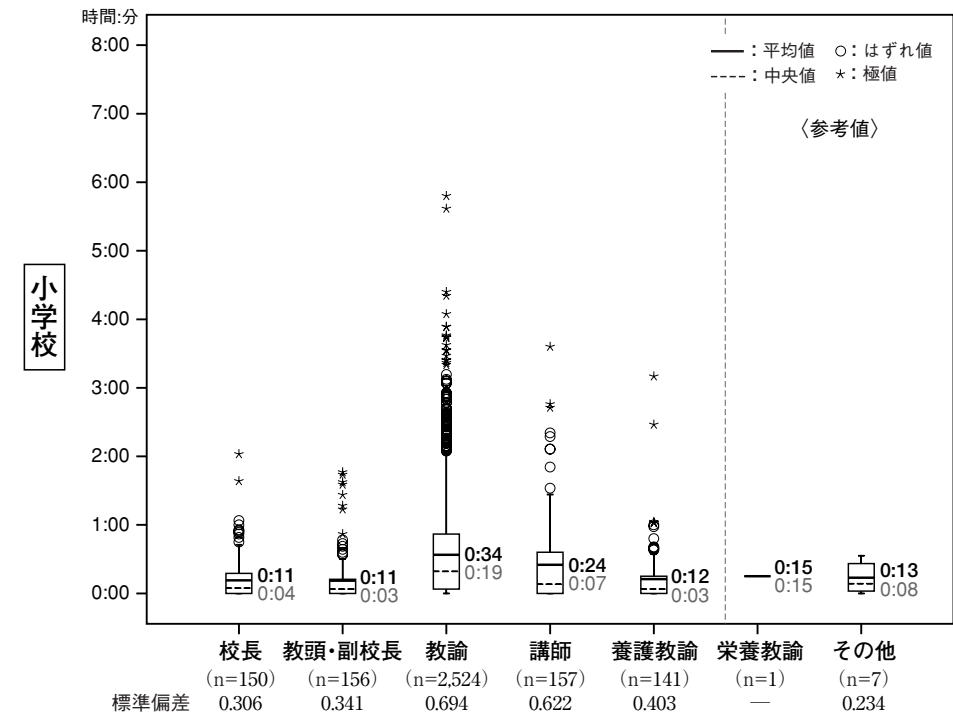
図2-3-5 勤務日・1日あたりの平均残業時間量(小・中学校 職階別)



第3期(通常期)の勤務日における平均持帰り時間量は、図2-3-6のように、小学校・中学校とも教諭で最も長くなっている。小学校と中学校を比べると小学校の教諭の方が34分と長く、中学校の教諭は21分と短くなっている。小学校では、教諭につづいて長いのが、講師の24分、次が養護教諭の12分である。中学校では、教諭につづいて長いのが講師と養護教諭の11分、次が校長の9分である。

図2-3-5と図2-3-6の比較から、勤務日においては、学校では教頭・副校長が他の職階に比べて長く残業を行い、自宅では教諭が他の職階に比べて長く持帰り仕事を行っているといえる。

図2-3-6 勤務日・1日あたりの平均持帰り時間量(小・中学校 職階別)



次に、性別ごとに平均残業時間量、平均持帰り時間量の順に、小学校と中学校それぞれについて検討しよう。

第3期(通常期)の勤務日における平均残業時間量は図2-3-7の通り、小学校・中学校ともに男性の方が女性教員よりも30分ほど長くなっている。小学校では、男性教員は1時間56分、女性教員は1時間27分、中学校では男性教員は2時間23分、女性教員は1時間55分である。これに対して第3期(通常期)の勤務日における平均持帰り時間量は図2-3-8の通り、小学校・中学校ともに女性教員の方が男性教員よりもやや

長くなっている(平均値は次の通り/小学校:男性教員 29分、女性教員 31分、中学校:男性教員 18分、女性教員 20分)。

また、平均残業時間量については中学校の教員の方が長く(図2-3-7)、平均持帰り時間量については小学校の教員の方がやや長いこと(図2-3-8)を考え合わせると、小学校の教員は自宅で、中学校の教員は学校で業務を行う傾向があるといえる。

図2-3-7 勤務日・1日あたりの平均残業時間量(小・中学校 性別)

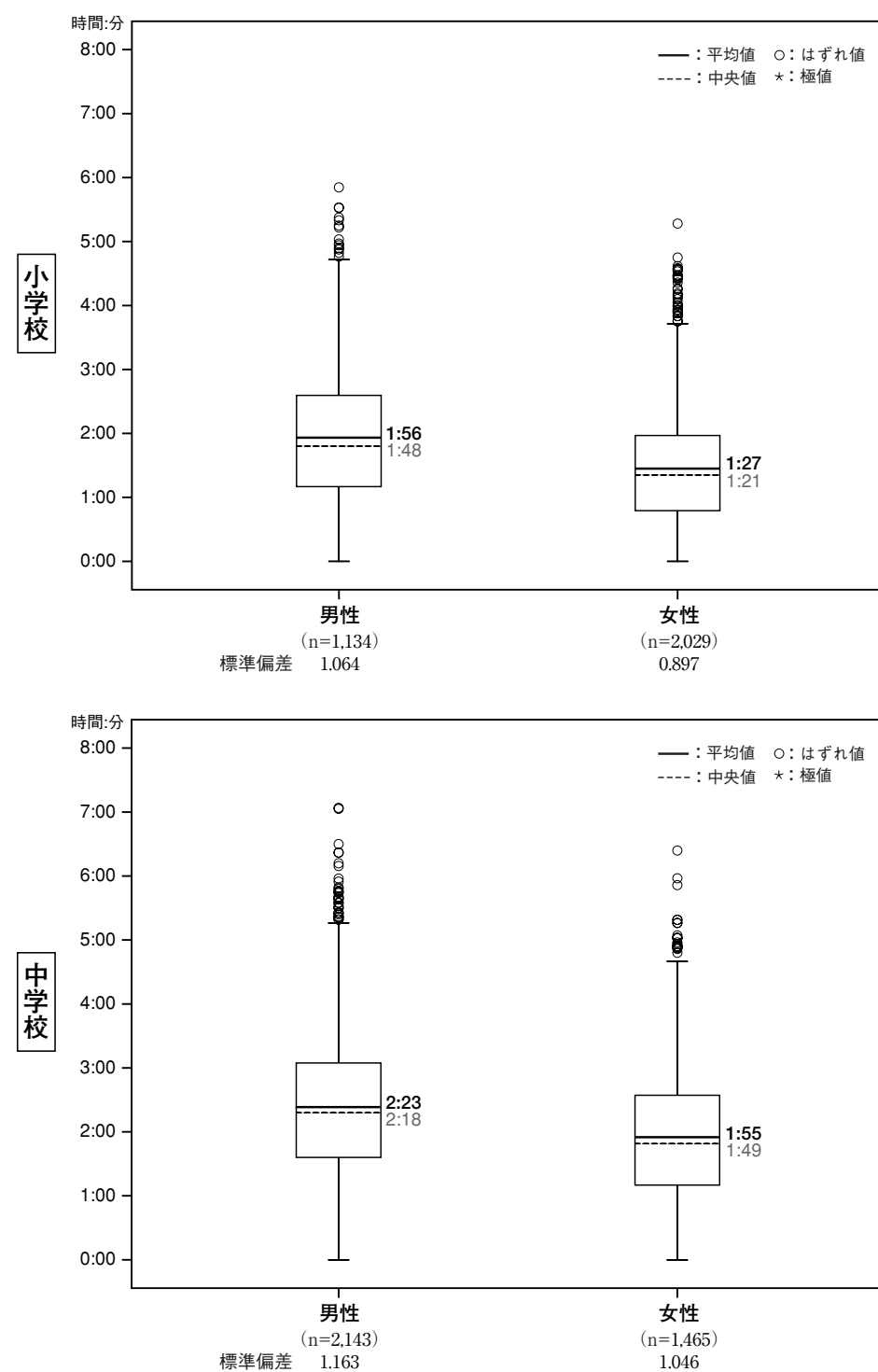
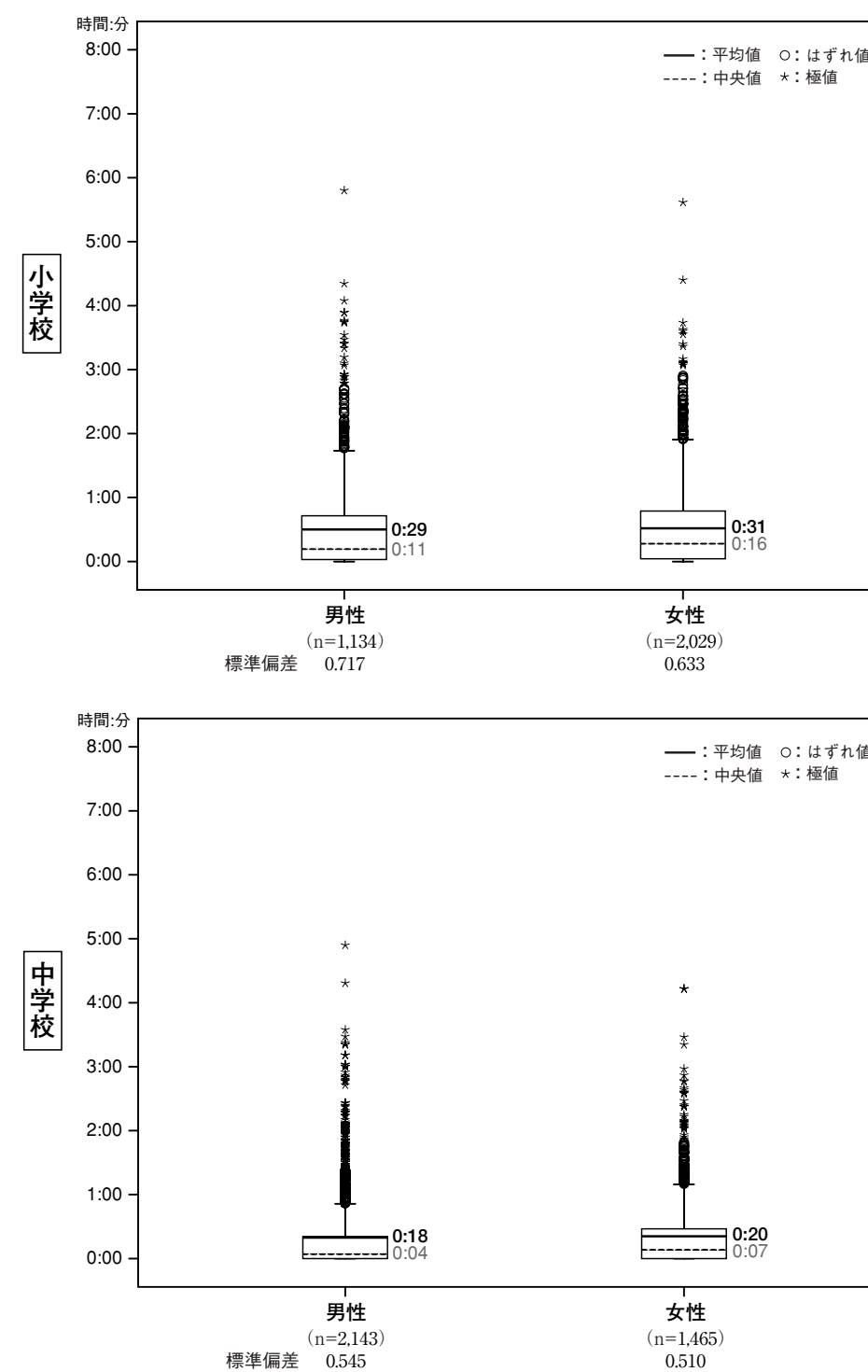


図2-3-8 勤務日・1日あたりの平均持帰り時間量(小・中学校 性別)

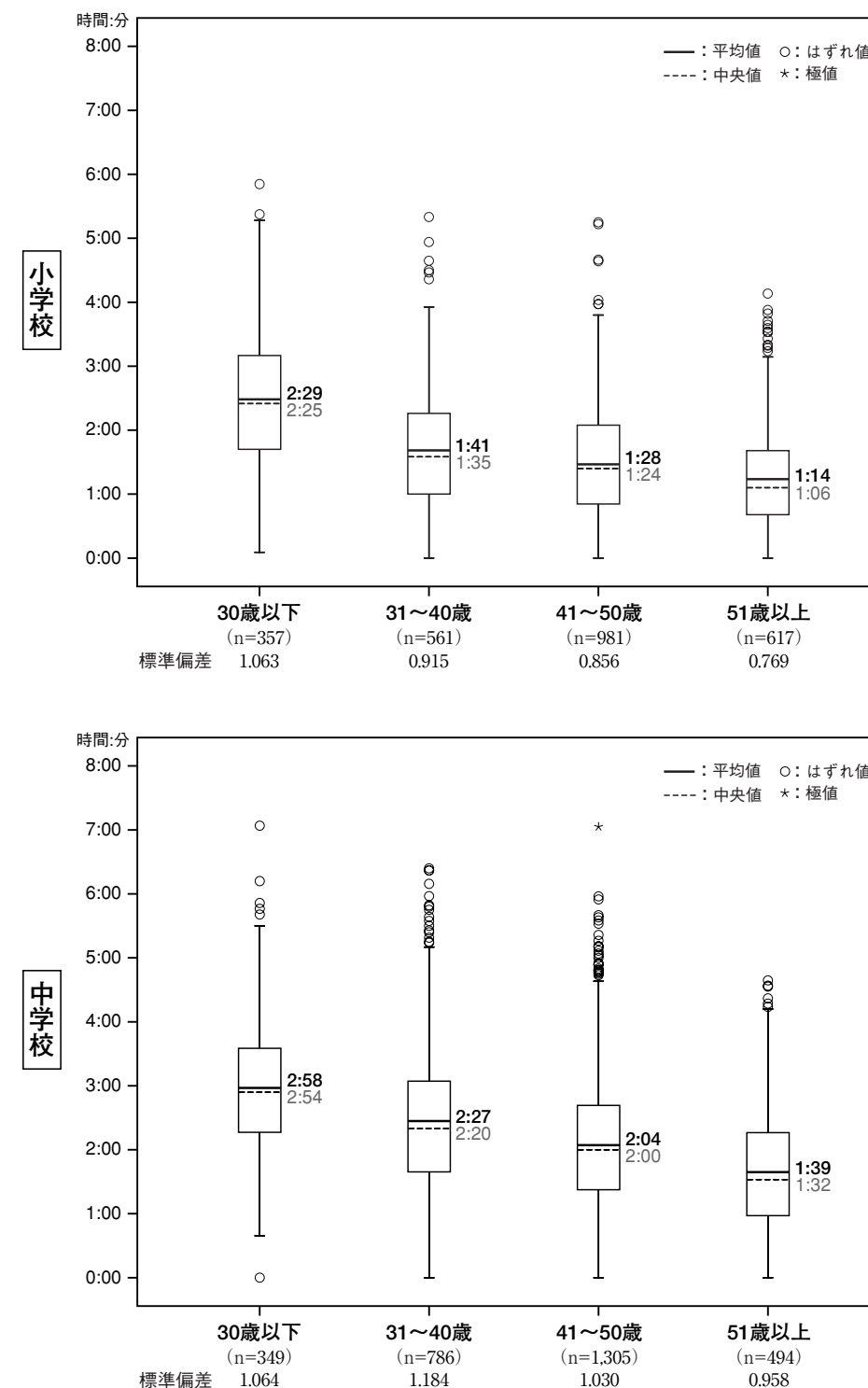




最後に、年齢別に平均の残業時間量・持帰り時間量の実態を検討しよう。ただし、この場合、職階の影響をのぞく必要がある。たとえば51歳以上には管理職が多く、この年齢層で残業時間・持帰り時間が長い場合は、年齢の影響だけではなく職階の影響だと考えられる。そこで、教諭のみを取り出し、教諭の年齢別で残業時間、持帰り時間の順に、小学校と中学校について分析を行う。

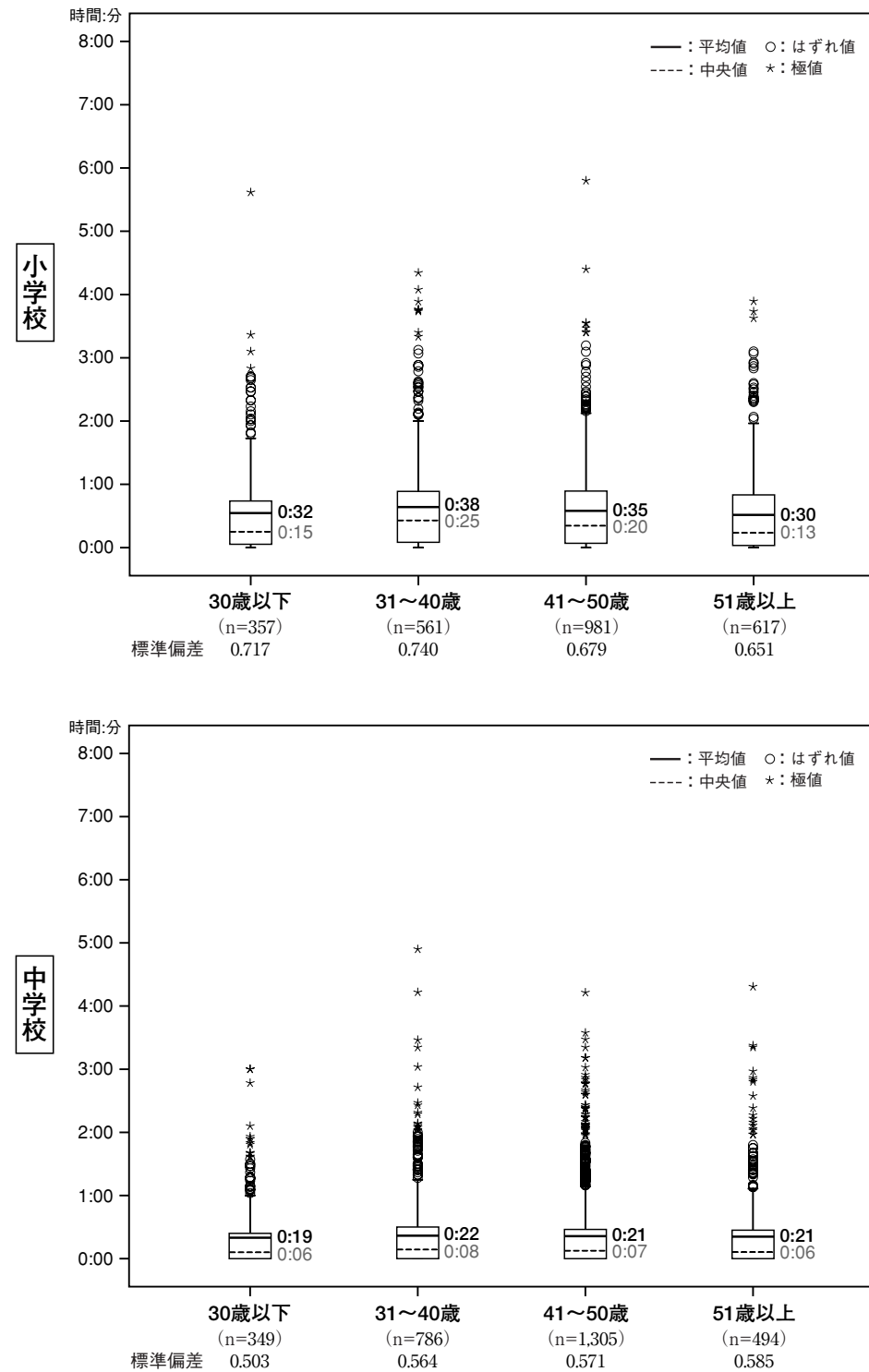
第3期(通常期)の勤務日における教諭の平均残業時間量は、小学校・中学校ともに30歳以下で最も長く、小学校では2時間29分、中学校では2時間58分である(図2-3-9)。しかし、年齢層が上がるにつれて平均残業時間は減少する。小学校では31~40歳で1時間41分、41~50歳で1時間28分、51歳以上で1時間14分である。中学校では31~40歳で2時間27分、41~50歳で2時間04分、51歳以上で1時間39分である。ここから、年齢層の高い、いわゆるベテラン教諭になるほど平均残業時間が減少していくといえる。この原因は、経験を積むことによって授業などの準備時間が短縮されることや、若い年齢層ほど部活動などの業務が任されることなどが考えられる。

図2-3-9 勤務日・1日あたりの平均残業時間量(小・中学校 教諭の年齢別)



第3期(通常期)の勤務日における教諭の平均持帰り時間量は、小学校・中学校ともに31~40歳、41~50歳でやや長くなっているが、年齢によって大きな差はないことがわかる(図2-3-10)。小学校では30歳以下で32分、31~40歳で38分、41~50歳で35分、51歳以上で30分である。中学校では30歳以下で19分、31~40歳で22分、41~50歳で21分、51歳以上で21分である。小学校と中学校を比較すると、小学校の教諭の持帰り時間がやや長くなっている。

図2-3-10 勤務日・1日あたりの平均持帰り時間量(小・中学校 教諭の年齢別)



## 第4章 第4期(通常期)における勤務実態

### 1. 第4期の調査協力校の概況

第4期の調査期間は、平成18年9月25日(月)から平成18年10月22日(日)までの4週間である。

まず、第4期の調査協力校の時期的特徴について紹介する。

第4期において回答のあった309校のうち31校の小学校・中学校が10月5日から10月15日までの期間に、児童・生徒の秋季休業期(以下、「秋季休業期」)を含んでいる。

調査協力校における秋季休業期間の分布は表2-4-1のようになっている。

分布をみると、秋季休業期のある学校のうち、10月7日(土)から10月10日(火)または10月11日(水)と、10月10日(火)から10月11日(水)に秋季休業期となっている学校が、それぞれ16.1%(5/31校)と最も多い。また秋季休業期は、最短で1日、最長で9日である。

通常期と秋季休業期では、教員の業務における質と量に違いがあると考えられるため、第4期については、調査協力校の秋季休業期の情報をもとに、データを通常期と秋季休業期の2つの時期に分けて分析を行った。ただし、秋季休業期のある学校は1割(31/309校)と少ないため、第4期については、そのうち通常期のみについての報告を行う。つまり、秋季休業期のある31校については通常期のデータのみ使用し、秋季休業期のない278校についてはすべてのデータを使用する。

表2-4-1 第4期の調査協力校における秋季休業期間

秋季休業期間	10月5日(木) ~6日(金) (2日間)	10月6日(金) ~9日(月) (4日間)	10月6日(金) ~10日(火) (5日間)	10月7日(土) ~15日(日) (9日間)	10月7日(土) ~9日(月) (3日間)	10月7日(土) ~10日(火) (4日間)
		2 6.5	1 3.2	2 6.5	2 6.5	2 6.5
10月7日(土) ~11日(水) (5日間)	10月10日 (火) (1日)	10月10日(火) ~11日(水) (2日間)	10月10日(火) ~13日(金) (4日間)	10月11日(水) ~12日(木) (2日間)	計	
	5 16.1	1 3.2	5 16.1	3 9.7	3 9.7	31 100.0 校 %

※期間は調査協力校の回答による

## 2. 残業時間・持帰り時間および業務の内訳

### (1) 全体的な残業時間・持帰り時間の実態

まず第4期(通常期)の勤務日における残業時間・持帰り時間の実態について、小学校、中学校、小学校と中学校の比較という順番で検討していこう(表2-4-2)。

小学校では、残業時間は平均で1時間43分、持帰り時間は平均34分、これらを合わせた時間の平均は2時間18分である。

中学校では、残業時間は平均2時間08分、持帰り時間は平均21分、これらを合わせた時間の平均は2時間29分である。

また、小学校と中学校を比べてみると、勤務日の残業時間の平均は中学校の方が小学校よりも25分長い。一方、持帰り時間の平均は小学校の方が中学校よりも13分長い。中学校では部活動があるために残業時間が長くなると考えられるが、小学校・中学校での残業時間・持帰り時間における業務内訳については、後の第3項において詳しくみる。

次に、第4期(通常期)の休日における残業時間・持帰り時間の実態について、小学校、中学校、小学校と中学校の比較という順番で検討していこう(表2-4-3)。

小学校では、残業時間は平均で22分、持帰り時間は平均で1時間25分、これらを合わせた時間の平均は1時間48分である。残業時間の中央値が0分であることからわかるように、小学校では休日に学校で業務を行う教員は少ないといえる。一方で、休日の残業時間と持帰り時間の中央値と平均値には20分以上のひらきがあることからわかるように、小学校では、次にみる中学校ほどではないものの、休日に残業や持帰り仕事をする人の間で、時間量の差が大きい(表2-4-3)。これは後の図2-4-3や図2-4-4からも確認できる。

中学校では、残業時間は平均1時間30分、持帰り時間は平均1時間41分、これらを合わせた時間の平均は3時間11分である。また、休日の残業時間と持帰り時間の中央値と平均値におよそ40分から50分のひらきがあることからわかるように、中学校では休日に残業や持帰り仕事をする人の間で、時間量の差が大きい(表2-4-3)。これは後の図2-4-3や図2-4-4からも確認できる。

小学校と中学校を比べてみると、休日の残業時間の平均は中学校の方が小学校よりも1時間08分長い。小学校と中学校それぞれの残業時間における業務内訳については、後の第3項で述べるが、中学校においては部活動を行っているために長くなると考えられる。

以上、第4期(通常期)の勤務日と休日を比べてまとめておこう。

小学校の教員は、勤務日においては、残業時間の方が持帰り時間よりも1時間09分長く(表2-4-2)、休日においては、持帰り時間の方が残業時間よりも約1時間長い(表2-4-3)。特に持帰り時間については、勤務日より休日の方が1時間ほど長くなっており、休日には学校で業務を行わないものの、自宅で持帰り仕事を行っている様子がうかがえる。

中学校の教員は、勤務日においては、残業時間の方が持帰り時間よりも1時間47分長く(表2-4-2)、休日においては、残業時間量と持帰り時間量はそれほど変わらない(表2-4-3)。持帰り時間については、勤務日より休日の方が1時間20分長い(表2-4-2、表2-4-3)。

表2-4-2 勤務日・1日あたりの平均残業時間量・持帰り時間量

	残業時間量	持帰り時間量	残業時間+持帰り時間
小学校	1時間43分 〔1時間34分〕(1.024)	34分 〔19分〕(0.679)	2時間18分 〔2時間10分〕(1.226)
中学校	2時間08分 〔2時間01分〕(1.142)	21分 〔8分〕(0.528)	2時間29分 〔2時間23分〕(1.262)
全体	1時間57分 〔1時間48分〕(1.108)	27分 〔12分〕(0.613)	2時間24分 〔2時間17分〕(1.249)

[ ]内は中央値、( )内は標準偏差を示す。

表2-4-3 休日・1日あたりの平均残業時間量・持帰り時間量

	残業時間量	持帰り時間量	残業時間+持帰り時間
小学校	22分 〔0分〕(0.889)	1時間25分 〔1時間00分〕(1.499)	1時間48分 〔1時間23分〕(1.708)
中学校	1時間30分 〔38分〕(2.006)	1時間41分 〔1時間03分〕(1.967)	3時間11分 〔2時間51分〕(2.500)
全体	59分 〔0分〕(1.688)	1時間34分 〔1時間00分〕(1.772)	2時間33分 〔2時間00分〕(2.280)

[ ]内は中央値、( )内は標準偏差を示す。

(2)個人単位でみた残業時間・持帰り時間の実態

前項では、第4期(通常期)の教員全体における残業時間量・持帰り時間量の平均に注目した。しかし、すべての教員が一様に残業や持帰り仕事を行っているわけではなく、これらの時間は、教員間での差が大きいと考えられる。

そこで、第4期(通常期)における教員一人あたりの平均残業時間量および平均持帰り時間量の分布をみたものが、図2-4-1から図2-4-4である。

以下、勤務日と休日それぞれについて、残業時間、持帰り時間の順に、それぞれ小学校、中学校の結果を検討していく。

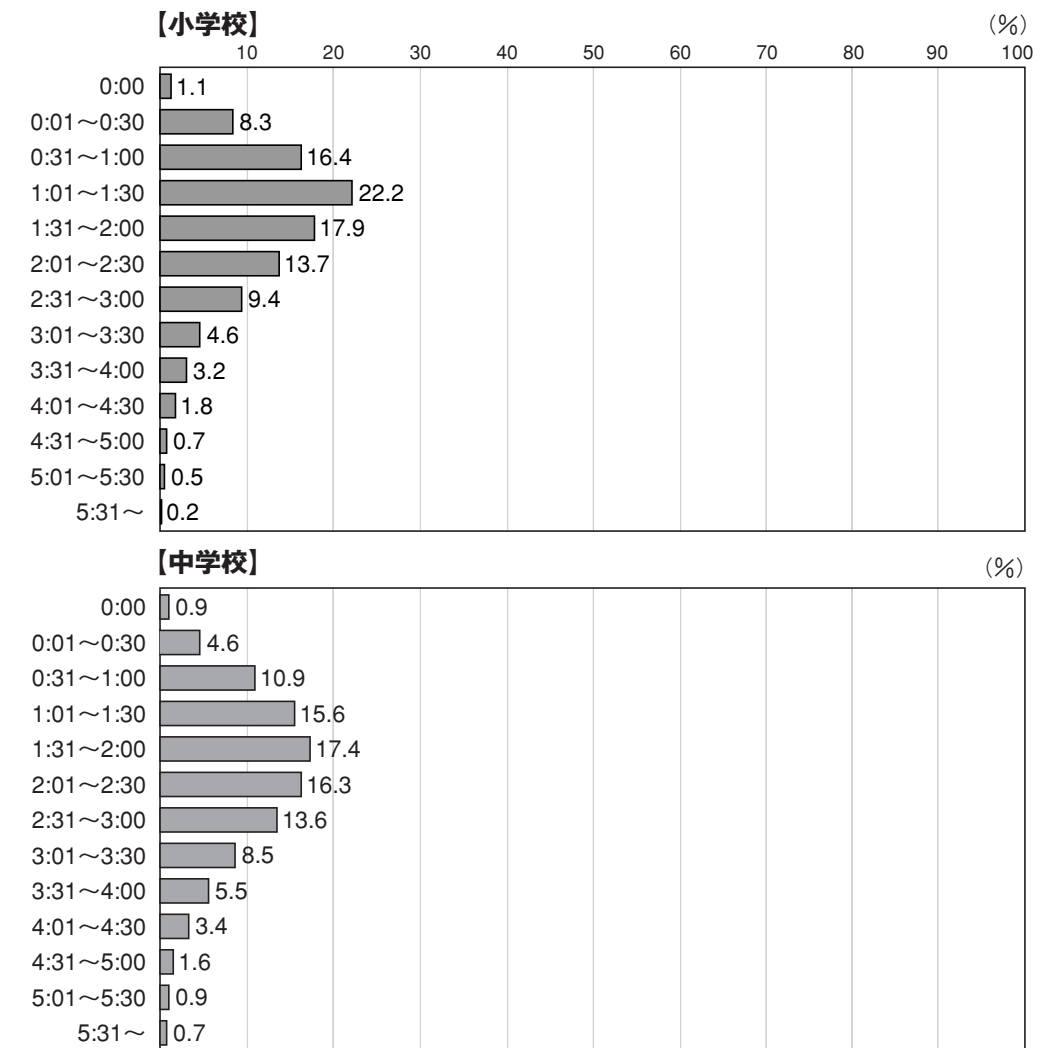
まず、第4期(通常期)の勤務日における平均残業時間量について検討しよう(図2-4-1)。

小学校の勤務日における平均残業時間の分布は、0分が1.1%で、残業を行わない教員はほとんどいない。平均残業時間が30分以下(0分をのぞく)は8.3%、31分～1時間以下は16.4%となっており、約25%の教員が1時間以下(0分をのぞく)の残業を行っている。また、残業が1時間01分～1時間30分以下の教員は22.2%、1時間31分～2時間以下の教員は17.9%と、2時間以下(0分をのぞく)の残業を行う教員が6割強である。また、2時間01分～2時間30分以下の残業を行う教員は13.7%、2時間31分～3時間以下の教員は9.4%、さらに、3時間を超える残業を行う教員も1割いる。

中学校の勤務日における平均残業時間の分布は、0分が0.9%で、残業を行わない教員はほとんどいない。平均残業時間が30分以下(0分をのぞく)は4.6%、31分～1時間以下は10.9%となっており、約15%の教員が1時間以下(0分をのぞく)の残業を行っている。これに対して、平均残業時間が1時間01分～1時間30分以下の教員は15.6%、1時間31分～2時間以下の教員は17.4%と、2時間以下(0分をのぞく)の残業を行う教員はおよそ5割である。また、2時間01分～2時間30分以下の教員は16.3%、2時間31分～3時間以下の教員は13.6%である。3時間を超える残業を行う教員は2割に達する。

以上から小学校・中学校ともに、勤務日にはほとんどの教員が残業を行っており、残業時間については、小学校では、6割強の教員が2時間以下(0分をのぞく)の残業を行っていることがわかる。一方、中学校では、平均残業時間が2時間以下(0分をのぞく)の教員はおよそ5割であり、小学校よりも中学校の方が、概して残業時間が長い傾向にあるといえる。

図2-4-1 勤務日・1日あたりの平均残業時間量の分布



次に、第4期(通常期)の勤務日における平均持帰り時間量について検討しよう(図2-4-2)。

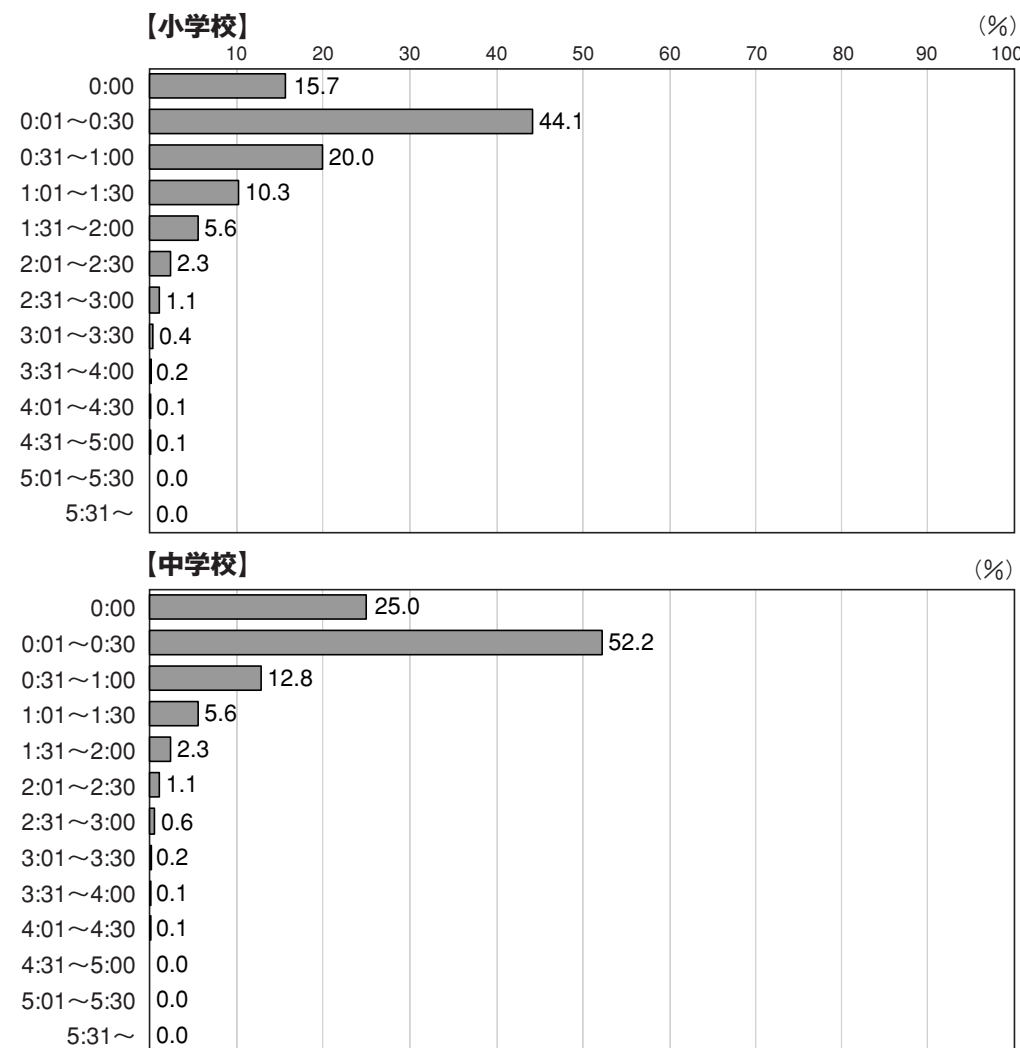
小学校の教員の勤務日の平均持帰り時間の分布は、0分が15.7%であり、持帰り仕事を行わない教員は15%ほど存在する。持帰り時間が30分以下(0分をのぞく)は44.1%、31分～1時間以下は20.0%であり、6割強の教員が1時間以下(0分をのぞく)の持帰り仕事を行っている。1時間を超える持帰り仕事を行っている教員は2割いる。

中学校の教員の勤務日の平均持帰り時間の分布は、0分が25.0%で、持帰り仕事を行わない教員は4人に1人である。持帰り時間が30分以下(0分をのぞく)は52.2%、31分～1時間以下は12.8%となっており、6割強の教員が1時間以下(0分をのぞく)の持帰り仕事を行っている。1時間を超える持帰り仕事を行っている教員は1割である。

以上、第4期(通常期)の勤務日について、勤務日に持帰り仕事を行わない教員は小学校では15%ほど、中学校では25.0%いる。また、小学校・中学校いずれにおいても、6割強の教員が1時間以下(0分をのぞく)の持帰り仕事を行っている。

第4期(通常期)の勤務日の残業時間と持帰り時間の実態についてまとめると、ほとんどの教員が残業を行っており、小学校では6割強、中学校ではおよそ5割の教員が2時間以下(0分をのぞく)の残業を行っている(図2-4-1)。持帰り仕事を行っていない教員は小学校では15%ほど、中学校では25.0%である。一方、持帰り仕事がある教員の方が多く、小学校・中学校とも6割強の教員が1時間以下(0分をのぞく)の持帰り仕事を行っている(図2-4-2)。

図2-4-2 勤務日・1日あたりの平均持帰り時間量の分布



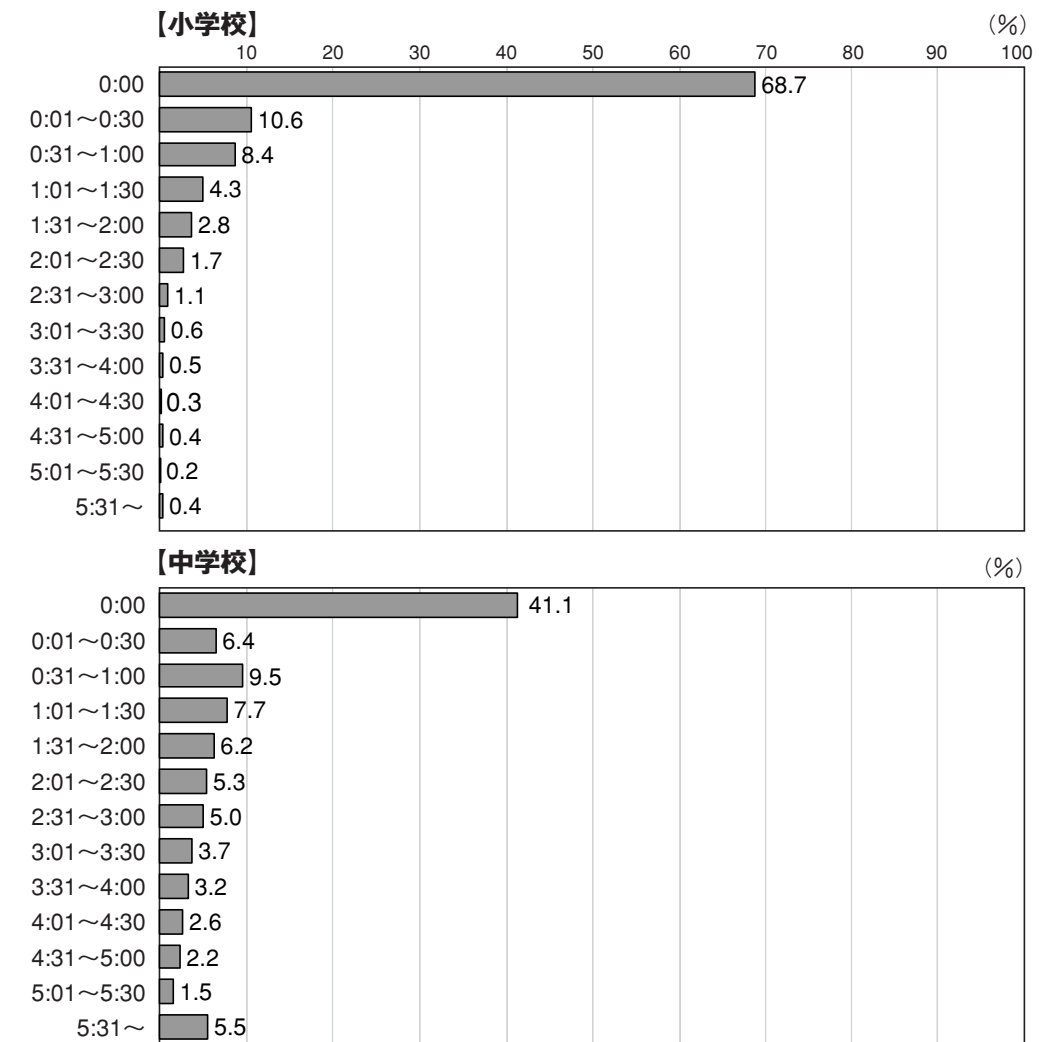
次に、第4期(通常期)の休日における平均残業時間量について検討しよう(図2-4-3)。

小学校の休日における平均残業時間の分布は、0分が68.7%で、残業を行わない教員は7割弱である。勤務日(図2-4-1)と比べると、休日には7割弱の教員が学校に出勤してはいないといえる。一方、1時間以下(0分をのぞく)の残業を行う教員が2割ほど、1時間01分～3時間以下の残業を行う教員も1割ほどいる。

中学校の休日の平均残業時間の分布は、0分が41.1%で、残業を行わない教員は4割いる。勤務日(図2-4-1)に比べると残業を行う教員は少ない。また、小学校に比べ休日に残業を行う教員が多い。残業時間は教員間での差が大きく、残業時間が1時間以下(0分をのぞく)の教員が約16%、1時間01分～2時間以下の教員が1割強、2時間01分～3時間以下の教員が1割、3時間01分～5時間以下の教員が1割強いる。さらに、休日に学校で5時間を超える業務を行う教員が7.0%存在するのは、小学校にはない中学校だけの特徴であるといえる。この時間に行っている業務としては部活動などが考えられるが、実際に中学校の教員が休日の残業時間にどのような業務を行っているのかは、後の第3項において紹介する。

以上をまとめると、次のようにいえる。第4期(通常期)の休日の残業時間について、休日に残業を行わない教員は小学校では7割弱、中学校では4割ほど存在する。また、特に中学校において、休日の残業時間は個人差が大きく、幅広い時間帯に教員が分布している。

図2-4-3 休日・1日あたりの平均残業時間量の分布



次に、第4期(通常期)の休日における平均持帰り時間量について検討しよう(図2-4-4)。

小学校の休日における平均持帰り時間の分布は、0分が2割弱で、勤務日(図2-4-2)よりもやや多くなっている。休日でも8割の教員が持帰り仕事を行っており、その時間は教員間での差が大きいことがうかがえる(図2-4-4)。平均持帰り時間が1時間以下(0分をのぞく)の教員は32.0%、1時間01分~2時間以下の教員は約24%、2時間01分~3時間以下の教員は約13%、3時間01分~5時間以下の教員は1割、さらに5時間を超える教員は3%ほど存在する。

中学校の休日における平均持帰り時間の分布は、0分が2割強で、勤務日(図2-4-2)とそれほど大きな差はない。休日でも8割弱の教員が持帰り仕事を行っており、その時間は教員間で差が大きい。持帰り時間が1時間以下(0分をのぞく)の教員は約26%、1時間01分~2時間以下の教員は約18%、2時間01分~3時間以下の教員は1割、3時間01分~5時間以下の教員は1割強、さらに5時間を超える教員も8%ほど存在する。

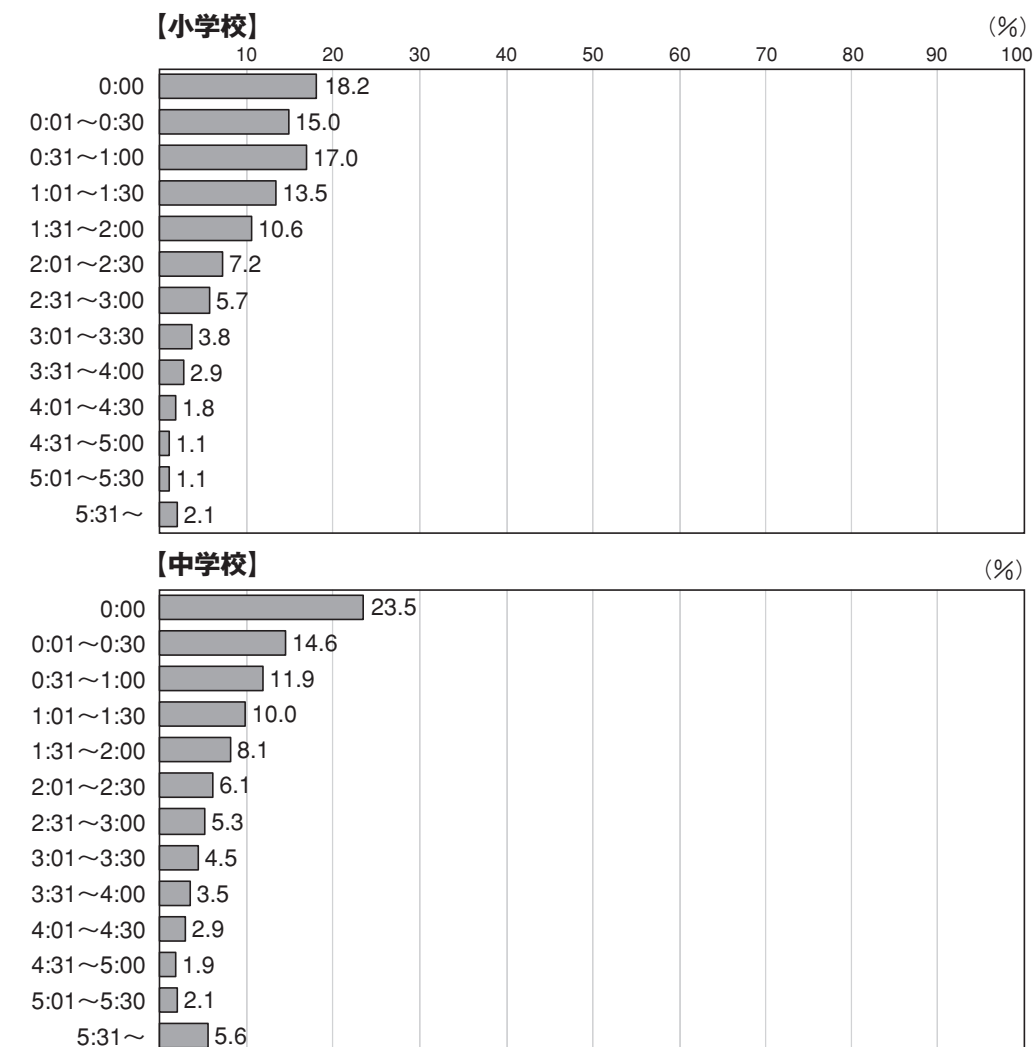
以上、第4期(通常期)の休日の持帰り仕事について、休日に持帰り仕事を行わない教員は小学校、中学校ともに2割ほど存在する。また、小学校・中学校いずれにおいても、持帰り時間は教員間で差が大きく、5時間を超える長時間の教員も小学校で3%ほど、中学校では8%ほどいる一方で、30分以下(0分をのぞく)と短時間の教員も15%ほど存在する。

第4期(通常期)の休日の残業時間・持帰り時間の実態についてまとめると、残業時間については、休日に残業を行わない教員は小学校では7割弱、中学校では4割ほど存在する。また、中学校では、教員間での残業時間の差が大きい(図2-4-3)。持帰り時間については、休日に持帰り仕事を行わない教員は小学校では2割弱、中学校では2割強存在する。また、小学校・中学校いずれにおいても、持帰り時間は教員によって差が大きい(図2-4-4)。

以上から次のことが指摘できる。

第4期(通常期)においては、勤務日には、ほとんどの教員が残業を行っており、小学校では6割強の教員が2時間以下(0分をのぞく)の残業を行っている(図2-4-1)。休日には残業を行う教員は小学校では3割強、中学校では6割弱となり、その残業時間には個人差がある(図2-4-3)。持帰り仕事を行う教員の割合は、小学校・中学校のいずれにおいても、勤務日では30分以下(0分をのぞく)の割合が最も多く(図2-4-2)、休日では0分が最も多く、時間が増えるにつれて割合が減少する傾向がみられる(図2-4-4)。小学校・中学校いずれにおいても、勤務日の持帰り時間は6割強が1時間以下(0分をのぞく)に集中するが(図2-4-2)、休日の持帰り時間は、教員間での差が大きい(図2-4-4)。

図2-4-4 休日・1日あたりの平均持帰り時間量の分布



(3) 残業時間・持帰り時間における業務内訳

前項では、第4期(通常期)における教員一人あたりの平均の残業時間量・持帰り時間量の分布について注目したが、本項ではこれらの時間にどのような業務を行っているのか、業務の内訳を検討する。

第4期(通常期)における勤務日と休日それぞれについて、残業時間、持帰り時間の順に、小学校と中学校のそれぞれで業務の上位5種類の内訳を検討していこう。

まず、第4期(通常期)の勤務日について検討しよう(表2-4-4、表2-4-5)。

平均残業時間における業務内訳については、小学校・中学校いずれにおいても最も長いのは、授業準備であり、小学校で27分、中学校で22分である。小学校で2番目に長いのは成績処理で13分、つづいて事務・報告書作成が9分、会議・打合せが8分である。中学校では2番目に長い業務は部活動・クラブ活動で18分、つづいて成績処理で12分、事務・報告書作成が11分である。ここから、小学校・中学校ともに残業時間における業務内訳では授業準備が最も長く、中学校の部活動・クラブ活動をのぞくと、成績処理や事務・報告書作成などの事務作業の時間が長いといえる(表2-4-4)。

平均持帰り時間における業務内訳については、小学校・中学校ともに最も長いのは授業準備で、小学校では13分、中学校では6分である。2番目に長い業務は、小学校・中学校ともに成績処理で、小学校では8分、中学校では5分である。3番目から5番目に長い業務は、小学校・中学校ともに、学年・学級経営が1~3分、事務・報告書作成が1~2分、その他の校務が1分ずつである(表2-4-5)。

次に、第4期(通常期)の休日について検討しよう(表2-4-6、表2-4-7)。

平均残業時間における業務内訳については、小学校では授業準備が最も長く4分、以下同じ値で、保護者・PTA対応、事務・報告書作成、地域対応、成績処理がそれぞれ2分である。中学校では部活動・クラブ活動が最も長く62分、つづいて授業準備と成績処理が4分である。以下、その他の校務と事務・報告書作成が3分である。中学校の部活動・クラブ活動をのぞき、平均残業時間は5分以下と短い(表2-4-6)。

平均持帰り時間における業務内訳については、小学校では授業準備が最も長く33分、つづいて成績処理が16分、事務・報告書作成が7分、学年・学級経営が5分、その他の校務が5分である。中学校では部活動・クラブ活動が最も長く41分、つづいて成績処理が18分である。以下、授業準備が15分、その他の校務が5分、事務・報告書作成が4分である。休日の平均持帰り時間における業務内訳は、小学校では成績処理や授業準備が長く、中学校では部活動・クラブ活動の時間が長い傾向があるといえる(表2-4-7)。

小学校・中学校いずれにおいても、休日の業務は、学校での残業についても自宅での持帰り仕事についても、授業準備時間が長い。ただし、休日の残業時間と持帰り時間では業務に費やす時間が異なる。たとえば、小学校では休日の残業時間における授業準備は4分であるのに対し、休日の持帰り時間においては33分と増加する。また、中学校では休日の残業時間における授業準備は4分であるのに対し、休日の持帰り時間においては15分と増加する。ここから、休日の業務は学校で行うよりも、持帰り仕事として、自宅でより長い時間をかけて行っていることがわかる。

表2-4-4 勤務日の平均残業時間における業務内訳

	小学校		中学校		全体	
	業務	時間	業務	時間	業務	時間
1	授業準備	27分	授業準備	22分	授業準備	24分
2	成績処理	13分	部活動・クラブ活動	18分	成績処理	13分
3	事務・報告書作成	9分	成績処理	12分	部活動・クラブ活動	10分
4	会議・打合せ	8分	事務・報告書作成	11分	事務・報告書作成	10分
5	学校経営	8分	学校行事	8分	会議・打合せ	8分

表2-4-5 勤務日の平均持帰り時間における業務内訳

	小学校		中学校		全体	
	業務	時間	業務	時間	業務	時間
1	授業準備	13分	授業準備	6分	授業準備	9分
2	成績処理	8分	成績処理	5分	成績処理	6分
3	学年・学級経営	3分	学年・学級経営	1分	学年・学級経営	2分
4	事務・報告書作成	2分	事務・報告書作成	1分	事務・報告書作成	2分
5	その他の校務	1分	その他の校務	1分	その他の校務	1分

表2-4-6 休日の平均残業時間における業務内訳

	小学校		中学校		全体	
	業務	時間	業務	時間	業務	時間
1	授業準備	4分	部活動・クラブ活動	62分	部活動・クラブ活動	34分
2	保護者・PTA対応	2分	授業準備	4分	授業準備	4分
3	事務・報告書作成	2分	成績処理	4分	成績処理	3分
4	地域対応	2分	その他の校務	3分	事務・報告書作成	2分
5	成績処理	2分	事務・報告書作成	3分	保護者・PTA対応	2分

表2-4-7 休日の平均持帰り時間における業務内訳

	小学校		中学校		全体	
	業務	時間	業務	時間	業務	時間
1	授業準備	33分	部活動・クラブ活動	41分	部活動・クラブ活動	23分
2	成績処理	16分	成績処理	18分	授業準備	23分
3	事務・報告書作成	7分	授業準備	15分	成績処理	17分
4	学年・学級経営	5分	その他の校務	5分	事務・報告書作成	6分
5	その他の校務	5分	事務・報告書作成	4分	その他の校務	5分



### 3. 属性別にみた残業時間・持帰り時間

前節では、第4期(通常期)における平均の残業時間量・持帰り時間量の全体像を検討した。

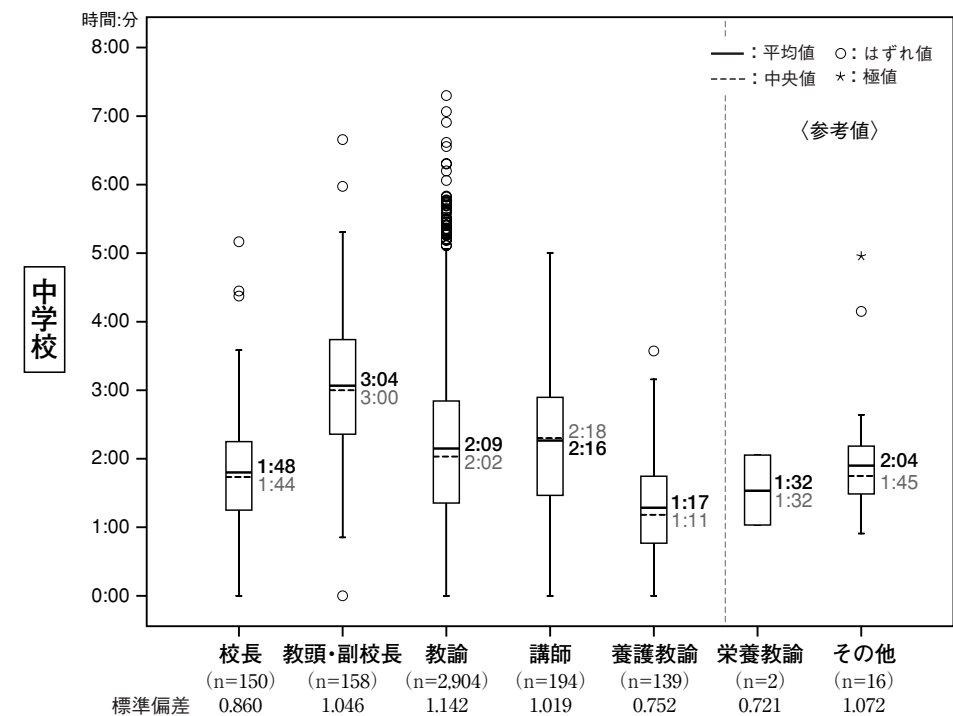
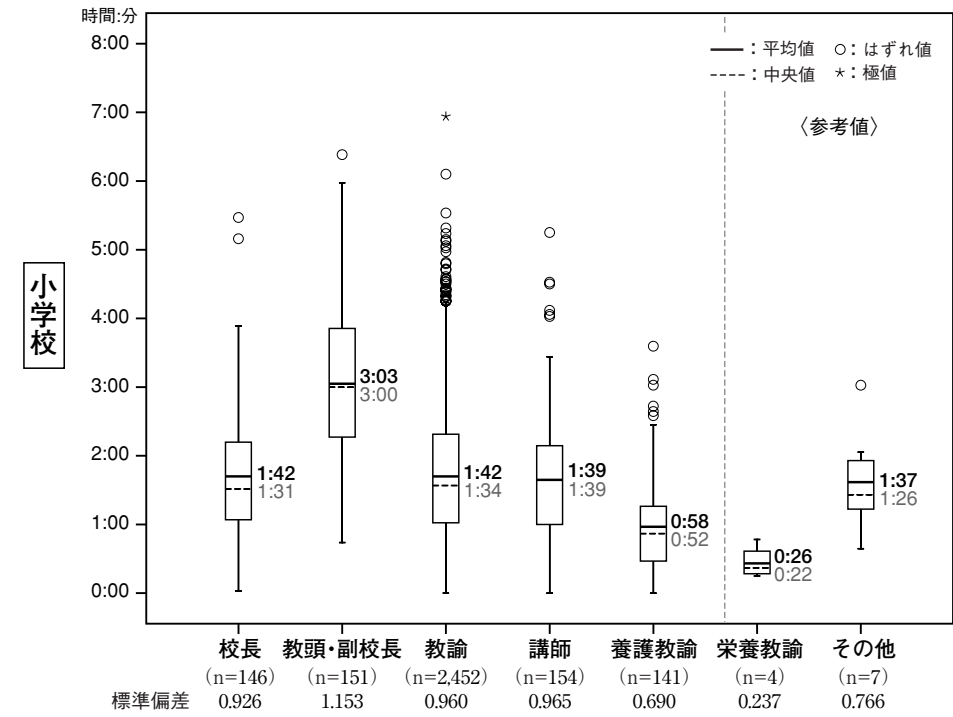
しかし、一人一人の残業時間量・持帰り時間量や、正規の勤務時間で処理できない業務を学校で行うのか、自宅で持帰り業務として行うのかといった勤務実態は、教員の性別や職階、年齢などの属性によって異なると考えられる。

そこで本節では、特に勤務日に絞り、属性別(職階別、性別、年齢別)に残業時間量・持帰り時間量の実態を明らかにする。

まずは職階別に、平均残業時間量、平均持帰り時間量の順に、小学校と中学校のそれぞれについて検討しよう。

第4期(通常期)の勤務日における平均残業時間量は、図2-4-5の通り、小学校の教頭・副校長は3時間03分、中学校の教頭・副校長は3時間04分であり、他の職階に比べて圧倒的に長くなっている。その他の職階については、小学校では校長と教諭は1時間42分、講師は1時間39分とほとんど差はない。中学校では校長は1時間48分で、教諭は2時間09分、講師は2時間16分と、校長よりも教諭・講師の方が30分ほど長くなっている。

図2-4-5 勤務日・1日あたりの平均残業時間量(小・中学校 職階別)



第4期(通常期)の勤務日における平均持帰り時間量は、図2-4-6のように、小学校・中学校いずれにおいても教諭で最も長くなっている。小学校と中学校を比べると小学校の教諭の方が38分と長く、中学校の教諭は23分と短くなっている。小学校では、教諭につづいて長いのが、講師の28分、次が校長の16分、教頭・副校長の15分である。中学校では、教諭につづいて長いのが講師の17分であり、次が校長の11分である。

図2-4-5と図2-4-6の比較から、勤務日においては、学校では教頭・副校長が長く残業を行い、休日においては自宅で教諭が長く持帰り仕事を行っているといえる。

次に、性別で平均残業時間量、平均持帰り時間量の順に、小学校と中学校それぞれについて検討しよう。

第4期(通常期)の勤務日における平均残業時間量は図2-4-7の通り、小学校・中学校ともに男性教員の方が女性教員よりも30分ほど長くなっている(平均値は次の通り/小学校:男性教員 2時間04分、女性教員 1時間32分、中学校:男性教員 2時間19分、女性教員 1時間54分)。

これに対して平均持帰り時間量は図2-4-8の通り、小学校・中学校ともに女性教員の方が男性教員よりもやや長くなっている(平均値は次の通り/小学校:男性教員 32分、女性教員 35分、中学校:男性教員 19分、女性教員 23分)。

図2-4-6 勤務日・1日あたりの平均持帰り時間量(小・中学校 職階別)

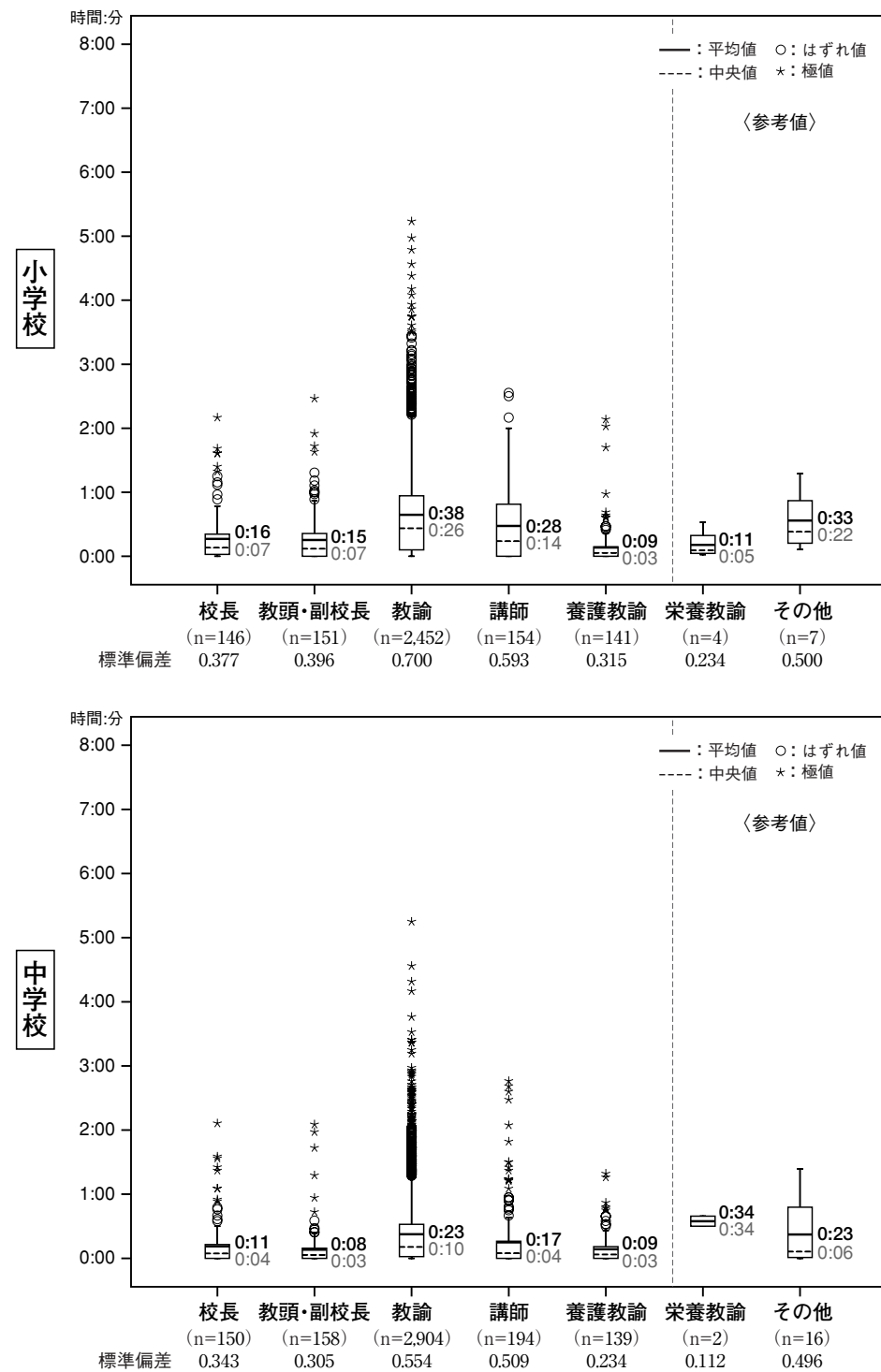
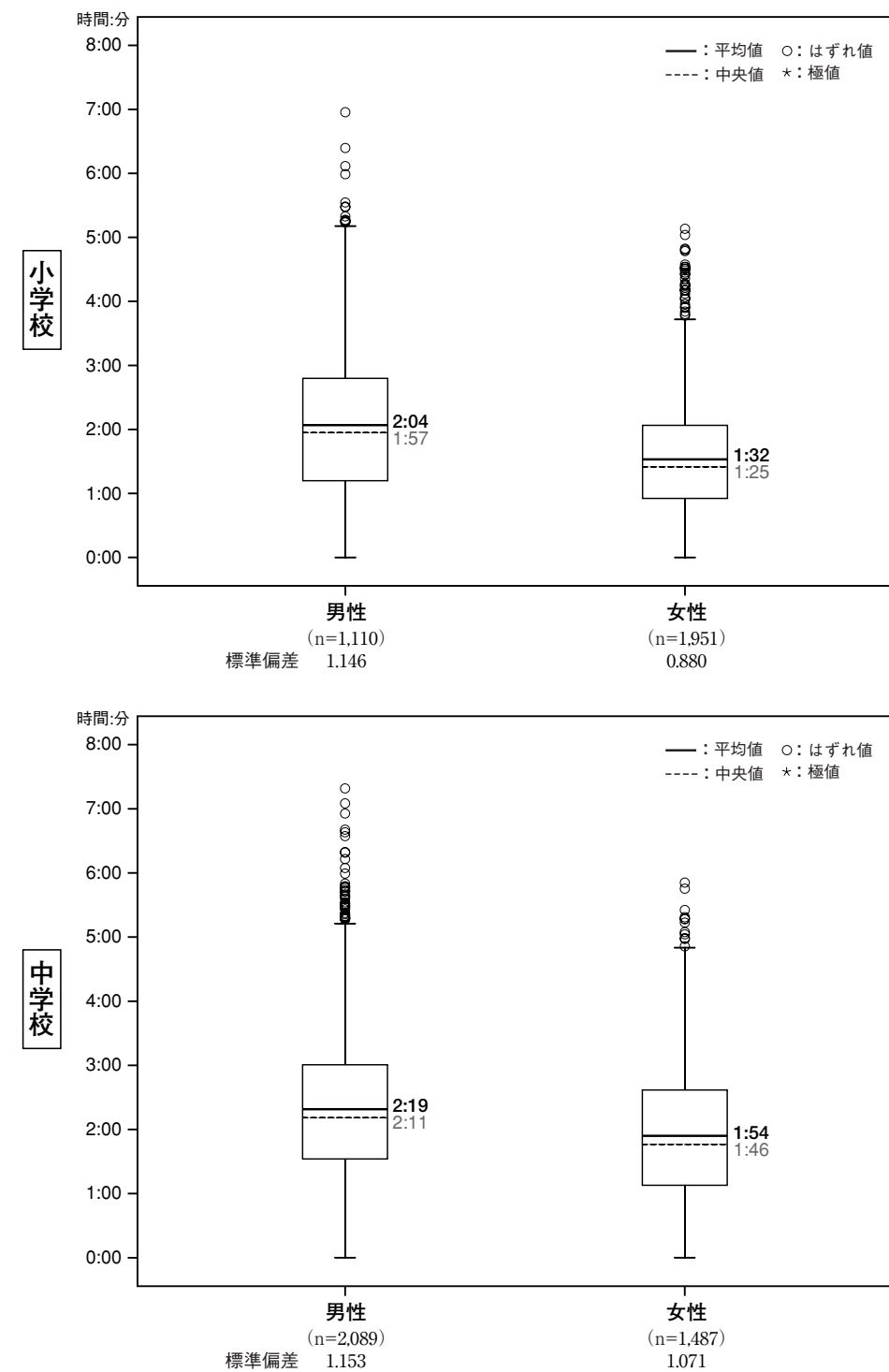


図2-4-7 勤務日・1日あたりの平均残業時間量(小・中学校 性別)



また、平均残業時間については中学校の教員の方が長く(図2-4-7)、平均持帰り時間については小学校の教員の方がやや長いこと(図2-4-8)を考え合わせると、小学校の教員は自宅で、中学校の教員は学校で残業を行う傾向があるといえる。

最後に、年齢別に平均の残業時間量・持帰り時間量の実態を検討しよう。ただし、この場合、職階の影響をのぞく必要がある。たとえば51歳以上には管理職が多く、この年齢層で残業時間・持帰り時間が長い場合は、年齢の影響だけではなく職階の影響も考えられる。そこで、教諭のみを取り出し、教諭の年齢別で残業時間、持帰り時間の順に、小学校と中学校について分析を行う。

第4期(通常期)の勤務日における教諭の平均残業時間量は、小学校・中学校いずれにおいても30歳以下で最も長く、小学校では2時間23分、中学校では2時間58分である(図2-4-9)。しかし、年齢層が上がるにつれて残業時間は減少する。小学校では31~40歳で1時間49分、41~50歳で1時間35分、51歳以上で1時間22分である。中学校では31~40歳で2時間23分、41~50歳で2時間03分、51歳以上で1時間31分である。ここから、年齢層の高い、いわゆるベテラン教諭になるほど平均残業時間が減少していくといえる。この原因は、経験を積むことによって授業などの準備時間が短縮されることや、若い年齢層ほど部活動などの業務が任されることなどが考えられる。

図2-4-8 勤務日・1日あたりの平均持帰り時間量(小・中学校 性別)

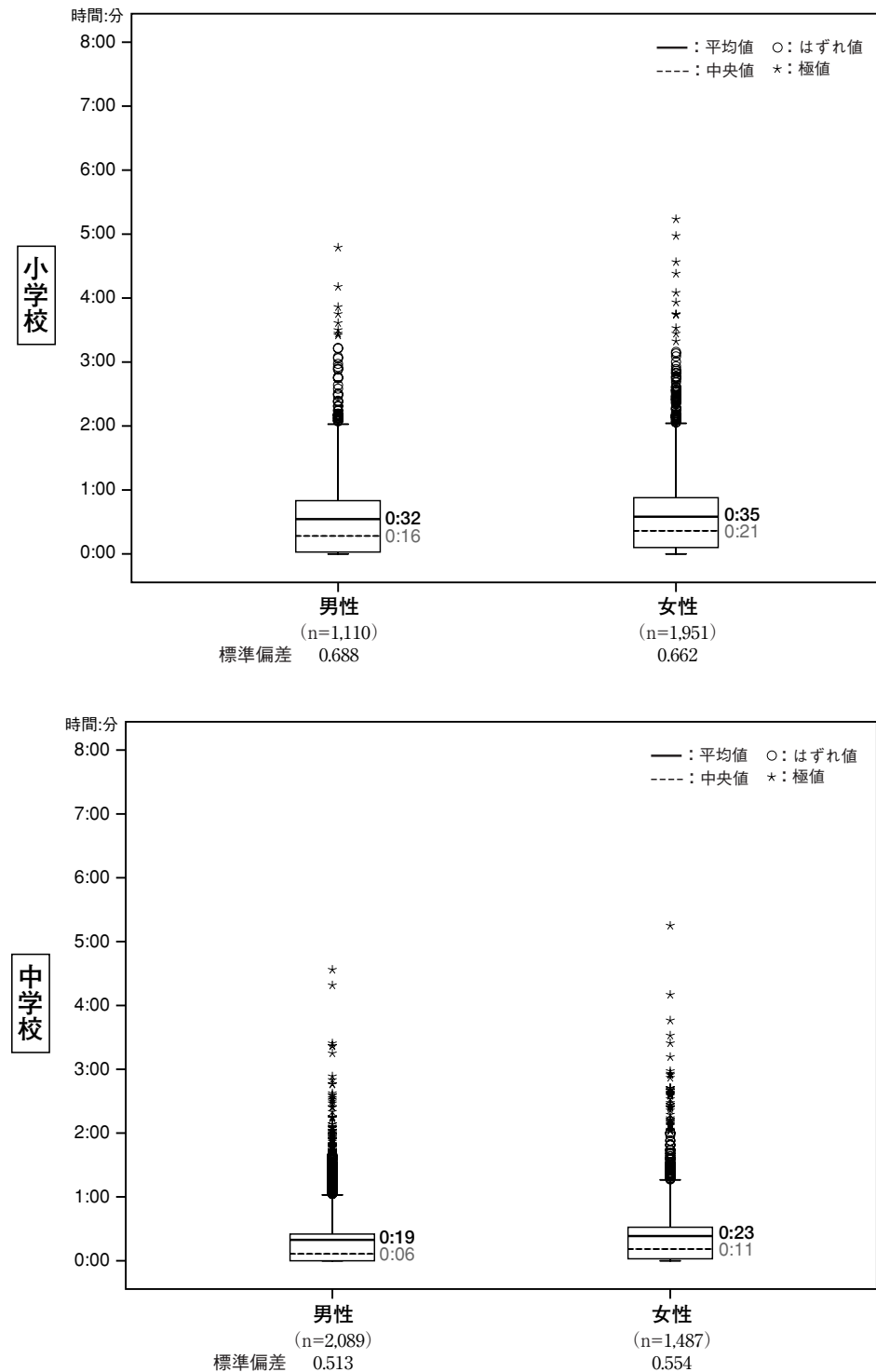
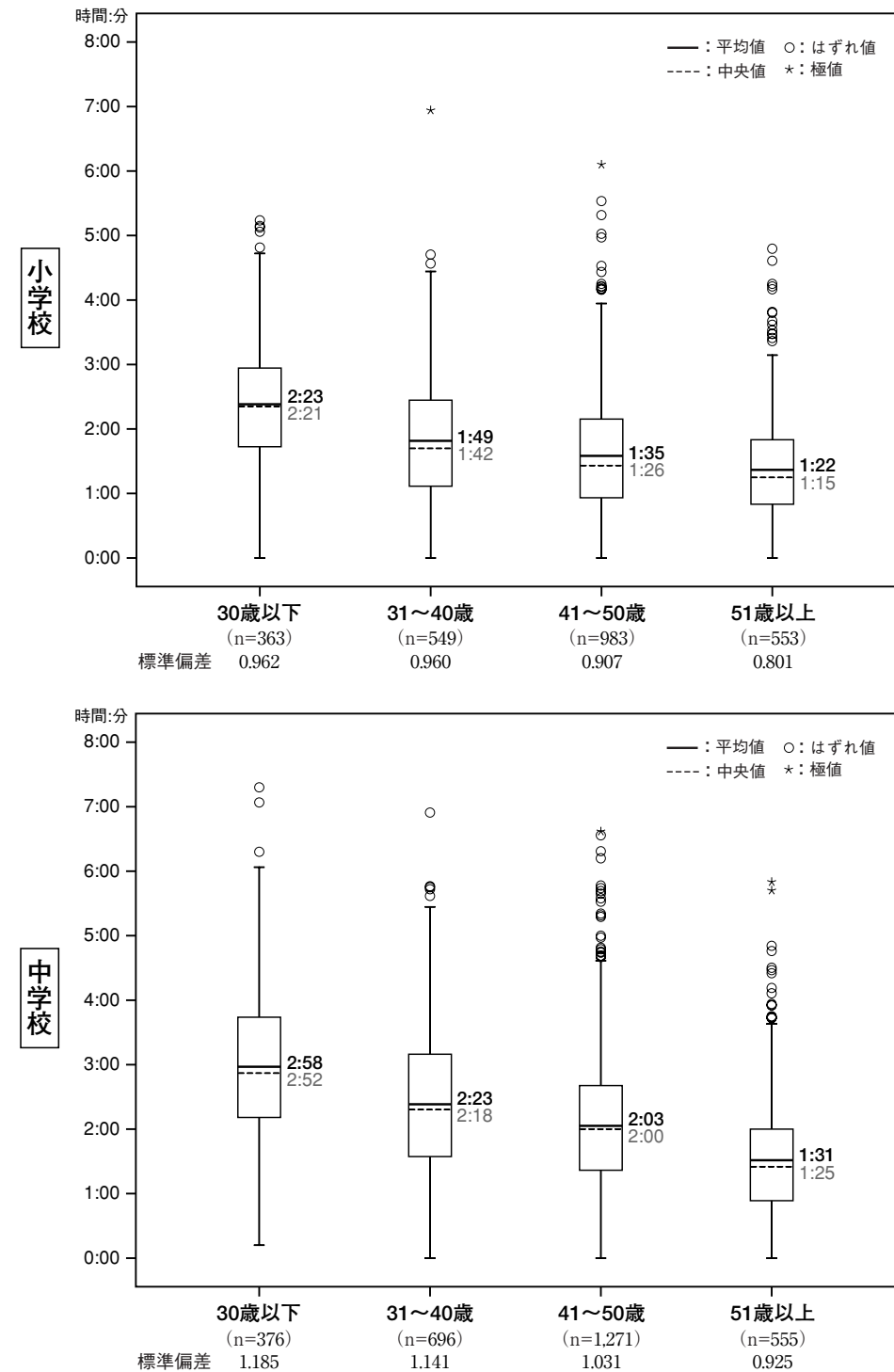
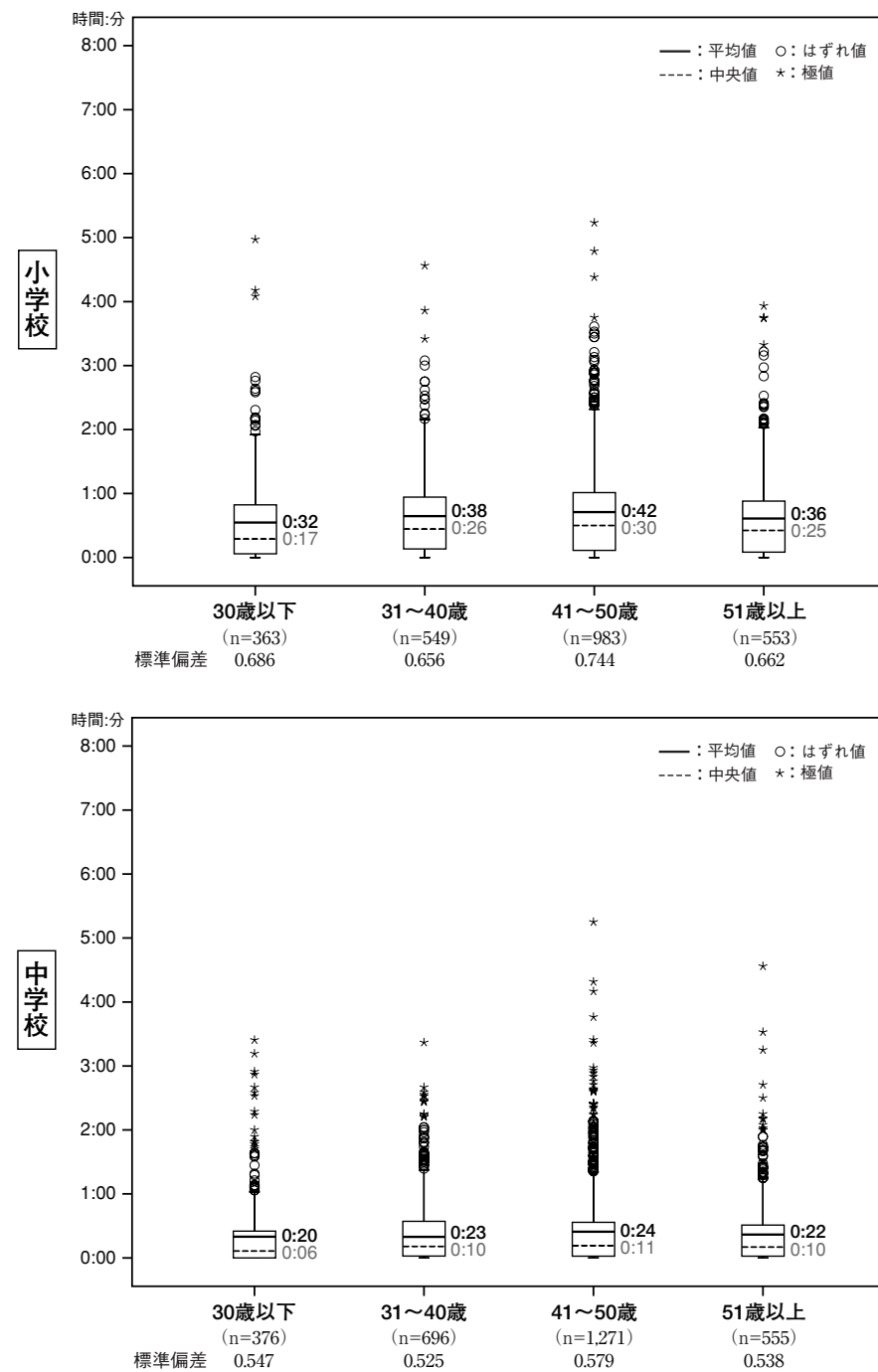


図2-4-9 勤務日・1日あたりの平均残業時間量(小・中学校 教諭の年齢別)



第4期(通常期)の勤務日における教諭の平均持帰り時間量は、小学校・中学校いずれにおいても30歳以下が最も短い。小学校では30歳以下で32分、31~40歳で38分、41~50歳で42分、51歳以上で36分である。中学校では年齢による差はあまりなく、30歳以下で20分、31~40歳で23分、41~50歳で24分、51歳以上で22分である(図2-4-10)。勤務日における残業時間と持帰り時間を比較すると、小学校・中学校いずれにおいても、残業時間は年齢が高くなるにしたがって減少する。これに対して小学校の持帰り時間については、いわゆる中堅からベテランにあたる41~50歳の教諭で長くなっている。中学校の持帰り時間には、年齢による差はあまりみられない(図2-4-9、図2-4-10)。

図2-4-10 勤務日・1日あたりの平均持帰り時間量(小・中学校 教諭の年齢別)



## 第5章 第5期(通常期)における勤務実態

### 1. 第5期の調査協力校の概況

第5期の調査期間は、平成18年10月23日(月)から平成18年11月19日(日)までの4週間である。

第5期において回答のあった343校のうち小学校1校が10月20日(金)から10月23日(月)までの期間に、児童・生徒の秋季休業期(以下、「秋季休業期」)を含んでいた。このうち第5期の調査と重なる日には10月23日(月)の1日のみである。

通常期と秋季休業期では、教員の業務における質と量に違いがあると考えられるため、第5期については、調査協力校の秋季休業期間の情報をもとに、データを通常期と秋季休業期の2つの時期に分割した。ただし、秋季休業期のある学校は1校であり、対象となる日にちも1日と少ないため、第5期では通常期のみについての報告を行う。

## 2. 残業時間・持帰り時間および業務の内訳

### (1) 全体的な残業時間・持帰り時間の実態

まず第5期(通常期)の勤務日における残業時間・持帰り時間の実態について、小学校、中学校、小学校と中学校の比較という順番で検討していこう(表2-5-1)。

小学校では、残業時間量は平均で1時間41分、持帰り時間量は平均33分、これらを合わせた時間の平均は2時間14分である。

中学校では、残業時間量は平均2時間08分、持帰り時間量は平均20分、これらを合わせた時間の平均は2時間29分である。

また、小学校と中学校を比べてみると、勤務日の残業時間の平均は中学校の方が小学校よりも27分長い。しかし、持帰り時間の平均は小学校の方が中学校よりも13分長い。中学校では部活動があるために残業時間が長くなると考えられるが、中学校での残業時間・持帰り時間における業務内訳については、後の第3項において検討する。

次に、第5期(通常期)の休日における残業時間・持帰り時間の実態について、小学校、中学校、小学校と中学校の比較という順番で検討していこう(表2-5-2)。

小学校では、残業時間は平均で21分、持帰り時間は平均で1時間20分、これらを合わせた時間は平均で1時間42分である。残業時間の中央値が0分であることからわかるように、小学校では基本的に休日に学校で業務を行っていないといえる(表2-5-2)。

中学校では、残業時間は平均1時間27分、持帰り時間は平均1時間31分、合計は平均で2時間59分となっている。中学校の休日の残業時間と持帰り時間で中央値と平均値の差が40分から50分ほどひらいていることからわかるように、中学校では、休日に残業や持帰り仕事をする人の間で、時間量の差が大きい(表2-5-2)。これは後の、図2-5-3や図2-5-4からも確認できる。

小学校と中学校を比べてみると、残業時間の平均は中学校の方が小学校よりも1時間06分長い。小学校と中学校それぞれの残業時間における業務内訳については、後の第3項で述べるが、中学校においては部活動を行っているために長くなると考えられる。

以上、第5期(通常期)の勤務日と休日を比べてまとめておこう。

小学校の教員は、勤務日においては、残業時間の方が持帰り時間よりも1時間08分長く(表2-5-1)、休日においては、持帰り時間の方が残業時間よりも約1時間長い(表2-5-2)。特に持帰り時間については、勤務日よりも休日の方が1時間弱長くなっており、休日には学校で仕事をしないものの、自宅で持帰り仕事を行っている様子がうかがえる(表2-5-1、表2-5-2)。

中学校の教員は、勤務日においては、残業時間の方が持帰り時間よりも1時間48分長く(表2-5-1)、休日においては、残業時間と持帰り時間はほぼ同じ長さである(表2-5-2)。持帰り時間については、勤務日よりも休日の方が1時間11分長い(表2-5-1、表2-5-2)。

表2-5-1 勤務日・1日あたりの平均残業時間量・持帰り時間量

	残業時間量	持帰り時間量	残業時間+持帰り時間
小学校	1時間41分 〔1時間31分〕(1.026)	33分 〔18分〕(0.681)	2時間14分 〔2時間06分〕(1.221)
中学校	2時間08分 〔2時間01分〕(1.169)	20分 〔7分〕(0.544)	2時間29分 〔2時間21分〕(1.291)
全体	1時間56分 〔1時間47分〕(1.130)	26分 〔11分〕(0.621)	2時間22分 〔2時間14分〕(1.265)

[ ]内は中央値、( )内は標準偏差を示す。

表2-5-2 休日・1日あたりの平均残業時間量・持帰り時間量

	残業時間量	持帰り時間量	残業時間+持帰り時間
小学校	21分 〔0分〕(0.801)	1時間20分 〔1時間00分〕(1.391)	1時間42分 〔1時間21分〕(1.557)
中学校	1時間27分 〔33分〕(2.025)	1時間31分 〔53分〕(1.837)	2時間59分 〔2時間34分〕(2.452)
全体	57分 〔0分〕(1.676)	1時間26分 〔56分〕(1.650)	2時間23分 〔1時間53分〕(2.185)

[ ]内は中央値、( )内は標準偏差を示す。

(2)個人単位でみた残業時間・持帰り時間の実態

前項では、第5期(通常期)の教員全体における残業時間量・持帰り時間量の平均に注目した。しかし、すべての教員が一様に残業や持帰り仕事を行っているわけではなく、これらの時間は、教員間での差が大きいと考えられる。そこで、第5期(通常期)における教員一人あたりの平均残業時間量・持帰り時間量の分布をみたものが、図2-5-1から図2-5-4である。

以下、勤務日と休日それぞれについて、残業時間、持帰り時間の順に、それぞれ小学校、中学校の結果を検討していく。

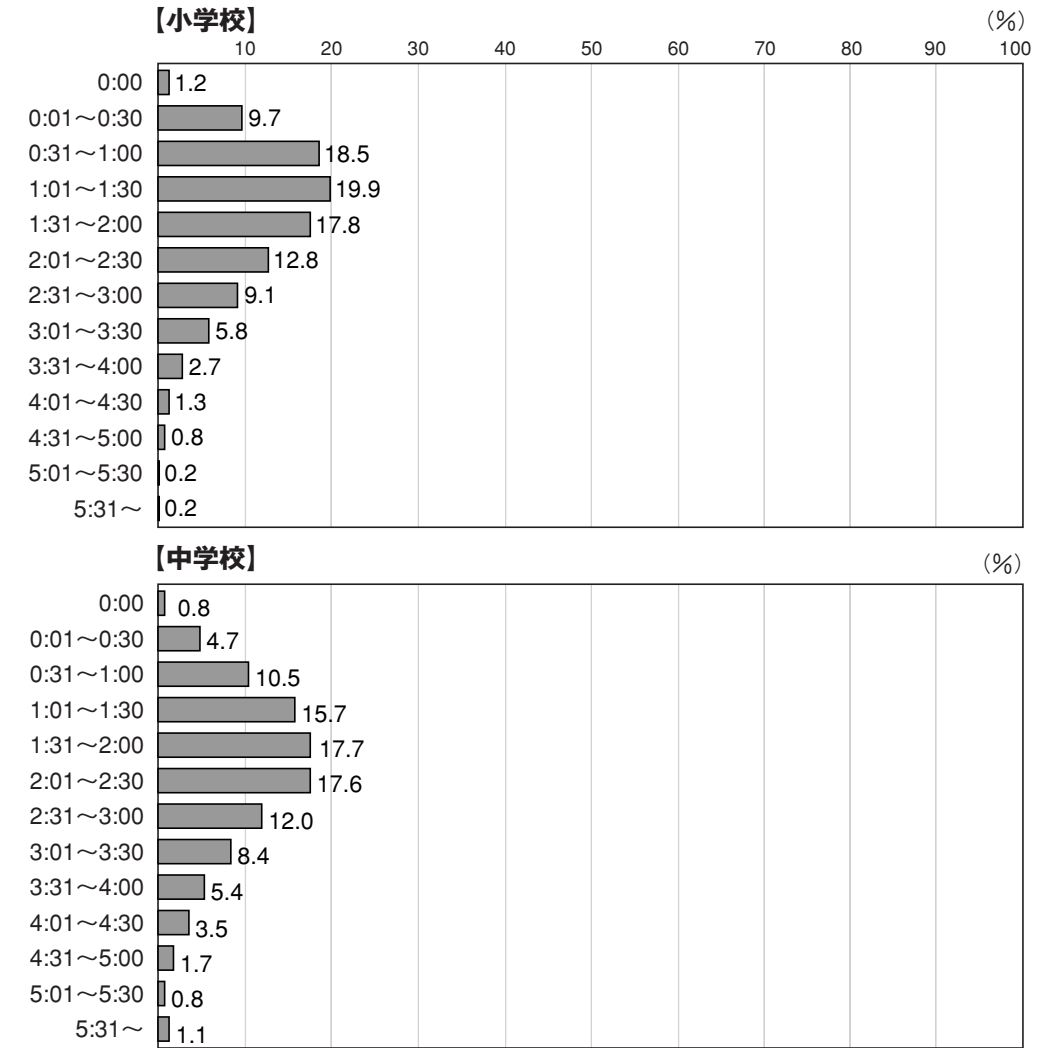
まず、第5期(通常期)の勤務日における平均残業時間量について検討しよう(図2-5-1)。

小学校の勤務日における残業時間の分布は、0分が1.2%で、残業を行わない教員はほとんどいない。残業時間が30分以下(0分をのぞく)は9.7%、31分～1時間以下は18.5%となっており、約30%の教員が1時間以下(0分をのぞく)の残業を行っている。また、残業が1時間01分～1時間30分以下の教員は19.9%、1時間31分～2時間以下の教員は17.8%と、2時間以下(0分をのぞく)の残業を行う教員が6割強である。また、2時間01分～2時間30分以下の教員は12.8%、2時間31分～3時間以下の教員は9.1%、さらに、3時間を超える残業を行う教員も約1割いる。

中学校の勤務日における平均残業時間の分布は、0分が0.8%で、残業を行わない教員はほとんどいない。残業時間が30分以下(0分をのぞく)は4.7%、31分～1時間以下は10.5%となっており、約16%の教員が1時間以下(0分をのぞく)の残業を行っている。これに対して、残業が1時間01分～1時間30分以下の教員は15.7%、1時間31分～2時間以下の教員は17.7%と、2時間以下(0分をのぞく)の残業を行う教員はおよそ5割弱である。また、2時間01分～2時間30分以下の教員は17.6%、2時間31分～3時間以下の教員は12.0%である。3時間を超える残業を行う教員は2割ほどである。

以上から小学校・中学校いずれにおいても、勤務日にはほとんどの教員が残業を行っており、残業時間については、小学校では65.9%の教員が2時間以下(0分をのぞく)の残業を行っていることがわかる。一方、中学校では2時間以下(0分をのぞく)の残業を行う教員は5割弱であり、小学校よりも中学校の方が概して残業時間が長い傾向にあるといえる。

図2-5-1 勤務日・1日あたりの平均残業時間量の分布



※時間量は「時間:分」を示す。たとえば「1:01～1:30」は「1時間01分～1時間30分」。

次に、第5期(通常期)の勤務日における平均持帰り時間量について検討しよう(図2-5-2)。

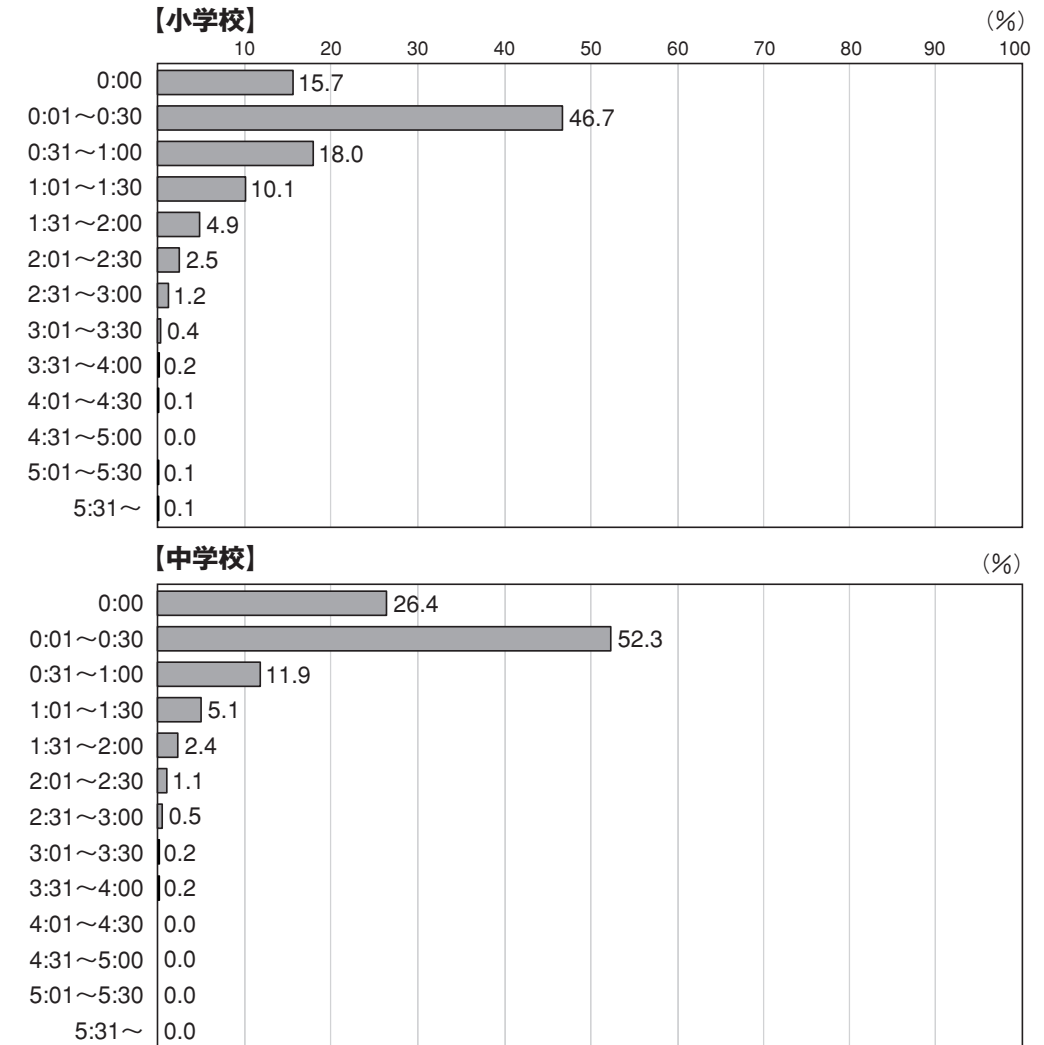
小学校の勤務日における平均持帰り時間の分布について検討すると、0分つまり持帰り仕事を行わない教員は15.7%存在する。持帰り時間が30分以下(0分をのぞく)は46.7%、31分~1時間以下は18.0%であり、およそ65%の教員が1時間以下(0分をのぞく)の持帰り仕事をを行っている。1時間を超える持帰り仕事をやっている教員は2割いる。

中学校の勤務日における平均持帰り時間の分布は、0分が26.4%で、持帰り仕事を行わない教員はおよそ4人に1人である。持帰り時間が30分以下(0分をのぞく)は52.3%、31分~1時間以下は11.9%であり、6割強の教員が1時間以下(0分をのぞく)の持帰り仕事をやっている。1時間を超える持帰り仕事をやっている教員は1割である。

以上、第5期(通常期)の勤務日について、勤務日に持帰り仕事を行わない教員は小学校では15%ほど、中学校では26%ほどいる。また、小学校・中学校いずれにおいても、6割強の教員が1時間以下(0分をのぞく)の持帰り仕事をやっている。

第5期(通常期)の勤務日の残業時間・持帰り時間の実態についてまとめると、残業を行っていない教員はほとんどおらず、小学校では6割強、中学校では5割弱の教員が2時間以下(0分をのぞく)の残業を行っている(図2-5-1)。持帰り仕事を行っていない教員は小学校では15%ほど、中学校では26%ほどとなっているが、持帰り仕事がある教員の方が多数派であり、小学校・中学校ともに6割強の教員が1時間以下(0分をのぞく)の持帰り仕事をやっている(図2-5-2)。

図2-5-2 勤務日・1日あたりの平均持帰り時間量の分布



※時間量は「時間:分」を示す。たとえば「1:01~1:30」は「1時間01分~1時間30分」。



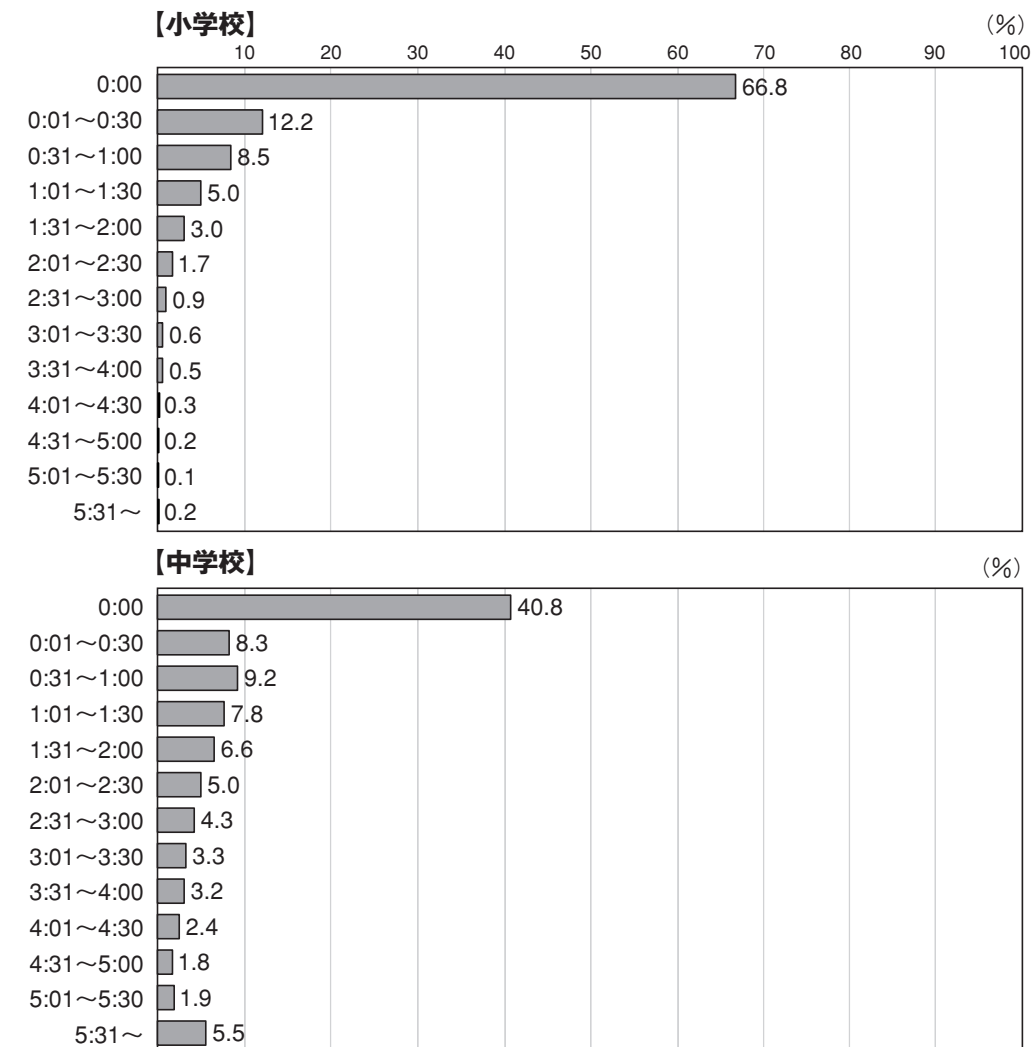
次に、第5期(通常期)の休日における平均残業時間量について検討しよう(図2-5-3)。

小学校の休日における平均残業時間の分布は、0分が66.8%で、残業を行わない教員は7割弱である。しかし、1時間以下(0分をのぞく)の残業を行う教員は2割、1時間01分～3時間以下の残業を行う教員も1割ほどいる。

中学校の休日における平均残業時間の分布は、0分が40.8%で、残業を行わない教員は4割いる。勤務日(図2-5-1)に比べると残業を行う教員は少ないが、およそ6割の教員が休日も学校に出勤して残業を行っているといえる。また、小学校よりも休日に残業を行う教員が多い。残業時間は教員間での差が大きく、残業時間が1時間以下(0分をのぞく)の教員が約18%、1時間01分～2時間以下の教員が約14%、2時間01分～3時間以下の教員が1割、3時間01分～5時間以下の教員が1割、さらに5時間を超える教員も1割弱存在する。なかでも休日に学校で5時間30分を超える勤務を行う教員が5%以上存在するのは、小学校にはない中学校だけの特徴であるといえる。業務の内訳としては部活動などが考えられるが、実際に中学校の教員が休日の残業時間にどのような業務を行っているのかは、後の第3項において検討を行う。

以上、第5期(通常期)の休日の残業時間について、休日に残業を行わない教員は小学校では7割弱、中学校では4割ほど存在する。また、特に中学校では、残業時間の個人差が大きく、幅広い時間帯に分布している。

図2-5-3 休日・1日あたりの平均残業時間量の分布



※時間量は「時間:分」を示す。たとえば「1:01～1:30」は「1時間01分～1時間30分」。

次に、第5期(通常期)の休日における平均持帰り時間量について検討しよう(図2-5-4)。

小学校の休日における平均持帰り時間の分布は、0分が19.3%で、勤務日(図2-5-2)よりもやや多くなっている。休日でも8割の教員が持帰り仕事を行っており、その時間は教員間での差が大きい。持帰り時間が1時間以下(0分をのぞく)の教員は31.7%、1時間01分~2時間以下の教員は24.6%、2時間01分~3時間以下の教員は13.6%、3時間01分~5時間以下の教員は8.5%、さらに5時間を超える教員は2.4%存在する。

中学校の休日における平均持帰り時間の分布は、0分が25.0%で、勤務日(図2-5-2)とそれほど大きな差はない。休日でも8割弱の教員が持帰り仕事を行っており、その時間は教員間で差が大きい。持帰り時間が1時間以下(0分をのぞく)の教員は3割弱、1時間01分~2時間以下の教員は約17%、2時間01分~3時間以下の教員は1割強、3時間01分~5時間以下の教員は1割強、さらに5時間を超える教員も5.6%存在する。

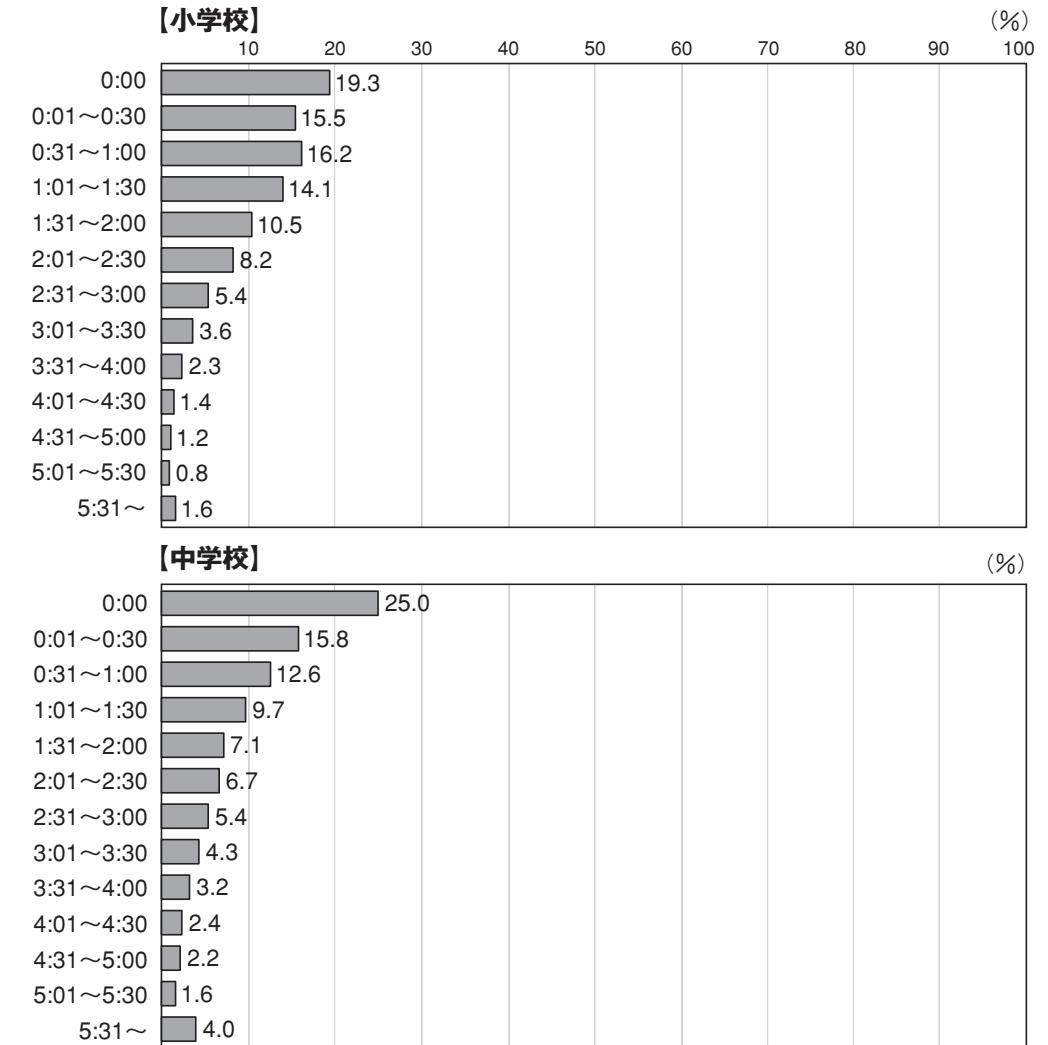
以上、第5期(通常期)の休日の持帰り時間について、休日に持帰り仕事を行わない教員は小学校・中学校ともに2割ほど存在する。また、小学校・中学校いずれにおいても、持帰り時間は教員間で差が大きく、5時間を超える教員も小学校では2.4%、中学校では5.6%存在する一方で、30分以下(0分をのぞく)と短時間の教員も15%ほど存在する。

第5期(通常期)の休日の残業時間・持帰り時間の実態についてまとめると、残業時間については、休日に残業を行わない教員は小学校では7割弱、中学校では4割ほど存在する。また、中学校では、残業を行う教員においては、教員間で残業時間の差が大きい(図2-5-3)。持帰り時間については、休日に持帰り仕事を行わない教員は小学校では2割弱、中学校では2割5分存在する。また、小学校・中学校いずれにおいても、持帰り時間は教員によって差が大きい(図2-5-4)。

以上から、次のことが指摘できる。

第5期(通常期)においては、勤務日にはほとんどの教員が残業を行っており、小学校では6割強の教員が2時間以下(0分をのぞく)の残業を行っている(図2-5-1)。休日には残業を行う教員は小学校では3割強、中学校では6割ほどで、中学校の残業時間には個人差がある(図2-5-3)。持帰り仕事を行う教員の割合は、小学校・中学校のいずれにおいても、勤務日では30分以下(0分をのぞく)の割合が多く(図2-5-2)、休日では0分が最も多く、時間が増えるにつれて割合が減少する傾向がある。一方で、中学校には休日の持帰り時間が5時間30分を超える教員も4.0%存在する(図2-5-4)。小学校・中学校いずれにおいても、勤務日の持帰り時間は過半数が1時間以下(0分をのぞく)に集中するが(図2-5-2)、休日の持帰り時間は、教員間で差が大きい(図2-5-4)。

図2-5-4 休日・1日あたりの平均持帰り時間量の分布



※時間量は「時間:分」を示す。たとえば「1:01~1:30」は「1時間01分~1時間30分」。

(3) 残業時間・持帰り時間における業務内訳

前項では、第5期(通常期)における教員一人あたりの平均の残業時間量・持帰り時間量の分布について注目したが、本項ではこれらの時間にどのような業務を行っているのか、業務の内訳を検討する。

第5期(通常期)における勤務日と休日それぞれについて、残業時間、持帰り時間の順に、小学校と中学校のそれぞれで業務の上位5種類の内訳を検討していこう。

まず、第5期(通常期)の勤務日について検討しよう(表2-5-3、表2-5-4)。

平均残業時間における業務内訳については、小学校・中学校ともに最も長いのは授業準備であり、小学校で30分、中学校で23分である。小学校で2番目に長いのは成績処理で11分、つづいて事務・報告書作成が9分、会議・打合せが7分である。中学校では2番目に長いのは部活動・クラブ活動で13分、つづいて事務・報告書作成と会議・打合せが11分となっている。ここから、小学校・中学校ともに残業時間における業務内訳は、授業準備が最も長く、中学校の部活動・クラブ活動をのぞくと、成績処理や事務・報告書作成などの事務作業の時間が長いといえる(表2-5-3)。

平均持帰り時間における業務内訳については、小学校・中学校いずれにおいても最も長いのは授業準備で、小学校では15分、中学校では6分である。2番目に長い業務は、小学校・中学校ともに成績処理で、小学校では6分、中学校では3分である。3番目から5番目に長い業務は、順番は異なるものの小学校・中学校ともに、学年・学級経営、事務・報告書作成、その他の校務が1~3分ずつとなっている(表2-5-4)。

次に、第5期(通常期)の休日について検討しよう(表2-5-5、表2-5-6)。

平均残業時間における業務内訳については、小学校では授業準備が最も長く4分、以下、保護者・PTA対応が3分、部活動・クラブ活動、その他の校務、事務・報告書作成が2分ずつである。中学校では部活動・クラブ活動が最も長く60分、つづいて授業準備、その他の校務が4分である。以下、成績処理、事務・報告書作成が2分である。中学校の部活動・クラブ活動をのぞき、残業時間は、小学校・中学校ともに5分以下と短い(表2-5-5)。

平均持帰り時間における業務内訳については、小学校では授業準備が最も長く32分、つづいて成績処理が12分、事務・報告書作成が7分、その他の校務、学年・学級経営が5分である。中学校では部活動・クラブ活動が最も長く36分、つづいて授業準備が16分、成績処理が13分である。以下、事務・報告書作成、その他の校務が5分ずつである。休日の平均持帰り時間における業務内訳は、成績処理や授業準備が長く、中学校では部活動・クラブ活動の時間が長い傾向があるといえる(表2-5-6)。

小学校・中学校いずれにおいても、休日の業務は、学校での残業についても自宅での持帰り仕事についても、授業準備の時間が長くなっている。ただし、休日の残業時間と持帰り時間では業務に費やす時間が異なる。たとえば、小学校では休日の残業時間における授業準備は4分であるのに対し、休日の持帰り時間においては32分と増加する。また、中学校では休日の残業時間における授業準備は4分であるのに対し、休日の持帰り時間においては16分と増加する。ここから、中学校の部活動・クラブ活動をのぞくと、休日の業務は学校で行うよりも持帰り仕事として、自宅でより長い時間をかけて行っていることがわかる。

表2-5-3 勤務日の平均残業時間における業務内訳

	小学校		中学校		全体	
	業務	時間	業務	時間	業務	時間
1	授業準備	30分	授業準備	23分	授業準備	26分
2	成績処理	11分	部活動・クラブ活動	13分	事務・報告書作成	10分
3	事務・報告書作成	9分	事務・報告書作成	11分	成績処理	10分
4	会議・打合せ	7分	会議・打合せ	11分	会議・打合せ	10分
5	学校経営	7分	学校行事	9分	学校経営	8分

表2-5-4 勤務日の平均持帰り時間における業務内訳

	小学校		中学校		全体	
	業務	時間	業務	時間	業務	時間
1	授業準備	15分	授業準備	6分	授業準備	10分
2	成績処理	6分	成績処理	3分	成績処理	4分
3	学年・学級経営	3分	事務・報告書作成	1分	学年・学級経営	2分
4	事務・報告書作成	2分	学年・学級経営	1分	事務・報告書作成	2分
5	その他の校務	1分	その他の校務	1分	その他の校務	1分

表2-5-5 休日の平均残業時間における業務内訳

	小学校		中学校		全体	
	業務	時間	業務	時間	業務	時間
1	授業準備	4分	部活動・クラブ活動	60分	部活動・クラブ活動	33分
2	保護者・PTA対応	3分	授業準備	4分	授業準備	4分
3	部活動・クラブ活動	2分	その他の校務	4分	その他の校務	3分
4	その他の校務	2分	成績処理	2分	保護者・PTA対応	2分
5	事務・報告書作成	2分	事務・報告書作成	2分	事務・報告書作成	2分

表2-5-6 休日の平均持帰り時間における業務内訳

	小学校		中学校		全体	
	業務	時間	業務	時間	業務	時間
1	授業準備	32分	部活動・クラブ活動	36分	授業準備	23分
2	成績処理	12分	授業準備	16分	部活動・クラブ活動	21分
3	事務・報告書作成	7分	成績処理	13分	成績処理	12分
4	その他の校務	5分	事務・報告書作成	5分	事務・報告書作成	6分
5	学年・学級経営	5分	その他の校務	5分	その他の校務	5分

### 3. 属性別にみた残業時間・持帰り時間

前節では、第5期(通常期)における平均の残業時間量・持帰り時間量の全体像を検討した。

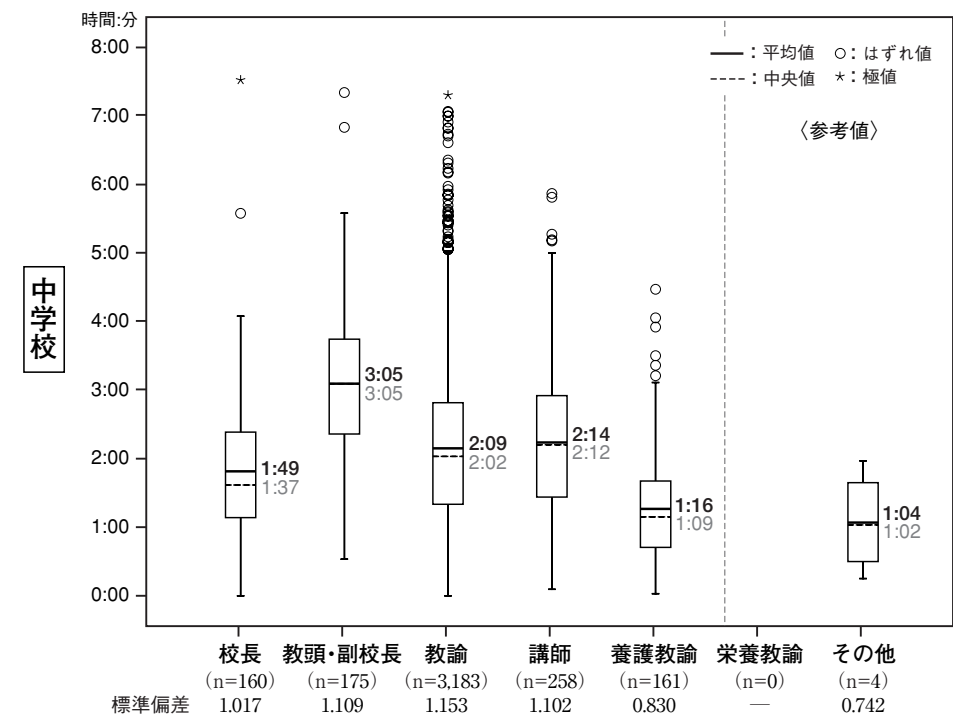
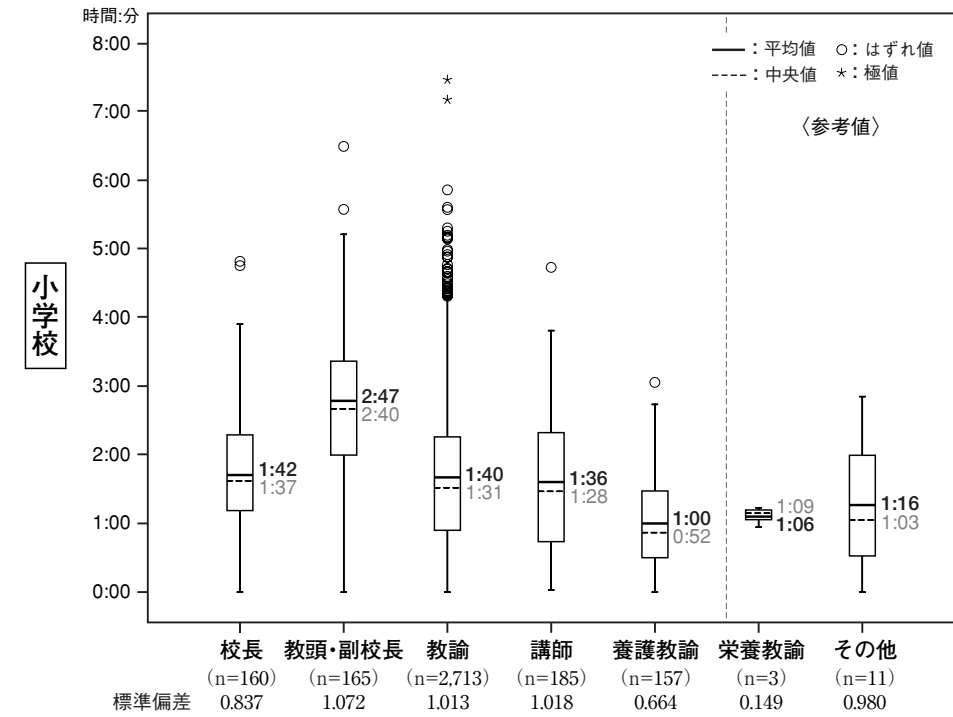
しかし、一人一人の残業時間量・持帰り時間量や、正規の勤務時間に処理できない業務を学校で行うのか、自宅で持帰り業務として行うのかといった勤務実態は、教員の性別や職階、年齢などの属性によって異なると考えられる。

そこで本節では、特に勤務日に絞り、属性別(職階別、性別、年齢別)に残業時間量・持帰り時間量の実態を明らかにする。

まずは職階別に、平均残業時間量、平均持帰り時間量の順に、小学校と中学校のそれぞれについて検討しよう。

第5期(通常期)の勤務日における平均残業時間量は、図2-5-5の通り、小学校の教頭・副校長は2時間47分、中学校の教頭・副校長は3時間05分であり、他の職階に比べて大幅に長くなっている。その他の職階については、小学校では校長は1時間42分、教諭は1時間40分、講師は1時間36分と、ほとんど差はない。中学校では校長は1時間49分、教諭は2時間09分、講師は2時間14分と、校長よりも教諭・講師の方が20～25分長くなっている。

図2-5-5 勤務日・1日あたりの平均残業時間量(小・中学校 職階別)



第5期(通常期)の勤務日における平均持帰り時間量は、図2-5-6のように、小学校・中学校とも教諭で最も長くなっている。小学校と中学校を比較してみると小学校の教諭の方が38分と長く、中学校の教諭は22分と短くなっている。小学校では、教諭につづいて長いのが、講師の27分、次に教頭・副校長の14分、校長、養護教諭の12分である。中学校では、教諭につづいて長いのが講師の15分であり、次が校長の10分である。

図2-5-5と図2-5-6の比較から、勤務日においては、学校では教頭・副校長が長く残業を行い、自宅では教諭が長く持帰り仕事を行っているといえる。

次に、性別ごとに平均残業時間量、平均持帰り時間量の順に、小学校と中学校それぞれについて検討しよう。

第5期(通常期)の勤務日における平均残業時間量は図2-5-7の通り、小学校・中学校ともに男性の方が女性教員よりも25分ほど長くなっている(平均値は次の通り/小学校:男性教員 1時間57分、女性教員 1時間32分、中学校:男性教員 2時間18分、女性教員 1時間56分)。

図2-5-6 勤務日・1日あたりの平均持帰り時間量(小・中学校 職階別)

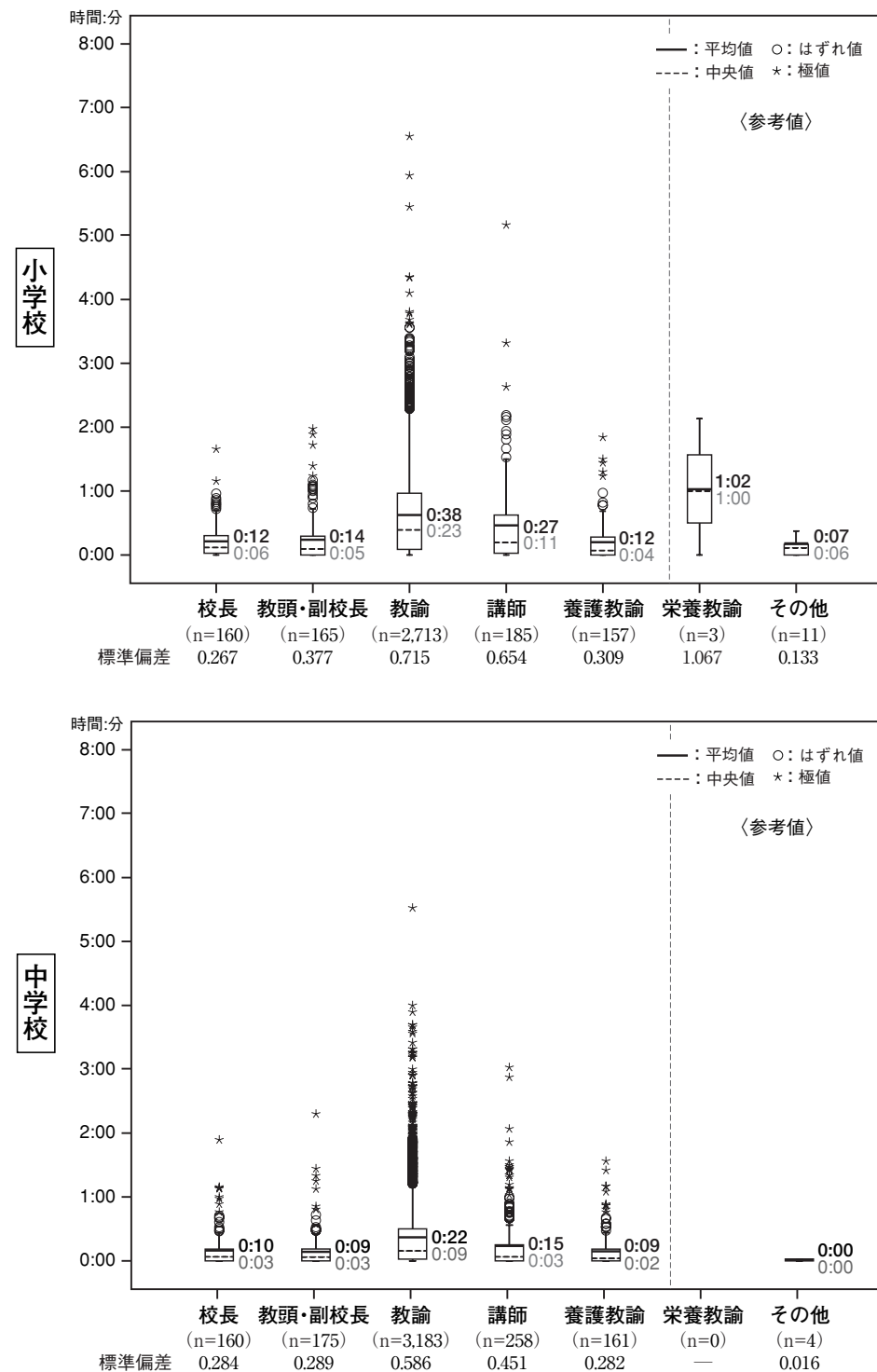
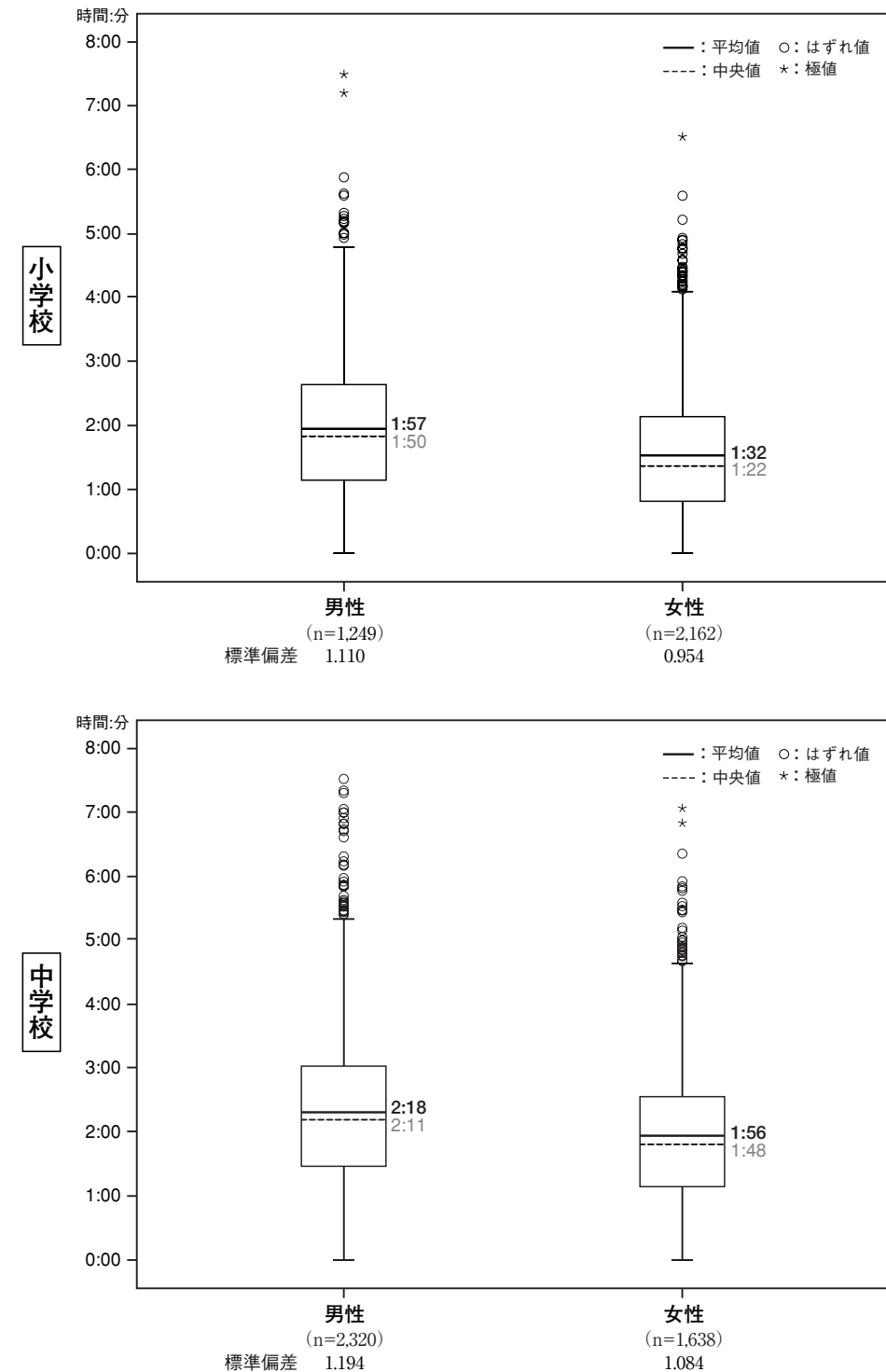


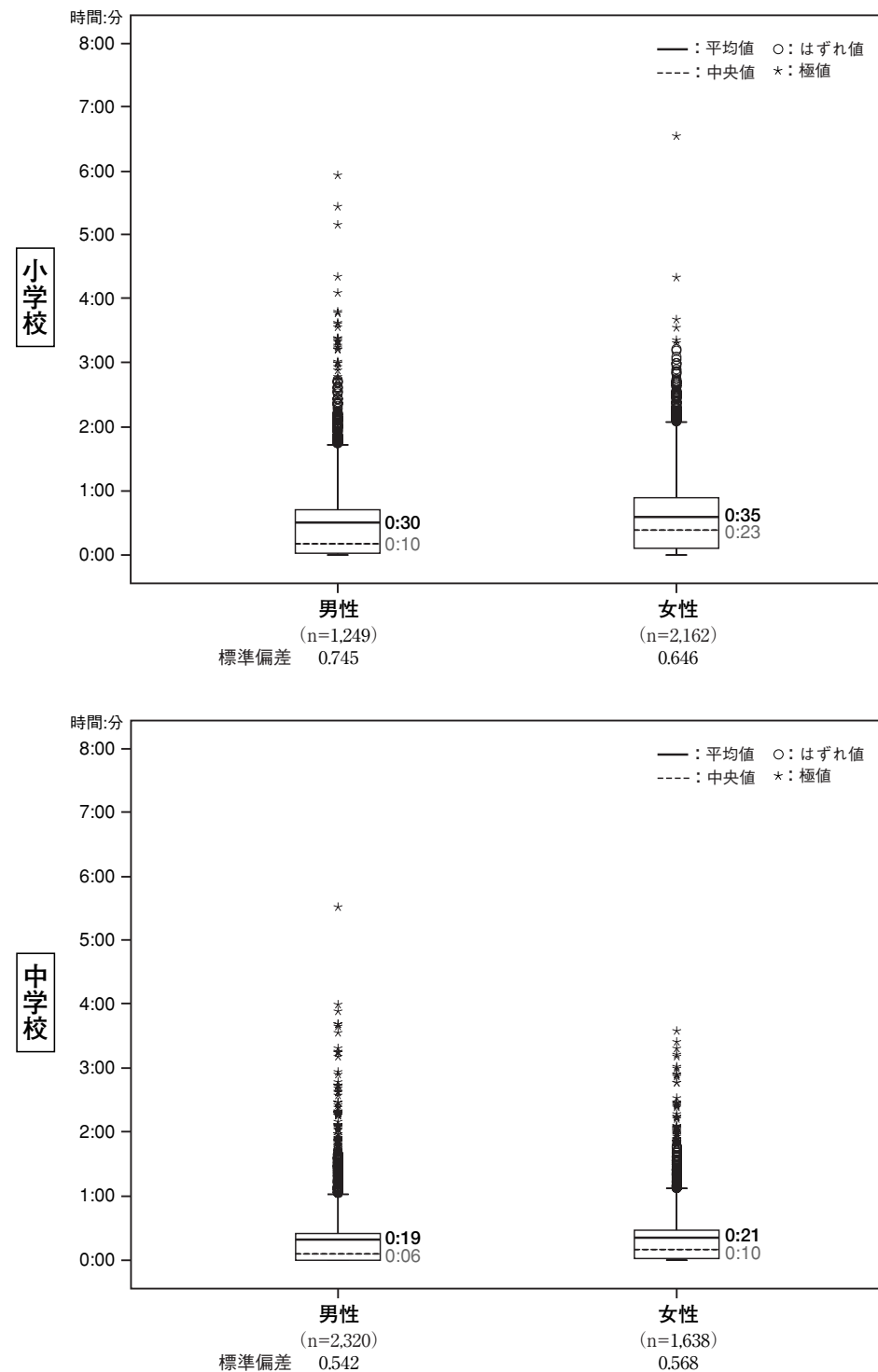
図2-5-7 勤務日・1日あたりの平均残業時間量(小・中学校 性別)



これに対して平均持帰り時間量は図2-5-8の通り、小学校・中学校ともに女性教員の方が男性教員よりもやや長くなっている(平均値は次の通り/小学校:男性教員 30分、女性教員 35分、中学校:男性教員 19分、女性教員 21分)。

また、平均残業時間量については中学校の方が長く(図2-5-7)、平均持帰り時間量については小学校の方がやや長いこと(図2-5-8)を考え合わせると、中学校の教員は学校で残業を行い、小学校の教員は自宅で持帰り仕事を行う傾向があるといえる。

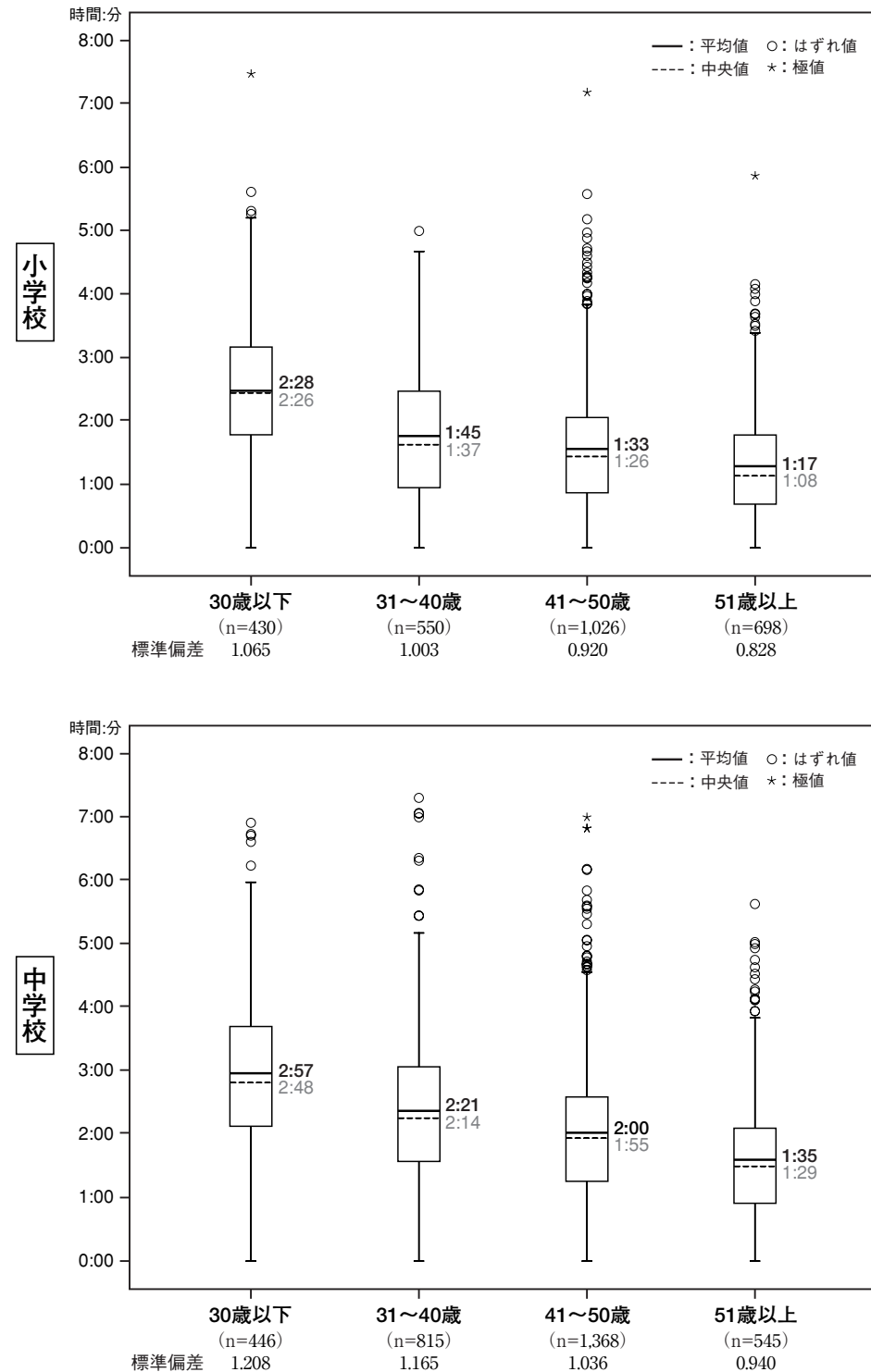
図2-5-8 勤務日・1日あたりの平均持帰り時間量(小・中学校 性別)



最後に、年齢別に平均の残業時間量・持帰り時間量の実態をみてみよう。ただし、この場合、職階の影響をのぞく必要がある。たとえば 51歳以上には管理職が多く、この年齢層で残業時間・持帰り時間が長い場合は、年齢の影響だけではなく職階の影響も考えられる。そこで、教諭のみを取り出し、教諭の年齢別で残業時間、持帰り時間の順に、小学校と中学校について分析を行う。

第5期(通常期)の勤務日における教諭の平均残業時間量は、小学校・中学校ともに30歳以下で最も長く、小学校では2時間28分、中学校では2時間57分である(図2-5-9)。しかし、年齢層が上がるにつれて平均残業時間は減少する。小学校では31~40歳で1時間45分、41~50歳で1時間33分、51歳以上で1時間17分である。中学校では31~40歳で2時間21分、41~50歳で2時間00分、51歳以上で1時間35分である。ここから、年齢層の高い、いわゆるベテラン教諭になるほど平均残業時間が減少していくといえる。この原因は、経験を積むことによって授業などの準備時間が短縮できることや、若い年齢層ほど部活動などの業務が任されることなどが考えられる。

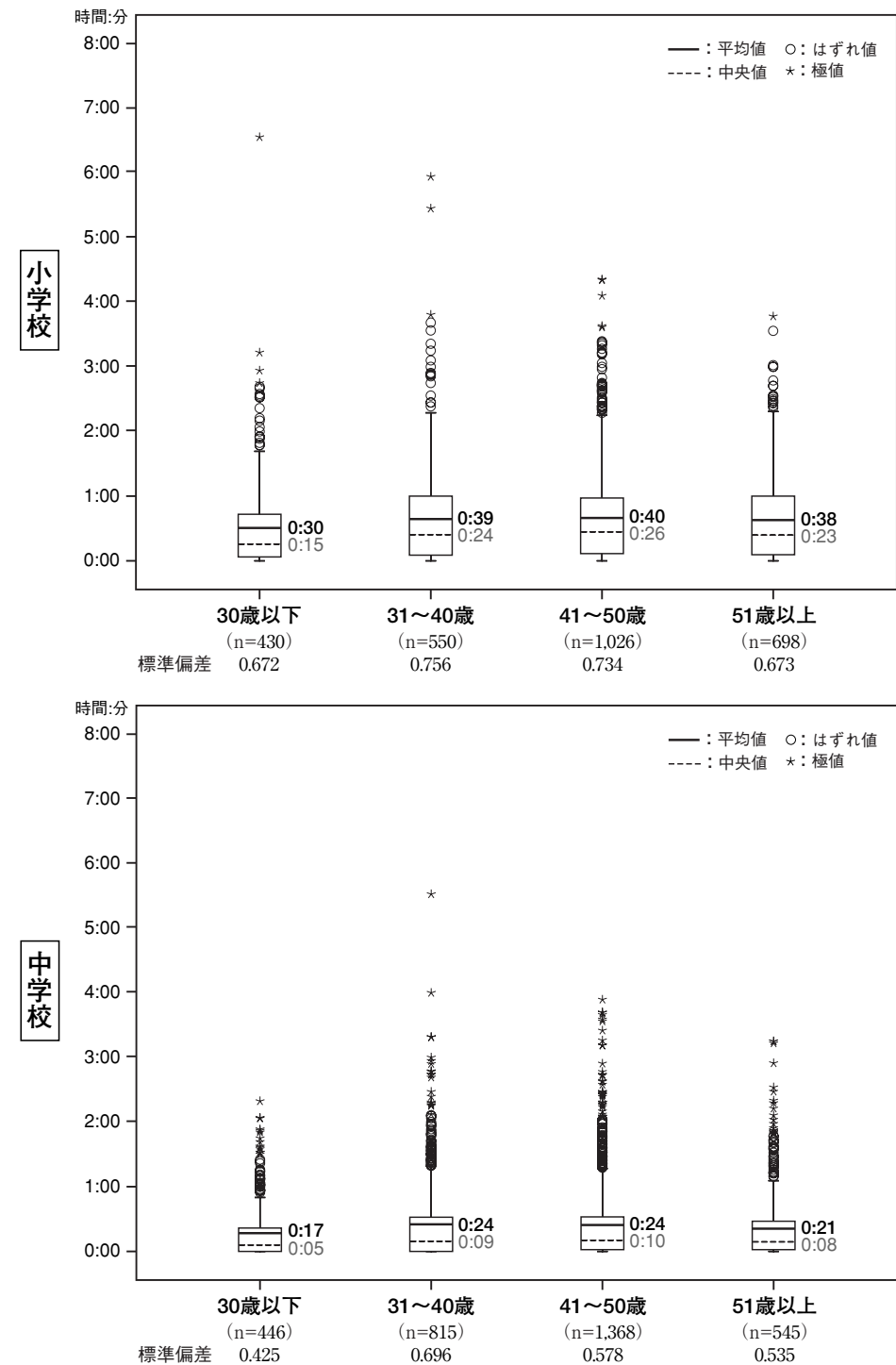
図2-5-9 勤務日・1日あたりの平均残業時間量(小・中学校 教諭の年齢別)



第5期(通常期)の勤務日における教諭の平均持帰り時間量は、小学校・中学校いずれにおいても30歳以下で最も短い。小学校では30歳以下で30分、31~40歳で39分、41~50歳で40分、51歳以上で38分である。中学校では年齢によってあまり差はなく、30歳以下で17分、31~40歳で24分、41~50歳で24分、51歳以上で21分である(図2-5-10)。

勤務日における平均の残業時間と持帰り時間を比べると、小学校・中学校いずれにおいても、残業時間は年齢層が上がるにしたがって減少する。これに対して持帰り時間は30歳以下で最も時間が短く、その他の年齢ではあまり差がみられない(図2-5-9、図2-5-10)。

図2-5-10 勤務日・1日あたりの平均持帰り時間量(小・中学校 教諭の年齢別)



## 第6章 第6期(通常期)における勤務実態

### 1. 第6期の調査協力校の概況

第6期の調査期間は、平成18年11月20日(月)から平成18年12月17日(日)までの4週間である。

第6期において回答のあった小学校・中学校331校のうち、調査期間中に長期休業期を含んでいる学校は1校もなかった。そこでこれまでの第1期から第5期とは異なり、第6期については、調査協力校のデータを時期によって分割しないで分析を行った。つまり、第6期のデータはすべて通常期のデータである。

11月下旬から12月中旬というこの時期は、一般的に秋季の学校行事などがひと段落し、児童・生徒の冬季休業期を控え、学期終了に伴うさまざまな業務が増える時期であると考えられる。本章では、このような時期について報告を行うこととする。



## 2. 残業時間・持帰り時間および業務の内訳

### (1) 全体的な残業時間・持帰り時間の実態

まず、第6期(通常期)の勤務日における残業時間・持帰り時間の実態について、小学校、中学校、小学校と中学校の比較という順番で検討していこう(表2-6-1)。

小学校では、残業時間量は平均で1時間36分、持帰り時間量は平均38分、これらを合わせた時間は平均2時間15分である。

中学校では、残業時間量は平均2時間08分、持帰り時間量は平均24分、これらを合わせた時間は平均2時間32分となっている。

また、小学校と中学校を比べてみると、勤務日の残業時間の平均は中学校の方が小学校よりも32分長い。しかし、持帰り時間の平均は小学校のほうが14分長い。

次に、第6期(通常期)の休日における残業時間・持帰り時間の実態について、小学校、中学校、小学校と中学校の比較という順番で検討していこう(表2-6-2)。

小学校では、残業時間は平均で20分、持帰り時間は平均で1時間53分、これらを合わせた時間の平均は2時間13分である。休日の残業時間の中央値が0分であることからわかるように、小学校の教員は基本的には休日には学校で業務を行っていない(表2-6-2)。

中学校では、残業時間は平均1時間13分、持帰り時間は平均1時間51分、これらを合わせた時間の平均は3時間05分である。また、休日の残業時間の中央値と平均値に50分ほどのひらきがあり、持帰り時間の中央値と平均値には30分以上のひらきがあることからわかるように、中学校では残業や持帰り仕事をする人の間で時間量の差が大きい(表2-6-2)。これは後の図2-6-3や、図2-6-4からも確認できる。

小学校と中学校を比べてみると、休日における残業時間の平均は中学校の方が小学校よりも50分ほど長い。持帰り時間については、小学校と中学校でほぼ同じである。小学校と中学校それぞれの残業時間・持帰り時間における業務内訳については、後の第3項で述べるが、中学校においては部活動を行っているために休日の残業時間が長くなると考えられる。

以上、第6期(通常期)の勤務日と休日を比べてまとめておこう。

小学校の教員は、勤務日においては、残業時間の方が持帰り時間よりも1時間ほど長く(表2-6-1)、休日においては、持帰り時間の方が残業時間よりも1時間30分ほど長い(表2-6-2)。持帰り時間については、勤務日より休日の方が1時間15分長く、休日には学校で仕事をせず、自宅で持帰り仕事を行っている様子がうかがえる(表2-6-1、表2-6-2)。

中学校の教員は、勤務日においては、残業時間の方が持帰り時間よりも1時間40分ほど長く(表2-6-1)、休日においては、持帰り時間は残業時間よりも40分ほど長い(表2-6-1、表2-6-2)。持帰り時間については、勤務日より休日の方が1時間30分ほど長く、休日でも自宅で持帰り仕事を行っている様子がうかがえる(表2-6-1、表2-6-2)。

表2-6-1 勤務日・1日あたりの平均残業時間量・持帰り時間量

	残業時間量	持帰り時間量	残業時間+持帰り時間
小学校	1時間36分 〔1時間26分〕(1.020)	38分 〔22分〕(0.748)	2時間15分 〔2時間06分〕(1.250)
中学校	2時間08分 〔2時間00分〕(1.152)	24分 〔10分〕(0.586)	2時間32分 〔2時間24分〕(1.276)
全体	1時間53分 〔1時間44分〕(1.123)	30分 〔14分〕(0.678)	2時間24分 〔2時間16分〕(1.272)

[ ]内は中央値、( )内は標準偏差を示す。

表2-6-2 休日・1日あたりの平均残業時間量・持帰り時間量

	残業時間量	持帰り時間量	残業時間+持帰り時間
小学校	20分 〔0分〕(0.780)	1時間53分 〔1時間30分〕(1.743)	2時間13分 〔1時間56分〕(1.844)
中学校	1時間13分 〔26分〕(1.759)	1時間51分 〔1時間17分〕(1.960)	3時間05分 〔2時間43分〕(2.400)
全体	49分 〔0分〕(1.460)	1時間52分 〔1時間23分〕(1.862)	2時間41分 〔2時間16分〕(2.202)

[ ]内は中央値、( )内は標準偏差を示す。

(2)個人単位でみた残業時間・持帰り時間の実態

前項では、第6期(通常期)の教員全体における平均の残業時間量・持帰り時間量に注目した。しかし、すべての教員が一様に残業や持帰り仕事を行っているわけではなく、これらの時間は、教員間での差が大きいと考えられる。

そこで、第6期(通常期)における教員一人あたりの平均残業時間量および平均持帰り時間量の分布をみたものが、図2-6-1から図2-6-4である。

以下、勤務日と休日それぞれについて、残業時間、持帰り時間の順に、それぞれ小学校と中学校の結果を検討していく。

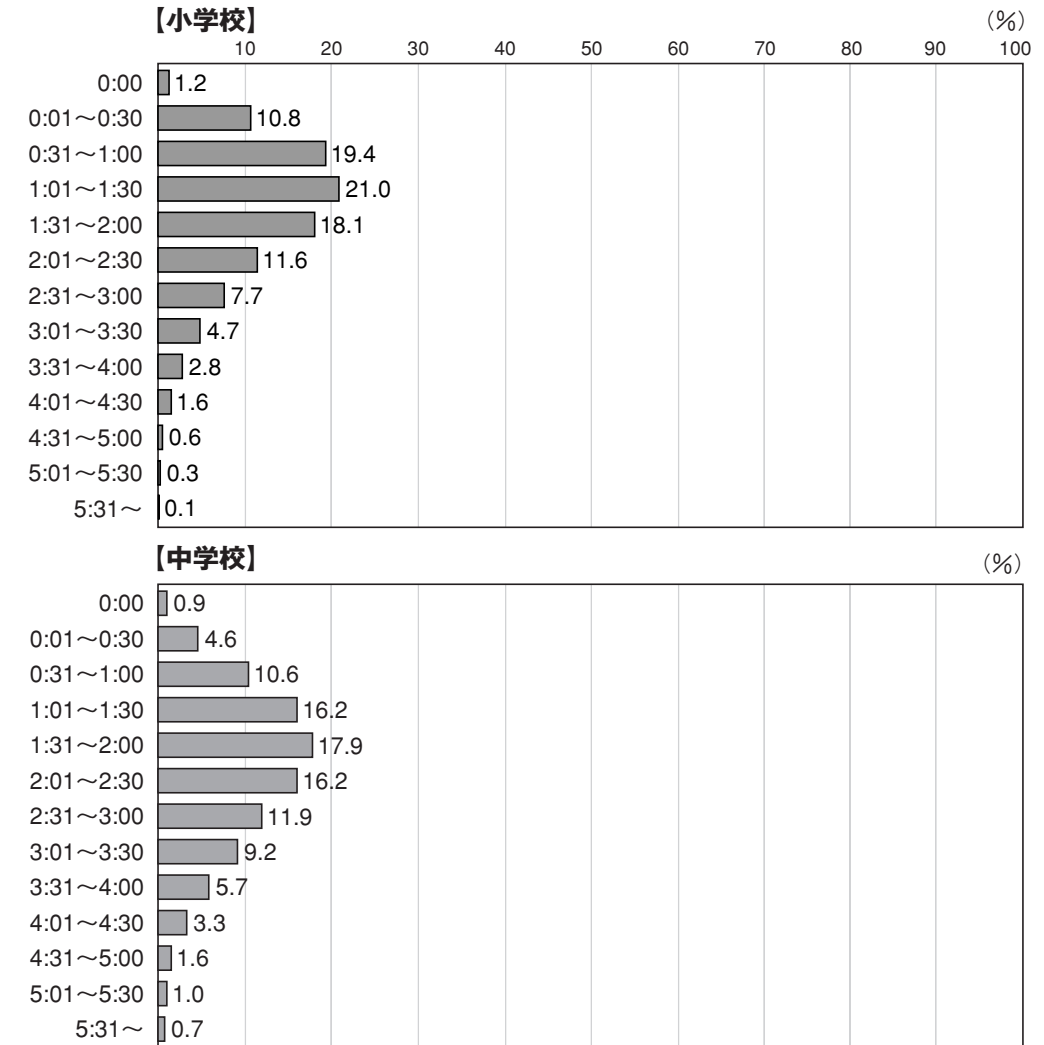
まず、第6期(通常期)の勤務日における平均残業時間量について検討しよう(図2-6-1)。

小学校の勤務日における平均残業時間の分布は、0分が1.2%で、残業を行わない教員はごく少数である。平均残業時間が30分以下(0分をのぞく)は10.8%、31分～1時間以下は19.4%となっており、3割の教員が1時間以下(0分をのぞく)の残業を行っている。残業が1時間01分～2時間以下の教員はおよそ4割、残業が2時間01分～3時間以下の教員は2割、3時間を超える教員は1割である。

中学校の勤務日における平均残業時間の分布は、0分が0.9%で、残業を行わない教員はごくわずかである。残業時間が30分以下(0分をのぞく)は4.6%、31分～1時間以下は10.6%となっており、約16%の教員が1時間以下(0分をのぞく)の残業を行っている。これに対して、平均残業時間が1時間01分～1時間30分以下の教員は16.2%、1時間31分～2時間以下の教員は17.9%、2時間01分～3時間以下の教員は28.1%、3時間を超える教員は2割ほどである。

以上から勤務日に残業を行わない教員は小学校においては1.2%、中学校においては0.9%となっており、残業を行う教員の多さが目立つことがわかる。しかし、残業時間については他の期に比べると必ずしも長くはなく、2時間以下(0分をのぞく)に小学校では7割、中学校では5割の教員が分布している。

図2-6-1 勤務日・1日あたりの平均残業時間量の分布



※時間量は「時間:分」を示す。たとえば「1:01～1:30」は「1時間01分～1時間30分」。

次に、第6期(通常期)の勤務日における平均持帰り時間量について検討しよう(図2-6-2)。

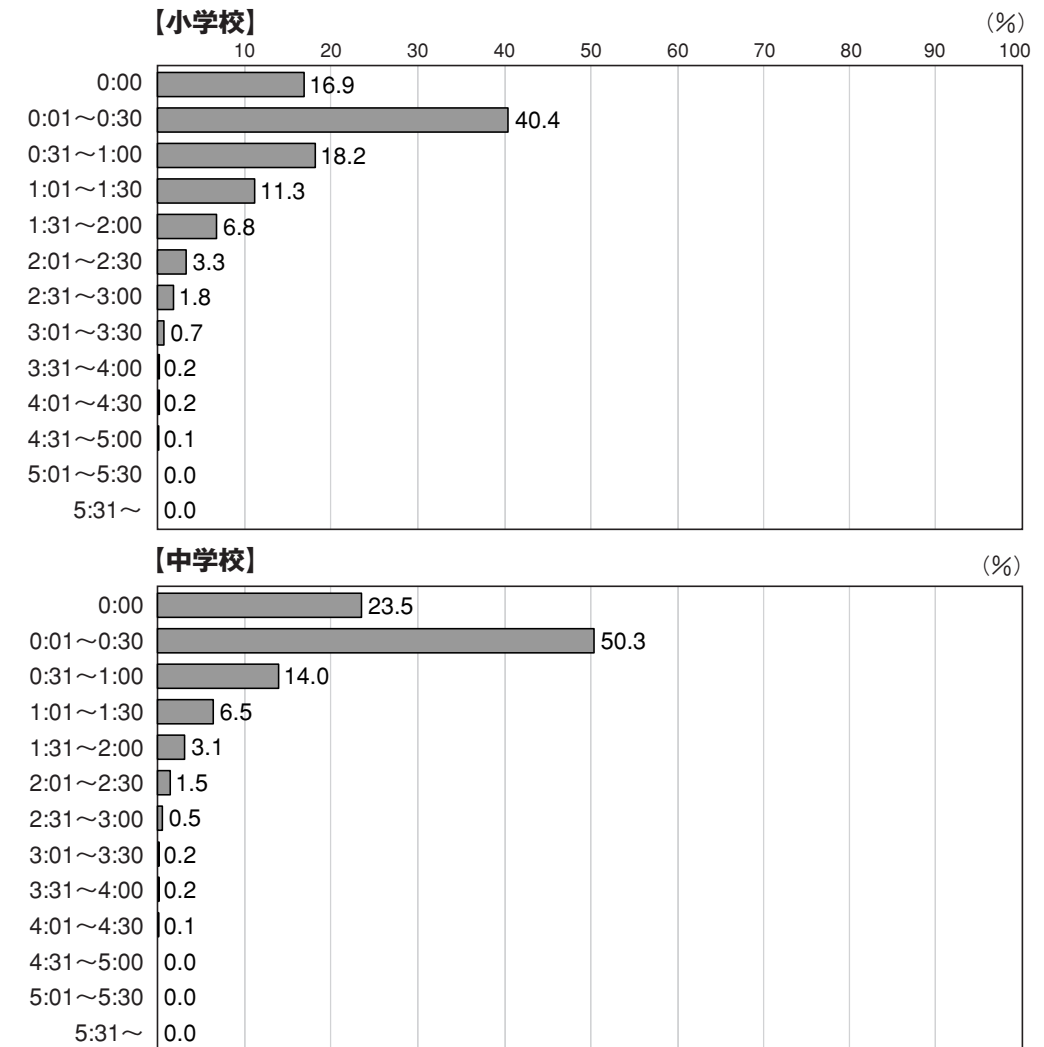
小学校の勤務日における平均持帰り時間の分布は、0分が16.9%で、持帰り仕事を行わない教員は2割弱である。持帰り時間が30分以下(0分をのぞく)は40.4%、31分～1時間以下は18.2%であり、6割弱の教員が1時間以下(0分をのぞく)の持帰り仕事をを行っている。1時間を超える持帰り仕事をを行っている教員は2割強である。

中学校の勤務日における平均持帰り時間の分布は、0分が23.5%で、持帰り仕事を行わない教員は2割強である。持帰り時間が30分以下(0分をのぞく)は50.3%、31分～1時間以下は14.0%であり、6割強の教員が1時間以下(0分をのぞく)の持帰り仕事をを行っている。1時間を超える持帰り仕事をを行っている教員は1割強である。

以上、第6期(通常期)の勤務日について、勤務日に持帰り仕事を行わない教員は小学校では2割弱、中学校では2割強いる。また、小学校・中学校いずれにおいても、6割前後の教員が1時間以下(0分をのぞく)の持帰り仕事をを行っている。

第6期(通常期)の勤務日の残業時間と持帰り時間の実態についてまとめると、残業をまったく行っていない教員は小学校においては1.2%、中学校においては0.9%であり、残業を行う教員は多い。残業時間については、小学校では2時間以下(0分をのぞく)に7割の教員が分布しており、中学校では2時間以下(0分をのぞく)に5割の教員が分布している(図2-6-1)。持帰り仕事については、まったく行っていない教員は小学校では約17%、中学校では約24%であり、小学校・中学校いずれにおいても、6割前後の教員が1時間以下(0分をのぞく)の持帰り仕事をを行っている(図2-6-2)。

図2-6-2 勤務日・1日あたりの平均持帰り時間量の分布



※時間量は「時間:分」を示す。たとえば「1:01~1:30」は「1時間01分~1時間30分」。

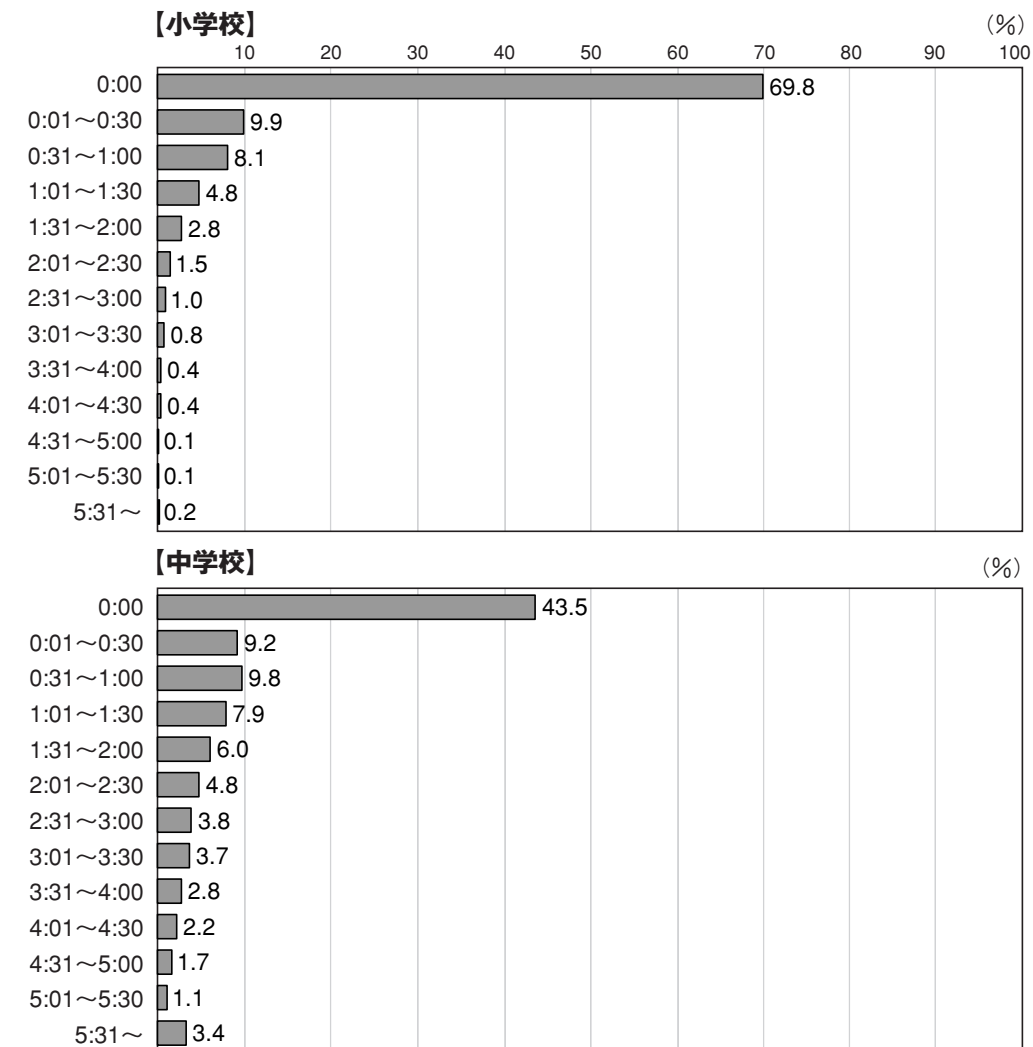
次に、第6期(通常期)の休日における平均残業時間量について検討しよう(図2-6-3)。

小学校の休日における平均残業時間の分布は、0分が69.8%で、勤務日(図2-6-1)と比べると、休日にはほとんどの教員が学校に出勤することはないといえる。1時間以下(0分をのぞく)の残業を行う教員はおよそ2割、1時間を超える残業を行う教員は1割強と、残業を行う教員も短い時間帯に集中している。

中学校の休日における平均残業時間の分布は、0分が43.5%であり、残る5割強の教員が休日にも学校に出勤して残業を行っている。また、小学校に比べると休日に残業を行う教員が多い。残業時間については1時間以下(0分をのぞく)の残業を行っている教員が2割、1時間01分~2時間以下の教員が約14%、2時間01分~3時間以下の教員が1割弱、3時間を超える教員は15%ほど存在する。この時間に行っている業務としては部活動などが考えられるが、実際に中学校の教員が休日の残業時間にどのような業務を行っているのかは、後の第3項において検討を行う。

以上をまとめると、第6期(通常期)の休日における平均残業時間について、休日に残業を行わない教員は小学校では7割、中学校では4割強存在する。小学校では残業時間が1時間以下(0分をのぞく)の教員がおよそ2割となっており、残業を行う教員についても、その時間は長くはない。中学校においては、残業時間の長さは教員間での差が大きく、1時間以下(0分をのぞく)の残業を行っている教員が2割ほどであるが、3時間を超える残業を行っている教員も15%ほど存在する。

図2-6-3 休日・1日あたりの平均残業時間量の分布



※時間量は「時間:分」を示す。たとえば「1:01~1:30」は「1時間01分~1時間30分」。

次に、第6期(通常期)の休日における平均持帰り時間量について検討しよう(図2-6-4)。

小学校の休日における平均持帰り時間の分布は、0分が15.2%で、持帰り仕事を行わない教員は約15%である。これは、勤務日(図2-6-2)と大きな差はない。他方、休日でも8割強の教員が持帰り仕事を行っており、その時間は教員によって差が大きい。持帰り時間が30分以下(0分をのぞく)の教員は12.1%、31分～1時間以下の教員は12.0%と、1時間以下(0分をのぞく)の教員が2割強である。1時間01分～2時間以下の教員は2割、2時間01分～3時間以下の教員は2割弱、3時間01分～4時間以下の教員が1割、4時間を超える教員が1割強いる。さらには5時間を超える持帰り仕事を行う教員も5%以上いる。

中学校の休日における平均持帰り時間の分布は、0分が18.9%で、持帰り仕事を行わない教員はおよそ2割である。これは、勤務日(図2-6-2)と大きな差はない。他方、休日でも8割以上の教員が持帰り仕事を行っており、その時間は教員によって差が大きい。持帰り時間が30分以下(0分をのぞく)の教員は13.9%、31分～1時間以下の教員は11.3%と、1時間以下(0分をのぞく)の持帰り仕事を行っている教員が2割強である。1時間01分～2時間以下の教員は2割、2時間01分～3時間以下の教員は1割強、3時間01分～4時間以下の教員は1割弱、4時間を超える持帰り仕事を行っている教員は1割強存在する。中には5時間を超える持帰り仕事を行っている教員も約8%存在する。

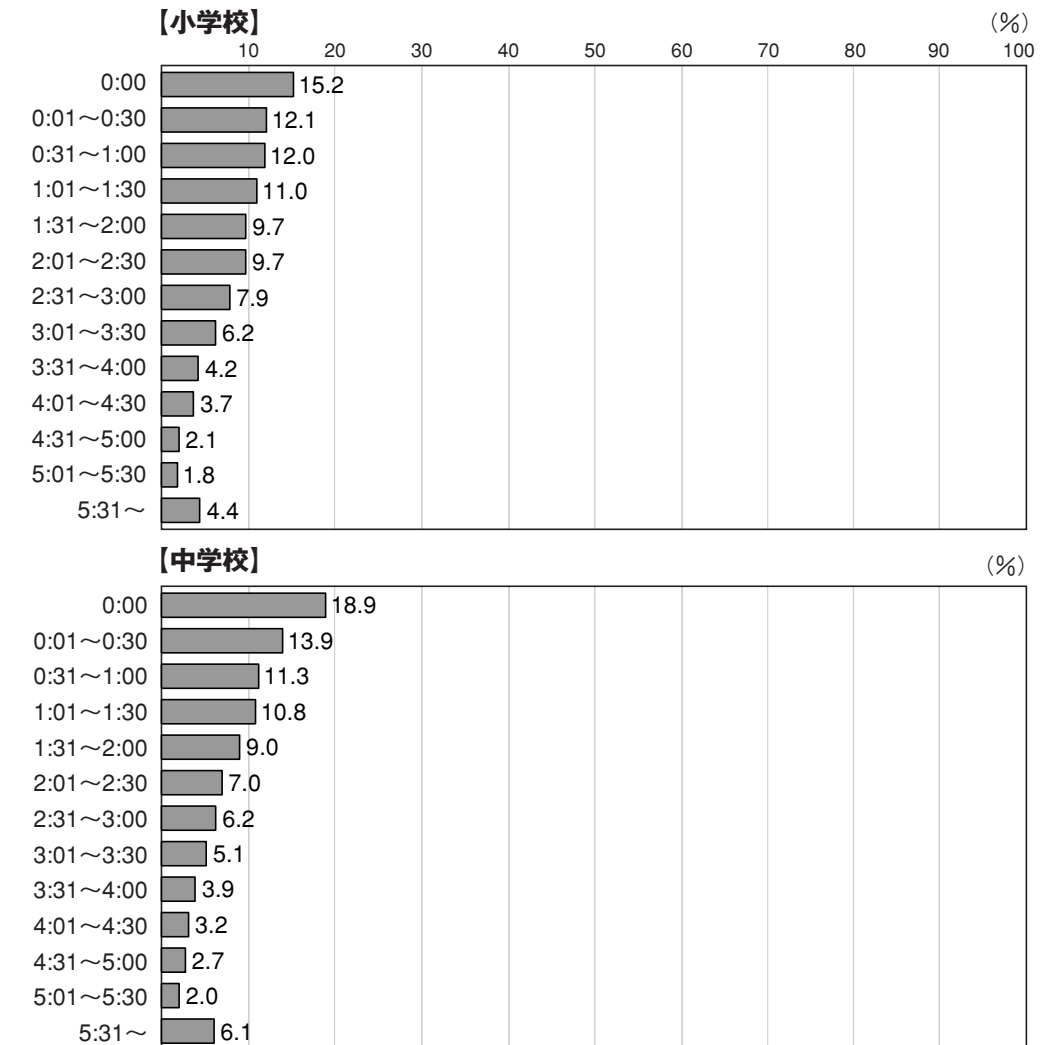
以上、第6期(通常期)の休日の持帰り時間について、休日に持帰り仕事を行わない教員は小学校では約15%、中学校ではおよそ2割存在する。また、小学校・中学校いずれにおいても、持帰り時間の分布は幅広く、1時間以下(0分をのぞく)の持帰り仕事を行っている教員が2割強、1時間01分～2時間以下の教員は2割、2時間01分～3時間以下の教員は1割強～2割弱、3時間を超える教員が2割強いる。

第6期(通常期)の休日の残業時間・持帰り時間の実態についてまとめると、残業時間については、休日に残業を行わない教員は小学校では7割、中学校では4割強存在する。残業を行う教員についても、1時間以下(0分をのぞく)の残業を行う教員の割合が小学校・中学校いずれにおいてもおよそ2割で、残業時間は長くはない(図2-6-3)。持帰り時間については、休日に持帰り仕事を行わない教員は小学校では約15%、中学校ではおよそ2割いる。持帰り仕事を行う教員においては、その時間は、小学校・中学校いずれにおいても幅広く分散しており、1時間以下(0分をのぞく)と持帰り時間が比較的短い教員と、持帰り時間が3時間を超える教員はほぼ同じ割合存在する(図2-6-4)。

以上から、次のことが指摘できる。

第6期(通常期)においては、勤務日に残業を行っていない教員は、小学校においては1.2%、中学校においては0.9%とごくわずかであることが特徴的である。しかし、残業時間については、他の期に比べると必ずしも長くはなく、2時間以下(0分をのぞく)に、小学校では7割、中学校では5割の教員が分布している(図2-6-1)。休日に残業を行わない教員は小学校では7割、中学校では4割強存在する。小学校では休日に残業を行う場合でも、その時間は必ずしも長くはない。中学校においては、残業時間の長さは教員間での差が大きい(図2-6-3)。持帰り仕事を行う教員の割合は、小学校・中学校のいずれにおいても、勤務日(図2-6-2)と休日(図2-6-4)ともにおよそ8割である。小学校・中学校いずれにおいても、勤務日の持帰り時間は6割前後が1時間以下(0分をのぞく)に集中し(図2-6-2)、休日の持帰り時間は1時間30分以下(0分をのぞく)に3割強の教員が分布している(図2-6-4)。

図2-6-4 休日・1日あたりの平均持帰り時間量の分布



※時間量は「時間:分」を示す。たとえば「1:01~1:30」は「1時間01分~1時間30分」。

(3) 残業時間・持帰り時間における業務内訳

前項では、第6期(通常期)における教員一人あたりの平均の残業時間量・持帰り時間量の分布について注目したが、本項ではこれらの時間にどのような業務を行っているのか、業務の内訳を検討する。

第6期(通常期)における勤務日と休日それぞれについて、残業時間、持帰り時間の順に、小学校と中学校のそれぞれで業務の上位5種類の内訳を検討していこう。

まず、第6期(通常期)の勤務日について検討しよう(表2-6-3、表2-6-4)。

平均残業時間における業務内訳については、小学校において最も長いのは、授業準備で22分である。2番目に長いのは成績処理で21分、つづいて事務・報告書作成が9分、学校経営が7分、会議・打合せが7分となっている。成績処理が上位に入っているのは、第6期(通常期)の時期的特徴であると考えられる。中学校において最も長いのは成績処理で31分である。2番目に長いのは授業準備で19分、つづいて会議・打合せで11分、事務・報告書作成11分、部活動・クラブ活動9分となっている。ここから、小学校・中学校ともに残業時間における業務内訳は、授業準備と事務的な業務が中心となっているといえる。特に成績処理が長いのは、冬季休業期を控えているためだと思われる。また、中学校では第1期から第5期には常に上位に入っていた部活動・クラブ活動の順位が低下している(表2-6-3)。これは、日没の早くなる冬季には他の調査時期に比べて部活動・クラブ活動の時間が短縮されることや、成績処理など他の業務の時間が長くなっていることが原因だと考えられる。

平均持帰り時間における業務内訳については、小学校において最も長いのは成績処理で16分である。2番目に長いのは授業準備で11分、つづいて学年・学級経営と事務・報告書作成2分、その他の校務1分となっている。中学校においても最も長いのは成績処理で10分である。2番目に長い業務は授業準備で5分、つづいて事務・報告書作成、その他の校務、学年・学級経営1分であり、事務的な業務が中心であるといえる(表2-6-4)。

表2-6-3 勤務日の平均残業時間における業務内訳

	小学校		中学校		全体	
1	授業準備	22分	成績処理	31分	成績処理	26分
2	成績処理	21分	授業準備	19分	授業準備	21分
3	事務・報告書作成	9分	会議・打合せ	11分	事務・報告書作成	10分
4	学校経営	7分	事務・報告書作成	11分	会議・打合せ	9分
5	会議・打合せ	7分	部活動・クラブ活動	9分	学校経営	8分

表2-6-4 勤務日の平均持帰り時間における業務内訳

	小学校		中学校		全体	
1	成績処理	16分	成績処理	10分	成績処理	13分
2	授業準備	11分	授業準備	5分	授業準備	7分
3	学年・学級経営	2分	事務・報告書作成	1分	事務・報告書作成	2分
4	事務・報告書作成	2分	その他の校務	1分	学年・学級経営	2分
5	その他の校務	1分	学年・学級経営	1分	その他の校務	1分

次に、第6期(通常期)の休日について検討しよう(表2-6-5、表2-6-6)。

平均残業時間における業務内訳については、小学校では成績処理が最も長く5分、以下、授業準備が3分、保護者・PTA対応と事務・報告書作成が2分、その他の校務1分とつづく。中学校では部活動・クラブ活動が最も長く46分、以下、成績処理10分、授業準備3分、事務・報告書作成、その他の校務2分とつづく(表2-6-5)。小学校・中学校いずれにおいても、成績処理、事務・報告書作成が上位に入っているのは、冬季休業期を控えた第6期(通常期)の時期的特徴であると考えられる。

平均持帰り時間における業務内訳については、小学校では成績処理が最も長く56分、つづいて授業準備が24分、事務・報告書作成が8分、学年・学級経営が6分、その他の校務が4分である。中学校でも成績処理が最も長く38分、つづいて部活動・クラブ活動が35分、授業準備が12分、事務・報告書作成が6分、その他の校務が4分である。成績処理、事務・報告書作成、学年・学級経営の時間の長さは、冬季休業期を控えているからだと考えられる(表2-6-6)。

表2-6-5 休日の平均残業時間における業務内訳

	小学校		中学校		全体	
1	成績処理	5分	部活動・クラブ活動	46分	部活動・クラブ活動	25分
2	授業準備	3分	成績処理	10分	成績処理	7分
3	保護者・PTA対応	2分	授業準備	3分	授業準備	3分
4	事務・報告書作成	2分	事務・報告書作成	2分	事務・報告書作成	2分
5	その他の校務	1分	その他の校務	2分	保護者・PTA対応	2分

表2-6-6 休日の平均持帰り時間における業務内訳

	小学校		中学校		全体	
1	成績処理	56分	成績処理	38分	成績処理	46分
2	授業準備	24分	部活動・クラブ活動	35分	部活動・クラブ活動	19分
3	事務・報告書作成	8分	授業準備	12分	授業準備	18分
4	学年・学級経営	6分	事務・報告書作成	6分	事務・報告書作成	7分
5	その他の校務	4分	その他の校務	4分	学年・学級経営	4分

### 3. 属性別にみた残業時間・持帰り時間

前節では、第6期(通常期)における平均の残業時間量・持帰り時間量の全体像を検討した。

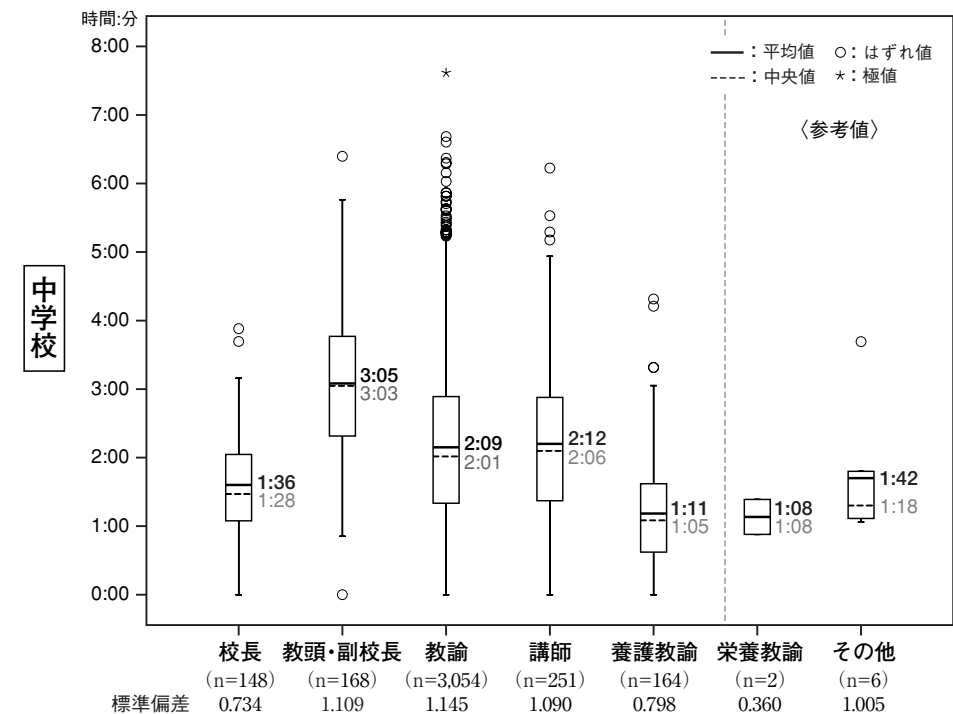
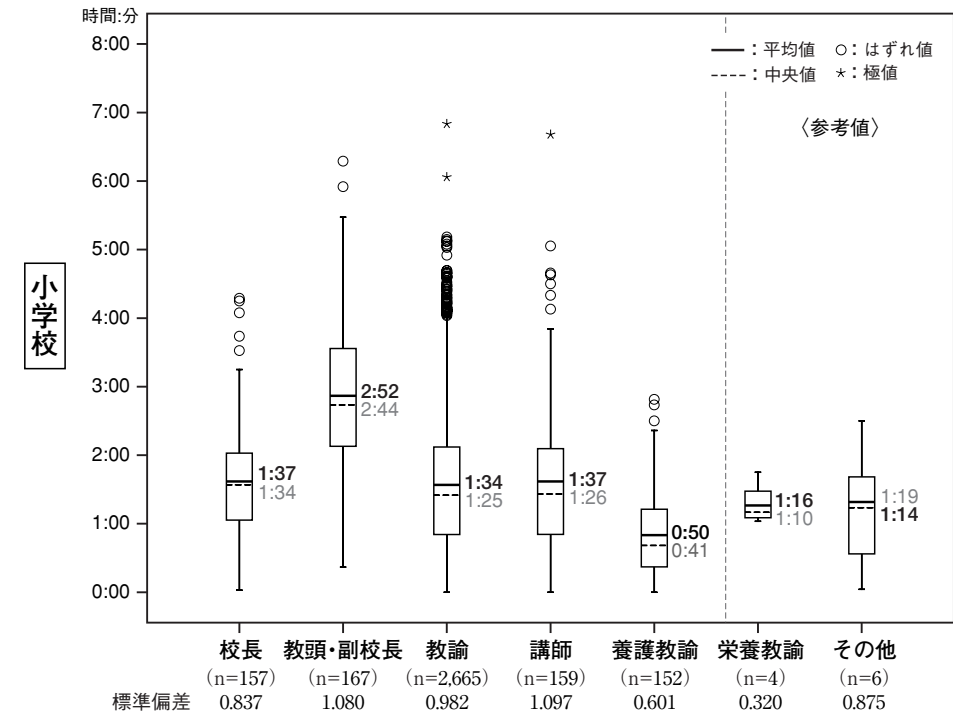
しかし、一人一人の残業時間量・持帰り時間量や、正規の勤務時間に処理できない業務を学校で行うのか、自宅で持帰り仕事として行うのかといった勤務実態は、教員の性別や職階、年齢などの属性によって異なると考えられる。

そこで本節では、特に勤務日に絞り、属性別(職階別、性別、年齢別)に残業時間量・持帰り時間量の実態を明らかにする。

まずは職階別に、平均残業時間量、平均持帰り時間量の順に、小学校と中学校のそれぞれについて検討しよう。

第6期(通常期)の勤務日における平均残業時間量は、図2-6-5の通り、小学校の教頭・副校長は2時間52分、中学校の教頭・副校長は3時間05分であり、他の職階に比べて大幅に長くなっている。その他の職階については、小学校では校長は1時間37分、教諭は1時間34分、講師は1時間37分、養護教諭は50分であり、養護教諭でやや短いほかは、職階による違いはほとんどない。中学校では校長は1時間36分で、教諭は2時間09分、講師は2時間12分、養護教諭は1時間11分である。

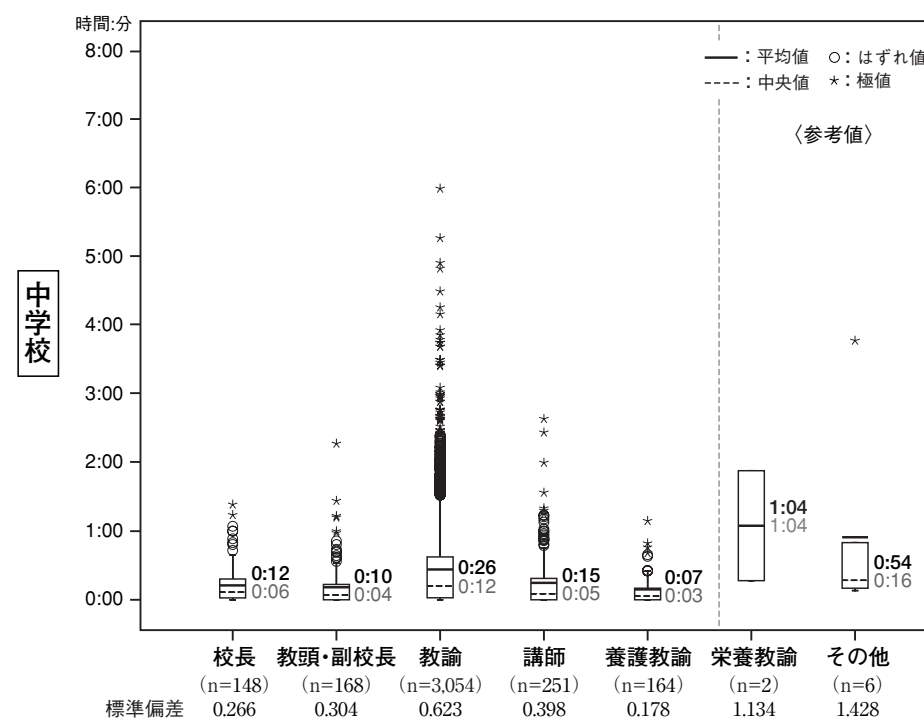
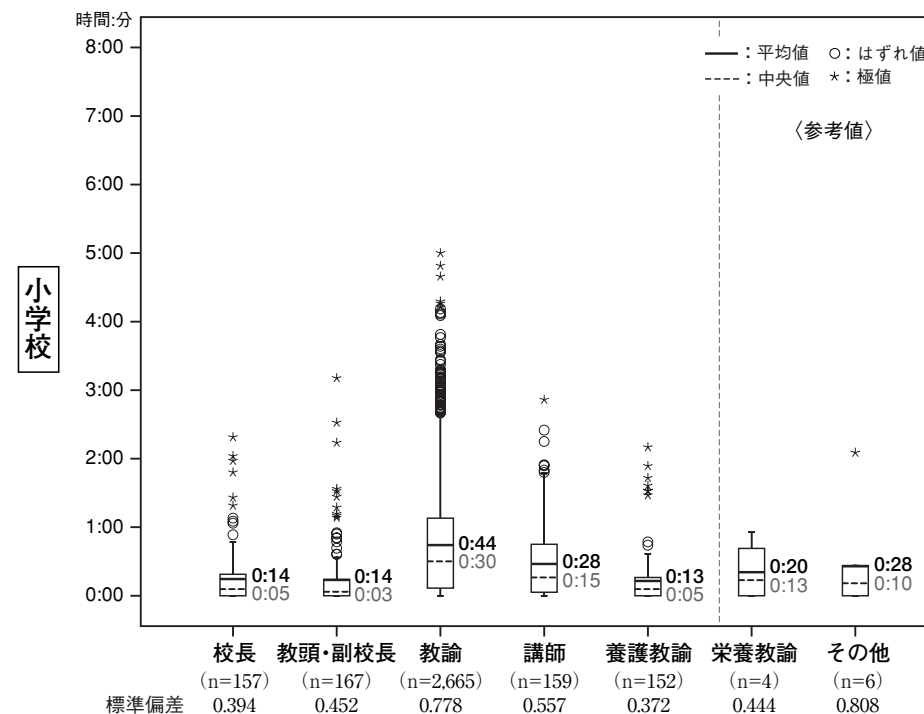
図2-6-5 勤務日・1日あたりの平均残業時間量(小・中学校 職階別)



第6期(通常期)の勤務日における平均持帰り時間量は、図2-6-6のように、小学校・中学校ともに教諭で最も長くなっている。しかし、教諭をのぞく他の職階においては差はほとんどなく、小学校では、教諭44分に対して校長、教頭・副校長14分、講師28分、養護教諭13分である。中学校では、教諭26分に対して校長12分、教頭・副校長10分、講師15分、養護教諭7分である。

図2-6-5と図2-6-6の比較から、勤務日においては、学校では教頭・副校長が長く残業を行うが、自宅での持帰り仕事は教諭が長く、他の職階においては違いはあまりないといえる。

図2-6-6 勤務日・1日あたりの平均持帰り時間量(小・中学校 職階別)





次に、性別ごとに平均残業時間量、平均持帰り時間量の順に、小学校と中学校それぞれについて検討しよう。

第6期(通常期)の勤務日における平均残業時間量は図2-6-7の通り、小学校・中学校ともに男性教員の方が女性教員よりも25分ほど長くなっている(平均値は次の通り/小学校:男性教員 1時間52分、女性教員 1時間28分、中学校:男性教員 2時間19分、女性教員 1時間54分)。

これに対して平均持帰り時間量は図2-6-8の通り、小学校・中学校いずれにおいても男性教員よりも女性教員の方が長い、その差はあまりない(平均値は次の通り/小学校:男性教員 34分、女性教員 41分、中学校:男性教員 22分、女性教員 25分)。

図2-6-7 勤務日・1日あたりの平均残業時間量(小・中学校 性別)

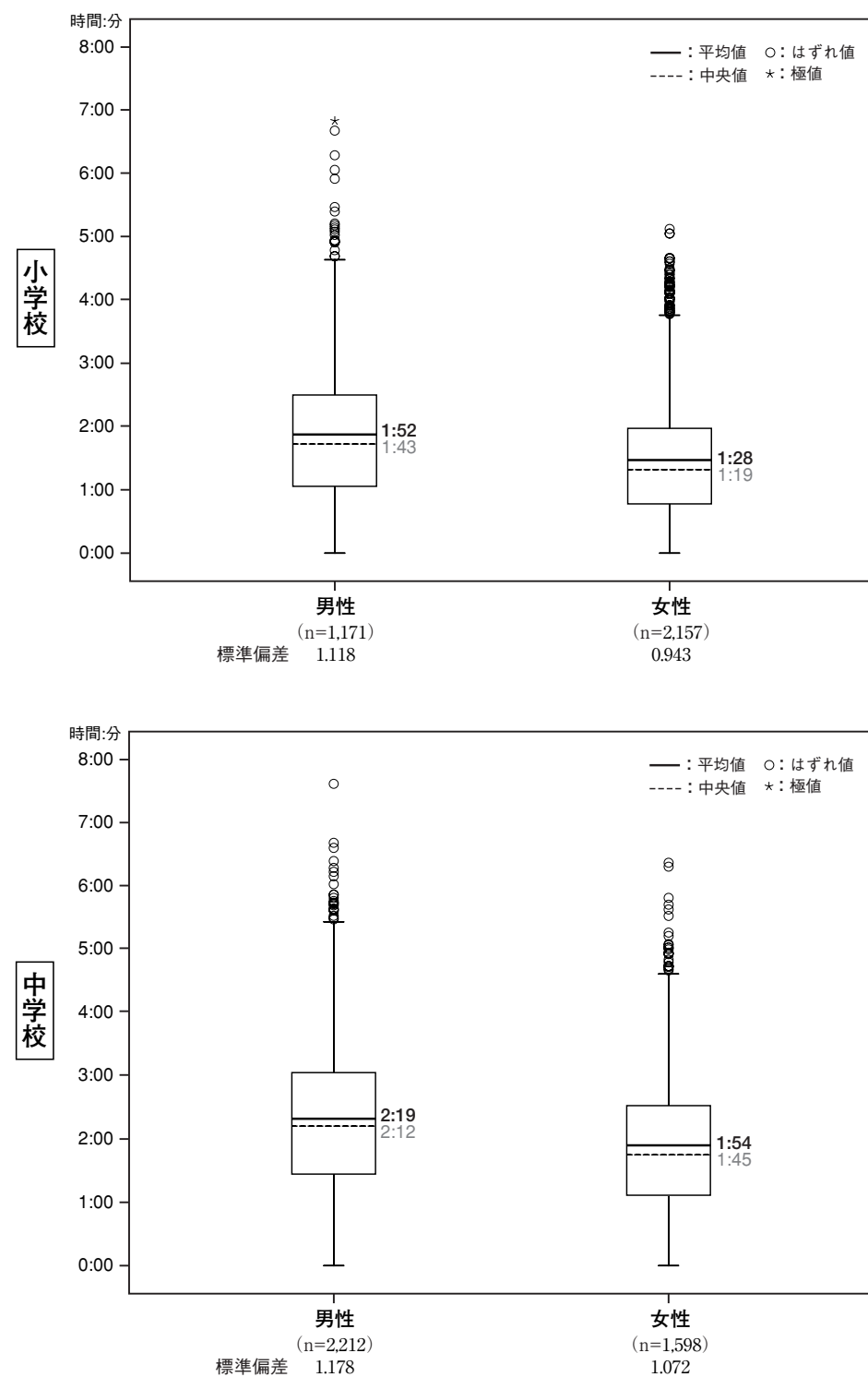
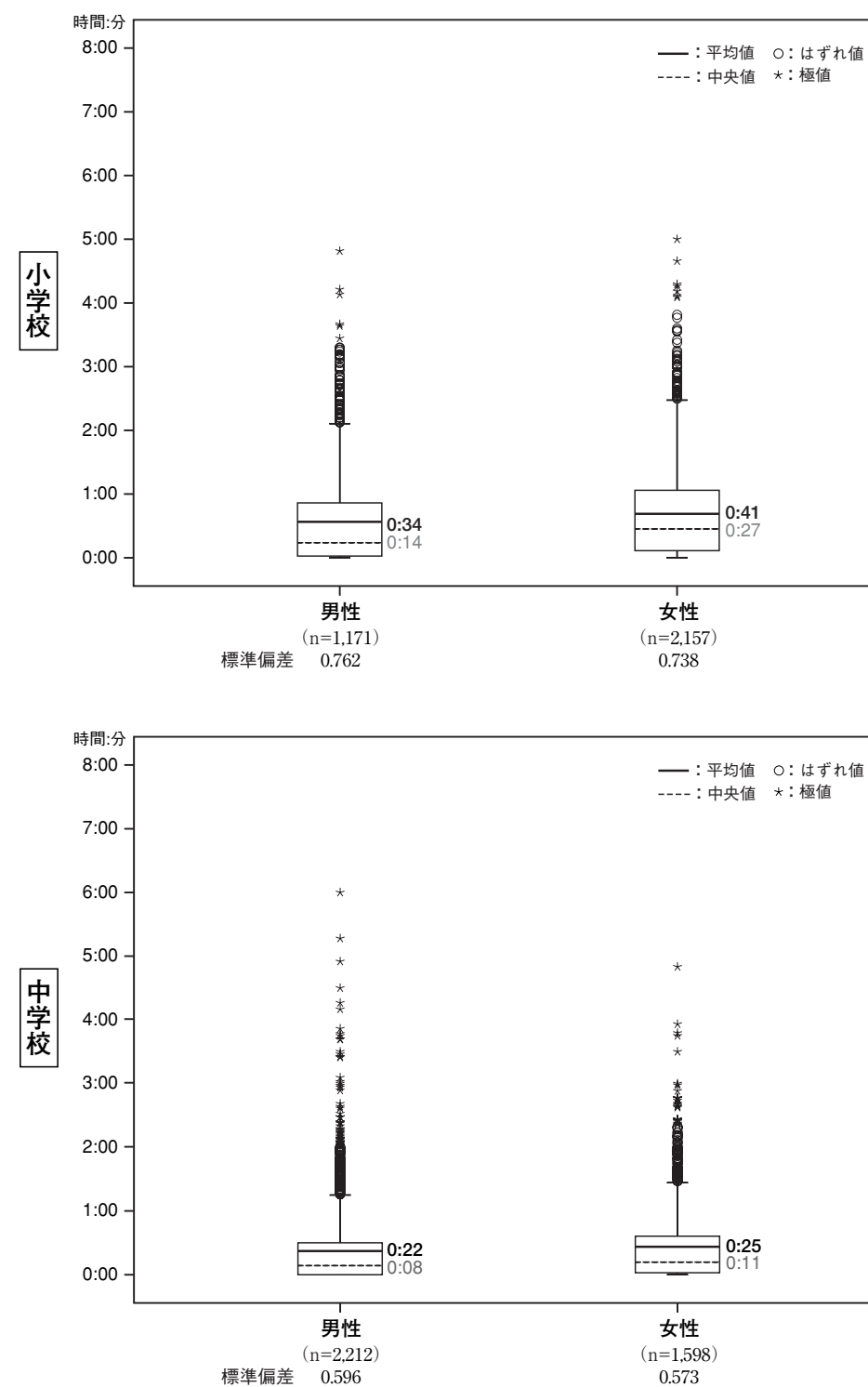


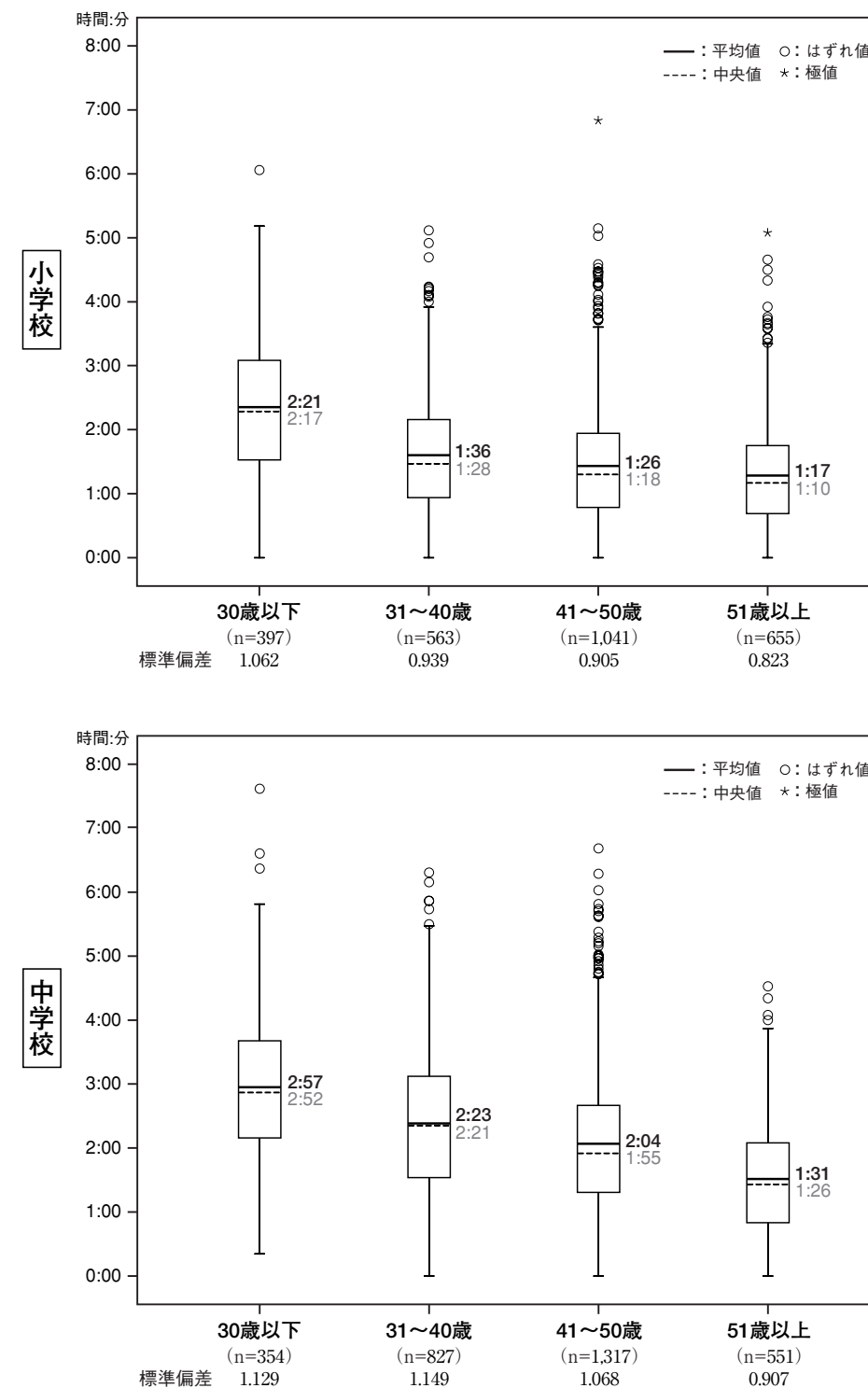
図2-6-8 勤務日・1日あたりの平均持帰り時間量(小・中学校 性別)



最後に、年齢別に平均の残業時間量・持帰り時間量の実態を検討しよう。ただし、この場合、職階の影響をのぞく必要がある。たとえば 51歳以上には管理職が多く、この年齢層で残業時間・持帰り時間が長い場合は、年齢の影響だけではなく職階の影響も考えられる。そこで、教諭のみを取り出し、教諭の年齢別で残業時間、持帰り時間の順に、小学校と中学校について分析を行う。

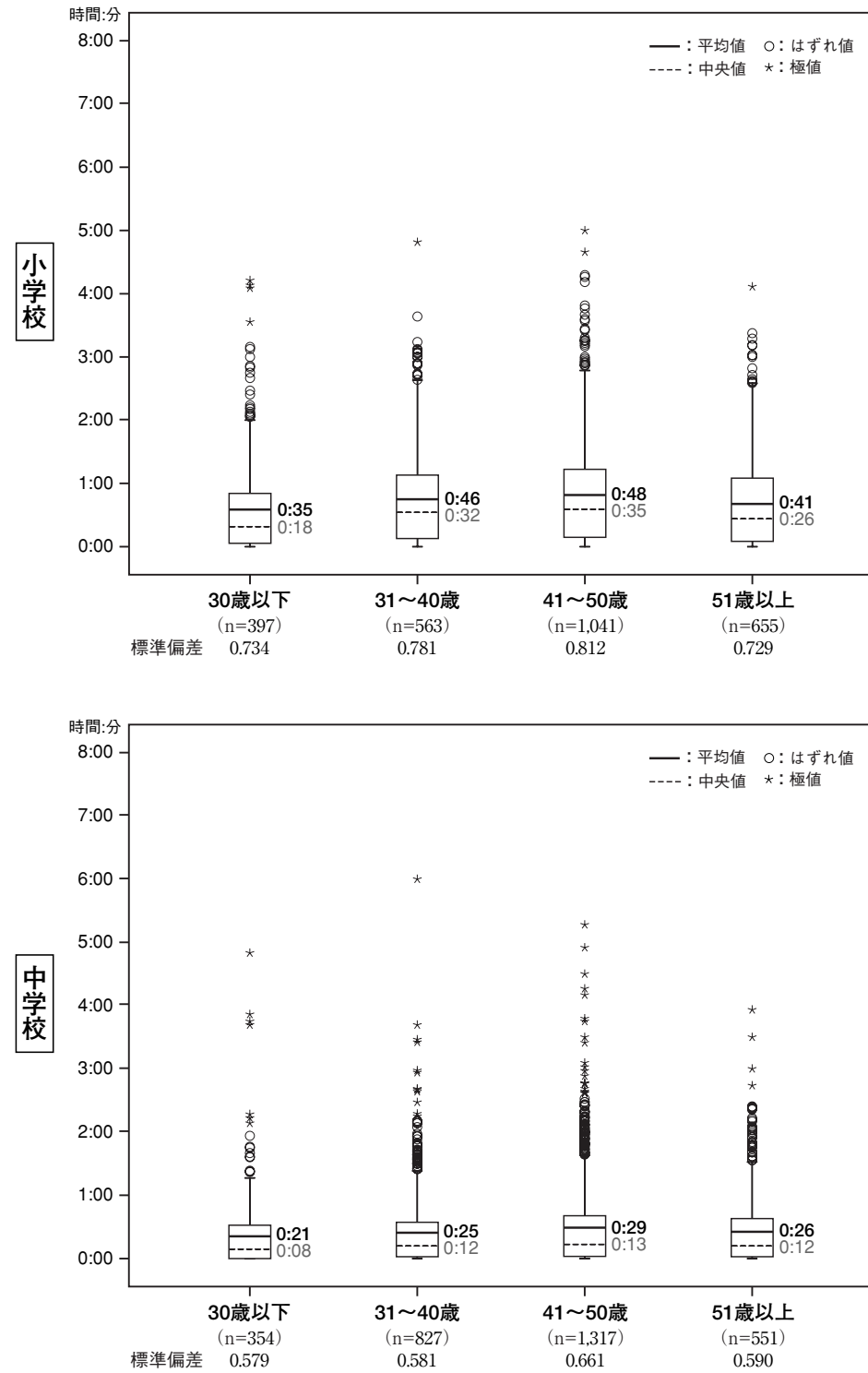
第6期(通常期)の勤務日における教諭の平均残業時間量は、小学校・中学校ともに30歳以下で最も長く、小学校では2時間21分、中学校では2時間57分である(図2-6-9)。しかし、年齢層が上がるにつれて残業時間は減少する。小学校では31~40歳で1時間36分、41~50歳で1時間26分、51歳以上で1時間17分である。中学校では31~40歳で2時間23分、41~50歳で2時間04分、51歳以上で1時間31分である。ここから、年齢層の高い、いわゆるベテラン教諭になるほど平均残業時間が減少していくといえる。この原因は、経験を積むことによって授業などの準備時間が短縮されることや、若い年齢層ほど部活動などの業務が任せられることなどが考えられる。

図2-6-9 勤務日・1日あたりの平均残業時間量(小・中学校 教諭の年齢別)



第6期(通常期)の勤務日における教諭の平均持帰り時間量は、小学校・中学校ともに41～50歳の教諭で最も長く、小学校では48分、中学校では29分である。小学校では30歳以下で35分、31～40歳で46分、51歳以上で41分である。中学校では30歳以下で21分、31～40歳で25分、51歳以上で26分である。小学校と中学校を比べると、全体的に小学校教諭の持帰り時間がやや長くなっている。

図2-6-10 勤務日・1日あたりの平均持帰り時間量(小・中学校 教諭の年齢別)



## 第7章 通期でみた教員の勤務実態

以上、第2部の第1章から第6章では、第1期から第6期の調査時期それぞれ(以下、「各期」)における教員の勤務実態について紹介してきた。本章では、第1期から第6期までの調査期間全体(以下、「通期」)を概観して、教員の勤務実態についての検討を行う。

第2部「調査の概要」の第10節第3項でも述べたように、本調査は、各期においてそれぞれ異なる教員を対象としているため、厳密に言えば、各期の結果を並べてみても、同一対象の勤務実態の時期的な変化をとらえたということにはならない。しかしながら、回答者数が非常に多いことや、第1期から第6期の勤務実態が、時期的な特徴を反映した結果となっていることから、通期としての勤務実態のおおまかな傾向をとらえることも可能であると考え、参考値として分析を行うこととする。このような限界を踏まえ、以下で「推移」や「変化」という言葉を使用する場合は、あくまでも便宜的かつ限定的な意味合いで用いることを、あらかじめ断っておく。

本章では、1. 通期でみた残業時間・持帰り時間の実態、2. 職階別にみた労働時間の実態についてみる。

なお、本章では、調査時期の表記については、「第1期」「第2期」のように、通常期と夏季休業期を付記せずにあらわす。しかし、実際に用いるデータは第2期のみ夏季休業期であり、第2期以外は通常期をあらわす。つまり、第1章から第6章で使用したデータと同じデータを用い、正確には各期は「第1期(通常期)」 「第2期(夏季休業期)」 「第3期(通常期)」 「第4期(通常期)」 「第5期(通常期)」 「第6期(通常期)」を意味する。

### 1. 通期でみた残業時間・持帰り時間の実態

本節では、勤務日や休日における教員全体の残業時間・持帰り時間の推移と業務の内訳を検討する。これは各章でみた実態の整理になるが、教員が正規の勤務時間以外の時間帯に、どのような業務をどれだけ行っているのか、あらためてその時期的な傾向をつかんでおこう。小学校の勤務日と休日、次に中学校の勤務日と休日という順に検討していく。

(1)小学校における勤務日の残業時間・持帰り時間の実態

それでは、小学校の教員の勤務日における平均残業時間量および平均持帰り時間量の推移について検討しよう(図2-7-1)。

第2期においては、残業時間は平均で21分、持帰り時間は平均で15分と他の時期に比べて短くなっている。しかし、第2期以外、つまり通常期においては、残業時間はおおむね1時間30分～2時間、持帰り時間は30～50分で、時期的な変化は大きくはない。

つまり、通期でみた場合、通常期と夏季休業期との間には繁閑の差があるが、通常期における時期的な繁閑の差は大きくはなく、通常期の勤務日であればおおむね1時間30分～2時間の残業を行う傾向にあるといえる。ただし、大型の長期休業期の前には繁忙になると考えられる。第1期において、残業時間が他の通常期に比べてやや長くなっているのは、次にみるように、3学期制の学校は学期末であることにともない、成績処理などの業務が増えるためであるといえる(図2-7-1)。

では、小学校の教員は、勤務日における残業時間・持帰り時間にはどのような業務を行っているのか、主要な業務の内訳について検討しよう(表2-7-1、表2-7-2)。

まず、勤務日の残業時間における業務の内訳について検討しよう(表2-7-1)。

第2期以外の時期、つまり通常期においては、成績処理と授業準備が常に上位に入る主要な業務である。通常期の各期において、成績処理は10～30分、授業準備は20～30分行われている。特に第1期は夏季休業前であるため、成績処理が28分と、他の時期に比べて長くなっている。これに対して第2期には成績処理は上位5位までの業務には入っておらず、その他の校務が上位に入っている。これは、長期休業期には基本的に授業や試験などがなく、また、教員が研修などに参加することが多くなることを反映していると考えられる。その他には事務・報告書作成が通常期の各期で10分ほど行われている。

次に、勤務日の持帰り時間における業務の内訳についてみてみよう(表2-7-2)。

各期とも、授業準備が常に上位に入る業務であり、5～15分行われている。また、第2期をのぞいて成績処理も上位に入る主要な業務であり、10分弱～20分ほど行われている。特に第1期には成績処理が24分と長く、残業時間における内訳とあわせてみると、夏季休業期前には正規の勤務時間以外(残業時間・持帰り時間)に50分以上の成績処理を行っていることになる。また、事務・報告書作成は各期とも2～3分行われている。

図2-7-1 勤務日・1日あたりの平均残業時間量・持帰り時間量(通期・小学校教員全体)

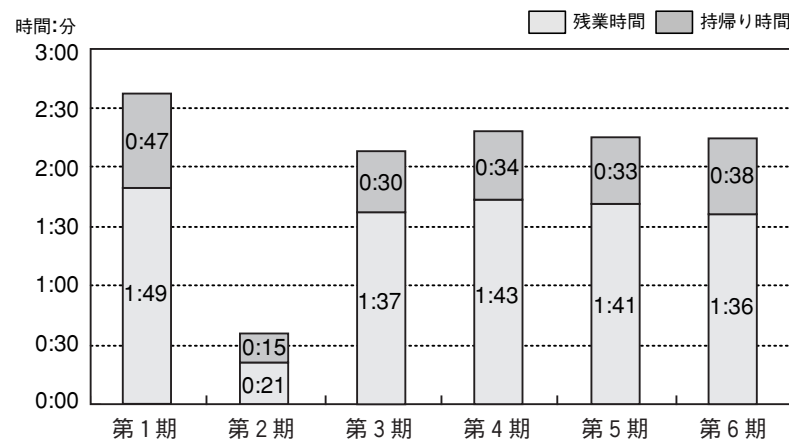


表2-7-1 勤務日の平均残業時間における業務内訳(通期・小学校教員全体)

	第1期 (7/3～7/30)		第2期 (7/31～8/27)		第3期 (8/28～9/24)	
	業務	時間	業務	時間	業務	時間
1	成績処理	28分	その他の校務	4分	授業準備	22分
2	授業準備	18分	事務・報告書作成	3分	成績処理	11分
3	事務・報告書作成	12分	学校経営	2分	学校行事	9分
4	学校経営	9分	学校行事	2分	事務・報告書作成	8分
5	その他の校務	7分	授業準備	1分	学校経営	8分

	第4期 (9/25～10/22)		第5期 (10/23～11/19)		第6期 (11/20～12/17)	
	業務	時間	業務	時間	業務	時間
1	授業準備	27分	授業準備	30分	授業準備	22分
2	成績処理	13分	成績処理	11分	成績処理	21分
3	事務・報告書作成	9分	事務・報告書作成	9分	事務・報告書作成	9分
4	会議・打合せ	8分	会議・打合せ	7分	学校経営	7分
5	学校経営	8分	学校経営	7分	会議・打合せ	7分

表2-7-2 勤務日の平均持帰り時間における業務内訳(通期・小学校教員全体)

	第1期 (7/3～7/30)		第2期 (7/31～8/27)		第3期 (8/28～9/24)	
	業務	時間	業務	時間	業務	時間
1	成績処理	24分	授業準備	4分	授業準備	11分
2	授業準備	9分	その他の校務	3分	成績処理	6分
3	学年・学級経営	4分	事務・報告書作成	2分	学年・学級経営	3分
4	事務・報告書作成	3分	学年・学級経営	0分	事務・報告書作成	2分
5	その他の校務	1分	学校経営	0分	その他の校務	1分

	第4期 (9/25～10/22)		第5期 (10/23～11/19)		第6期 (11/20～12/17)	
	業務	時間	業務	時間	業務	時間
1	授業準備	13分	授業準備	15分	成績処理	16分
2	成績処理	8分	成績処理	6分	授業準備	11分
3	学年・学級経営	3分	学年・学級経営	3分	学年・学級経営	2分
4	事務・報告書作成	2分	事務・報告書作成	2分	事務・報告書作成	2分
5	その他の校務	1分	その他の校務	1分	その他の校務	1分

(2)小学校における休日の残業時間・持帰り時間の実態

次に、小学校の教員の休日における平均残業時間量および平均持帰り時間量の推移について検討しよう(図2-7-2)。

第2期においては残業時間は平均で7分、持帰り時間は平均で34分と、他の時期に比べてやや短い。しかし、第2期以外、つまり通常期においては残業時間はおおむね15~30分で時期的な変化はほとんどなく、小学校教員は休日に学校で仕事をする事は少ないといえる。これに対して持帰り時間は時期による違いが大きく、第3期から第5期においては1時間20分ほどであるのに対し、第1期と第6期には2時間弱~2時間30分ほどと他の時期に比べて長い。これは長期休業期前であるためだと考えられる。

では、小学校の教員は、休日における残業時間・持帰り時間にはどのような業務を行っているのか、主要な業務の内訳について検討しよう(表2-7-3、表2-7-4)。

まず、休日の残業時間における業務の内訳について検討しよう(表2-7-3)。

成績処理や授業準備は、休日においても勤務日と同様に上位には入る業務であるが、第1期の成績処理が11分である以外には、特に長いとはいえない。事務・報告書作成は第3期をのぞき、各期で0~2分行われている。勤務日の残業と比較して休日の残業に特徴的なのは、保護者・PTA対応や部活動・クラブ活動、地域対応など、児童や保護者、地域を対象にした業務である。

次に、休日の持帰り時間における業務の内訳について検討しよう(表2-7-4)。

各期とも、授業準備が常に上位に入る業務であるが、その時間には時期的な違いがある。第3期から第6期には授業準備は30分ほど行われているが、第1期には授業準備は15分ほどで、成績処理が91分と長い。第2期は基本的に授業も試験もない期間だが、授業準備は9分行われている。また、夏季休業期前である第1期と冬季休業期前である第6期の成績処理の業務の長さが注目される。その他には事務・報告書作成が第2期をのぞき、各期とも7~9分行われている。

図2-7-2 休日・1日あたりの平均残業時間量・持帰り時間量(通期・小学校教員全体)

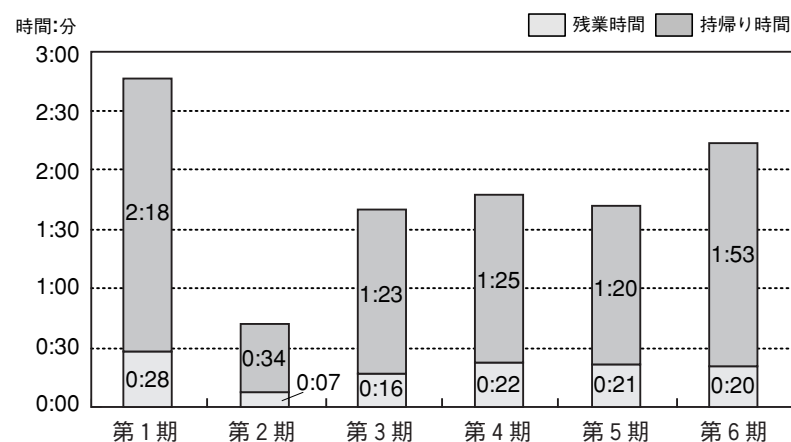


表2-7-3 休日の平均残業時間における業務内訳(通期・小学校教員全体)

	第1期 (7/3~7/30)		第2期 (7/31~8/27)		第3期 (8/28~9/24)	
	業務	時間	業務	時間	業務	時間
1	成績処理	11分	その他の校務	1分	成績処理	2分
2	事務・報告書作成	2分	保護者・PTA対応	1分	授業準備	2分
3	保護者・PTA対応	2分	事務・報告書作成	0分	保護者・PTA対応	1分
4	部活動・クラブ活動	1分	学校経営	0分	その他の校務	1分
5	学校経営	1分	部活動・クラブ活動	0分	地域対応	1分

	第4期 (9/25~10/22)		第5期 (10/23~11/19)		第6期 (11/20~12/17)	
	業務	時間	業務	時間	業務	時間
1	授業準備	4分	授業準備	4分	成績処理	5分
2	保護者・PTA対応	2分	保護者・PTA対応	3分	授業準備	3分
3	事務・報告書作成	2分	部活動・クラブ活動	2分	保護者・PTA対応	2分
4	地域対応	2分	その他の校務	2分	事務・報告書作成	2分
5	成績処理	2分	事務・報告書作成	2分	その他の校務	1分

表2-7-4 休日の平均持帰り時間における業務内訳(通期・小学校教員全体)

	第1期 (7/3~7/30)		第2期 (7/31~8/27)		第3期 (8/28~9/24)	
	業務	時間	業務	時間	業務	時間
1	成績処理	91分	授業準備	9分	授業準備	26分
2	授業準備	13分	その他の校務	5分	成績処理	23分
3	事務・報告書作成	9分	事務・報告書作成	4分	事務・報告書作成	7分
4	学年・学級経営	7分	部活動・クラブ活動	1分	学年・学級経営	5分
5	その他の校務	3分	校務としての研修	1分	その他の校務	5分

	第4期 (9/25~10/22)		第5期 (10/23~11/19)		第6期 (11/20~12/17)	
	業務	時間	業務	時間	業務	時間
1	授業準備	33分	授業準備	32分	成績処理	56分
2	成績処理	16分	成績処理	12分	授業準備	24分
3	事務・報告書作成	7分	事務・報告書作成	7分	事務・報告書作成	8分
4	学年・学級経営	5分	その他の校務	5分	学年・学級経営	6分
5	その他の校務	5分	学年・学級経営	5分	その他の校務	4分

(3) 中学校における勤務日の残業時間・持帰り時間の実態

つづいて、中学校の教員の勤務日における平均残業時間量および平均持帰り時間量の推移についてみてみよう(図2-7-3)。

第2期においては、残業時間は平均で33分、持帰り時間は平均で14分と、他の時期に比べて短くなっている。残業時間は第1期には2時間26分とやや長い、第3期から第6期にはおおむね2時間10分ほどとなっている。つまり、通期でみた場合、残業時間には通常期と夏期休業期との間には繁閑の差があるが、通常期における時期的な繁閑の差は大きくはなく、勤務日であればおおむね2時間10～30分程度の残業を行う傾向にあるといえる。ただし、大型の長期休業期の前には繁忙になると考えられる。第1期において残業時間が他の通常期に比べてやや長くなっているのは、次にみるように、3学期制の学校は学期末であることにともない、成績処理などの業務が増えるためであるといえる(表2-7-5、表2-7-6)。

持帰り時間は、通常期でおおむね20～25分程度で、第2期に若干短いことをのぞけば時期的な変化はほとんどない。中学校の教員は、勤務日においては、業務は主に学校で残業として行い、持帰り仕事はあまり行わない傾向にあるといえる。

では、中学校の教員は、勤務日における残業時間・持帰り時間にはどのような業務を行っているのか、主要な業務の内訳について検討しよう(表2-7-5、表2-7-6)。

まず、勤務日の残業時間における業務の内訳である(表2-7-5)。

第2期以外の時期、つまり通常期における中学校教員の残業では成績処理や授業準備も小学校と同様に主要な業務の一つであるが、特に部活動・クラブ活動が主要な業務となっていることが特徴的である。部活動・クラブ活動は各期10～30分程度行われている。その他には、授業準備は第2期をのぞく各期で20分前後行われている。事務・報告書作成は、第2期をのぞき各期で10～15分程度行われている。長期休業期前である第1期と第6期には、成績処理が約30分と他の時期に比べて長くなっている。また、第2期にはその他の校務が上位に入っていることは、長期休業期には基本的に授業や試験などがなく、また、教員が研修などに参加することが多くなることを反映していると考えられる。

次に、勤務日の持帰り時間における業務の内訳について検討しよう(表2-7-6)。

各期とも、授業準備が常に上位に入る業務であり、5分前後行われている。また、第2期をのぞいて成績処理も主要な業務であり、5～10分ほど行われている。また、事務・報告書作成は各期で1～2分行われている。

表2-7-5 勤務日の平均残業時間における業務内訳(通期・中学校教員全体)

	第1期 (7/3～7/30)		第2期 (7/31～8/27)		第3期 (8/28～9/24)	
	業務	時間	業務	時間	業務	時間
1	成績処理	28分	部活動・クラブ活動	10分	部活動・クラブ活動	22分
2	部活動・クラブ活動	26分	その他の校務	6分	授業準備	19分
3	授業準備	16分	事務・報告書作成	4分	学校行事	14分
4	事務・報告書作成	13分	学校経営	2分	事務・報告書作成	11分
5	学校経営	10分	授業準備	1分	成績処理	9分

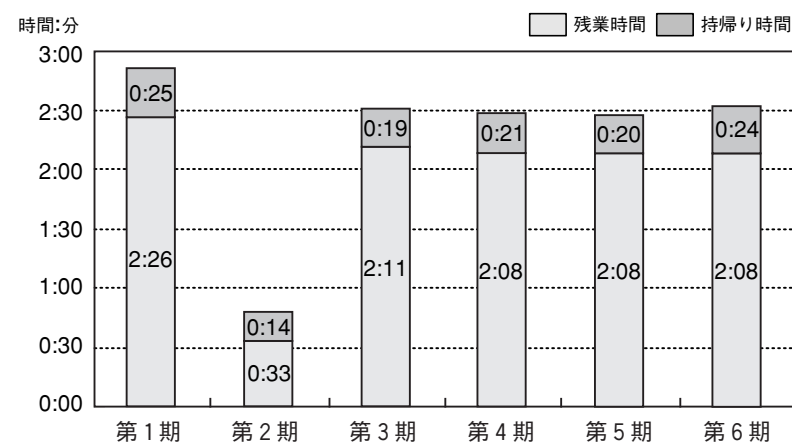
	第4期 (9/25～10/22)		第5期 (10/23～11/19)		第6期 (11/20～12/17)	
	業務	時間	業務	時間	業務	時間
1	授業準備	22分	授業準備	23分	成績処理	31分
2	部活動・クラブ活動	18分	部活動・クラブ活動	13分	授業準備	19分
3	成績処理	12分	事務・報告書作成	11分	会議・打合せ	11分
4	事務・報告書作成	11分	会議・打合せ	11分	事務・報告書作成	11分
5	学校行事	8分	学校行事	9分	部活動・クラブ活動	9分

表2-7-6 勤務日の平均持帰り時間における業務内訳(通期・中学校教員全体)

	第1期 (7/3～7/30)		第2期 (7/31～8/27)		第3期 (8/28～9/24)	
	業務	時間	業務	時間	業務	時間
1	成績処理	9分	その他の校務	3分	授業準備	6分
2	授業準備	5分	授業準備	2分	成績処理	4分
3	事務・報告書作成	2分	事務・報告書作成	2分	事務・報告書作成	1分
4	学年・学級経営	1分	部活動・クラブ活動	0分	その他の校務	1分
5	その他の校務	1分	成績処理	0分	学年・学級経営	1分

	第4期 (9/25～10/22)		第5期 (10/23～11/19)		第6期 (11/20～12/17)	
	業務	時間	業務	時間	業務	時間
1	授業準備	6分	授業準備	6分	成績処理	10分
2	成績処理	5分	成績処理	3分	授業準備	5分
3	学年・学級経営	1分	事務・報告書作成	1分	事務・報告書作成	1分
4	事務・報告書作成	1分	学年・学級経営	1分	その他の校務	1分
5	その他の校務	1分	その他の校務	1分	学年・学級経営	1分

図2-7-3 勤務日・1日あたりの平均残業時間量・持帰り時間量(通期・中学校教員全体)



(4) 中学校における休日の残業時間・持帰り時間の実態

次に、中学校の教員の休日における平均残業時間量・平均持帰り時間量の推移についてみてみよう(図2-7-4)。

第2期においては、残業時間は平均で44分、持帰り時間は平均で47分と、他の時期に比べてやや短くなっている。第2期以外、つまり通常期においては残業時間は1時間10分～50分ほどだが、第1期は1時間50分と長めで、第6期には1時間13分とやや短くなっている。

小学校の教員は、基本的には休日には学校で仕事をを行わないのに対して、中学校では学校で残業を行っていることが特徴的である。この内訳にどのような業務を行っているのかは、詳しくは後で検討する。持帰り時間は第3期から第5期には1時間30分ほどであり、第1期と第6期には若干多くなり1時間50分ほどとなっている。これは長期休業期前であることによると考えられる。

では、中学校の教員は、休日における残業時間・持帰り時間にはどのような業務を行っているのか、主要な業務の内訳についてみてみよう(表2-7-7、表2-7-8)。

まず、休日の残業時間における業務の内訳についてみてみよう(表2-7-7)。

休日の残業時間において、特に目立つのは部活動・クラブ活動である。第3期から第5期で1時間ほど、第1期では78分、第6期では46分となっている。その他には授業準備や事務・報告書作成は各期で1～4分であること、成績処理は夏季休業期前である第1期には11分であり、冬季休業期前である第6期には10分であることなどが目立つ。

次に、休日の持帰り時間における業務の内訳についてみてみよう(表2-7-8)。

各期とも、部活動・クラブ活動が常に上位に入る業務であり、第2期をのぞいて40分前後となっている。第2期には22分とやや短くなる。その他には、授業準備が第2期をのぞく各期で10～15分程度であること、事務・報告書作成は各期5分前後であることなどが特徴的である。

図2-7-4 休日・1日あたりの平均残業時間量・持帰り時間量(通期・中学校教員全体)

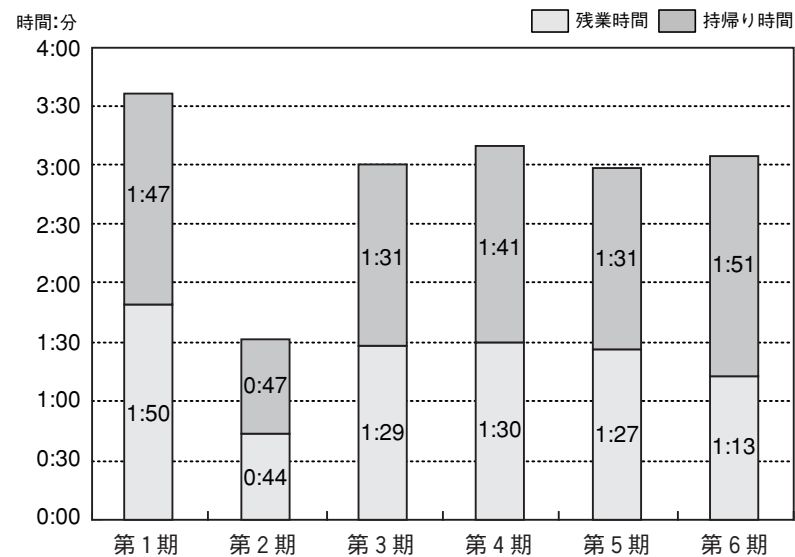


表2-7-7 休日の平均残業時間における業務内訳(通期・中学校教員全体)

	第1期 (7/3~7/30)		第2期 (7/31~8/27)		第3期 (8/28~9/24)	
	業務	時間	業務	時間	業務	時間
1	部活動・クラブ活動	78分	部活動・クラブ活動	33分	部活動・クラブ活動	64分
2	成績処理	11分	その他の校務	2分	成績処理	3分
3	その他の校務	4分	事務・報告書作成	1分	授業準備	3分
4	事務・報告書作成	3分	保護者・PTA対応	1分	その他の校務	3分
5	授業準備	3分	学校経営	0分	学校行事	3分

	第4期 (9/25~10/22)		第5期 (10/23~11/19)		第6期 (11/20~12/17)	
	業務	時間	業務	時間	業務	時間
1	部活動・クラブ活動	62分	部活動・クラブ活動	60分	部活動・クラブ活動	46分
2	授業準備	4分	授業準備	4分	成績処理	10分
3	成績処理	4分	その他の校務	4分	授業準備	3分
4	その他の校務	3分	成績処理	2分	事務・報告書作成	2分
5	事務・報告書作成	3分	事務・報告書作成	2分	その他の校務	2分

表2-7-8 休日の平均持帰り時間における業務内訳(通期・中学校教員全体)

	第1期 (7/3~7/30)		第2期 (7/31~8/27)		第3期 (8/28~9/24)	
	業務	時間	業務	時間	業務	時間
1	部活動・クラブ活動	45分	部活動・クラブ活動	22分	部活動・クラブ活動	40分
2	成績処理	27分	授業準備	5分	授業準備	15分
3	授業準備	9分	その他の校務	4分	成績処理	13分
4	事務・報告書作成	5分	事務・報告書作成	3分	事務・報告書作成	4分
5	その他の校務	5分	成績処理	1分	その他の校務	3分

	第4期 (9/25~10/22)		第5期 (10/23~11/19)		第6期 (11/20~12/17)	
	業務	時間	業務	時間	業務	時間
1	部活動・クラブ活動	41分	部活動・クラブ活動	36分	成績処理	38分
2	成績処理	18分	授業準備	16分	部活動・クラブ活動	35分
3	授業準備	15分	成績処理	13分	授業準備	12分
4	その他の校務	5分	事務・報告書作成	5分	事務・報告書作成	6分
5	事務・報告書作成	4分	その他の校務	5分	その他の校務	4分



## 2. 職階別にみた労働時間の実態

第1章から第6章で検討した通り、ひとくちに教員といっても、残業時間や持帰り時間の量には職階によって差がある。特に勤務日における教頭・副校長の残業時間の長さが顕著であった。

これまで、職階によって業務や職務・職責が異なるために給与も異なると考えられ、校長や教頭・副校長などを対象にした管理職手当が定められてきた。しかし、実際に職階によってどのように業務が異なるのかは、具体的に明らかにされてはこなかった。そこで本節では、職階によって学校で行う業務の量と内容がどのように異なるのかという観点から、職階別に勤務日の労働時間(持帰りを含まない)の推移と業務の内訳について、通期でみてみよう。

この際、教員のうちおよそ9割を占める校長、教頭・副校長、教諭、講師に絞ってみることにする。

また、第1節では、業務の内訳をみる際に、a～uの業務のうち上位にランクインする業務に絞って検討したが、本節では、個別業務の時間の長短よりも、職階による業務内容の質的な違いを傾向としてとらえるために、便宜上、a～uの業務を「児童生徒の指導に直接的にかかわる業務」「児童生徒の指導に間接的ににかかわる業務」「学校の運営にかかわる業務及びその他の校務」「外部対応」の4種類に分類して、教員が学校で行うすべての業務について検討を行うこととする。なお、以上の4分類は、下記の通りの構成になっている。

### ①児童生徒の指導に直接的にかかわる業務:

朝の業務、授業、学習指導、生徒指導(集団)、生徒指導(個別)、部活動・クラブ活動、児童会・生徒会指導、学校行事

### ②児童生徒の指導に間接的ににかかわる業務:

授業準備、成績処理、学年・学級経営

### ③学校の運営にかかわる業務及びその他の校務:

学校経営、会議・打合せ、事務・報告書作成、校内研修、校務としての研修、会議(校外)、その他の校務

### ④外部対応:

保護者・PTA対応、地域対応、行政・関係団体対応

それでは、最初に小学校、次に中学校の順に、勤務日における平均労働時間(持帰りを含まない)の推移を検討していこう。

### (1)小学校における職階別にみた勤務日の労働時間(持帰りを含まない)の実態

まず、小学校における勤務日の労働時間(持帰りを含まない)から検討しよう(図2-7-5)。

勤務日における労働時間(持帰りを含まない)は、教頭・副校長が最も長い。第2期をのぞいて、教頭・副校長は各期で12時間ほど働いている。これに対して、校長、教諭、講師においては、労働時間(持帰りを含まない)の長さにはあまり違いはない。

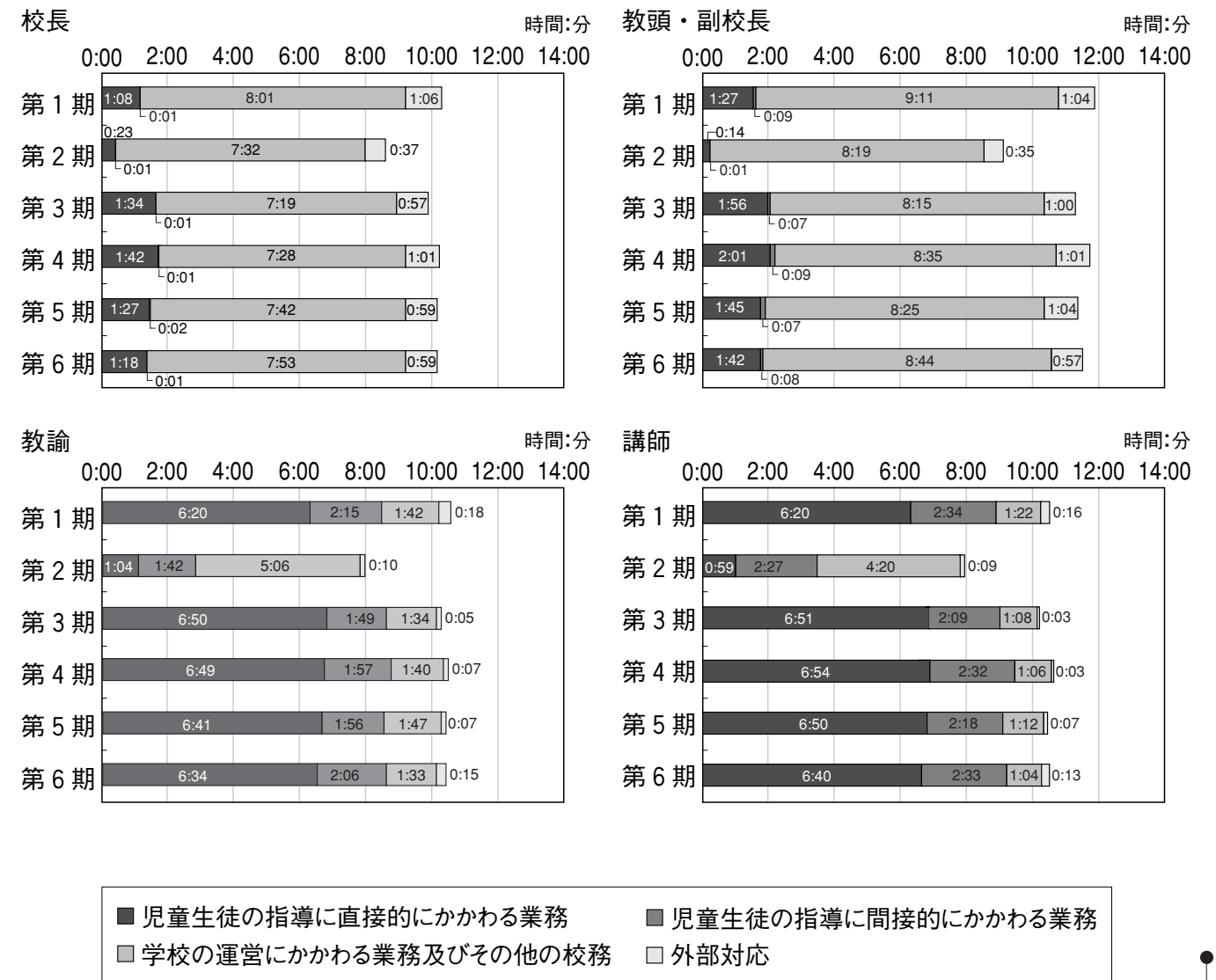
業務の内訳についておおまかにいうと、管理職である校長と教頭・副校長が似ており、管理職ではない教諭と講師が似ている。

校長と教頭・副校長は、労働時間(持帰りを含まない)のうち7～9時間が「学校の運営にかかわる業務及

びその他の校務」であり、これは労働時間(持帰りを含まない)のうち実に7割以上を占める。その他には、第2期をのぞいて外部対応が各期1時間ほど入っているのが特徴的である。校長と教頭・副校長では、業務の種類の内訳は似ているが、教頭・副校長において「学校の運営にかかわる業務及びその他の校務」がより長くなっている。

また教諭と講師は、第2期をのぞいておよそ6時間～7時間が「児童生徒の指導に直接的にかかわる業務」であり、これに「児童生徒の指導に間接的ににかかわる業務」を加えると、労働時間(持帰りを含まない)のうち7割以上が児童生徒への対応で占められている。これは管理職である校長や教頭・副校長とは対照的な特徴である。教諭と講師では、業務の種類の内訳はおおむね似ているが、教諭の方が講師よりも「学校の運営にかかわる業務及びその他の校務」が20～30分長くなっている。

図2-7-5 勤務日・1日あたりの平均労働時間(持帰りを含まない)の内訳(小学校)



(2) 中学校における職階別にみた勤務日の労働時間(持帰りを含まない)の実態

次に、中学校における勤務日の労働時間(持帰りを含まない)を検討しよう(図2-7-6)。基本的に、前項でみた小学校における勤務日の労働時間(持帰りを含まない)の特徴と同様である。

勤務日における労働時間(持帰りを含まない)は、教頭・副校長が最も長い。第2期をのぞいて、教頭・副校長は各期で12時間ほど働いている。これに対して、校長は10時間ほどで、教諭、講師においては、労働時間(持帰りを含まない)の長さにはあまり違いはない。

業務の内訳についておおまかにいうと、管理職である校長と教頭・副校長が似ており、管理職ではない教諭と講師が似ている。

第2期をのぞいて校長は8時間ほど、教頭・副校長は8時間30分～9時間ほどが「学校の運営にかかわる業務及びその他の校務」であり、これは労働時間(持帰りを含まない)のうち実に7～8割ほどを占める。その他には、第2期をのぞいて外部対応が各期1時間ほど入っているのが特徴的である。校長と教頭・副校長では、業務の種類の内訳は似ているが、教頭・副校長において「学校の運営にかかわる業務及びその他の校務」がより長くなっている。

また、教諭と講師は、第2期をのぞいておよそ6時間～7時間30分が「児童生徒の指導に直接的にかかわる業務」であり、これに「児童生徒の指導に間接的にかわる業務」を加えると、労働時間(持帰りを含まない)のうち9割近くが児童生徒への対応で占められている。これは管理職である校長や教頭・副校長とは対照的な特徴である。教諭と講師では、業務の内訳はおおむね似ているが、教諭の方が講師よりも「学校の運営にかかわる業務及びその他の校務」が20～40分長くなっていること、「外部対応」がやや長くなっていること、「児童生徒の指導に間接的にかわる業務」がやや短くなっている点が異なる。

図2-7-6 勤務日・1日あたりの平均労働時間(持帰りを含まない)の内訳(中学校)

